

大宰府条坊跡36

— 県道観世音寺二日市線建設に伴う調査 —

平成20(2008)年

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡36 (太宰府市の文化財 第99集) 正誤表

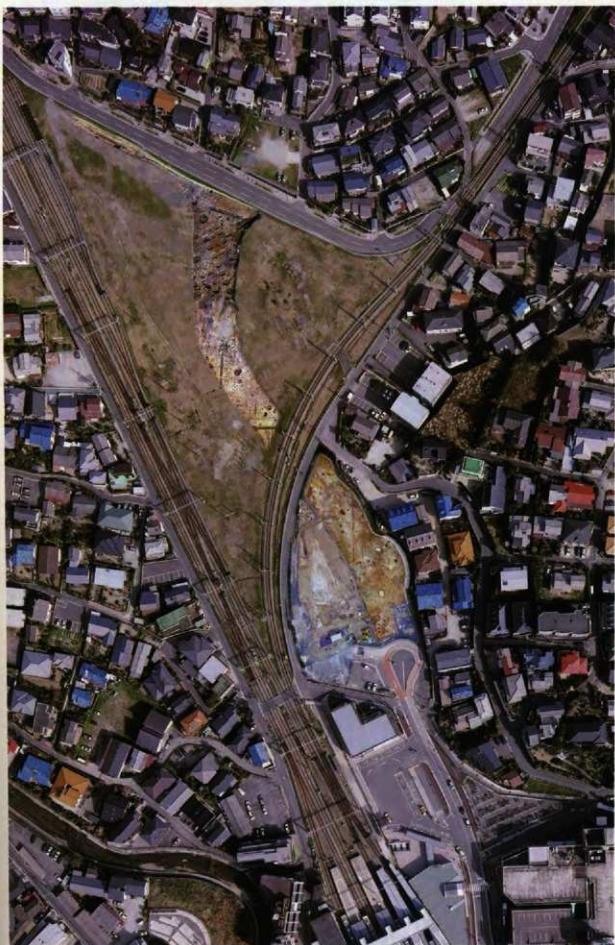
頁	誤	正
8	S N (東西土層模式図の方位)	W E
37・38	44710.0	44712.0
135	236-1SE510茶灰色土出土遺物 甕(5)と平瓦8	甕(5)と平瓦8は236-1SE510青灰色土出土遺物
136	236-1SE510茶灰色土出土遺物 5と8	5と8はSE510青灰色土出土遺物

大宰府条坊跡36

— 県道観世音寺二日市線建設に伴う調査 —

平成20（2008）年

太宰府市教育委員会



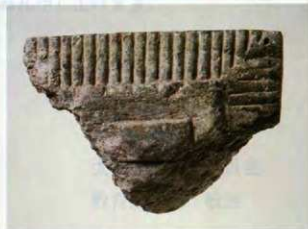
第236-1次調査第1調査面および第236-2次調査全景（上が北）



曲物 (第236-1次調査SE510 Fig.80-10)



「有佛」墨書瓦 (第236-2次SK015暗灰色土 Fig.106-17)



滑石製屋蓋 (第236-2次調査SE050暗灰色粘土、Fig.102-11)

序

本書は、県道観世音寺二日市線の道路新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は大宰府条坊跡の中央付近に位置し、かつて西日本鉄道二日市操車場があった場所で、その機能が筑紫駅に移転するまで、大きな建物が建ち並んでいました。

今回の調査では「天下之一都会」（『続日本紀』）と称された大宰府を物語るように、奈良時代から平安時代にかけての遺構や遺物が多数見つかりました。その中でも大型の掘立柱建物跡や東西道路などの条坊痕跡のほか、滑石製屋蓋や須恵器の盤など珍しい遺物も発見され、大宰府の歴史を知る上で貴重な所見を得ることが出来ました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成20年3月
大宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は太宰府市朱雀2・3丁目で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第11座標系（旧日本座標系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 調査対象地の表土除去および埋戻しは（有）松田造園土木に委託した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は宮崎、柳、松浦、床平慎介、森若知子が行った。
5. 第236-1次調査の遺構全体図作成は航空測量を実施し、これを縮写測エンジニアリングに委託し、1面目のみ図化を行った。また、平行して手測りによる実測図も作成した。
6. 遺構の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表増睦夫）が行い、一部を縮写測エンジニアリングが行った。
7. 出土品の自然科学分析は（株）パリオ・サーヴェイに委託した。
8. 出土した鉄製品・木製品の保存処理は下川可容子、安芸朋江、鈴木弘江が行った。
9. 遺物の実測は、主に第236-1次調査分を（有）システム・レコ、NPO法人文化財保存活用支援センターに委託し、第236-1次調査分の一部と第236-2次調査分を久味木理恵、森部順子、福井門、久家春美、松本理栄子、宮崎が行った。
10. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美が行った。
11. 遺物の整理接合・復元作業は中村房子、林美知子、久保嘉代香、馬場由美が行った。
12. 遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房（代表岡紀久夫）が行った。
13. 第236-1次調査第2・3調査面の遺構全体図については、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託してデジタルトレースを行った。第3調査面の一部のデジタルトレースは久味木理恵が行い、デジタルトレース図の加工・修正等は、井上信正の協力を得た。
14. 遺構・遺物実測図の浄書は、全て宮崎が行った。
15. 本書に用いた分類は以下のとおり。
須恵器・・・『宮ノ本遺跡II 一窟跡篇一』（太宰府市の文化財第10集）1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類一』（太宰府市の文化財第49集）2000
土器・・・『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第7集）1983
16. 執筆は、V章を（株）パリオ・サーヴェイが行い、その他の執筆および編集は、宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	4
II、調査体制	6
III、調査および整理方法	7
IV、調査報告	
1、第236-1次調査	11
(1) 調査に至る経過	11
(2) 基本層位	11
(3) 検出遺構	18
第1調査面	18
第2調査面	33
第3調査面	40
第4調査面	47
(4) 出土遺物	48
第1調査面	48
第2調査面	91
第3調査面	117
2、第236-2次調査	165
(1) 調査に至る経過	165
(2) 基本層位	165
(3) 検出遺構	165
(4) 出土遺物	169
V、第236次調査の自然科学分析	（パリオ・サーヴェイ）187
VI、調査まとめ	207

写真図版・・・主な遺構および遺物写真

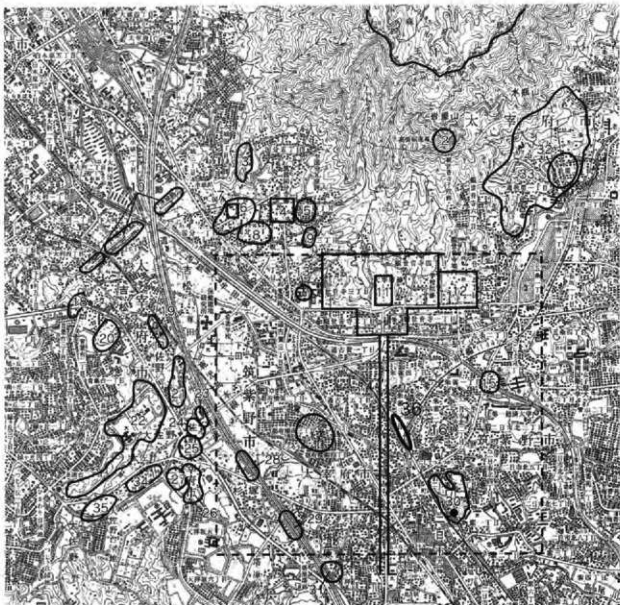
付図・・・第236-1次調査	第1調査面遺構全体図 (1/200)	
	第236-1次調査	第2調査面遺構全体図 (1/200)
	第236-1次調査	第3調査面遺構全体図 (1/200)
	第236-1次調査	第4調査面遺構全体図 (1/400)
	第236-1次調査	第1調査面略測図 (1/200)
	第236-1次調査	第2調査面略測図 (1/200)
	第236-1次調査	第3・4調査面略測図 (1/200, 1/400)
	第236-2次調査	遺構全体図 (1/200)
	第236-2次調査	遺構略測図 (1/200)

付録・・・CD（遺構および遺物写真）

紀年表	AD	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶磁器式 (型式の上段)		標準磁器	主要陶磁器						
				区輪	区輪								
①	700	I A B					唐三彩、二彩 絞胎						
	725							II	唐祿O-10 并分朝G-7 唐門?・唐内 唐門・唐坐(唐西)・(唐京K-14) 唐京K-14 唐京S-4 唐京K-90 唐京K-90	白磁類 越州陶系青磁(白磁) 長沙陶系青磁・青磁 唐彩・磁胎			
	750							III					
	800							IV					
	825							VI					
	850							VII					
	900							VIII					
	925							IX			(A類)	唐京山 (唐京O-53)	唐江
	1000							X			(A類)	新唐O-63	越州陶系青磁類 白磁X類
	1025							XI			B	唐京山+72 (丸石2)	
②	1100	A B				白磁類II,III,VI-3,VI, X,XIII類 唐京I,IV,V,VI類 唐京S-1	初期唐京系木・阿安系系青磁O類 越州陶系青磁 白磁類 白磁類I類、III類						
	1150							XII					
	1200							XIII					
	1225							XIV	D	唐京系青磁類I-4,6 血塗 阿安系青磁類-IV,血塗	白磁類V,IV-4,血塗類増加		
	1250							XV	E		白磁類VI,III-VII-1類		
	1275							XVI	F	唐京系青磁類II-a上類	白磁類VII-2類		
	1300							XVII	G	唐京系青磁類II類 白磁IX類	唐京系青磁類II-c類 白磁X類 唐京陶類		
	1325							XVIII					
	1350							XIX					
	1375							XX					
③	1400												
④	1500												

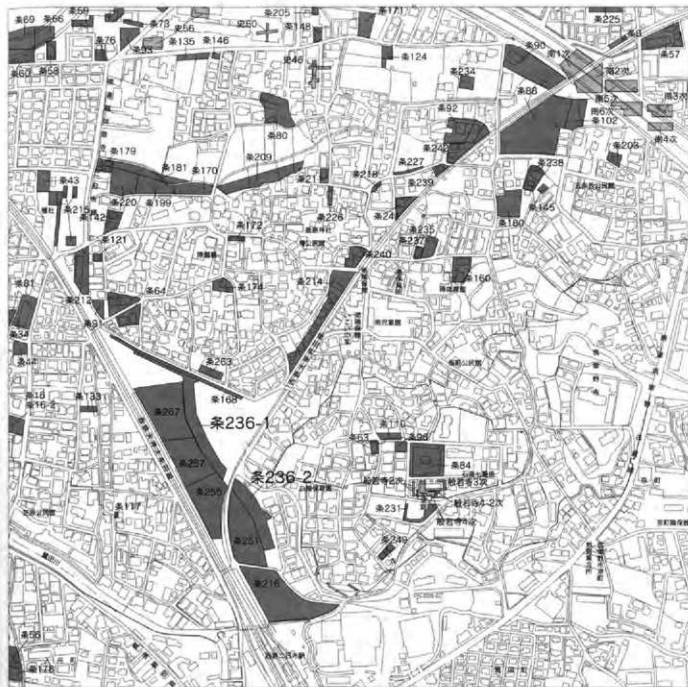
Fig.1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年

- 紀年表資料 ①A.D.927 延暦5年,大宰府74次SD205A湯
 ②A.D.1091 寛治5年,平安京北条4番195E白井井
 ③A.D.1224 長祿3年,大宰府35,30SD202湯
 ④A.D.1304 應元2年,大宰府109,111次SD2020湯
 ⑤A.D.1335 元祿2年,大宰府45,38,1200湯
 ⑥A.D.794 延暦3年,長岡京102次SD10201湯
 ⑦A.D.1459 1465 長祿3 寛正5年,福岡市井田町C・SG16池
 ⑧A.D.1501 文龜元年,大宰府70,65,21,805湯
 ⑨A.D.1265 文永2年,博多62次713土壘
- 文献 ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982
 ②福岡県史「香川遺跡」(平安京跡発掘調査報告東京の第一項)1975 平安京調査会
 ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和43年度発掘調査報告」1976
 ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和53年度発掘調査報告」1989
 ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査報告」1978
 ⑥福岡市市立歴史文化財センター「福岡市市立歴史文化財調査報告書(第1集)」1988
 ⑦福岡市教育委員会「井田町C遺跡」(福岡市市立歴史文化財調査報告書179)1988
 ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982
 ⑨福岡市教育委員会「博多48」(福岡市市立歴史文化財調査報告書57)1995



- | | | | |
|------------|------------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 影塚遺跡 |
| 2. 若原城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 藤原遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 神ノ尾遺跡 | 12. 飯付遺跡 | 21. 前田遺跡 | 30. 墓、墓塚遺跡 (●は墓火葬場) |
| 4. 筑前區分寺跡 | 13. 遺賢田印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府赤松坊跡(鐘録内) | 23. 藤川遺跡 | 32. 濱城跡 |
| 6. 黒分松本遺跡 | 15. 若知遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 黒船區分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾輪遺跡 | 34. 原ノ原遺跡 |
| 8. 黒分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 藤原遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 藤原田印出土地 | 18. 神ノ前遺跡 | 27. 藤城戸遺跡 | 36. 瀬236の調査地 (報告地未) |

Fig.2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)



- 次・・・大宰府史跡調査第1次調査 (大宰府市教委 調査分)
 ●○次・・・大宰府史跡調査第2次調査 (九州歴史資料館 調査分)
 ●○次・・・藤原川原(ハイバ)築山調査 (福岡県教育 調査分)

Fig.3 調査地と周辺調査地点 (1/5,000)

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に背振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。二つの平野に挟まれた狭い平地を古代には官道が、現代では鉄道や高速道路が通り抜け、今も昔も交通の要衝となっている。

古代にはこの狭い平野の北端に大宰府政庁を置き、前面にいわゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。その規模は南北22条、東西12坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。近年開発による発掘調査が相次ぎ、下記のような大宰府条坊を解明する上で重要な成果を得ることが出来ている。

五条2丁目で行った第217・224調査では、平安時代中期と12世紀埋没の南北道路側溝が検出され、約90mの区割りである条坊案では左郭12坊推定ライン上にあたる、『宇佐大鏡』久安4（1148）年条の記述から、12坊路を「京極大路」とするとうい見解が大宰府条坊復原案を最初に提示した鏡山猛氏以来支持されてきたが、その「京極大路」の遺構である可能性が十分考えられる。また、西側側溝からは大量の獣骨・人骨が出土し、土器とともに側溝に廃棄された状況が確認できた。また、12世紀中頃～後半に道路の付け替えが行われた際、調査区の東から北の東西道路が、南北道路に取り付き丁字路になっていることが明らかになり、平安時代後期の時点で、平安時代中期以降急速に栄えていった安楽寺天満宮周辺の街区と大宰府条坊が接していたことを示すものと考えられている。

筑紫野市塔原東1丁目（第258次調査）では、8世紀後半埋没の平行する東西溝が検出され、井上信正条坊案の22条と合致し、条坊の南限である可能性が指摘されている。

新宮間の伝承地の北側100mの坂本2丁目付近（第264・265・269次調査）では、奈良時代の掘立柱建物群が検出され、その規模から官衙の一部である可能性が指摘され、政庁周辺に広がる官衙域がさらに西側に広がっていた可能性も考えられる。また、周辺には新宮間伝承地や遠賀国印出土地があり、政庁周辺官衙と異なった機能を持つ官衙であった可能性も考えておく必要がある。

都府楼南2丁目目の第222次調査は広大な面積が調査された。遺構の殆どが11世紀末～12世紀前半埋没という所見が得られ、検出された道路遺構などから、東西95m、南北110mの区画の存在が確認された。条坊内では近年一区画90m四方の設計プランが書き出されているが、条坊外に続く条坊の存在も指摘されており、この調査地が条坊の外側であった可能性も考えられ、平安時代後期に条里の土地での住宅開発があったとみられ、条坊と条里の関係を知る貴重な所見を得ることが出来ている。

今回の調査地の東側丘陵上には般若寺跡があり、現在塔跡が現存している。塔跡は一边8.8mの瓦積基壇でその中央付近に後世の移動があるもの塔心礎が置かれている。その周辺からは塔跡より遡るとみられる掘立柱建物などが確認されている（第231次調査）。

般若寺跡が所在する丘陵の西斜面は、瓦窯の存在が知られていたが、開発によって明確な調査が行われることなく住宅地になっていた。しかし、2007年、住宅改築に伴って、窠跡が1基確認され、発掘調査が行われた（第270次調査）。瓦窯は有階無段登窯で、天井が落下した様子が確認でき、窯内からは粘土質の瓦片が多く出土した。時期は10世紀代と推測される。この瓦窯跡は第236・2次調査地の東隣に位置する。

以上のような調査成果が増加する大宰府条坊跡において、今回の調査地はその大宰府条坊の真ん中付近に位置し、標高は31.7mの平地で、西と南は開けていて南西の鷲田川方向に向かって僅かに低くなっていく。東側は般若寺跡が所在する標高50mほどの丘陵が迫り、北側はその般若寺丘陵から派生した標高38m前後の低丘陵が中央大路（推定朱雀大路）付近まで続いていて、現在のように住宅が建て込まな

かったとしても、調査地から真北の政庁官衙域は見通しがきかない立地だったと推測される。また、西鉄太宰府線が丘陵の狭間を通っているが、最近の発掘調査（第214・240次調査）から、ここは古代から谷地形であったことがわかっている。

近代以降この地には西鉄二日市操車場があったのだが、その西日本鉄道は大正4年10月に太宰府参拝客の輸送を目的に、筑紫電気軌道株式会社として設立され、その後社名を九州鉄道株式会社に変更するとともに、都市間の旅客輸送を目的とするようになった。大正11年9月16日福岡～久留米間38.8kmの工事に着手し、大正13年4月12日完成に至った。二日市操車場と呼ばれる二日市工場と車両基地（車庫）もこの時に設置されている。当時の車両は96人乗り、4輪ボギー客車16両で、福岡～久留米間を55分で走る当時としては最新鋭車両であった。全線14区に分けられ、1区6線であった。福岡～大宰府間全線が開通したのは昭和11年4月7日1日のことで、昭和17年に西日本鉄道に改称している。

昭和53年当時の二日市操車場の規模は、工作線9（799m）、検査線3（518m）、洗車線3（420m）、ピット線6（298m）、留置線2（410m）であった。しかし、輸送力増強などにより二日市車庫は収容力が限界に近づき、昭和48年筑紫駅近くに新しい筑紫車庫の建設に着手、昭和51年7月には一部使用が開始され、昭和57年3月25日に車両基地が完成し、昭和62年1月1日に築業工場が完成した。この築業車庫の完成により、二日市操車場は解体されるに至った。

調査地点の当時の状況は、第236・1次調査地には車両基地、第236・2次調査地には住宅などが十数件建ち並んでいた。基地解体後発掘調査直前までは前者が空地で、後者が駐車場として利用されていた。

参考文献

- 『遺跡だより48号 昔は町外れでした』太宰府市教育委員会 2001年
- 大宰府条坊跡第258次調査現地説明会資料 筑紫野市教育委員会 2007年
- 『大宰府条坊跡27』太宰府市の文化財81集 太宰府市教育委員会 2005年
- 『西日本鉄道70年史』西日本鉄道株式会社 1978年
- 『西鉄創立80周年記念 明日に翔ける』西日本鉄道株式会社 1988年

II、調査体制

(平成16 / 2004年度)・・・発掘調査

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰明
	事務主査	藤井奈人 (～6月30日)
		齋藤実貴男 (7月1日～)
主任主事	大石敬介	
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮 中島恒次郎
	主任技師	井上信正 高橋 学
		宮崎亮一 (調査担当)
技師 (嘱託)	下川可容子 森田レイ子 渡邊 仁 長 直信	
	柳 智子 松浦 智 (7月1日～) (調査担当)	

(平成19 / 2007年度)・・・報告書発行

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人 (～9月30日)
		松田幸夫 (10月1日～)
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信 (～9月30日)
		菊武良一 (10月1日～)
	調査係長	永尾彰明
	主任主査	吉原慎一 齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学
		宮崎亮一 (整理担当)
技師 (嘱託)	柳 智子 下高大輔 大塚正樹 越野晋平	

なお、調査および整理に際して、次の方々から有益なご教示を得た。記して感謝いたします。

(順不同・敬省略)

小田富士雄 (福岡大学名誉教授)、山中章 (三重大学教授)、大橋泰夫 (鳥根大学教授)、狭川真一・佐藤亜聖 (元興寺文化財研究所)、舟山良一・石木秀啓 (大野城市教育委員会)、松井章、玉田芳英、豊島直博、箱崎和久、市大樹、関広高世 (奈良文化財研究所)、山川均 (大和郡山市教育委員会)、長谷川透 (明日香村教育委員会)

III、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群』(太宰府市の文化財第14集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001年9月改訂)に基づいている。

○発掘調査

南北に長い調査地で、表土除去を行った時点で、南端ですべてに地山が検出されていたが、北端では全く地山が見えていない状況であった。遺構面が全面均等のレベルで広がっていないことが予想されたため、整地の広がりや注意しながら遺構検出を行い、遺構の掘削は明確に古い時期の遺構と判断できない限り、各調査面で確認したものおよび遺構プランが完結しているものを随時掘削し調査を行った。また、掘削が多く見られたが、掘削の底面から検出した遺構については、どの遺構面に属する遺構なのか判断が困難なため、掘削内で完結している遺構については第1調査面で調査した。

表土剥ぎはバックホーによって行い、第1調査面の検出を行った。北側のみに広がる第2遺構面は、遺構プランの一部は第1調査面ですでに検出されていたため、その上面を覆う整地や遺構を人力によって除去した。第3調査面は第3遺構面を覆う灰色土を除去した面であるが、調査区中央の大掘削の南側で、灰色土が厚く堆積していたため、人力で遺物の出土状況や遺構の有無等を確認しながら2/3ほどの厚さを除去した後、残りの1/3ほどはバックホーによって掘り下げ、第3調査面を検出した。北側の一部を除いて調査区の大平が、第3・4の遺構面が混在して検出され、掘立柱建物等と切りあっていない限り、同時に検出・掘削を行った。

各調査面はラジコンヘリによる航空測量を行い、第2～4調査面は手測りによる実測も行った。

○整理報告

報告の手順としては、遺構がどの段階で確認されるに至ったかを明確にするため、大きな相違がない限り、調査作業順つまり調査面ごとに報告し、主要遺構の遺構面の整理は第VI章のまどめで行っている。よって、第IV章の調査報告では、調査面ごとに報告しているため、同一面でありながら、時期の異なる遺構が混在することとなっている。また、遺構略測図は全て調査面ごとに整理したが、遺構全体図については、第3調査面で明確に第4遺構面と認識できた遺構のみを抜き出し、第4調査面に合成し報告している。

遺物については、国内からの搬入品については形状が確認できるものは極力報告することに努めたが、整理報告作業の効率化と報告書のスリム化のため、規格性が強い輸入陶磁器については『大宰府条坊跡 XV-陶磁器分類』を基に分類し、出土遺物一覧表に分類と破片数を掲載したのみで、実測作業は基本的に行っていない。しかし、未分類のものや稀な陶磁器などについては実測し報告している。よって、遺構時期の検証については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。また、古代の遺構から確認される石鏃等の石製品については、混入品と判断したものの、条坊施行以前の活動を物語る遺物と考え、出土遺構ごとには報告せず、調査面毎にまとめて報告している。

上記のように遺構面が単純でないため、この調査報告書については、言葉の混乱を避けるため、発掘調査作業において遺構面と判断し調査した面のことを「調査面」、その後の検証で確認された面を「遺構面」と区別し報告することとする。各調査面で確認された遺構面との大雑把な関係は、第1調査面で第1・3遺構面、第2調査面で第2遺構面、第3調査面で第3・4遺構面、第4調査面で第4遺構面である。

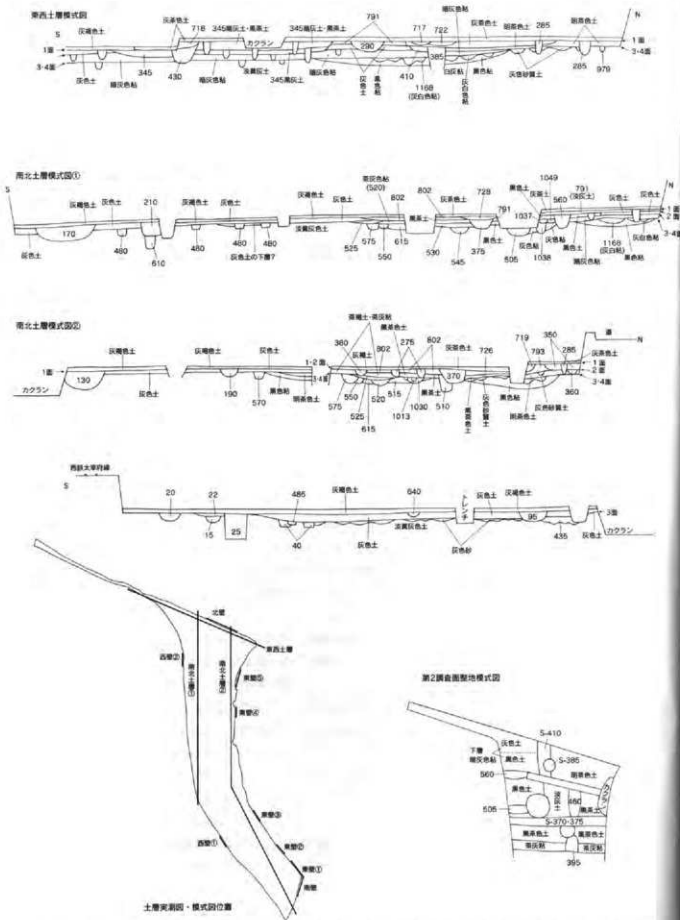
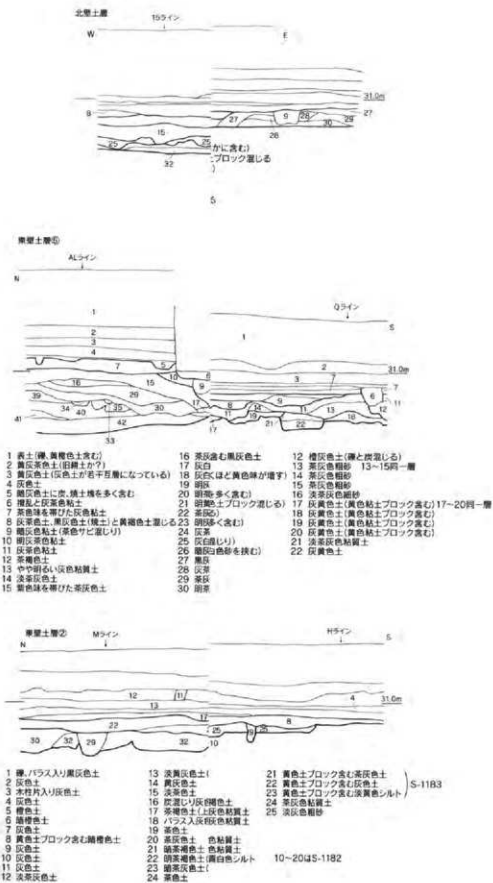


Fig.4 第236-1次調査土層模式図・調査区土層実測位置・第2面基盤層模式図



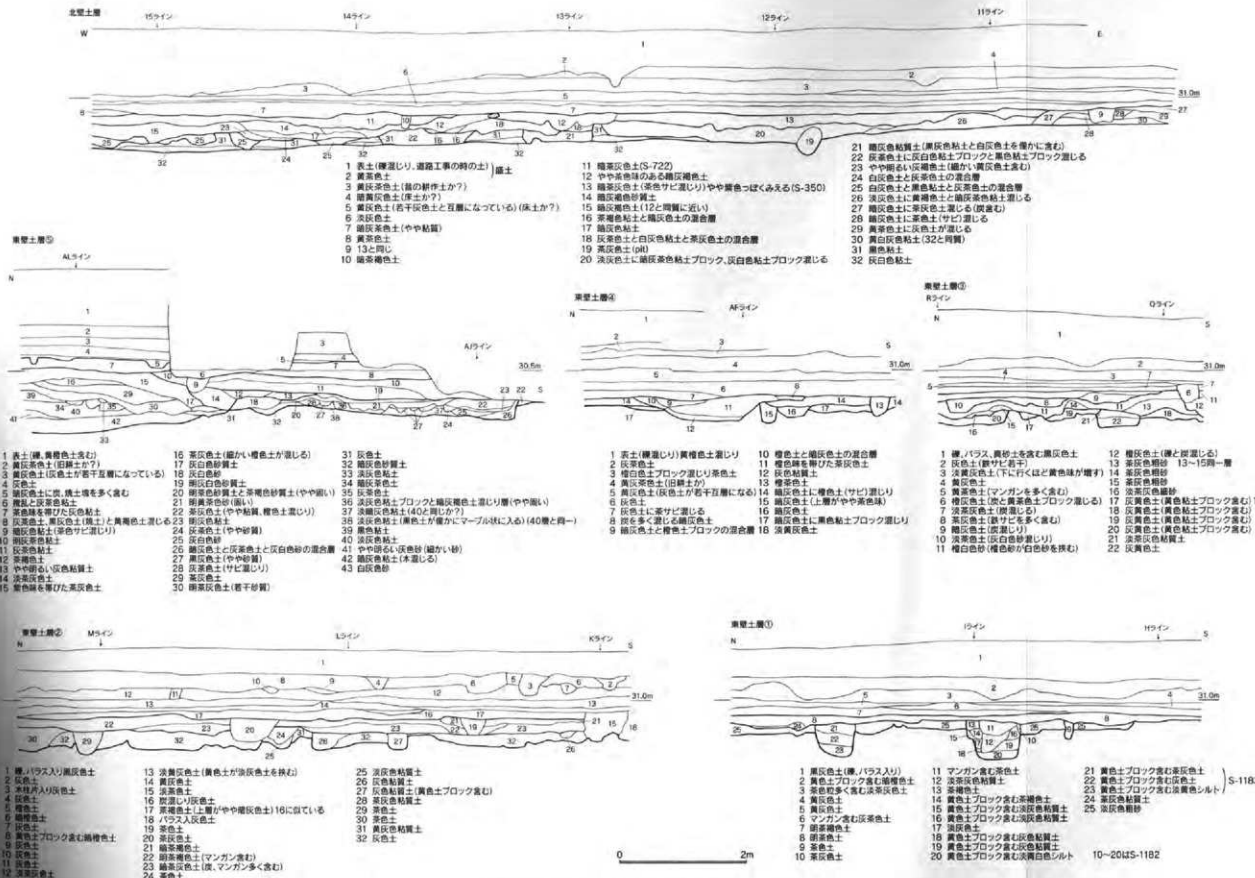


Fig.5 第236-1次調査区土層断面図① (1/60)

IV、調査報告

1、第236-1次調査

(1) 調査に至る経過

第236次調査の調査地は太宰府市朱雀3丁目340-1、305-1で、太宰府市の南辺中央付近に位置する。

1992年2月29日、西日本鉄道株式会社の依頼によって二日市操車場跡地の試掘調査を行い2面以上の遺構が広がることが確認された。1995年に北辺部の市道が拡幅されることにより発掘調査が実施され(第168次調査)、試掘所見を上回る2～4面という高密度な遺構が展開されることが確認された。

平成14年2月28日、市の都市計画課から県道新設に伴う資料作成の要請があり、本格的に県道部分の発掘調査の調整に入った。

県道581号観世音寺二日市線は、月山官衙跡前から南に伸び、檀社の横を通り、筑紫野市境で県道福岡日田線(旧国道3号)に接続する道路であったが、西鉄二日市駅東口の開設や県道整備に伴って、檀社から西鉄二日市駅東口に通じる道路が新設されることとなった。そこで、西鉄太宰府線と西鉄二日市駅間の敷地および西鉄天神大牟田線と太宰府線に挟まれた三角形の広大な西鉄二日市操車場跡地を横切るように計画された。また、西鉄二日市駅に近い所では市道が新たに接続するというので、併せて調査を行った。調査は遺構密度が高い西鉄太宰府線より北側を第236-1次調査として先行して実施し、駐車場として使用していた南側を第236-2次調査として続けて調査を行った。

西鉄二日市操車場の主要な建物が建っていた部分が調査対象地ということもあり、その名残である線路や枕木などがみられたが、最も障害となったのは建物等の大きなコンクリート基礎で、深く入り込んだものは地山まで達し、遺構を大きく破壊していた。また、調査を行った2004年は、台風が過去最高の10個日本に上陸し、しかも温暖化の影響なのか、通常の降雨でも豪雨になるという異常気象の年であった。よって、ひと雨降れば現場は全面水浸しで、浅いところでも水深30cm近く水没するという状態で、昼夜問わず排水を行っても、2日以上かかってしまう始末であった。このような悪条件は現場進行の停滞と遺構の崩壊を招き、調査精度に大きな影響を与えることとなった。

発掘調査は第236-1次調査が2004(平成16)年4月19日から2005(平成17)年3月29日、第236-2次調査が2005(平成17)年1月26日から2005(平成17)年3月29日にかけて実施した。広大な面積と遺構面が複数に展開するため、調査は宮崎亮一と柳智子が常時担当し、調査中頃から松浦智が参加し行われた。開発対象面積は第236-1・2次調査合わせて約5000m²、そのうち第236-1次調査の調査面積は2740m²である。

(2) 基本層位

○第1遺構面の覆土

深さ0.9mほどまでは西鉄二日市操車場のコンクリート基礎、攪乱、表土が覆っている。その下に操車場建設直前に広がっていた田圃の耕作土と床土が全面に覆い、0.2mほどの包含層を除去したところで、第1調査面として遺構を確認している。現地表面から約1.1mの深さである。

○第1遺構面と第1遺構面基礎層

第1調査面での遺構検出時の取り上げ土色は灰褐色土で行ったが、AKライン付近から北側一帯では、重機による表土剥ぎ後、細かい土器片が多く散らばり、周囲と状況が異なっていたため灰茶色土と分け取り上げた。

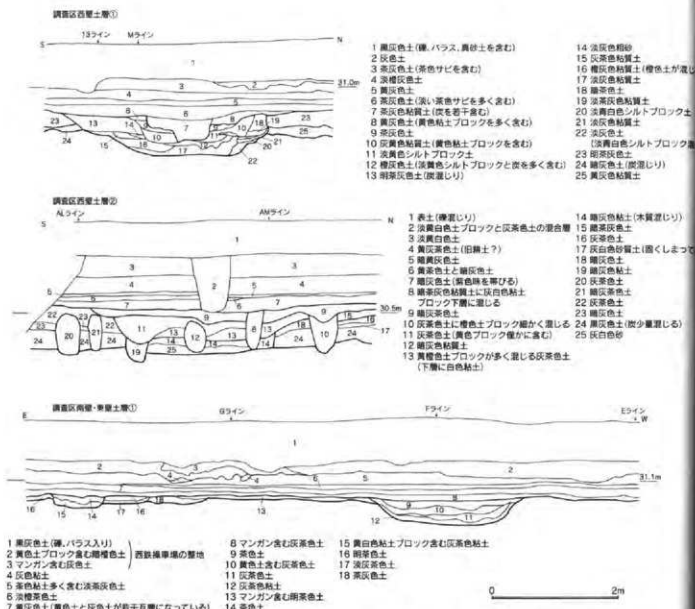


Fig. 6 第236-1次調査区土層実測図② (1/60)

第1遺構面基盤層は、大きくみれば薄い紫色のような土色で、調査地全体に広がっていた。しかし、北側が若干土質の異なる大きな塊状の整地で形成されていたため、北側の基盤層は土質ごとに遺構番号を付けて除去した。また、第2遺構面が第1調査面検出作業時に部分的に確認できるところもあった。この北側の整地状況は南から続く淡黄灰色土の地山が窪み下がついていくA付近からみられ、その整地を除去した面が第2遺構面である。第1調査面はその後の精査で、全体的に若干掘り下げ過ぎた部分のみみられたが、この調査面が今回の調査地でほぼ最上の遺構面と認められた。しかし、南端部に関しては第1調査面に既に地山まで検出している状態で、第3遺構面までが同一レベルで確認できるといふ新発見した状況であり、その遺構の中で最も新しい遺構が第1遺構面のものであることになる。

○第2調査面と第2調査面基盤層

第1調査面基盤層のうち、北側に円塊状に広がる整地を除去した後に確認し調査した面を第2調査面とし、その後の精査から第2遺構面と同じ意味をなしていると判断できた。調査区南側では第2遺構面は明確に確認できなかった。

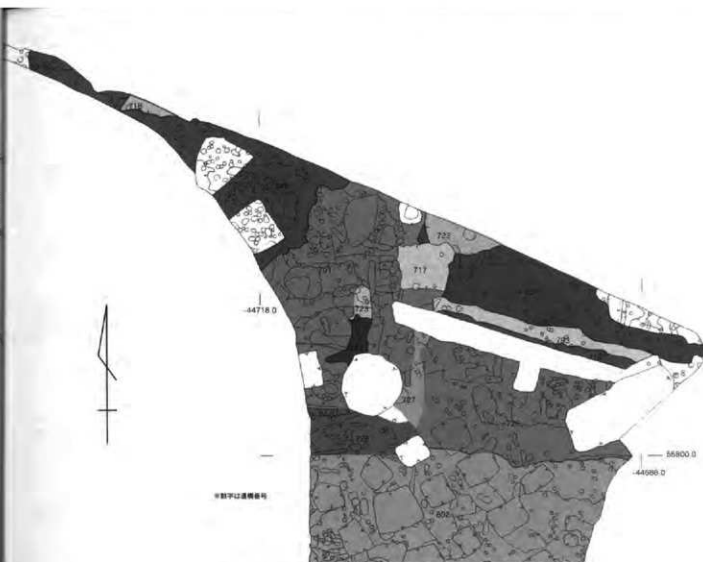


Fig. 7 第1調査面基盤状況

第2調査面基盤層は、主に灰色土層で、これは淡黄灰色土のシルト質の地山を覆う土層である。平安時代前期の遺物を含む層で、SD015の東西溝の北側付近から始まり、北に進むにつれ徐々に深くなり、深いところで厚さ0.4mほどになるが、大きな乱層を挟んで北側は厚さ0.1m前後と薄くなりながら北側へつづく。SD415の東西溝があるA付近から北側は、淡黄灰色土が深く下がり、全体が落ち込み状になっていたため、層位が南側と異なるため灰色土の広がりや明確につかめていない。灰色土層は全面一様な整地ではなく、南側の灰色土が始まる部分は全体が灰色土であるが、大掘灰土に近いほど若干状況が異なる。灰色土の下層、つまり、地山を覆う層は、黒灰色粘質土ブロックと黄灰色土と灰茶色土の混合層である。また、大掘灰土の西側のSD170の周囲は黒灰色粘質土や灰色粘質土が0.2mほど窪み状に堆積していたが、遺物は殆どなく、重機によって除去した。

灰色土の遺物は上面で出土することが多く、掘り下がるほど極端に少なくなる。掘削時は判別できなかったが、その後の精査で地山（淡黄灰色土）と第3遺構面との間には2層あることが確認され、その上層が第2調査面の基盤層（灰色土とする）であり、下層は第3遺構面の基盤である。この下層は一様に広がるものでなく、アメーバ状の凸凹である。

また、一部第1遺構面の遺構の掘り残しがあるのか、11世紀の遺物が部分的に出土する。

○第3遺構面と第3遺構面基盤層

第3調査面検出作業で、第2調査面基盤層（灰色土）が上下2層になっていたことに気づけなかったため、第3遺構面の基盤層も一部同時に掘り下げてしまった。よって、調査では地山やそこに掘り込まれているアメーバ状の凸凹に、遺構が切り込んでいる状態で検出されたが、実際には、これらを覆う薄い灰色土

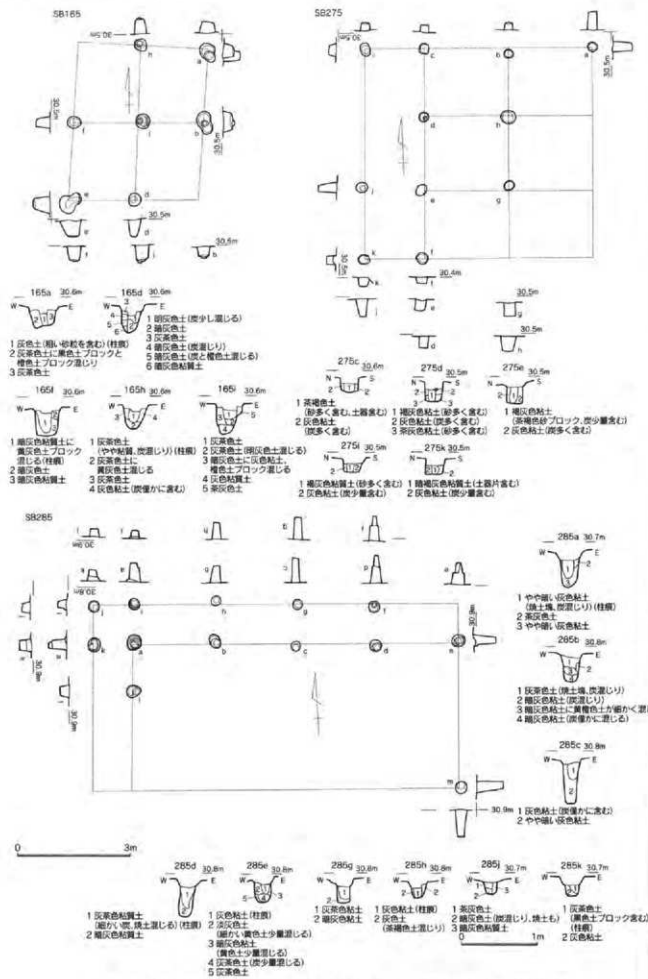


Fig.10 SB165・275・285遺構実測図 (1/100、土層図は1/50)

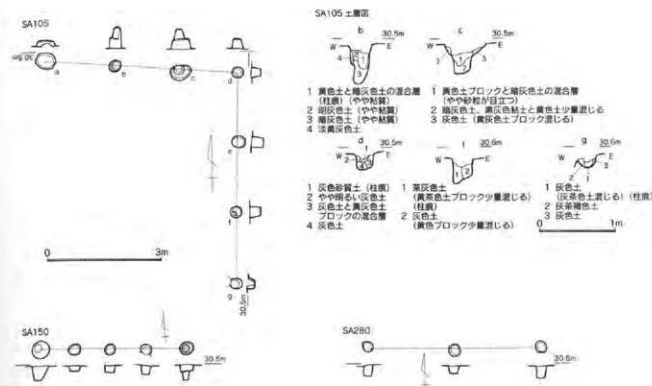


Fig.11 SA105・150・280遺構実測図 (1/100、土層図は1/50)

下層が第3遺構面の基盤であることが、その後の精査で確認できた。第3遺構面の南端部分には第1調査面を確認され、調査を行った。

○第4遺構面

第4遺構面は第3調査面で検出された遺構のうち、埋土が淡灰色の真砂土のような土や灰色砂で、地山である淡黄灰色土にアメーバ状に広がっているものが第4遺構面の遺構である。調査区北側で検出された黒色粘土にも、凸凹に入り込んで、黒色粘土ブロックやその下層の白灰色粘土のブロックなどが埋土に含まれている遺構を第4遺構面と判断した。これは、自然によるものではなく、人工的に掘り返されたものであることが理解できたが、そのほか淡黄灰色土に広がるアメーバ状の凸凹は僅かに遺物が含まれているもの、すべて人工的な意図がある掘り込みとも言い難く、また、淡黄灰色土の地山が降雨後とても柔らかいことから上面からの沈み込みも含まれていると考えられる。

(3) 検出遺構

3つの調査面に分けて発掘調査を進めたが、10章の調査および整理方法で述べたように整地の有無等によって第1調査面で第3遺構面の遺構を掘ることもあり、よって、時期の異なる遺構が混在する結果になっている。ここでは調査面で報告し、各時期については第VI章でまとめることにする。

○第1調査面

掘立柱建物

236-1SB030 (Fig.8)

2×2間の南北棟。振れは桁行で約N-3°43'-Eである。北東隅は調査区外で、南側中央はSK050に覆乱されて不明である。掘り方は円形で直径0.3～0.4m、深さは0.4～0.7m、柱痕は直径0.1～0.15m程である。柱間は南北が1.8～1.9m、東西が1.6mを測る。

236-1SB045 (Fig.8)

2×5間の南北棟であるが、北側は調査区に接するため、5間で終わるかさらに延びるのかが明確でない。振れはN-1°45'-Wである。柱間は梁行が西から2.0mと1.8m、桁行は2.0mで南端の柱間のみ1.9mである。掘り方は円形で直径0.25～0.35m、深さは0.35～0.5m、柱痕は直径0.12m前後である。さらに東側と南側に1.08mの間をあけて庇が1間付いている。掘り方は格子状に広がる畑状遺構の溝の埋土に掘り込んでいる。

236-1SB100 (Fig.9)

2×3間の南北棟の掘立柱建物で、南と西に庇が1間づつ付く。振れはやや歪んでいて、東側の柱筋で約N-1°Eを測る。柱間は梁行1.75m、桁行2.1m。掘り方は径0.3m前後、深さ0.4～0.5mで、庇の掘り方は径0.2m前後、深さ0.2～0.3m、柱痕は直径0.12～0.16mである。西北隅の庇の掘り方がXII明埋没のSD070の埋土に切り込んでいるため、それ以降の建物と推測される。

236-1SB145 (Fig.9)

2×4間の南北棟の掘立柱建物で、振れはほぼ真北を示している。柱間は桁行および2.2m、梁行1.9mを測る。掘り方は径0.3～0.4m、深さ0.5前後の円形で、柱痕は直径0.12m前後である。西側のみそれぞれの柱間の中央付近に径0.2～0.3mのピットが確認された。そのピットの埋土は灰色粘土である。

236-1SB165 (Fig.10)

2×2間の総柱の掘立柱建物で、振れは全体的に歪んでいて、東西に柱筋を合わせている所もあるが、およそN-1°56'-Eに振れている柱筋もある。柱間は東西1.7～1.8m、南北2.07mを中心に狭い所は1.95mを測る。掘り方は径0.3～0.4m、深さ0.4m前後の円形で、柱痕は直径0.16m前後である。SB100と重複しているが、掘り方の切り合いがなく新旧については不明。北西隅の掘り方は確認できていない。埋土に焼土塊を含むものがある。

236-1SB275 (Fig.10)

2間以上×3間の総柱の掘立柱建物の東西棟で、東側は調査区に接するため、さらに東側に続く可能性がある。西側に建物から1.6mで庇が付く。振れはN-2°35'-Eを測る。柱間は東西2.2m、南北は1.8m、2.0m、1.8mで中央部分がやや広い。掘り方は径0.22～0.38m、深さ0.2～0.5mの円形で、柱痕は直径0.1m前後である。柱痕は褐色粘土で、裏込めは灰色粘土で、両方に炭化物を多く含んでおり、これらの炭化物は建物建築前のものと推測される。

236-1SB285 (Fig.10)

調査区北端で南側は、試掘トレンチによって消滅している。3×4間の東西棟で、北と西には建物から1.06mで庇が付く。振れはW-2°57'-Nを測る。柱間は東西2.15m、南北は約1.2mを測る。掘り方は径0.24

～0.38mの円形で、焼土塊が多く出土する。また、柱痕は灰色粘土である。

236-1SB340

4間以上×2間以上の南北棟で、南側は攪乱により不明、西側は調査区外へ続いている、この報告書作成時にその西隣で第267次調査が行われていて、続きを確認した。柱間0.9～1.2mで、振れはほぼ真北を示す。柱痕は全体に灰色や茶灰色の粘土で、明瞭に確認できる。

236-1SB655

調査区西端で検出したピットが、その後隣接地で調査を行った第255次調査のS-101と第257次調査のS-5と合わせて、2間以上×3間の南北棟で、南側と東側に1間の庇が付く建物であることが判明した。振れはおよそN-1°57'-Eを測る。掘り方が楕円形のものが多く、建替えもしくは柱痕の除去が行われた可能性が考えられるが、柱穴掘削後に建物と認識したため掘り方の埋土状況が掴めていないため、明確に言い切れない。柱間は南北2.0m、東西は1.8mと2.0m、庇との間は東側が1.0m、南側1.08mである。全体として4.9m×7.0mの建物である。

236-1SB660

調査区南端で検出したピットが、隣接する第255次調査のS-60と合わせて、東西2間、南北4間で、南側に庇が付く南北棟と考えられる。柱間は南北2.1m、東西1.8m、庇との間は2.2mを測る。振れはN-2°30'46"-Eである。

櫓列

236-1SA105 (Fig.11)

南北3、東西3間のL字に展開する櫓列で、東西5.0m、南北5.45mを測る。当初は調査区外に続きがあると推測し、掘立柱建物と考えていたが、隣接地で調査を行ったところ、続きとみられる遺構が確認できなかったため、櫓列として報告する。柱間は南北1.85m、東西1.55～1.9m。

236-1SA150 (Fig.11)

東西に並ぶ柱痕を確認した5個のピット列。全長4.0m、柱間0.92～1.06mで、振れはW-2°43'-Nを測る。SB145の掘立柱建物の掘り方と接しているが、切り合い関係は微妙で不明瞭である。

236-1SA280 (Fig.11)

SB275の北側に平行して東西に並ぶ3個のピット列。全長4.5m、柱間2.3mで、振れはW-1°-Nを測る。SB275の柱間とほぼ同じであるため、建物と関係があるものと考えたいが、同時に存在するにはあまりに近接しているため、時期が異なる櫓列と考える方が妥当であろう。

236-1SA325

柱痕を確認した3個のピットで、南北に並び、対となるピットが確認できないため、櫓列と推測される。全長4.7m、柱間2.2mと2.5mで、振れはN-19°47'-Eを測る。柱痕は灰色粘土であった。

溝

236-1SD001 (Fig.12)

振れはN-0°43'29"-Sの南北溝だが、途中で東に屈曲した後、さらに北側に伸びている。検出長17.6m、幅0.6～0.85m、深さ0.1～0.18mを測る。埋土は周囲の地山に似た土質で、茶褐色土と淡灰色土の混合層で、南側に行くほど黄色土混じりの灰色土に変わっていく。遺物は玉縁の白磁が1点出土する以外は奈良時代の遺物が多い。

236-1SD015 (Fig.12)

振れはE-1°42'17"-Nの東西溝で、SD020と平行する。検出長20.3m、幅0.65～1.6mで東側がやや狭い。深さ0.05～0.15mで底面はほぼ水平である。

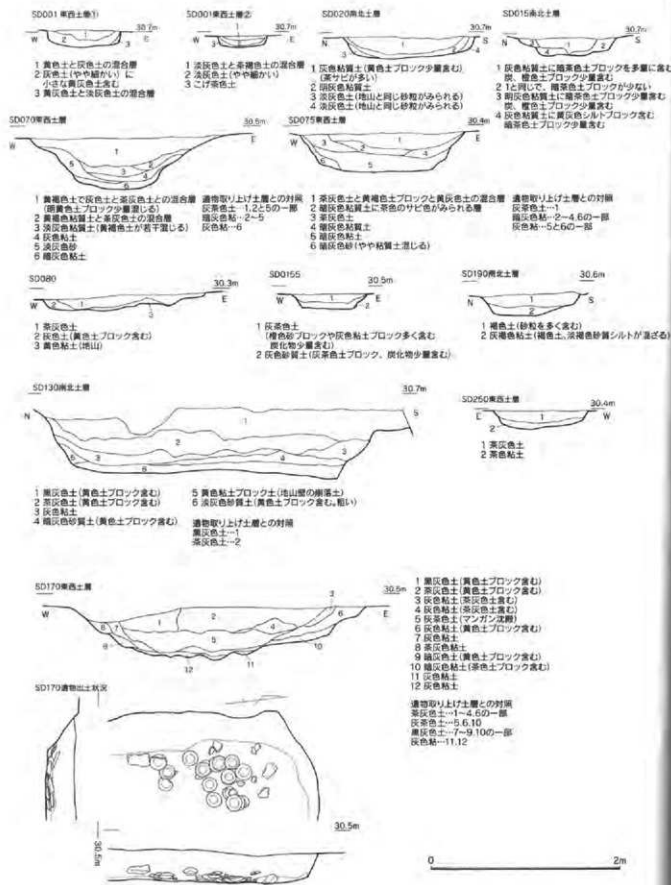


Fig.12 第1調査面溝土層およびSD170遺物出土状況実測図 (1/40)

遺構検出時点で、S-22や茶褐色土など11世紀の遺物を含む層が薄く上面を覆っていた。5ラインより西側では、暗灰色土に深く切り込んだ淡灰色土が明瞭に確認できた。淡灰色土には須恵器の蓋3や土師器の環A(9世紀代)の小破片を僅かに含んでおり、暗灰色土のような7世紀末前後の遺物という状況と大きく異なっている。淡灰色土の南端は溝の検出ライン内におさまっていることから、全く異なる溝とは考えがたく、8世紀中頃には殆ど埋没していた可能性が高く、SD015の北で確認された整地が行われた平安時代前半はこの溝は完全に機能していなかったと推測される。しかし、7世紀末前後の遺物が殆どを占める暗灰色土のような状況は、今後注意すべき課題である。

また、西端で馬の歯片は出土したが、この付近は数条の溝が切り交わっているため、この溝の埋没に伴うものなのかは明確でない。

236-1SD020 (Fig.12)

振れはW-1°49'37"-Nの東西溝で、SD015と平行する。検出長13.1m、幅1.1~1.65m、深さ0.2m前後でほぼ水平である。北岸が南岸に比べ、なだらかに立ち上がる。埋土は大きく2層に分けられるが、上層はその上の埋土によって、土壤変化したような感じで、土質はほぼ同質とみて問題ないであろう。また、淡灰色土ではF4~F5付近で骨片が少量出土し、その中に馬の歯が含まれていた。

236-1SD035

振れはW-1°39'37"-Nの東西溝。SD015を切っている。検出長4.25m、幅0.95m、深さ0.1~0.2mで、東側が若干深くなっているが、全体の埋土は同じ明灰色土である。

236-1SD041・042

振れはE-0°48'45"-Sの東西溝。検出長7.9m、幅0.2~0.8m、深さ0.1m前後である。第257次調査で、この延長上の溝が道路南側溝をなしている。

236-1SD065

振れはN-7°7'30"-Eの南北溝。検出長4.45m、幅0.5~0.7m、深さ0.04~0.1mの浅い溝で、埋土は暗灰色土の単一層である。SD030の建物がこの溝の埋土に切り込んで建てられている。

236-1SD070 (Fig.12)

振れはN-2°22'49"-Eの南北溝。検出長18.7m、幅1.1~2.0mで1.8m前後、深さ0.45~0.5mを測る。周囲の地山は黄灰色の細かい土で非常に柔らかい。多量に出土した遺物は殆どが土師器で、棄り痕跡は確認できない。遺物の時期幅はない。遺物を含む層は土層より遺物量が多い状況で、一括廃棄だと推測される。北側は攪乱で大きく削平されているが、その直前で陸橋の高まりがあり、上端幅0.4m以上、溝との高低差0.2mを測る。南側のSD075との境界部分も試掘で削平を受けているが、陸橋状になっていて上端幅0.43m、下端幅1.27m、高さ0.3mを測る。この陸橋間には上端で12.6m、下端で11.8mを測る。これは奈坊内の道路側溝でみられる連続土坑の状態が良いものと見られる。

埋土は遺物も多く含む層が暗灰色粘土と灰色粘土で、粘土が厚く堆積している。その両岸には砂層が薄く堆積する。特に北側の陸橋状になっている部分には粗い砂がやや厚めに堆積していた。

236-1SD075 (Fig.12)

南側は調査区外に続き、北側は陸橋状の高まりを挟んでSD070に続いている南北溝。検出長3.85m、幅1.85m、深さ0.5mを測る。埋土の堆積状況も下層ほど粘土層になっている。よって、SD070と同じ遺構とみて間違いないであろう。

236-1SD080 (Fig.12)

振れはN-5°49'5"-Wの南北溝。検出長8.65m、幅0.6~2.4m、深さ0.05~0.15mを測る。遺物は多くないが、奈良時代の遺物が多い。遺構は浅いため、溝の両側は直線的ではなく、蛇行している。北

側がやや深くなっている。

236-1SD125

検出長2.25m、幅1.15m、深さ0.3mを測る南北溝。調査区端のため全容は不明瞭だが、SD080に切られている。埋土は細かい淡灰色土で、周辺の地山の土が堆積したとみられる。埋土中に川原石は4個ほどまわって出土した。

236-1SD130 (Fig.12)

振れはW-1°49'32"-Nの東西溝。西側が大きく攪乱によって破壊され、東側はすぐ調査区外になるため、検出長4.0m、幅3.55m、深さ0.6mを測る。南側に淡灰色土、北側に明灰色土、それを除去すると一見地山のような黄色土と灰色土の混合層がみられたが、横の攪乱からこれは溝の埋土であることが確認できた。底面は途中で幅0.37～0.6mほど陸橋ようになっていて、高さは東底より0.2m、西底より0.45mを測る。埋土の最下層は灰色土のとても細かい土である。その土質はこの現場の雨天後に堆積した土壌に良く似ているため、随時流水があったというより、自然に堆積したとみるのが妥当であろう。

236-1SD155・190 (Fig.12)

南北方向の溝だが、東にやや湾曲している。検出長15.0m、幅0.9～1.0m、深さ0.14～0.3mを測る。SD070の延長上に位置するが、その間が攪乱で大きく削られているため、連続性が掴めない。埋土もSD070と全く異なり、茶褐色土で遺物も散発的に出土する状況である。SD155とSD190は攪乱によって分離されているが、埋土の状況が茶灰色土と灰茶色土の2層に分かれ、全く同じであることから、同一のものかと判断できる。

236S-1SD170 (Fig.12)

振れはN-5°2'23"-Eの南北溝。長さ12.3m、幅2.6～3.15m、深さ0.3～0.55mを測る。北端ではほぼ完形の土師器の丸底杯aが19個、小皿aが1個が重なり合って出土した。出土位置は底面より僅かに浮いた状態であるが、土器間の埋土と土器下の埋土は殆んど同じである。また、土師器は裏返ることなくすべて正位置で出土していることなどから、埋没時に意図的に置かれたものと推測される。その他では破片が出土するくらいで、多量に遺物が出土する状況ではない。埋土はやや濡った茶灰色土と灰茶色土が厚く堆積している。底および側面には灰色土や灰色粘土が薄く堆積している。また、丸底杯4枚の内面に薄く炭化物が堆積していた。樹種同定の結果、第V章に記しているようにシャンシャンボとツゲ科の炭化物であった。

236-1SD180

南北溝で振れはN-0°6'39"-Eである。長さ9.8m、幅1.6m以上、深さ0.05m前後と浅く、埋土は黒灰色土で、底面には2条の南北溝(SD329, SD185=225)が走り、東端の溝(SD329)は幅0.45～0.8m(0.6m前後)、深さ0.1～0.2mで、西側の溝(SD185)の西側立ち上がりは調査区外のためどのようなものかは明確にはわからない。両溝の埋土はほぼ同じで茶灰色土である。しかし、SD225についてはSD185の延長上にあるため、同一の溝とみられるが、遺物から9世紀代の埋没の可能性が考えられるため、明確に言い切れない。

236-1SD210

長さ約4m、幅2.6m、深さ0.3m前後の東西溝。東側を攪乱できれいに無くなっているが、その東側延長上にSD130がある。埋土状況が異なるため、全く同一のものとは言い切れないが、北側のラインは揃っているため、同じ意味を成す溝と推測される。2遺構を合わせた振れはW-0°30'6"-N。埋土は暗灰色土で攪乱近くでは黄色土や木材が出土したが、攪乱による影響と考えられる。

236-1SD220

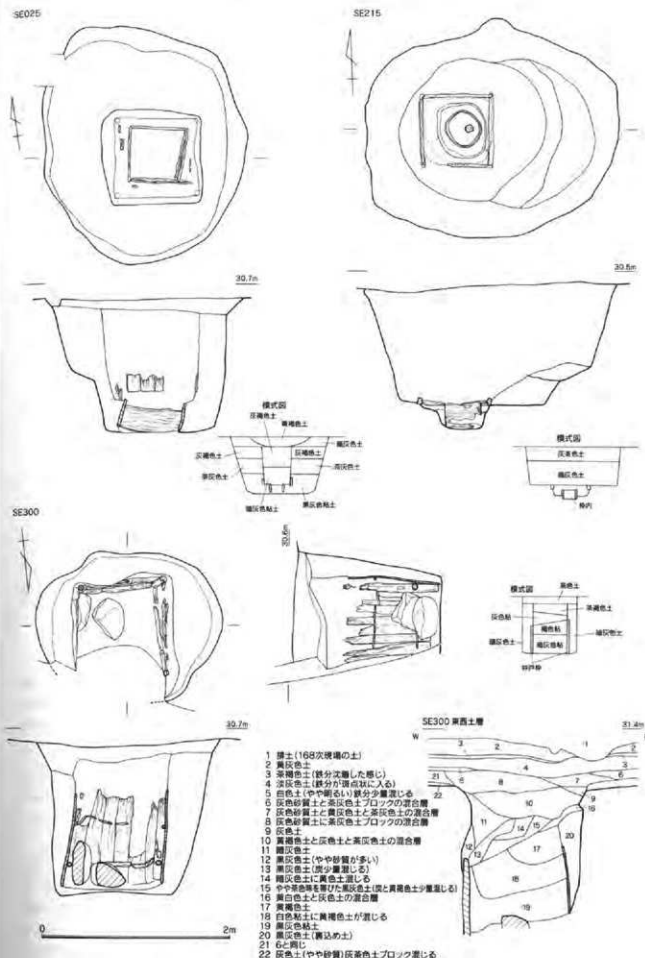


Fig.13 SE025・215・300遺構実測図 (1/40)

振れはN-7° 4' 43"-Eの南北溝。長さ4.2m、幅0.84～0.98m、深さ0.1～0.2m。埋土は茶灰色土でほぼ単層である。畑状遺構に切られている。

236-1SD250・260・335 (Fig.12)

振れはN-0° 36' 23"-Wの南北溝。長さ25.9m、幅1m前後、深さ0.15m前後でU字形をしている。埋土はおよそ2層で、上から灰茶色土と茶灰色土である。遺物量は比較的小さい。SD250と260と335は、それぞれ分析されているものの埋土の状況などから同一の溝と判断できる。

236-1SD270

振れはN-5° 19' 7"-Eの南北溝で北端が東に若干蛇行している。長さ11.6m、幅0.6～0.75m、深さ0.05～0.1m。埋土は淡灰色土でほぼ単層である。

236-1SD657・658

長さ1.7～2.3m、幅0.3m前後、深さ0.05～0.1m前後の小さな東西溝だが、畑状遺構のSX645の北端部に位置する。

井戸

236-1SE025 (Fig.13)

東西2.1m、南北2.5m、深さ約1.4mの楕円形をした掘り方で、遺構検出段階で円形プランの中央に黄褐色土が不定円形で確認できた。遺構全体を0.2mほど掘り下げた段階で、井戸枠と推測される方形プランを確認した。

井戸枠は一边0.8mの正方形で、北側と南側に幅0.05～0.1mの板材を立て並べていたが、本来の厚みがわからないほど腐食し、一部に残るのみであった。また検出段階でかなり土圧によって前に押し出されていた。四隅には井戸枠を留めていた隅柱の痕跡とみられる径0.05mほどの空洞があった。

中央には0.6×0.6mの正方形に組まれた板材が検出されたが、これはいわゆる曲物の代用であろう。部材の厚さは0.025m、幅は約0.3mで、部材同士はホゾなどの細工もなく組まれていた。表面に加工痕跡などは確認できなかった。この板材上面と井戸枠の底面とでは約0.1～0.2mの落差があり、やや不自然な状態を示している。

掘り方の明確な底面は、調査中に湧水によって周囲が崩壊してきたため、確認できていない。

236-1SE215 (Fig.13)

東西2.68m、南北2.32m、深さ1.38mの楕円形をした掘り方で、東側が一段テラス状になっている。井戸枠は横板の最下部が残っていて、内法0.68m×0.7mを測る。横板は西側のものが断面方形状に加工を施しているが、それ以外の3本は樹皮が残り、自然木をそのまま利用したものとみられる。それぞれの端部は凹凸状にホゾ加工し組まれていたとみられるが、腐食し欠損も目立つ。

横板に囲まれた中央には径0.38m、深さ0.26mの曲物が残っていた。曲物は一边0.74m、深さ0.26mの正方形の掘り方に納められ、横板はその掘り方の上面に置かれた状態であった。掘り方の中央付近より下は砂質土で、調査中は曲物内のみ湧水し、その曲物内からは瓢箪のような木製品は出土した。

236-1SE230 (Fig.14)

東西1.9m、南北1.8m、深さ1.2mの楕円形をした掘り方で、西側上面は積乱によって、削平されている。井戸枠は検出面から約0.6m付近から残っていて、四隅に隅柱を立て（1ヶ所欠損）、内法0.6m×0.7mを測る。南・西側には井戸枠が残存しているが、北側および東側の井戸枠は残っておらず、土層観察からも崩壊したことが窺える。井戸枠は腐食が著しいが、幅0.09～0.12m、厚さは現状では5mmの縦板を使用し、それぞれ南辺は縦板が約8枚、西辺は約9枚、東側は1枚のみ残存していた。南辺では縦板が一部二重になっていた。隅柱は直径約0.05m前後の断面円形で、ホゾなどの加工痕跡は腐食が著しく未確

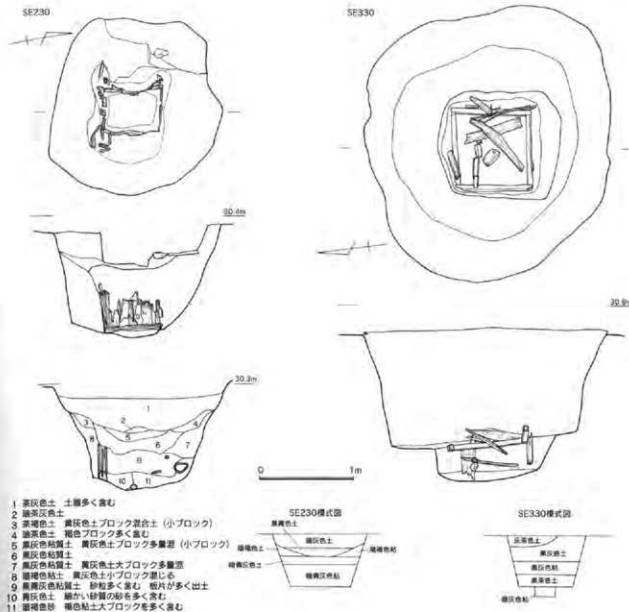


Fig.14 SE230・330遺構実測図 (1/40)

認。横板は腐食が著しいが、およそ断面円形をしており、直径0.02～0.05mを測る。横板は縦板の最下部付近で縦板を押さえるように設置されていた。東側の横板は隅柱より内側にずれていて、また、東側の横板が南辺の縦板の二重部分の内側の縦板に食い込んで検出されたことから、二重の縦板は修復痕跡の可能性が考えられる。井戸枠内の埋土から板材が少量出土し、最下層からは焼けた花崗岩が出土した。井戸底周囲の地山は粗い褐色砂である。

236-1SE300 (Fig.13)

調査区の北端に位置し、北側が調査区外になり未検出である。掘り方は東西2.0m、南北1.6m以上、深さ1.6mの楕円形である。井戸枠の内法は東西0.9m、南北1.0mを測り、縦板は検出面から約0.5m付近から残っているが、腐食が目立ち部材はふよふよの状態である。幅0.08～0.11m程で、一部幅0.2mのものもある。厚さは殆ど1.5cm前後である。横板は2段分が残存し、上段の横板はかなり腐食して、原型を失いかけているが、元来直径0.03m程の自然木を使用していたとみられる。また、横板は隅柱のホゾに差し込まれていたとみられるが、横板は当初の位置から最大0.2mほど落下していたが、隅柱に僅かにホゾが差し込まれた状態で残っていた。下段の横板は直径約0.04～0.05m程で、良好に原型を保っている。それぞれ端部は隅柱に彫りこまれたホゾに差し込まれた状態で検出された。上段のホゾ穴は残り

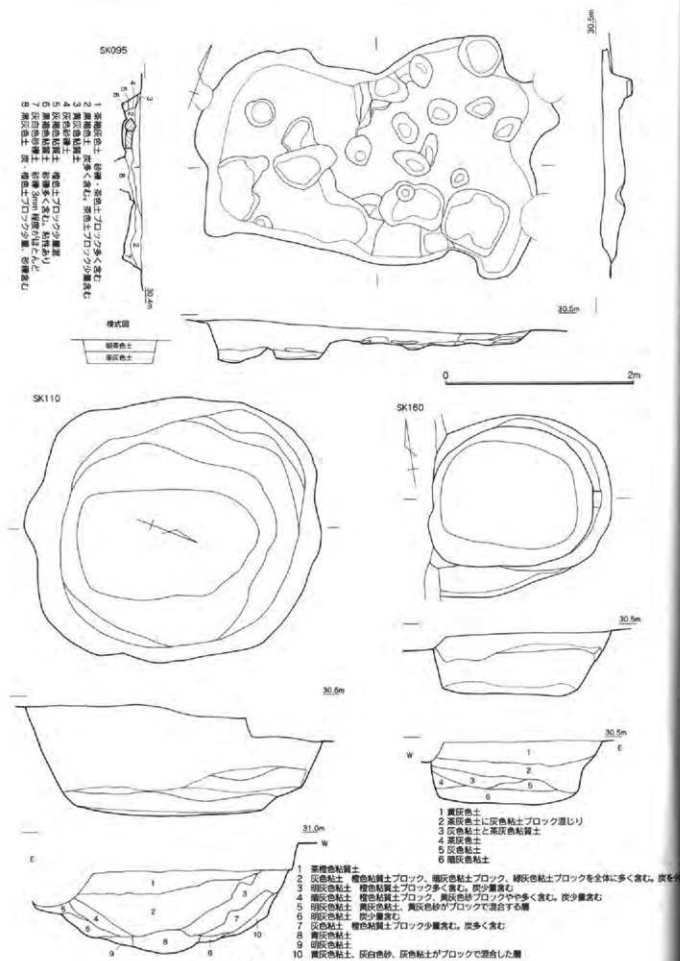


Fig.15 SK095・110・160遺構実測図 (1/40)

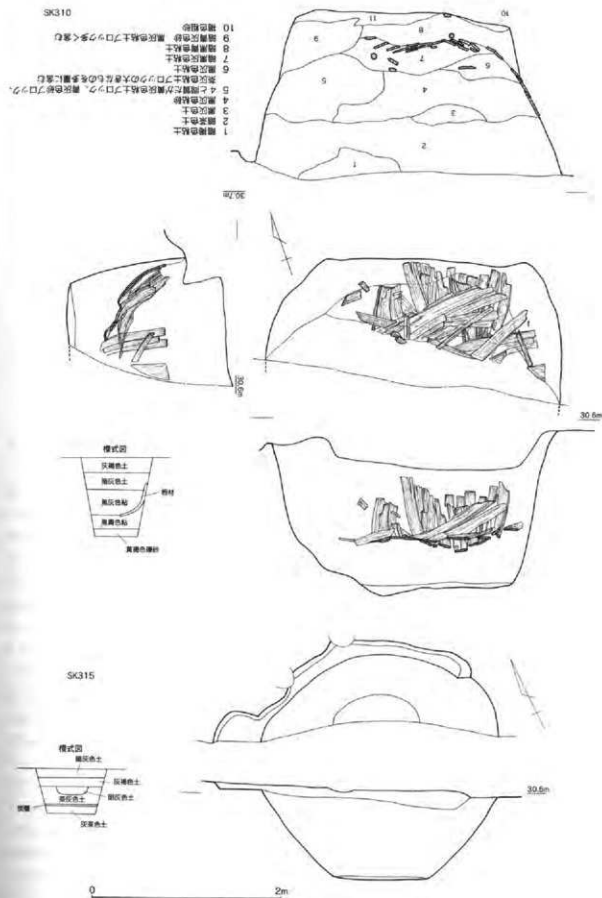


Fig.16 SK310・315遺構実測図 (1/40)

が良くないが、下段は残りがよく、縦0.09m、横0.04mの長方形を呈している。隅柱は残りが良い南側の2本は、直径0.09mの丸木で、一部に樹皮が残存していた。先端部は尖らせることなく、ほぼ水平にカットされていた。南西隅の下段のホソ穴は南辺と西辺の位置が段違いになっていて、南辺隅が上にあって長さ0.09m、幅0.04mで貫通している。西辺隅のものは長さ0.045m、幅0.035mで、貫通はしていない。また、隅柱底と縦板底はほぼ同レベルであった。

下段の横棧のレベルで花崗岩の大石が3個あり、ほぼ井戸底に接している。1個の大石と東壁の縦板との間には横棧が挟まる形で残っており、横棧がしっかりと顕在していた時に投げ込まれた可能性が考えられる。埋土の下位にあたる大石周辺からは草木が検出された。大石があって確認しづらい状況であったが、井戸底に曲物等は全く存在していなかった。土層堆積状況が、周囲にない黄色土が多く堆積していることや東側からの傾斜がみられることから、自然堆積というより人為的に埋められたと推測される。井戸底にある花崗岩の大石もその時に投げ込まれたものと推測される。調査中は湧水が著しく周囲が崩落していた。

236-1SE330 (Fig.14)

東西3.0m、南北2.6m、深さ1.2mの隅丸方形をした掘り方である。遺構検出時点で、細かい土師器片を多く含む灰茶色土が、黒色粘土ブロックを多く含む黒灰色土の西側に偏った状態で検出された。黒色粘土は掘り下がるほど量が多くなった。遺構検出面から約0.5mまでは黒灰色土で井戸枠跡のプランは全く確認できなかった。井戸枠の横棧が確認されたあたりから、砂利混じりの黒茶色土になり、湧水も著しくなった。

横棧は南東隅が最も高く、北西隅が最も低く、その高低差が約0.36mで、明らかに当初の位置から傾いた状態で検出された。しかし、横棧はそれぞれホソで組み合ったままで、約0.74m四方の方形を保っている。横棧両端のホソは東西が凹型、南北が凸型に加工する。その外側には元位置を保っている縦板が3枚確認できた。また、横棧に囲まれた内部からは、転落した縦板に混じって曲物が1点傾いた状態で出土した。大ききや出土状況から転落した曲物と推測される。埋土中からは、井戸枠材の破片が散発的に出土し、良好な部材は幅0.052～0.17m、厚さは0.007～0.02mであった。また、井戸枠を除去した部分には、南北1.3m、東西1.12m、深さ約0.5mの方形の掘り込みがある。

井戸枠や横棧の出土状態、埋土の状態などから、この井戸は崩壊した後に黒灰色土によって埋められた可能性が考えられる。

土坑

236-1SK050

検出時では方形プランを示していたが、降雨と湧水によって崩落し、写真・実測時は円形になり、原形から大きく変わってしまった。大きさは直径約2m、深さは1.2mを測るが、当初は南北約1.8m、東西約1.5mであった。SB030を切っているが、埋土は灰色砂混じりの近現代の掘削のようなものであったため、時期の特定は困難である。

236-1SK095 (Fig.15)

規模は3.88×2.55m、深さ約0.35mで、東西に長い不定形の長方形をなしている。底面にはピットが確認され、全体的に凹凸がある。ピットについてはこの土坑に伴うものか、下層の遺構なのかについては判断が難しい。埋土は炭や黄色土がまじり、一見掘削のような状況を示している。また、焼土塊が多く出土している。底面は暗灰色砂である。

236-1SK110 (Fig.15)

規模は南北3.15m、東西2.8m、深さ1.15mの楕円形で、きれいな掘削形をしている。検出時は井戸で

はないかと思われたが、途中で草木片は出土するものの、加工を施した木片や井戸枠材等は全く出土していなかった。埋土は全体的に少量ではあるが炭が混じり、底面近くの青灰色粘土からは焼け石が3個出土した。柔らかい地山を掘り抜いているため、底面や底面近くの側壁は非常に崩れやすい状態である。

236-1SK160 (Fig.15)

規模は1.9×1.9m、深さ0.7mの円形土坑である。西側はSD155によって切られている。底面に近い下層は灰色粘土で木片を少量含んでいた。

236-1SK235

規模は0.91×0.61m、深さ0.5mの円形土坑で、埋土は黒灰色土で、土師器の破片が細かく入っている。底に花崗岩の川原石が置かれている。隣接する第168次調査で一部調査されている。

236-1SK240

規模は1.8×0.5m以上、深さ0.53mの円形土坑である。隣接する第168次調査でSK440として半調査されている。

236-1SK290

規模は3.9×2.55m、深さ0.25mの南北に長い土坑である。埋土は中央付近が灰色粘土で、その周囲は茶灰色土であった。灰色粘土には土師器の丸底杯が多く含まれていた。

236-1SK310 (Fig.16)

調査区際のため全容は不明であるが、確認した規模は東西3.15m、南北1.4m、深さ1.75mの円形の土坑で、土坑の北壁と底面には板材が積み重なっている。北側に因っては土坑の傾斜に沿って板材も湾曲している。板と板の間には粘土が入り込んでいるところも確認できた。下端から0.3m付近でも屈曲している板材も数点みられた。板材は幅0.08m前後で、長さは1mを超えるものもある。板材は大きく2層に分かれ、壁にまっすぐもたれ掛かる板材は多いところで3～4枚重なり、その上にやや斜めに板材が重なっている。もたれ掛かった板材の下部からも短めの板材が出土する。この短めの板材に対し逆方向の90度で立つ板材が2～3枚出土。折れて落下したもののかの判別はできない。これらの下から板材は出土しない。板材に挟まれた状態で、井戸の横棧に似たような凸型に加工した角材が2点出土し、また、西側の調査区際に直径0.05m程の丸木が縦に刺さり、その外側に縦板が3枚確認され、調査区外に続く可能性がある。埋土の最上層である灰褐色土からは欄干口が出土。その下の層は黄灰色ブロック混じりの暗灰色土で、その下の黒灰色粘質土には木片が少量混じり、北側の壁からも板材が検出し始める。この埋土は下層ほど砂混じりの粘質になっていく。

現状でこの遺構が何なのかを言及するには情報が乏しいが、隣接地の調査で明らかにしていきたい。

236-1SK315 (Fig.16)

調査区際のため全容は不明である。規模は東西2.5m、南北1m以上、深さ1.0mで、現状では半円形の土坑である。埋土は暗灰色土で、中央付近は黄色ブロックが細かく入っている。遺物量は検出時から多く、土師器が殆どである。茶灰色土の底面および側面からは炭化物が多く検出された。この炭化物を採取し、放射性炭素年代測定を行ったところ、第V章で示したように、較正年代がcalAD686～802であり、遺物と同じ年代結果が示された。

堀状遺構

236-1SX640 (Fig.17)

調査当初は溝として調査を行っていたため、各溝に遺構一覧表に記したように遺構番号を付したが、以下のようにひとつの遺構と考えたため、S-640と統一して報告する。

幅0.25～0.5m (0.35m前後)、深さは東西0.05～0.15m、南北0.1～0.25mほどの溝が約3m四方の



Fig.17 SX640・650遺構配置図 (1/200)

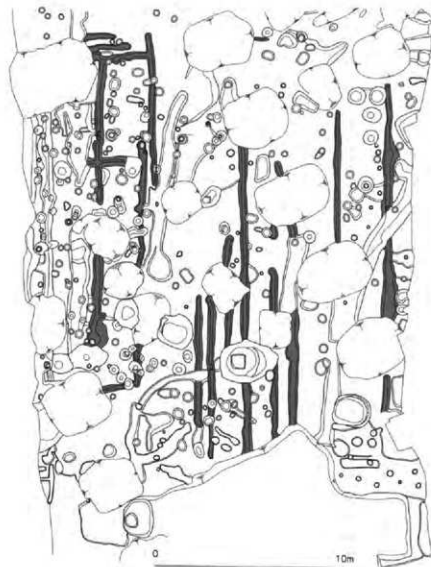


Fig.18 SX645遺構配置図 (1/200)

格子状に広がっていて、南北37mの範囲で確認でき、西隣の第257次調査でも検出され、東西合わせて約45mまで広がっていることがわかった。主な所見をあげれば以下のとおりである。

- ・東西溝と南北溝とは、切り合いが微妙な状態で確認できる所がある。
- ・東西溝と南北溝は埋土が全く同じで、切り合いが非常に困難な場所も多く、殆ど時間差なく掘削・埋没が行われたと考えられる。
- ・格子溝以外にも何度か掘り直しとみられる溝が検出された。
- ・溝の底面に砂や腐植土などが常に流れていた痕跡は全く確認できない。
- ・埋土を花粉分析したところ、風化が目立ち植生復元するような結果は得られなかった。
- ・溝の間隔が3mとやや広く、畝の間に掘られた溝としては深い。
- ・灰色土の整地と検出範囲がほぼ一致する。
- ・遺構の範囲には同時期の建物が検出されていない。
- ・類似した遺構が長岡京跡水垂地区で検出されており、菜園遺構と推測されている。

以上のことから、湿気抜きなど地盤を安定させる溝と耕作(畑)に関する遺構と考えられるが、その後の目立った土地利用がないことを考えると畑の遺構と考える方が妥当ではないかと考えた。しかし、作物の畝の間に掘られた溝というのでなく、作物の畝に直角に掘った溝と推測される。今後の事例の増

加によって新たな見解も出てくるものと考えられる。

236-1SX645 (Fig.18)

大混乱と14条路との間で検出された幅0.22～0.45m(0.37m前後)、深さ0.15m前後の南北溝のごとで、検出範囲は南北約23mである。埋土は茶灰色土で砂層は見られない。断面形状はU字形をしている。約8本の列になり、2.5m間隔で掘られているものもある。南側で検出された格子状に展開する溝(SX640)と同じ性格である可能性が考えられる。

時期はVIII～IX期埋没のSE215に切られていることから、それ以前の埋没と推測される。

236-1SX650 (Fig.17)

格子状に展開する溝(SX640)の中で最も新しい東西溝で、埋土は灰色土のほぼ単層で、S-5・10・34・140の4本の溝で、それぞれS-5は長さ10.6m以上、幅0.4～0.56m、深さ0.15～0.23m。S-10は長さ4.1m、幅0.5m、深さ0.2m、S-34は長さ8.7m、幅0.45m、深さ0.2m前後。S-140は長さ7.6m、幅0.4～0.6m、深さ0.13～0.2mを測る。SX640・645のような大規模な畑ではなく、屋敷内の小規模な菜園と推測される。

道路遺構

236-1SF665

SD015と020に挟まれた空間で、現存幅4.0m、溝中心間は5.46mを測る。上面は削平され、地山が露出している状態であった。平安後期には、SD041・042を南側溝とする東西路が造られている。

整地層(第1調査面基盤層・第2遺構面覆土)(Fig.7)

236-1SX345

整地層と考えられる土層で第2調査面でも述べるが、調査区は北端であったため全容が掴みにくい状況であった。その後この遺構は大きく2期の埋土で構成されていることが判明した。上層はXII期、下層はVII期頂である。調査区北端付近は細かい土器片が一面に広がっていた。西側のAU22付近からは丸底環が完形の状態でもとまって出土した。ほぼ同レベル、また正位置で出土している土器も多い。

236-1SX350

北端部に東西に広がる第2調査面を覆う整地層である。茶灰色土で鉄サビのような土も混じっている。東側は細く溝状になっているため、溝状の窪みを埋めたものと推測される。

236-1SX717

茶褐色土に黄色土が混じる土層で、厚さ0.05mほどである。

236-1SX718

暗灰色土層で、黄色土を少々含む。

236-1SX719

試掘トレンチ沿いに細長い整地で、灰茶色土である。

236-1SX722

灰茶色土で錆色をしている。厚さ0.05mほどである。

236-1SX723

黄色土で若干白色土が混じっている。遺物はあまりなく、殆ど下層から出土している。

236-1SX724

灰茶色土層。

236-1SX726

灰茶色土で錆色土を含む。東側ほど土色は明るくなる。

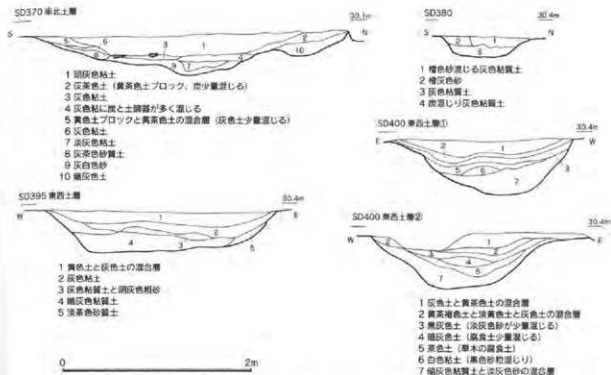


Fig.19 SD370・380・395・400土層実測図(1/40)

236-1SX727

黄色土と白色土と茶色土の混合層で、真砂土のような土質である。

236-1SX728

錆色土や黄色土を含む灰茶色土層である。

○第2調査面 溝

236-1SD355・360

SX350の整地を除去後に確認できる溝で、整地の北辺に沿う形で東西に蛇行している。SD355とSD360は幅0.66m分断されているが、ほぼ同一遺構とみられる。SD360の埋土は紫色に近い暗灰色土で、西端の行方については確認できなかった。SD355は検出長5.3m、最大幅1.0m、深さ0.2～0.25m、SD360は検出長9.2m、幅0.8～1.3m、深さ0.1m前後を測る。

236-1SD365

掘れはN-7°12'40"-Wの南北溝で、検出長2.7m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。SX350によって切られている。

236-1SD370・375 (Fig.19)

掘れはW-1°31'12"-Nの東西溝で、検出長24.3m、幅2.65～3.45m、深さ約0.3～0.5mを測る。SD375とSD370でひとつの溝と考えられるが、当初溝と認識できていなかったことと混乱で分断されていたことから、調査時は遺構番号を分けて調査を行った。

SD370は第1調査面の遺構検出時に一部の遺構ラインは確認できたが、部分的に整地が覆っていたため第2調査面で調査を行った。SD375のプランについては、第1調査面では全く確認できなかった。埋土は明茶色粘土でその下に灰色粘土、灰色砂で地山に達する。南北両肩に中段があり、溝は二段掘り込みの形状を示している。SD370の明茶色粘土には丸底環など多くの土器が出土する。

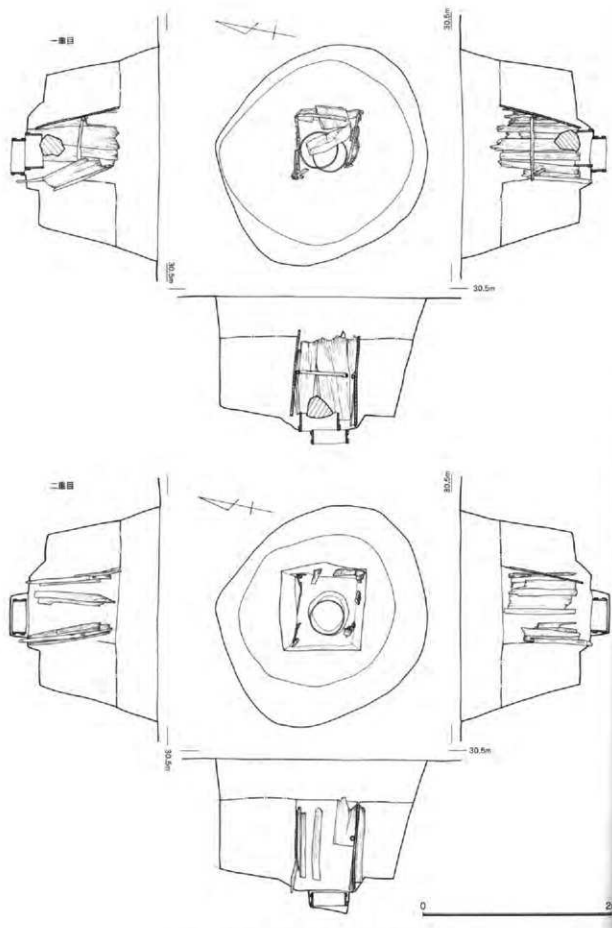


Fig.20 SE385遺構実測図 (1/40)

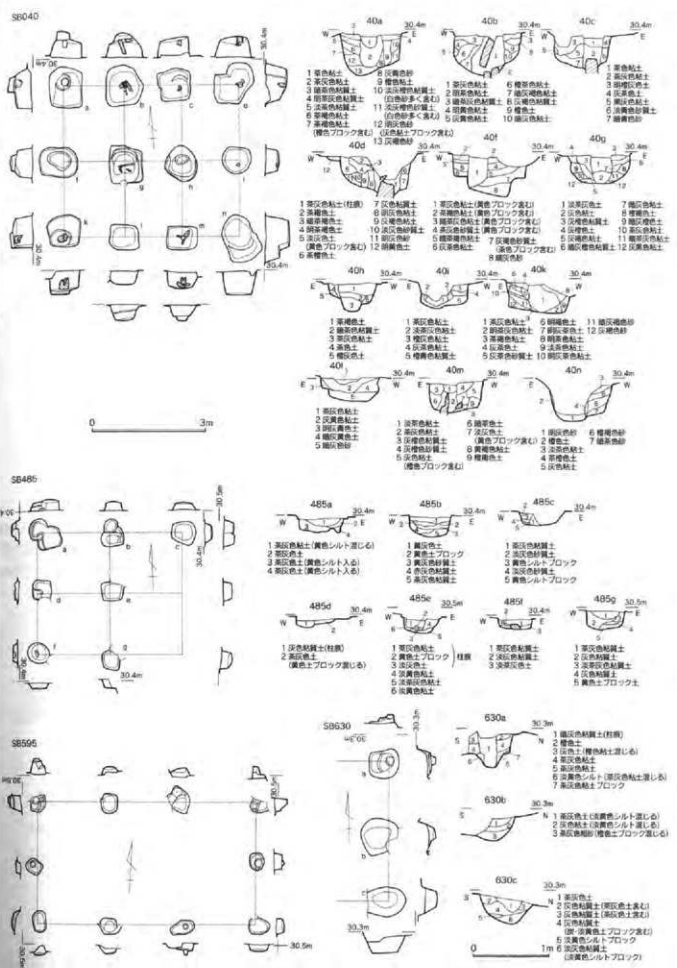


Fig.21 SB040・485・595・630遺構実測図 (1/100、土層図は1/50)

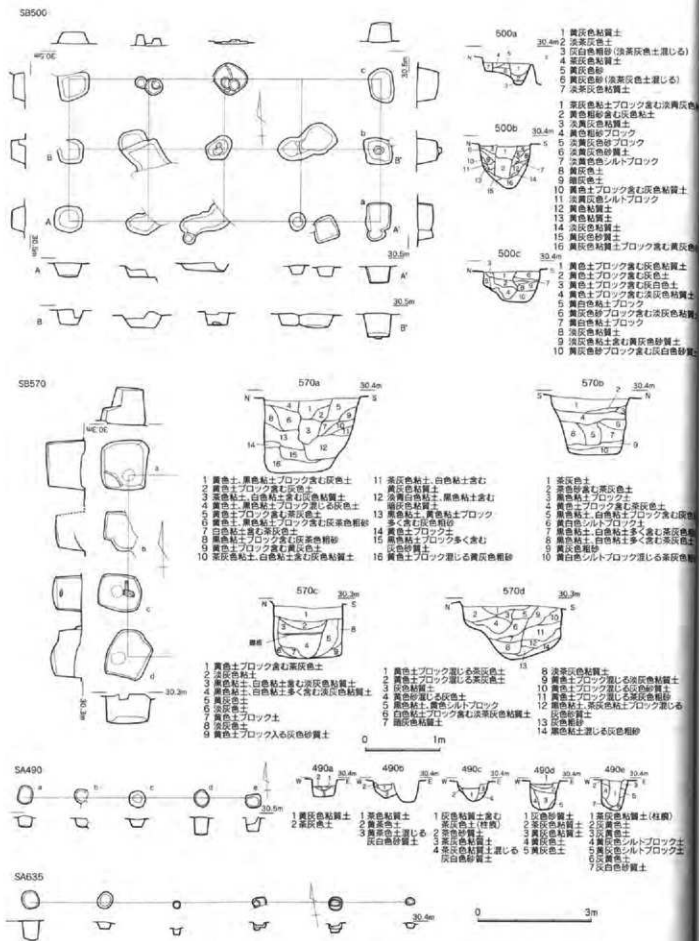


Fig.22 SB500・570、SA490・635遺構実測図 (1/100、土層図は1/50)

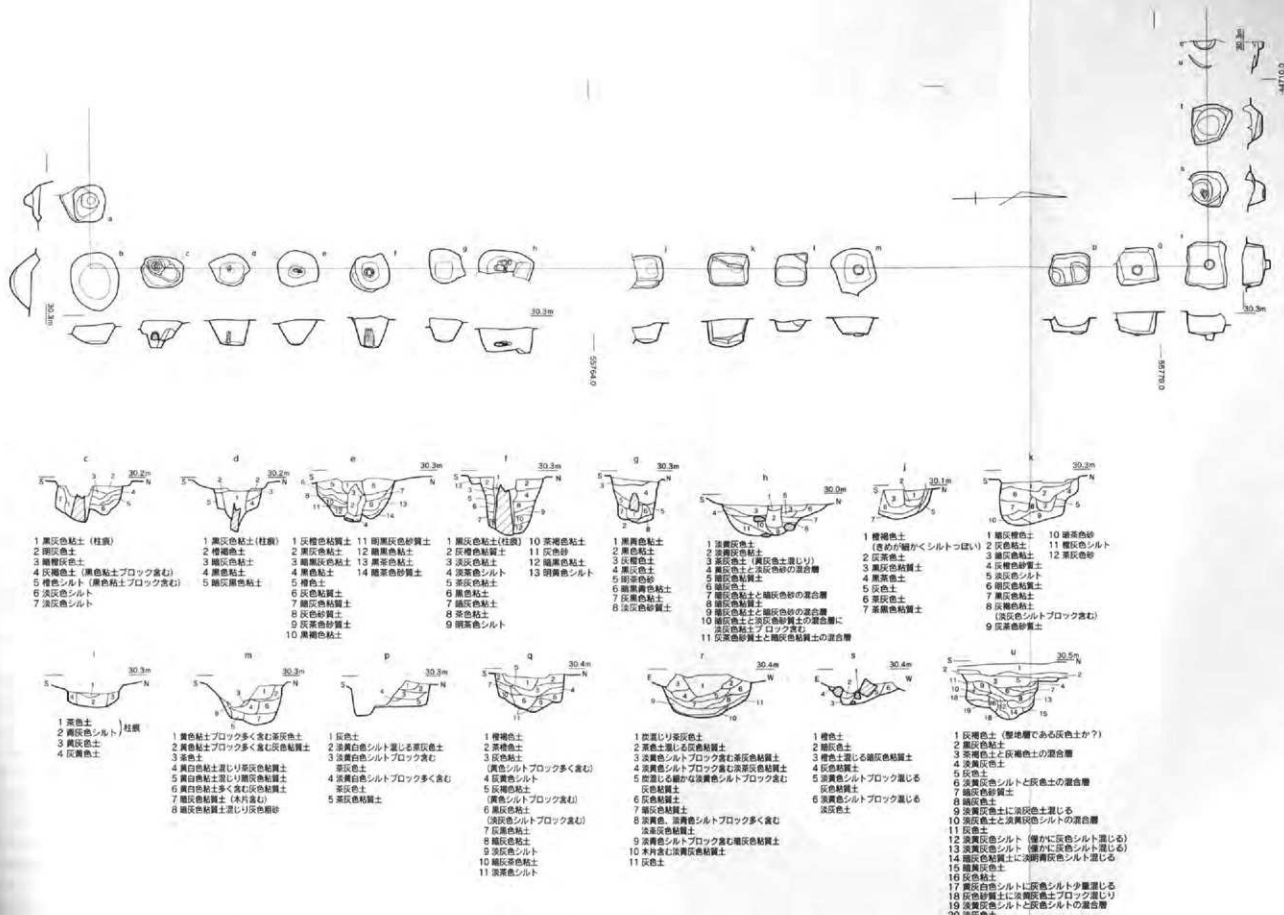


Fig.23 SB480遺構実測図 (1/100、土層図は1/50)

236-1SD380 (Fig.19)

振れはW-3° 3' 10°-Nの東西溝で、検出長16.3m、幅0.85～1.3m、深さ0.2m前後を測る。東側は攪乱によって行方不明である。西側は途中で途切れている。SD370・375と平行するが溝の規模や遺物の混入状況は全く異なっている。埋土は灰色粘土で、西側はその下層に黄色砂混じりの黄灰色粘土が堆積していた。

236-1SD395・400・786 (Fig.19)

この3つの遺構は攪乱などによって分断されているため、繋がっていたかどうかについては明瞭でないが、南北に並んでいるため、連続土坑のように同じ性格の遺構であると判断し、ここで合わせて報告する。

SD395は振れがN-0° 5' 49°-Sの南北溝で、検出長10.1m、最大幅3.5m、深さ0.1～0.6mを測る。埋土は上面に黄色土混じりの茶灰色土が蛇行し、その下に茶色砂を含む灰色土が全体的に広がっている。その埋土を除去すると灰色粘土が厚く堆積している。灰色粘土には部分的に土師器を多く含んでいるところがある。

SD400は振れがN-13° 3' 21°-Wで、検出長5.8m、最大幅2.8m、深さ0.2～0.9mを測る溝だが、一見長い土坑のような状態である。南端はSD370の埋土の端を僅かに切り込み終わっている。上面は複数の薄い整地がみられ、その下面より灰色粘土が溝状に検出される。その下には茶灰色土を挟んで、炭を多く含む黒灰色土が厚く堆積し、南端の方では草木も多く見られた。また、0.6×0.3mの花崗岩や白色粘土の塊も検出された。

SD786は南北4.9m、東西2.9m、深さ0.07～0.15mの不定形な土坑状の遺構で、底面にも土坑があり、凸凹している。単なるたまりかどと考えていたが、SD395・400と南側に続く遺構が検出されたため、一連の溝の可能性が推測される。埋土は灰色土と黄色土の混合したものである。

236-1SD415

振れはE-0° 58' 31°-Nで、検出長7.1m、幅0.4～0.95m、深さ0.15mを測る東西溝。埋土は灰色土である。

236-1SD560

第2調査面で検出されていたが、作業に伴う窪みや試掘トレンチによって、確認できる状況に至ったと判断し、遺構の掘削は第3調査面で行ったが、ここでは遺構検出順のまま第2調査面で報告する。振れはE-0° 28' 19°-Nで、検出長13.0m、幅は1.7m前後で最大幅1.95m、深さ0.5m前後で最深0.8mを測る東西溝で、東側は先細りになっている。埋土は黒色粘土である。

井戸

236-1SE385 (Fig.20)

11世紀後半の遺物を含む整地層を除去した面から検出された。しかし、第2調査面検出時は土質が異なるというよりは円形に割れ目がある状態で確認されたことから、埋土の土質の違いによる沈み込みと推測され、第2調査面よりやや古い時期の埋没とみた方が妥当と考えられる。掘り方は南北2.2m、東西2.3m、深さ1.6mの楕円形で、中央付近で検出された方形の井戸枠は、内法南北0.75m、東西0.62mを測り、四隅には径0.05m前後の隅柱が立てられ、横棧は隅柱を貫通するホゾ穴に差し込まれていた。ホゾ同士はずれた状態で彫りこまれている。横棧は径0.03～0.045mの自然木で、樹皮が残存していた。横棧に押さえられた状態で、幅0.045～0.1mの縦板が残存していた。西側の井戸枠は殆ど検出されていないが、南西隅の隅柱が大きく東側に向かって傾いていることや残存する縦板が一回転して南側の横棧に接していることなどから崩壊し消滅したと推測される。また、最初の井戸枠縦板の背後には、幅0.1m前後の縦板を中心に0.03～0.21mとばらつきのある縦板が部分的に残存していた。この縦板は一重目比べて大きく厚みがある。二重目に隅柱は確認できなかったが、当初から存在していたかも不明である。

井戸枠内には大きな花崗岩が落下して、それを除去した直下から曲物が検出された。径0.38m、深さ0.19mで木質の腐食が目立ち、調査中の土圧で崩壊した。その直下からさらに曲物が確認されたが、位置関係は若干ずれた状態であった。下位の曲物は径0.4m、深さ0.15mで、上位の曲物と異なり非常に残りが良かった。下位の曲物は井戸枠の隅柱より深い位置に設置されていた。

以上のように、曲物が2個あることから、修復して使用されたと推測されるが、縦板が二重になっていることについては二重目の縦板が中位までしかないものもあり、補強材とも考えられる。

土坑

236-1SK390

楕円形状の土坑で、南北約3.7m、東西約2.8m、深さ0.2mを測る。僅かにSD400を切って掘り込まれている。底面からは浅いピットが検出された。深さが浅いため、埋土はほぼ単純層であるが、埋土中にSD400埋土で検出された白色粘土が少量出土した。草木も少量出土。

236-1SK405

直径1.2m、深さ1mの円形の土坑である。埋土はほぼ2層で上層がやや粘質の黒灰色土で、下層がシルト質の青灰色土である。掘り込んだ周囲の地盤は砂質で、少量の湧水がある。

その他の遺構

236-1SX345

調査区北西部に広がる整地層。第1調査面でも前述したが、調査区が狭まる部分で、全容が掴めない状況であったが、出土する遺物は多く、上層はXII期、下層はVII期頃の大きく2時期の遺物があり、この遺構の中に上下2面あるものと推測される。詳細は隣接地の調査で明らかにしたい。

○第3調査面

調査区北西部以外では、この面で異なる時期の遺構面が2面同時に検出される状況であった。よって、層位が明瞭な北西部以外は第3調査面で報告する。

掘立柱建物

236-1SB040 (Fig.21)

南北2間、東西3間の総柱建物。柱間は梁行約1.5m、桁行2.1m、振れはN-4° 29' 33" Eである。さらに東側に掘り方が確認されたため、調査時は同一遺構とみていたが、他のものに比べ浅いため、報告時には別遺構とした。柱根に関しては第1面で一部プランが確認されたものもあったが、掘り方は全く確認できず、また、その柱根部分の埋土も空洞が多く、柱が腐食したことによる陥没した状況を示していた。掘り方は一辺0.62～1.1m、深さ0.3～0.6mの隅丸方形を呈する。掘り方のうち、柱材が残るものが6ヶ所、横木などの礎板だけ残るものが2ヶ所と比較的遺存状況は良好であった。柱穴は明灰色粘土で満たされている。柱根の径は0.2m前後を測る。

236-1SB420

第168次調査でSB250として確認されていた2間×4間の建物の残りの掘り方3つ分である。埋土は黄色土で、明瞭な柱痕は確認できていない。

236-1SB480 (Fig.23)

東西3間以上、南北16間の南北棟で、南北長29.6m(小尺100尺)を測り、柱間は梁行約2m、桁行約1.85mである。振れは僅かに東に振れていて、N-1° 9' 6" Eである。掘り方は9世紀代の灰色土の整地で覆われ、灰色土下層の整地に切り込んでいた。この下層の整地の時期に関しては、遺物が少なく特定できていない。掘り方は一辺1m前後の方形もしくは隅丸方形を呈し、深さは0.25～0.75mで、覆って0.8m前後である。

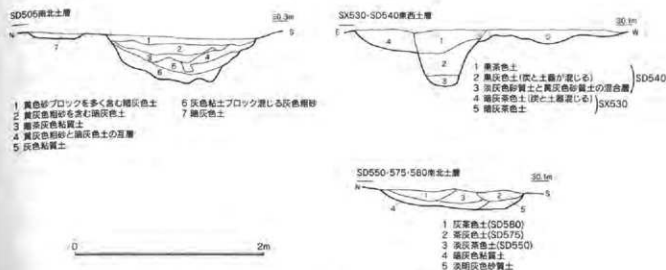


Fig.24 第3調査面溝土層実測図 (1/40)

柱痕や礎板が残る掘り方が5つあり、ひとつは川原石を敷いたものがあった。柱痕で最も残りが良いもので、径0.19m、高さ0.59mほどであった。

調査区西端で検出され、西側の展開状況がわからない。また、掘り方が一部擾乱によって欠落しているため、1棟の建物か複数の建物か調査時は不明確であったが、南側の第257次調査で、同様の大型建物を検出したため、SB480は長大な1棟の掘立柱建物であったと推測でき、あわせて2棟が南北に並んでいたことになる。この西半分は報告時に行っている第267次調査で確認されている。

236-1SB485 (Fig.21)

東西2間、南北2間の総柱建物で、南東部は擾乱で欠損する。柱間は東西1.9m、南北1.6mである。振れは僅かに東に振れていて、N-2° 45' 30" Eである。掘り方はおよそ一辺0.5～0.6mの隅丸方形で、深さ0.1～0.3m、土層観察や掘り方の検出状況から柱は抜き取られた可能性も考えられる。SB40と重複しているが、切り合い関係からSB485が新しい。

236-1SB500 (Fig.22)

S-495とS-500として調査を行ったもので、当初別遺構とみていたが、西隣の第257次調査で、S-500と同規模の掘り方が確認され、同じ意味を持つ遺構と判断された。柱間は1.9m、掘り方は一辺0.7m前後の隅丸方形で、深さは0.4～0.6mのしっかりした造りをしている。しかし、この2間の掘り方の間には同規模の明瞭な掘り方が少なく、建物として図示したが、明確に言い切れない状況である。巨大な建物SB480やSB570との位置関係から門の可能性も考えられるが、今回は明言できず周辺の調査によって再検討しなければならない。振れはW-3° 34' Nである。

236-1SB570 (Fig.22)

調査区の東縁で、南北3間の4つの大きな掘り方が検出した。埋土を調査したところ、明瞭な柱痕は確認できず、土層観察から柱を抜き取った可能性が高い。よって、規模は南北4.8mで、柱間はおよそ1.6mと推測される。振れについては柱痕を確認できていないため、明確ではないがSB570cで検出した礎板の位置を考慮したところ、同時期とみられるSB480に近い振れの可能性が高いと推測した。掘り方は方形を呈し、その一辺が1.0～1.3m、深さ0.75～1.0mという大きさを誇っているため、櫛列というより、掘立柱建物と推測され、東側の調査区外に続いているものとみられる。

236-1SB595 (Fig.21)

南北2間、東西3間の東西棟。柱間は梁行1.63m、桁行1.92mと推測される。振れはおよそW3°2'5"である。掘り方は0.38～0.66mの不定円形を呈する。掘削中はビットとして掘り下げていたが、整理中に建物として完結することがわかったため、柱痕の確認等を怠っている。埋土は掘り方の場所によって異なり、西側は地山が黒色粘土や白色粘土地盤のため、それらの混合土で埋まり、東側は粘土地盤でないため埋土は灰茶色土であった。

236-1SB630 (Fig.21)

調査区西端で検出した南北2間の柱列、調査時はS-480としていたが、SB480と異なる建物と考え、新たに遺構番号を付した。掘り方が周囲の建物に似ているため、東西棟の掘立柱建物になると推測される。南北長3.7mで柱間は1.85m、振れは柱痕を明瞭に確認していないが、振れはSB480とほぼ同じ約N1°45'Eとみられる。掘り方は長さ0.7～1.0m不定円形で、深さは約0.5mであるが、断面形状はややなだらかである。

欄列

236-1SA465

東西4間の欄列で、長さ3.6mを測る。振れはE1°34'Eで、柱間はおよそ0.9m、掘り方は径0.35～0.5mの円形である。

236-1SA490 (Fig.22)

東西4間の欄列で、長さ6.1mを測る。振れは約W3°10'Nで、柱間はおよそ1.5mである。掘り方は径0.4～0.5mの円形で、深さは0.2～0.45mである。

236-1SA635 (Fig.22)

報告整理中に確認した東西5間の欄列で、長さ10.1mを測る。振れは約W9°9'Nで、柱間はおよそ2mである。掘り方は径0.2～0.5mの円形で、深さは0.1～0.5m。底面のレベルは深浅が交互になる。

溝

236-1SD410

振れはN17°27'50"Eの南北溝。検出長8.3m、幅3.5m、深さ0.1m前後。SE385の井戸が切り込んでいる溝。埋土は黒灰色土。南側は試掘のトレンチで切断されていて、その後の行き先は不明。

236-1SD430

振れはW4°43'1"Nの東西溝。検出長6.2m、幅0.28～1.0m、深さ0.06～0.5mを測る。埋土は黄灰色土・灰色粘質土・黒色土で黄色土ブロックを含んでいる。1・2面目の遺構検出時に南辺ラインは確認していたが、調査区北端付近で全体が把握が難しく、整地もしくは堆積層の違いと認識していたが、3面目の遺構検出の際明瞭に確認できた。遺物が土師器の小皿を含んでいる。底面の一部がやや深くなっているところがある (S-450)。

236-1SD455

調査区北端に位置し、振れはW9°23'40"Nで、検出長4.2m、幅1.3m、深さ0.5mを測る東西溝。埋土は黒灰色土である。遺物は11世紀のものを含んでいて、整地の関係で1・2面目の遺構検出時にそれらしいプランは未確認であった。底面にビットや土坑が存在する。

236-1SD505 (Fig.24)

振れはE2°35'1"Nの東西溝。検出長13.9m、幅1.1～2.0mでおよそ1.5m前後、深さ0.4m前後。最上面を細かい整地が覆っていて、プランを確認することがやや困難であったことが3面目でのプラン確認に至った。方位などから2面目で確認していたSD560と対になる可能性があり、2条の溝で道路遺構の可

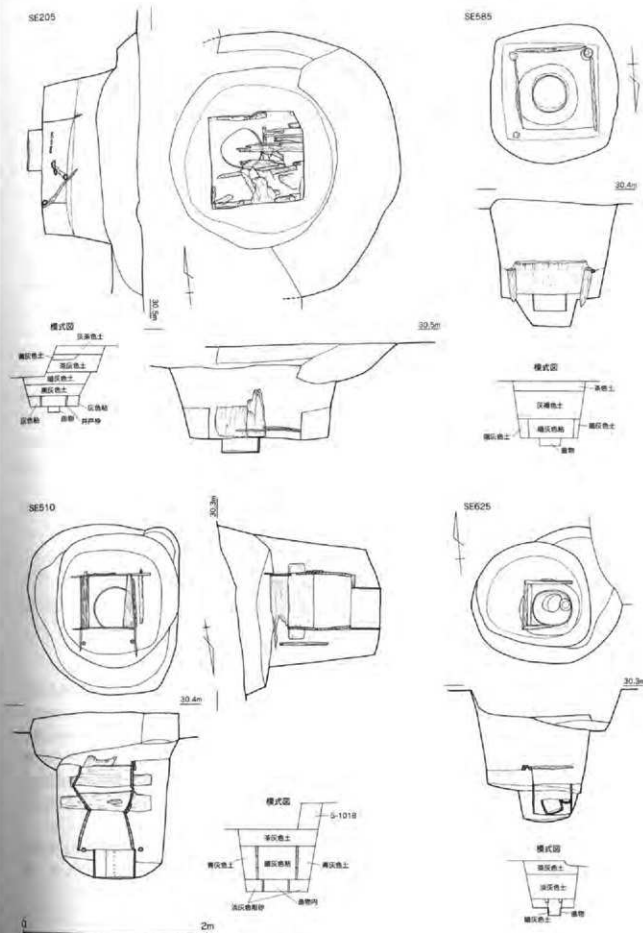


Fig.25 SE205・510・585・625遺構実測図 (1/40)

能性も考えられる。2条の溝間は約3.5mである。埋土は最下層が灰色粘土であったが、その上面の溝の最終埋設の埋土は粗い砂と粘土の互層になり、木片も混じっていた。

236-1SD515

振れはSD520とほぼ同一方向を向く東西溝で幅0.3～0.4m。調査時は溝状にプランが確認されたが、土層を観察すると、溝というより道路とみられる窪みの北側に堆積した堆積層（整地）とも考えられる。上層は黒茶色土、下層は茶色の砂質土である。

236-1SD520

振れはW-3° 37' 15" -Nの東西溝。検出長22.5m、幅0.8～1.7m、深さ0.2m前後。北側のS-515（黒茶色土）より明るい茶色土のラインが東西に確認でき、南側は砂質（S-615）であったため、その間であるプランを溝と認識し掘削した。北側の埋土の量は微妙な状況であった。SD550と平行し、合わせて道路側溝と推測される。

236-1SD540・1038 (Fig.24)

振れはN-1° 41' 18" -Wの南北溝。検出長約15m、幅0.55～1.5m、深さ0.4～0.5m前後。途中ほかの遺構によって分断されているが、延長上にあるS-1038の溝とみられ、それら全体をみると北側が東に緩やかに曲がっている。南端から馬の歯が出土している。SK545の最上面の西端から馬とみられる頭蓋骨が出土したが、その出土位置がSD540と切りあっている部分であるため、SK545出土の頭蓋骨もSD540出土とみた方が妥当である。また、SD540とSX530の切りあいは平面的にはSD540が古いように思われたが、土層断面で確認したところSD540が新しいことがわかった。

236-1SD550 (Fig.24)

振れはW-3° 42' 13" -Nの東西溝。検出長21.0m、幅1.1～2.0m、深さ0.3～0.4m前後。埋土は茶褐色土で、SD520と平行し、合わせて道路側溝と推測される。

236-1SD575 (Fig.24)

振れはW-0° 33' 0" -Nの東西溝。途中途切れている部分もあるが、検出長15.9m、幅0.2m前後、深さ0.1～0.3m。SD550上に切り込んでもあるものそれと平行するため、SD550を掘り直したものとみられ、同様の機能を持っていたと思われる。

井戸

236-1SE205 (Fig.25)

SX640や灰色土の整地層より下から検出されたが、中央の井戸枠付近は埋土が陥没し、第1調査面を確認されていた。掘り方はトレンチで一部は破壊されているが、最大径2.9mを測り、遺構検出面から0.4m付近で掘り方は狭くなり、南北1.9m、東西1.8mの円形を呈している。井戸枠は一边1.0mの正方形で、東側の井戸枠が枠内に倒壊した状態で検出され、南側の縦板も内側に傾いた状態で検出された。縦板は幅0.2～0.3m、最も厚いもので0.05mを測った。横板には径0.05mのやや屈曲した自然木が使用され、縦板の最下に据えられていた。隅柱はほとんど腐ってなくなっていたが、径0.05m程の空洞ができていて、北西隅には先端を尖らせた隅柱が僅かに残っていた。

井戸枠中央よりやや西側には、径0.4m、深さ0.15mの曲物が据えられていたが、東側で僅かに材質が残るのみで、他は掘り方のみ残っていた。井戸底は細かい砂で、曲物はその砂に掘りこまれていた。曲物の掘り方まで含めた全体の深さは1.15mである。調査時は曲物内のみ湧水していた。

236-1SE510 (Fig.25)

掘り方は南北1.8m、東西1.6m、深さ1.75mの楕円形で、0.4mほど下がった所に中段があり、そこから南北1.4m、東西1.3mの隅丸方形の掘り方がつく。埋土の上部である茶灰色土では瓦が多く出土し、

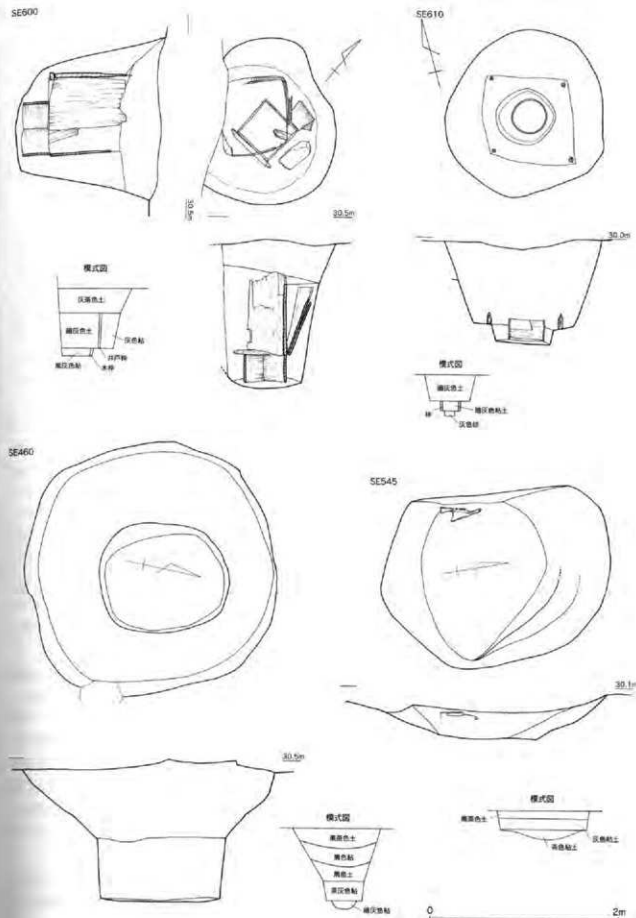


Fig.26 SE600・610、SK460・545遺構実測図 (1/40)

井戸枠内の暗灰色粘土でも瓦が多く出土し、ほかに花崗岩や板材が混ざっていた。井戸枠は凸型に加工した板材を巧みに組み合わせて積み重ねている。内法は0.55m四方で、残存していたのは3段分まで東西の井戸枠材が土圧で内側に押し出されている。最下の井戸枠とその上の井戸枠との繋ぎ目の裏側には板が置かれ、泥の進入を防いでいたように思える。井戸枠底には径0.45m、深さ0.3mの非常に残りの良い曲物が検出されたが、井戸枠とずれていることと曲物と同じレベルで横棧のような加工を施した部材が検出されたこと、その部材の一方が井戸枠の裏込め内から検出されたことなどから、この井戸枠は改修後のものと推測される。

236-1SE585 (Fig.25)

灰色土に切り込む井戸で、第1調査面で確認していたが、第3調査面で調査を行っていた。掘り方は南北1.45m、東西1.35m、深さ1.0mの隅丸方形で、中央に約0.8m四方の井戸枠を作っている。井戸枠は北側が全く残ってなく、その他も遺存していたが腐食が著しく、縦板と確認できるのみで、枚数や縦板の幅など詳細は確認できる状態ではなかった。また、縦板の下は曲物上面と同一レベルであった。隅柱は南側が残っていて、径0.09mで僅かに先端は尖らせていた。横棧は北側以外残っていたが腐食が著しい。自然木を使用していて、径0.03～0.04mである。井戸枠内には曲物が設置され、大きさは南北0.36m、東西0.35m、深さ0.18mで、木質が僅かに残る程度であった。曲物内の埋土は2層で上層が暗灰色粘土、下層が明灰色砂であった。曲物は砂に0.65m程の掘り方を掘って設置されていた。

236-1SE600 (Fig.26)

掘り方は南北1.75m、東西1.2m以上、深さ1.6mの不定円形で、西側は調査区外に続いている。井戸枠は0.8mの方形で、幅0.46mの板材をはじめ全体的に大きな板を使用している。南辺部は一部崩壊している。井戸枠は板を2～4枚重ねていた。井戸枠底から箱型の本柱が検出されたが、井戸枠の下にもぐっていくため、時期が異なるものとみられる。本柱は内法0.4m、深さ0.28mで、加工を施し巧みに組み合わせていた。井戸枠の裏込めには本柱と平行する縦板と石が検出され、本柱に伴って作られた井戸枠の残骸と推測され、改修して使用されたとみられる。井戸枠内の埋土からは縦板片や大石が出土した。

236-1SE610 (Fig.26)

SB480の掘立柱建物の掘り方を切って掘り込まれた井戸で、掘り方は東西1.7m、南北1.8m、深さ1.1mの円形で、井戸枠は僅かに板材が残っていたが、調査中に埋土と一緒に取れてしまうほど腐食していた。四隅には径0.05m前後の隅柱が僅かに残存していた。中央には径0.35mの曲物が設置されていたが、これも薄く木片が残っている程度であった。井戸の埋土である暗灰色土には瓦が多く含まれていた。曲物内の埋土は2層で上層が暗灰色粘土、下層が明白色砂であった。

236-1SE625 (Fig.25)

掘り方は東西1.26m、南北1.26m、深さ1.4mの円形で、一辺0.44m程の方形に木片が検出された。井戸枠のようにも見えるが明確でない。その中央には曲物が存在し、その径は0.4mで掘り方中央よりやや東寄り確認された。曲物周囲の掘り方は礫と木炭で埋められていた。曲物内からは0.18×0.2m、深さ0.14mの曲物と土師器環が検出された。この曲物は汲み上げ具として使用されたものと推測される。

土坑

236-1SK460 (Fig.26)

南北2.68m、東西2.68mの円形を呈している。形状から素掘りの井戸とも考えたが、掘削後全く湧水がないこと、雨水もすぐに吸い込んでしまうことや埋土中から少量の木片は出土したが、その他井戸枠を想定できる遺物が出土していないため、土坑として報告する。2面目で落ち込みによってできたと思われる土坑を確認していることや最上面の埋土(黒茶色土)に11世紀後半の遺物が含まれていることな

どから第2遺構面の遺構の可能性も考えられる。しかし、中位から底面までは9世紀代までの遺物が殆どであることから、最上面は整地の落ち込みなどと考え、この遺構は最終埋没こそ11世紀後半と言えるが、9世紀代には殆ど埋没していたと推測される。最上面の黒茶色土層からは散骨の四肢骨片が少量出土した。

236-1SK535

調査区西端にある土坑で、調査区外につづく。埋土はSK530と同じ黒灰色土で、平瓦の完形品が出土。

236-1SK545 (Fig.26)

南北2.4m、東西1.8m、深さ0.48mの楕円形を呈している。最上面の西端から馬とみられる頭蓋骨が出土したが、その出土位置がSD540と切りあっている部分であること、SD540からも馬の歯が出土していることなどから、この土坑出土とみよりSD540出土とみた方が妥当である。

236-1SK590

南北4.0m、東西3.0m、深さ0.3mの楕円形を呈している。底面はやや凸凹している。埋土は全体的に灰色をした粘質土で、明白色の粘土ブロックが細かく入り、人為的に埋められた可能性が高い。

道路遺構

236-1SF615

SD520とSD550に挟まれた幅約1.8mの帯状に続く砂質土で、表面は若干凹凸があり、サビで茶色に硬化している。この硬化面を除去すると、やや砂質の黒灰色土が黒色粘土などに凹凸に入り込んでいる。砂質はこの付近の地山であるが、黒色粘土より下層に砂層があるため、SX615の砂質土は黒色粘土の上に路面とするため意図的に積まれたものと推測される。また、砂質土を除去すると周囲より低くなる。

その他の遺構

236-1SX530 (Fig.24)

SD375を挟んで北側でも同様の埋土が存在するため、それまで含めて南北約6.5m、東西7.0m、深さ0.3m前後の方形を呈している。埋土は黒灰色土と黒灰色粘土の混合層のほぼ単一層で、底面ではSD540が検出された。土坑か窪みとみられるが不明瞭である。

236-1SX525

SD550、520、615を覆っている茶褐色土層で、厚さは10cm前後でそれら遺構との境目は明瞭である。

○第4調査面

調査区の北西付近一帯に広がっていた暗灰色粘土を除去した遺構面で、灰白色粘土や淡黄灰色土を基盤とした面である。確認される遺構はアレーバ状に暗灰色粘土やそれに黒色粘土ブロックが混じり込んでいる埋土で、明確に遺構と言えるものは多くない。この黒色粘土は砂を殆ど含まない粘性がとても強い粘土で、調査区内を蛇行する流路の最終埋没層とみられる。この埋没時期や埋没状況については分析を行っている(第V章)。北側では黒色粘土を挟むように凹凸が広がっているため、ある時期にこの粘土を採掘した可能性も考えられる。この採掘時期は黒色粘土付近で出土する遺物から弥生時代後期のものであろうか。また、この面では上面の遺構の掘り残しとみられるピット類も確認されている。

(4) 出土遺物

○第1調査面

掘立柱建物

236-1SB100e出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a (1・2) 磨滅しているが、体部はヨコナデ。2は底部回転ヘラ切り。

236-1SB100g出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a (3) 復元口径9.0cm。内面底部ナデ、体部は回転ナデ、底部回転ヘラ切り。

236-1SB145d出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底坏a (4) 復元口径14.6cm。体部は屈曲なく丸く仕上げ、下半に指頭圧痕や板状圧痕が残る。

236-1SB165a振り方出土遺物 (Fig.27)

土製品

焼土塊 (5・6) 全体的に荒れているが、部分的に面を残している。色調は淡橙茶色で、0.4cm未満の白色砂粒を多く含み、スサ痕跡もみられる。

236-1SB165h柱痕出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底坏a (7) 体部中位付近で僅かに段があり、外面に板状圧痕を残す。

236-1SB165h振り方出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底坏 (8) 体部中位付近で僅かに段があり、その下半はナデ、内面はミガキbを施す。

236-1SB275a出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a (9) 小破片で、底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (10) 復元口径15.2cm。内面にミガキb、外面底部に板状圧痕が残る。

236-1SB275d出土遺物 (Fig.27)

土製品

焼土塊 (11・12) 部分的に面を残している。色調は茶灰色や橙灰色を呈し、胎土には白色砂粒やスサを多く含む。11には棒状痕跡があり、12には土師器片が混ざり込んでいる。

236-1SB275h出土遺物 (Fig.27)

黒色土器A類

甕 (13) 口縁端部外面はヨコナデ、その他は摩滅。外面に一部煤が付着している。

236-1SB285a出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a (14) 小破片で底部は磨滅する。体部は内外面ともヨコナデ。

236-1SB285b出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a (15・16) 口径9.0cmと9.8cm。両方とも底部回転ヘラ切り。内面底部はナデ。

236-1SB285b振り方出土遺物 (Fig.27)

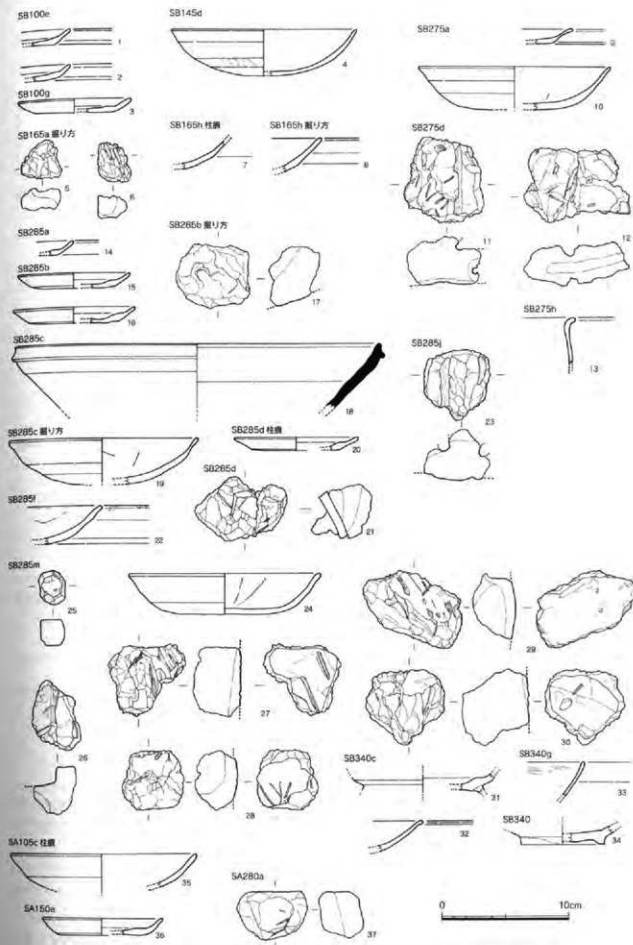


Fig.27 第1調査面掘立柱建物・柵列出土遺物実測図 (1/3)

土製品

焼土塊 (17) 胎土は茶灰色や黒灰色を呈し、0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、スサ痕も僅かにみられる。

236-1SB285c出土遺物 (Fig.27)

須恵質土器

鉢 (18) 復元口径29.6cm、口縁端部が若干肥厚する。内外面とも回転ナデ。外面口縁部付近は暗青灰色で他は青灰色を呈する。東播系。

236-1SB285c掘り方出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底坏a (19) 復元口径15.2cm、内面にミガキbやコテ当て痕、外面は体部がヨコナデで、底部に板状圧痕を残す。

236-1SB285d柱痕出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a (20) 復元口径9.8cm、器高1.0cm。磨滅し調整不明。

236-1SB285d出土遺物 (Fig.27)

土製品

焼土塊 (21) 胎土は茶灰色や黒灰色を呈し、0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、スサや須恵器片が混ざり込まれている。

236-1SB285f出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底坏a (22) 内面にミガキbを施す。口縁端部に煤が付着している。

236-1SB285j出土遺物 (Fig.27)

土製品

焼土塊 (23) 胎土は淡茶灰色と黒灰色を呈し、0.5cm以下の白色砂粒を多く含む。棒状の痕跡を2.4cmの間隔で残し、土壁の可能性が考えられる。

236-1SB285m (S-697) 出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底坏a (24) 復元口径15.1cm、内面にはコテ当て痕、外面は上部がヨコナデ、下半に指頭圧痕と板状圧痕を残す。

瓦類

瓦玉 (25) 大きさは2.7×2.15×2.5cm。側面を打ち欠き、片面に布目痕が残る。

土製品

焼土塊 (26~30) 胎土は茶灰色や黒灰色を呈し、0.5cm以下の白色砂粒を多く含む、スサ痕跡も多くみられる。面を残している部分が多く見られる。26には土師器片を含む。

236-1SB340c出土遺物 (Fig.27)

土師器

椀c (31) 磨滅し調整は高台接合のヨコナデ以外不明。

緑釉陶器

皿 (32) 胎土は0.5mm程度の白色砂粒を多く含む、白茶色を呈する。口縁端部が僅かに外反する。釉は口縁部外面に僅かに残り、内面は点状に残る。土師質。

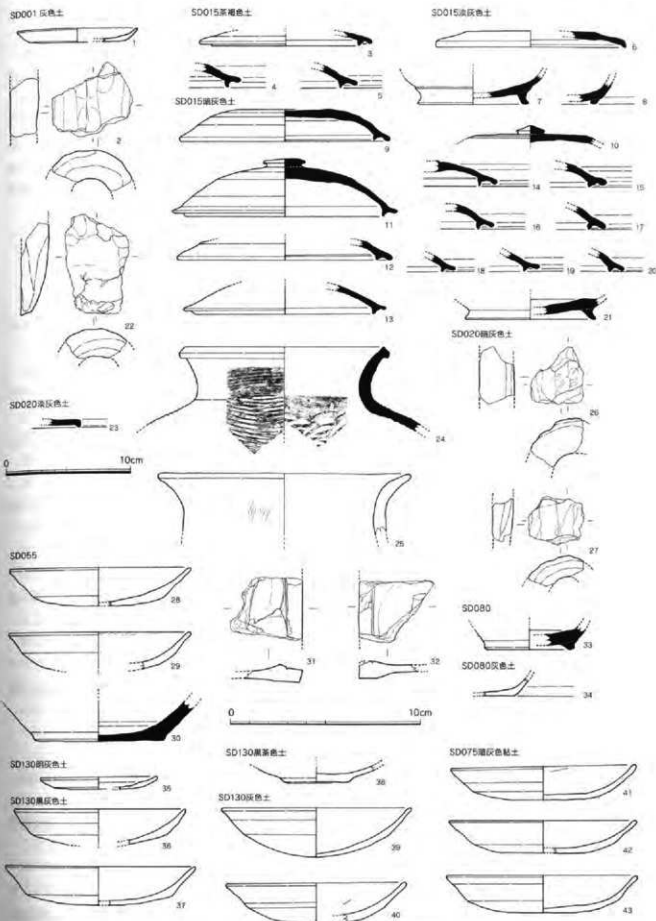


Fig.28 SD001・015・020・055・075・080・130出土遺物実測図 (1/3、31・32は1/2)

236-1SB340g出土遺物 (Fig.27)

黒色土器

椀(33) 内面に僅かにミガキcが残る。外面ヨコナデ。

236-1SB340 (S-881) 出土遺物 (Fig.27)

緑釉陶器

椀×皿(34) 高台削り出して、復元高台径6.6cm。胎土は微細な白色砂粒を含み暗灰色を呈する。釉は暗緑灰色で、内面にミガキの後薄く施釉され、外面は高台と底部外面が露胎で、体部外面のみ施釉される。須恵質。

槽列

236-1SA105c柱痕出土遺物 (Fig.27)

土師器

丸底杯(35) 復元口径15.0cm。内面にミガキbが残る。

236-1SA150e出土遺物 (Fig.27)

土師器

小皿a(36) 復元口径9.6cm、器高1.4cm。磨減し調整不明。

236-1SA280a出土遺物 (Fig.27)

土製品

焼土塊(37) 胎土は黒灰色と茶灰色を呈し、0.4cm以下の白色・茶色砂粒を多く含み、ササ痕もみられる。

溝

236-1SD001灰色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿a(1) 復元口径9.6cm、内面ヨコナデ、底部外面に板状圧痕が残る。

土製品

襷羽口(2) 現存長5.9cm、幅6.3cm、厚さ2.3cm。胎土は3mmまでの白色・茶色砂粒を多く含み、表面から明灰色・淡茶灰色・淡褐色を呈する。表面はナデている。

236-1SD015茶褐色土出土遺物 (Fig.28)

須恵器

蓋1(3~5) 口縁部より僅かに高い断面三角形の返りを貼付する。色調は青灰色を呈する。還元・焼成とも良好。3は復元口径13.6cm。色調は明灰色を呈し、内外面とも回転ナデ。

236-1SD015淡灰色土出土遺物 (Fig.28)

須恵器

蓋3(6) 復元口径15.0cm。内外面とも回転ナデで、内面上部はナデ。色調は青灰色を呈する。還元・焼成とも良好。

杯c(7・8) 7は外開きの高い高台を貼付する。内面不定方向のナデ。8は内外面回転ナデ、底部端に低い高台を貼付する。

236-1SD015暗灰色土出土遺物 (Fig.28)

須恵器

蓋a1(9) 復元口径16.6cm。外面上半部は回転ヘラ切り、その他内外面は回転ナデ。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、青灰色を呈する。還元・焼成とも良好。

蓋c(10) 外面は回転ヘラズリで擬宝珠形のツマミを貼付する。内面はナデ。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、内面青灰色、外面灰黒色を呈する。還元・焼成とも良好。

蓋c1(11) 復元口径17.8cm、外面上半部は回転ヘラズリで、潰れた擬宝珠形のツマミを貼付する。その他は回転ナデで、内面頂部に一部ナデを施す。胎土は3mm以下の白色砂粒を含み、青灰色を呈する。還元・焼成とも良好。

蓋1(12~20) 胎土はおおよそ1mm以下の白色砂粒を含み、青灰色を呈する。還元・焼成とも良好。復元口径は12が17.0cm、13が16.0cm。口縁部より僅かに高い断面三角形の返りを貼付する。口縁部破片のため、内外面とも回転ナデ。14・15は外面上部に回転ヘラズリが確認できる。17は明灰色を呈する。20は紫灰色を呈する。

杯c(21) 外開きの高台を貼付する。底部内面ナデ、底部外面ヘラ切りである。

土師器

破片 摩滅が目立ち実測するまでには至っていないが、回転台を使用したような橙色と黄褐色の土師器が4点出土している。場合によっては還元不良の須恵器の可能性もある判別が微妙な土器である。

土製品

襷羽口(22) 先端部部分で、厚さは2.2cm。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、断面は外側から淡青灰色、淡茶灰色、淡褐色に変色する。先端部は熱で融解し、氈滓も付着している。

236-1SD020淡灰色土出土遺物 (Fig.28)

須恵器

蓋3(23) 口縁部で、内外面とも回転ナデ。

裏(24) 復元口径16.6cm、口縁部を肥厚させる。外面叩き、内面は同心円の当て具痕が残る、頸部外面は回転ナデで条痕状になっている。色調は青灰色で、体部内面は自然釉で灰黒色を呈する。

土師器

裏(25) 復元口径20.0cm、外面に僅かにタテハケが残る。胎土は淡褐色で、砂粒に混じって角閃石が混入する。

236-1SD020暗灰色土出土遺物 (Fig.28)

土製品

襷羽口(26・27) 2点とも胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含み、26は厚さが2.8cm。断面は外側から暗灰色、淡褐色、橙茶色に変色し、外側は熱により硬化する。27は厚さが1.6cm。断面は外側から明灰色、赤茶色、淡褐色に変色し、外側は熱により硬化している。

236-1SD055出土遺物 (Fig.28)

土師器

丸底杯a(28・29) 復元口径は14.5、14.6cm、29は口縁部内面に炭化物が付着する。

須恵切土器

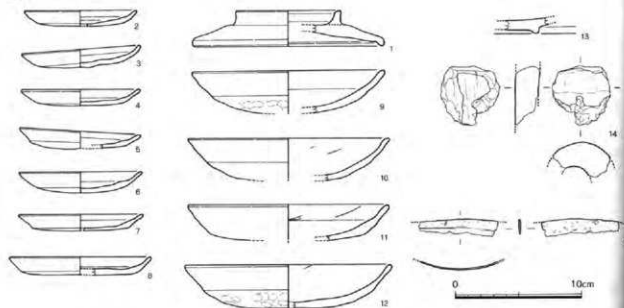
鉢(30) 胎土は精製され、明灰色を呈する。復元底径は10.4cm。底部外面は回転糸切り、内面は使用によって磨減する。

石製品

風字硯(31・32) 硯面は凹面に仕上げ、周囲に浅い沈線を描き、その外側に平坦面を作る。裏面は表と同様に加工しているが、粗く割り僅かに研磨するだけである。石材は黒色味の強い暗灰色の粘板岩。2点は同一個体の可能性が高い。

236-1SD070灰茶色土出土遺物 (Fig.29)

SD070 反茶色土



SD070 赭灰色粘土

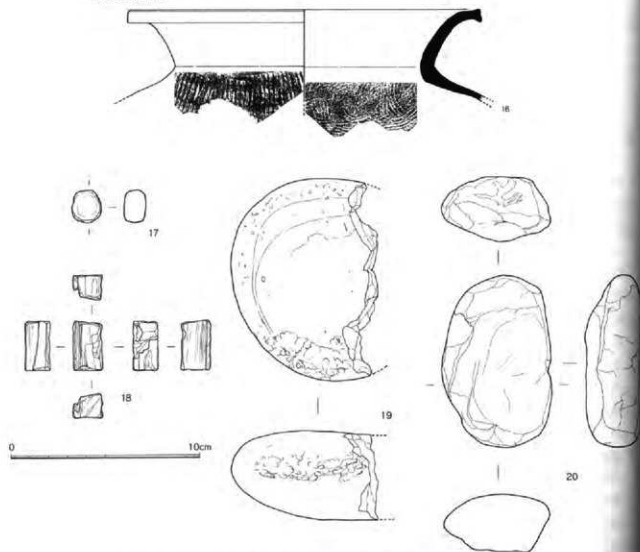


Fig.29 SD070出土遺物実測図① (1/3, 18~20は1/2)

SD070 薄灰色粘土

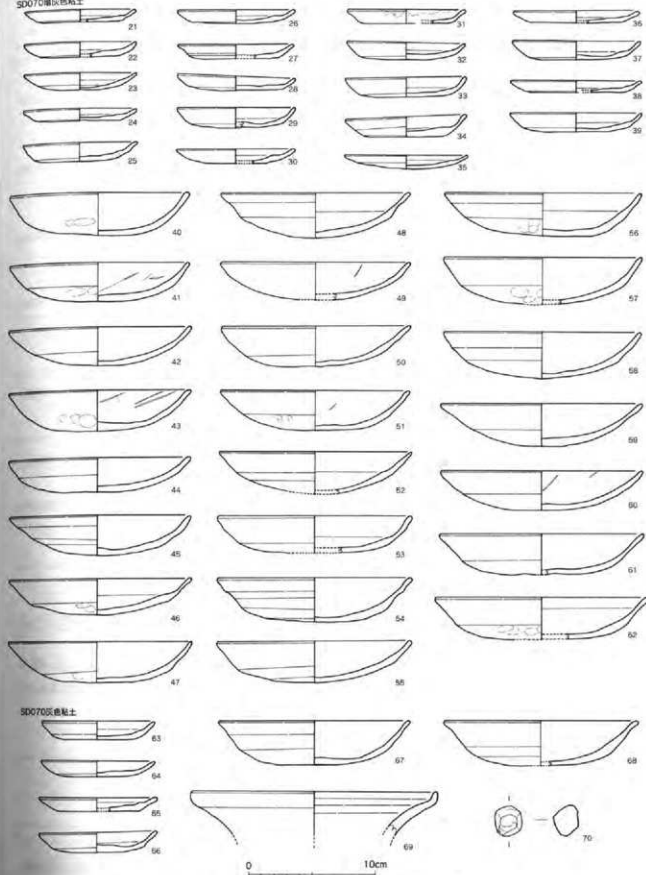


Fig.30 SD070出土遺物実測図② (1/3)

土師器

蓋b3(11) 復元口径14.8cm、ソマリ径は8.4cm、口縁端部を僅かに曲げている。全体的に磨滅しているが、外面回転ナデ、内面ナデか。色調は茶灰色～黄橙色を呈する。

小皿a(2～8) 口径8.9～11.2cm、器高1.2～1.65cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a(9～12) 復元口径15.2～18.4cm、内面ミガキbで、体部下半は押し出し。9・12には指頭圧痕が僅かに残る。

緑釉陶器

椀×皿(13) 高台部はケズリ出しで、高台付外および底部外面以外は薄く淡緑灰色釉を施す。焼成は須恵質で、京都産とみられる。

土製品

羅羽口(14) 厚みは1.5～2.2cm、中央の孔は復元径約2.2cm。胎土にはスサ痕が明瞭に確認できる。外面は茶灰色と暗灰色に変色し、先端部は融解している。

金属製品

用途不明製品(15) 現存する大きさはタテ1.4cm、ヨコ6.2cm、厚さ1.0cm。内側に僅かな段を有する。湾曲しており、何か器状の口縁部分とみられる。

236-1SD070緑灰色粘土出土遺物 (Fig.29・30)

須恵器

甕(16) 復元口径28.0cm、口縁端部は僅かに肥厚させる。頸部は内外面とも回転ナデで、くびれ部が内外面ともナデ。

土師器

小皿a(21～39) 口径8.8～10.4cm、器高0.9～1.6cm。確認できるものはすべて底部回転ヘラ切り、板状圧痕が残る。31の口縁部内面には煤(油煙)が付着している。

丸底坏a(40～62) 口径14.4～16.8cm、器高2.7～3.7cm。全体的に磨滅が目立つが、ミガキbやコテ当て痕が部分的に確認できる。外面中位に僅かに屈曲している。

瓦類

瓦玉(17) 大きさは2.1×2.3×1.7cm。全体的に磨滅している。

石製品

滑石加工品(18) 大きさは2.6×1.6×1.3cm。方形に削られ、当初の面が3面残り、口縁部もしくはは鈎部分を加工したものとみられる。

磨石(19・20) 19は円形で半分ほど欠損する。最大長10.7cm、厚さ4.7cm。両面は研磨され、側面には敲打痕も確認できる。20は両端が非常に研磨され光沢を放つ。石材は石英で長さ9.2cm、幅5.8×3.0cmである。表面の筋目に赤色顔料が確認でき、蛍光X線分析を行ったところ水銀米であった。また、同様に金色物質も確認でき、蛍光X線分析を行ったところ、金であることが確認できた。

236-1SD070灰色粘土出土遺物 (Fig.30)

土師器

小皿a(63～66) 口径9.0～9.6cm、器高1.1～1.6cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a(67・68) 口径はそれぞれ15.1cmと15.4cm。外面は屈曲なく丸く仕上げる。

灰釉陶器

甕×壺(69) 口縁端部を上方に屈曲させる。復元口径19.4cm。胎土は淡灰白色で1mm前後の黒色粒を含む。内外面とも回転ナデのあと施釉されているが、外面は殆ど剥落していて、淡緑灰色釉が僅かに残つ

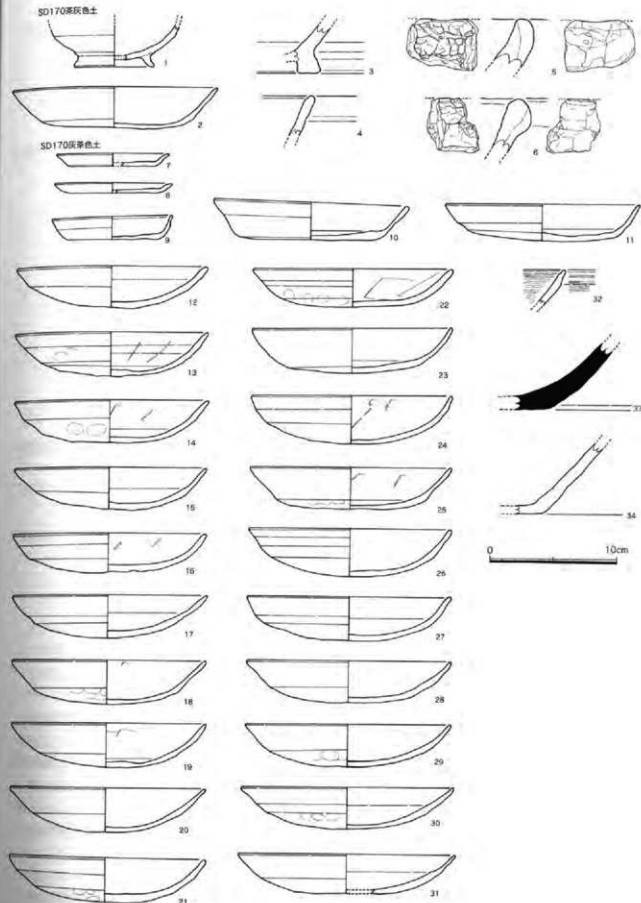


Fig.31 SD170出土遺物実測図 (1/3)

ている。

瓦類

瓦玉 (70) 大きさは2.4×2.1×1.9cm。丸く加工されている。

236-1SD075暗灰色粘土出土遺物 (Fig.28)

土師器

丸底坏a (41～43) 復元口径14.6～15.0cm、器高2.6～3.0cm。外面中位に僅かに段を有するがほぼ丸い。胎土は茶白色や茶灰色を呈する。

236-1SD080出土遺物 (Fig.28)

須恵器

坏c (33) 底部内外面はナデ。底部端に台形の高台を貼付する。復元高台径7.1cm。

236-1SD080灰色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

坏a (34) 体部と底部との境は若干丸味を帯びる。胎土は茶灰色を呈する。

236-1SD130明灰色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

小皿a (35) 復元口径9.4cm、器高0.95cm。全体的に磨滅している。

236-1SD130黒灰色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

丸底坏fa (36・37) 2点とも全体的に磨滅している。体部中位が肥厚し僅かに屈曲する。胎土は茶白色を呈する。

236-1SD130黒茶色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

坏 (38) 底部は凸型で、磨滅しているが糸切りのようにも見える。胎土は砂粒を少量含むが精製されている。内面は茶白色、外面は橙灰色を呈する。豊前からの搬入か。

236-1SD130灰色土出土遺物 (Fig.28)

土師器

丸底坏a (39・40) 内面はミガキb、外面底部は回転ヘラ切り後ナデ。胎土は茶白色を呈する。

236-1SD170茶灰色土出土遺物 (Fig.31)

土師器

碗c (1) 復元高台径6.3cmの外開きの高台を貼付する。坏部はやや小振りである。

丸底坏fa (2) 磨滅し調整は内面底部で僅かにナデが残るだけが、底部は若干押し出しが認められる。

灰軸陶器

壺 (3) 底部付近で、がっちりとした高台を貼付する。体部外面下半は回転ヘラケズリ、高台部は回転ナデ、施軸は内面のみで淡緑灰色の軸が薄く掛かり、貫入もみられる。

朝鮮系無軸陶器

甕 (4) 口縁端部で外面は叩きの後、回転ナデを施す。内面回転ナデ。胎土は淡褐白色砂粒を僅かに含み、外面は灰黒色、断面は茶褐色を呈する。

土製品

トリベ (5・6) 5は内面が灰白色に変色し、端部に褐黒色の付着物がみられる。胎土には亀裂が多くみられ、スズ痕も残る。6は内面が淡赤灰色や淡黄灰色に変色硬化する。

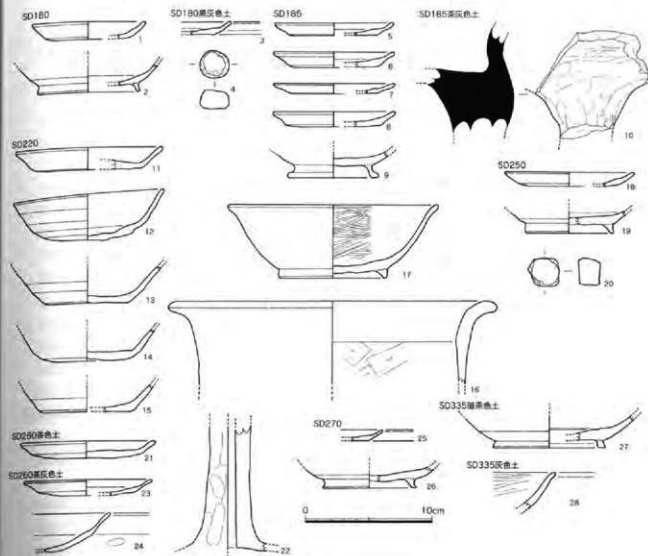


Fig.32 SD180・185・220・250・260・270・335出土遺物実測図 (1/3)

236-1SD170灰茶色土出土遺物 (Fig.31)

土師器

小皿a (7～9) 口径9.0～9.5cm、器高0.8～1.8cm。9のみ底部回転糸切り。

坏a (10・11) 2点とも口径15.4cm、内面不定方向ナデ、外面底部回転ヘラ切り。

丸底坏fa (12～31) 口径15.2～17.2cm、器高3.0～3.8cm。殆ど完形で、内面はナデの後ミガキbを施し、コテ当て痕も確認できる。29は内面に傷が多い。外面は磨滅が目立つ。

瓦器

碗 (32) 口縁端部内面に沈線を巡らし、内外面とも小刻みなミガキcを施し、光沢がある。胎土は精製されている。

須恵質土器

鉢 (33) 胎土は淡灰色で、2mm以下の淡灰色や黒灰色の砂粒を含み、全体にスズ痕が残る。外面ナデ調整で、内面は使用のため磨滅している。

朝鮮系無軸陶器

甕 (34) 底部付近で、外面は叩きの後小刻みなナデ、内面は回転ナデ、体部下半とナデを底部外面

は施す。外面灰黒色、断面茶褐色を呈する。

236-1SD180出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (1) 復元口径9.0cm、口縁端部内面に僅かに煤が付着する。

黒色土器A類

椀c (2) 復元高台径8.2cm、内外面とも摩滅するが、内面に僅かにミガキが残る。

236-1SD180黒灰色土出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (3) 小破片で、調整は摩滅し不明。

瓦類

瓦玉 (4) 大きさは2.2×2.3×1.5cm。片面に布目痕が残る。

236-1SD185出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (5~8) 復元口径9.4~9.6cm、器高0.8~1.2cm。全て摩滅し調整不明。

椀c (9) 若干歪みがあるが、復元高台径7.2cm。高台端部は外側に屈曲する。

236-1SD185茶灰色土出土遺物 (Fig.32)

須恵器

脚付盤 (10) 脚部先端は欠損する。胎土は2mm以下の白色砂粒を少量含むが精製されている。焼成は良好だが、還元が若干悪く、色調は灰白色を呈する。体部内面はヨコナデ、脚部接合部がヨコナデ、脚部はナデ調整である。

236-1SD220出土遺物 (Fig.32)

土師器

皿a (11) 復元口径11.8cm。底部回転ヘラ切り、他は摩滅し調整不明。

環a (12~15) 12は底部が丸く不安定。13~15は体部と底部の境は若干丸味を帯びる。

甕 (16) 復元口径26.0cm。胎土は粗く3mm以下の白色砂粒を多く含む、内面明茶褐色、外面黒灰色を呈する。体部内面はヘラケズリ。口縁端部と外面は摩滅し調整不明。

黒色土器A類

椀c (17) 復元口径16.6cm。胎土は2mm以下の白色砂粒を含み、焼成は不良で内面にはミガキが明顯に残るが、外面は摩滅する。

236-1SD250出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (18) 復元口径10.2cm。内外面とも摩滅し調整不明。

灰釉陶器

椀×皿 (19) 三角形の高台を貼付し、復元高台径7.0cm。胎土は明灰色で精製され、体部内面に僅かに明灰緑色の釉を施し、内面底部は軸がなく平滑。外面は無軸で回転ナデ。

瓦類

瓦玉 (20) 大きさは2.5×2.3×1.7cm。

236-1SD260茶色土出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (21) 復元口径11.0cm。外面底部回転ヘラ切り。内面底部不定方向のナデ。

器a (22) 脚部で外面にナデ痕跡を残す。

236-1SD260茶灰色土出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (23) 復元口径10.4cm。内外面とも摩滅し調整不明。

丸底環a (24) 外面に指頭圧痕が残り、中位で僅かに屈曲し口縁部はやや薄く仕上げらる。

236-1SD270出土遺物 (Fig.32)

土師器

小皿a (25) 小破片で、全面摩滅している。

黒色土器A類

椀c (26) 体部外面はヨコナデ。内面と外面底部は摩滅し調整不明。

236-1SD335暗茶色土出土遺物 (Fig.32)

緑釉陶器

椀 (27) 方形の高台を貼付し、高台豊付には僅かに段がある。内面底部に浅い辻線が巡る。内外面とも淡明緑色釉が薄く綺麗に掛かっている。須恵質。復元高台径8.9cm。

236-1SD335灰色土出土遺物 (Fig.32)

黒色土器A類

椀c (28) 口縁端部が僅かに外反する。内面ミガキが残る。

井戸

236-1SE025暗灰色土出土遺物 (Fig.33)

須恵器

甕 (1) 二重口縁で、内面はカキ目、外面は回転ナデ。焼成良好、還元不良。

石製品

磨石 (2) 大きさ4.9×3.9×2.8cmの円球で、全面を磨り痕や敲打痕が残る。花崗岩。

236-1SE025灰褐色土出土遺物 (Fig.33)

須恵器

甕3 (3) 復元口径14.8cm。外面上部はヘラケズリで平坦をなす。内面頂部ナデ、他は回転ナデ。口縁端部は僅かにつまみ出している。焼成・還元良好。

環c (4) 底部端に高台を貼付する。焼成・還元良好。

土師器

環a (5・6) 体部と底部の境が僅かに丸味を帯びる。5は外面黄白色、6は淡橙灰色を呈する。

黒色土器A類

椀c (7・8) 磨滅も目立ち、内面ミガキcだけが単位不明瞭。7は外面下半ヘラケズリのような痕跡がある。

土製品

土玉 (9) 大きさは2.0×2.1×1.3cmで、色調は茶灰色で焼成は良好。表面ナデ調整。

236-1SE025暗灰色粘土出土遺物 (Fig.33)

土師器

環a (10・11) 底部回転ヘラ切り。色調は茶灰色を呈する。10は内面に炭化物が付着。

黒色土器A類

椀c (12) 内面ミガキcだけが、一部煤が厚く付着している。外面は回転ヘラケズリ。

236-1SE025茶灰色土出土遺物 (Fig.33)

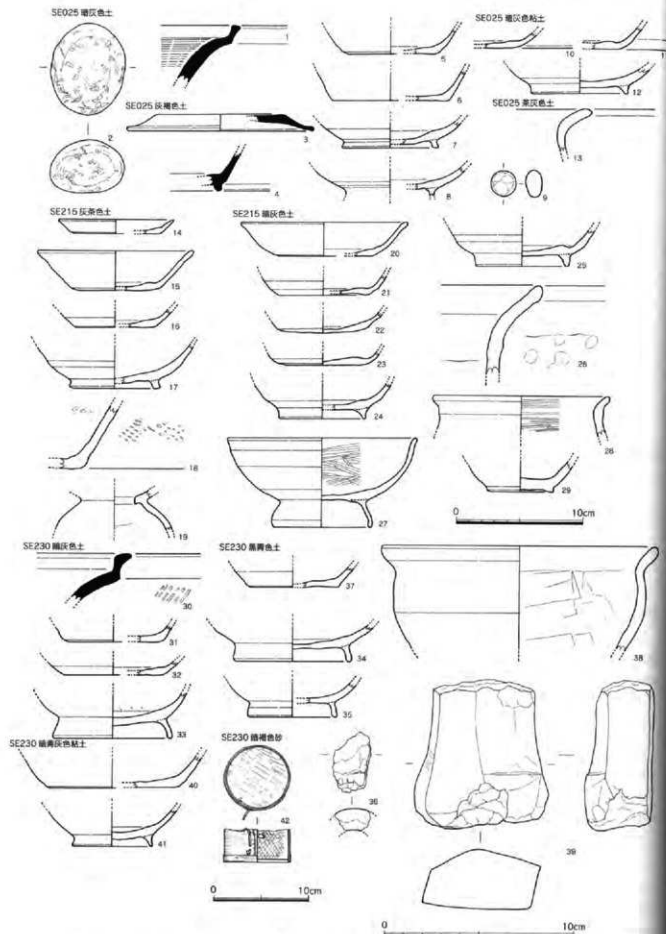


Fig.33 SE025・215・230出土遺物実測図 (1/3、2・39は1/2、42は1/8)

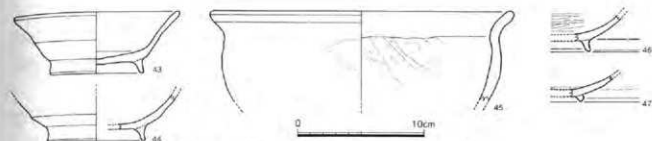


Fig.34 SE230暗青灰色土出土遺物実測図 (1/3)

土師器

甕 (13) 胎土は粗く、1mm以下の白色砂粒と角閃石を少量含む。焼成やや不良。外面ヨコナデ、その他は磨減し不明。

236-1SE215灰茶色土出土遺物 (Fig.33)

土師器

小皿a (14) 復元口径9.1cm、底部回転ヘラ切り。

坏a (15・16) 底部回転ヘラ切り。色調は黄灰白色を呈する。15は復元口径12.3cm。

黒色土器A類

碗c (17) 復元高台径7.2cm。焼成は不良で、全体的に磨減する。

朝鮮系無軸陶器

甕 (18) 胎土は精製され、外面暗灰褐色、内面暗灰色、断面茶色を呈する。体部外面は叩きの後ヨコナデ、内面ヨコナデで、当て具痕のようなものが残る。底部外面は未調整。

越州窯系青磁

唾壺 (19) 胎土は精製され、明橙灰色から灰白色を呈する。軸は淡灰緑色の透明釉で光沢があり、細かい貫入が入る。体部内面の上部が無釉。

236-1SE215暗灰色土出土遺物 (Fig.33)

土師器

坏a (20～23) 復元底径7.0～7.6cm。20は復元口径13.2cm。焼成は不良で黄灰白色を呈する。

碗c (24・25) 復元高台径6.8cmと7.4cm。

甕 (26) 胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや互質気味になっている。口縁端部は内外面ヨコナデ、その他内面はナデ、外面は指頭圧痕が残る。内外面に粘土紐痕が残る。

黒色土器A類

碗c (27) 復元口径15.0cm。高い高台を貼付し、口縁端部を僅かに外反させる。内面ミガキc、外面は磨減している。

小甕 (28) 胎土は1mm以下の砂粒を若干含む。色調は外面が灰色～茶褐色を呈する。内面はミガキc、外面には炭化物が付着する。

越州窯系青磁

小甕 (29) 復元高台径5.2cm。胎土は黒色粒を含むが精製され、灰白色や淡褐色を呈する。軸は明るい緑色で細かい貫入が入る。内外面施釉され、高台置付は軸を拭き取っている。

236-1SE230暗灰色土出土遺物 (Fig.33)

須恵器

甕 (30) 色調は暗灰色を呈する。外面の一部に叩き痕が残る。内外面とも回転ナデ。

土師器

環a (31・32) 底部回転ヘラ切り。復元底部径7.9cm。色調は全体として黄白色を呈する。
 碗c (33・34) 若干高い高台を貼付する。33は内面にコテ当て痕が残り、炭化物も付着する。色調は淡黄褐色を呈する。

黒色土器A類

碗c (35) 磨滅が目立ち、内面にはミガキ痕だけ残る。

土製品

羅羽口 (36) 胎土は4mm以下の砂粒と角閃石を含み、熟により表面は若干亀裂が入り暗灰色、灰褐色、茶灰色に変色する。断面も外側から暗灰色、淡赤灰色を呈する。

236-1SE230黒青色土出土遺物 (Fig.33)

土師器

環a (37) 底部回転ヘラ切り。色調は茶灰色を呈する。

甕 (38) 復元口径22.0cm。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡褐色や茶褐色を呈する。焼成不良で外面は磨滅し、体部内面はヘラケズリ。

石製品

砥石 (39) 大きさは7.9×6.3×3.6cmで、上下以外側面部分5面を使用している。砂岩製。

236-1SE230暗青灰色土出土遺物 (Fig.34)

土師器

碗c (43・44) 43は復元口径13.2cm。茶灰色を呈する。44は全体的に磨滅するが、内面にミガキのような痕跡もみられる。

甕 (45) 復元口径24.0cm。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含み、明茶褐色を呈する。体部内面は斜め方向のヘラケズリ、その他はヨコナデで、外面には炭化物が付着する。

黒色土器B類

碗c (46) 胎土は精製されている。焼成はやや不良で、内面はミガキが確認できる。

灰釉陶器

皿 (47) 胎土は灰色で、白色砂粒と黒色粒を含む。軸は灰緑色で、外面下半と内面底部は施釉されていない。

236-1SE230暗青灰色粘土出土遺物 (Fig.33)

土師器

環a (40) 復元底径10.4cm、内面には炭化物が付着する。

碗c (41) 高台径6.4cm、底部内外面はナデ、その他はヨコナデ。

236-1SE230暗褐色砂出土遺物 (Fig.33)

木製品

曲物 (42) 潰れた状態で出土したが、底板を基準に復元図化した。径13.8×14.1cm、高さ7.0cm。下方にはタガを巡らせ、側板と底板は5ヶ所留められていたとみられる。

236-1SE300灰色粘土出土遺物 (Fig.35)

緑釉陶器

皿 (1) 復元高台径7.0cm。高台に僅かに段を有する。底部は糸切りのような痕跡も見える。胎土は淡黄灰色で精製されている。軸は明黄緑色で細かい貫入が入り、一部軸が剥けている。

236-1SE300褐色粘土出土遺物 (Fig.35)

土師器

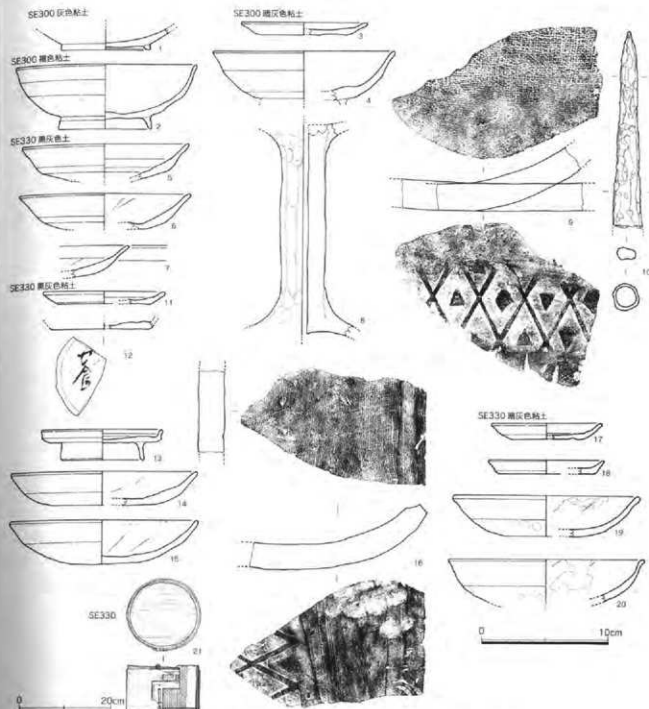


Fig.35 SE300・330出土遺物実測図 (1/4, 21は1/8)

碗c (2) 復元口径14.4cm。高台部はヨコナデ、他は磨滅。口縁端部僅かに外反する。

236-1SE300暗灰色粘土出土遺物 (Fig.35)

土師器

小皿a (3) 復元口径10.0cm。底部回転ヘラ切り、内面底部ナデ。

碗c (4) 復元口径14.4cm。高台は欠損する。口縁端部僅かに外反する。

236-1SE330黒灰色土出土遺物 (Fig.35)

土師器

丸底環a (5～7) 内面はミガキbで、底部はヨコナデ。体部中位が厚く、5・7は外面下半が回転ヘラ切り後ナデ、6は指押さえがみられる。

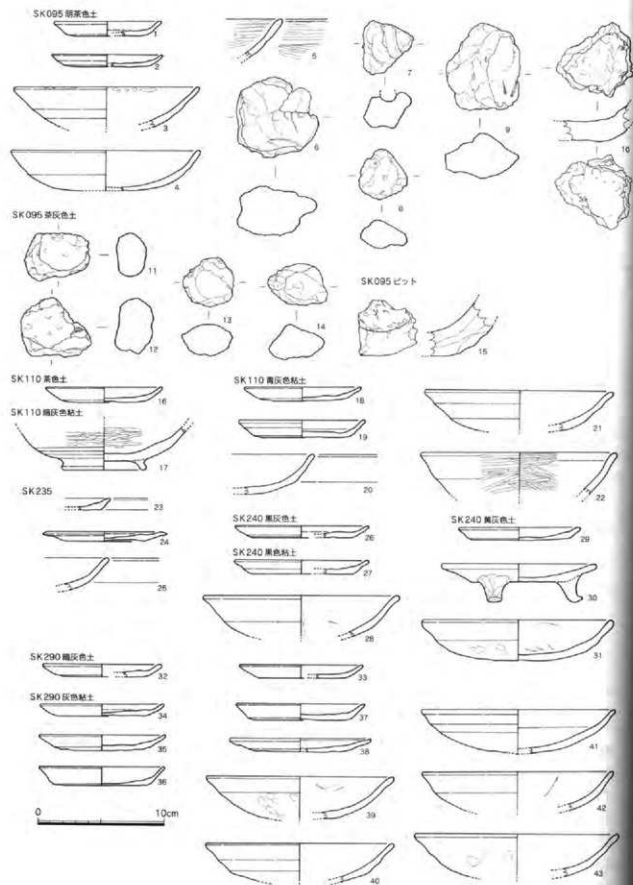


Fig.36 SK095・110・235・240・290出土遺物実測図 (1/3)

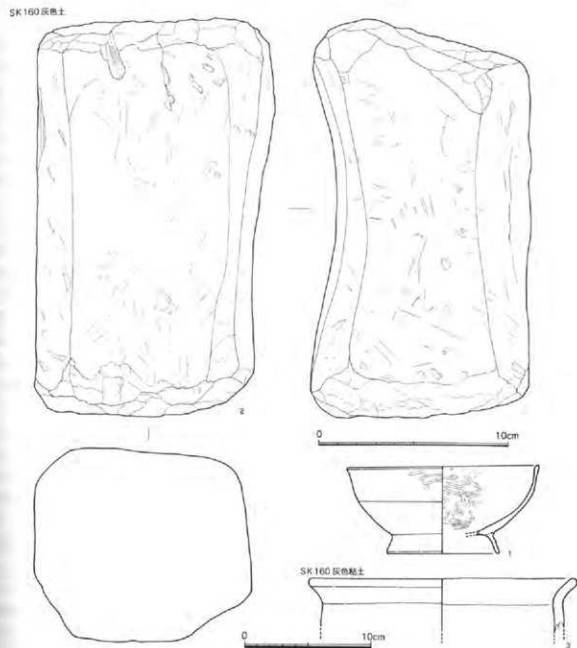


Fig.37 SK160出土遺物実測図 (1/3, 2は1/2)

器台 (8) 外面縦方向のナデで、脚部両端が指押さえやナデである。

瓦類

平瓦 (9) 外面は大きな斜格子と三角形を組み合わせた叩きを施す。

金属製品

鉄矛 (10) 長さ15.5cm、最大径2.35cmの円錐状をなす。表面は錆で覆われている。内部は筒状になっているが、木片が見つかっている。

236-1SE330黒灰色粘土出土遺物 (Fig.35)

土師器

小皿a (11・12) 底部回転ヘラ切りで、12の底面には墨書があり、実測図のような2文字と記されているが、詳細は判別できない。

小皿c (13) 口径9.6cm、器高2.4cm。内面底部はナデ、外面底部は回転ヘラ切りと板状圧痕が残る。

丸底坏a (14・15) 内面ミガキbで当て具痕が残り、外面底部には板状圧痕が残る。

瓦類

平瓦 (16) 外面は大きな斜格子と三角形を組み合わせたの叩きとナデ調整。

236-1SE330暗灰色粘土出土遺物 (Fig.35)

土師器

小皿a (17・18) 17は底部回転ヘラ切り、18は底部糸切りである。

丸底坏a (19・20) 復元口径14.8cmと15.6cm。内面はミガキbで一部煤が付着する。

236-1SE330出土遺物 (Fig.35)

木製品

曲物 (21) 調査では側面が潰れた状態で出土したため、底板を基準に復元図化を行った径15.2×15.4cm、高さ9.9cm。側板は4ヶ所を木釘で留めていて、そのうち2本が残存する。側板の一部に方形孔と円孔が開けられている。口縁部の一部がすれて削られている。

土坑

236-1SK095明茶色土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (1・2) 復元口径8.6cmと8.8cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (3・4) 復元口径14.8cmと15.0cm。3は口縁部内面に炭化物が付着する。

瓦器

碗 (5) 胎土は精製され、内外面ともミガキcを施し、銀色味を帯びた暗灰色を呈する。

土製品

焼土塊 (6～9) 胎土は5mm以下の白色砂粒を多く含み、淡赤茶色～茶灰色を呈し、6には石が混ざっている。7には棒状痕跡が、9にはスサ痕が確認できる。

トリベ (10) 厚さ1.8cm程で、内面は灰色や暗灰色を呈し、部分的に黒色や青緑色の付着物がみられる。

236-1SK095茶灰色土出土遺物 (Fig.36)

土製品

焼土塊 (11～14) 胎土は5mm以下の白色砂粒を多く含み、スサ痕もみられる。色調は淡赤茶色～淡灰褐色を呈する。

236-1SK095ピット出土遺物 (Fig.36)

土製品

トリベ (15) 厚さ2.3cmほどで、内側から明灰色、暗灰色、茶白色、明灰色に変色する。内面は硬化し赤茶色や黒色の付着物がみられる。

236-1SK110茶色土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (16) 復元口径9.2cm。外面底部に板状圧痕が残る。

236-1SK110暗灰色粘土出土遺物 (Fig.36)

黒色土器B類

碗c (17) 胎土は精製され、体内外面はミガキで、体部下半は回転ヘラクスリ。

236-1SK110青灰色粘土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (18・19) 復元口径9.2cmと10.0cm。底部回転ヘラ切り。19は内面不定方向のナデ。

丸底坏a (20・21) 内面ミガキb、外面下半は回転ヘラ切り痕が残る。

黒色土器B類

碗 (22) 復元口径15.6cm。内外面にミガキcを施す。

236-1SK160灰色土出土遺物 (Fig.37)

黒色土器A類

碗c (1) 口径15.2cm、器高6.7～6.95cm。内外面ともミガキcを施す。底部は欠損するが意図的打ち欠いた可能性もある。

石製品

砥石 (2) 大きさは21.1×12.5×10.2cm。側面を糸で使用し、一部火を受け黒色に変色または煤が付着している。砂岩製。

236-1SK160灰色粘土出土遺物 (Fig.37)

土師器

甕 (3) 復元口径21.2cm。胎土は3mm以下の白色・茶色砂粒を多く含んでいる。内外面ヨコナデで、外面には煤が付着する。接合しないが同一個体とみられる長胴体断面片がある。

236-1SK235出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (23) 小破片である。内面ヨコナデ。

小皿a2 (24) 復元口径9.8cm、器高0.7cm。口縁部に浅い沈線が巡る。

丸底坏 (25) 外面下半は回転ヘラ切り。その他は磨滅し不明。

236-1SK240黒灰色土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (26) 復元口径10.6cm。底部回転ヘラ切り。

236-1SK240黒色粘土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (27) 復元口径10.6cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏 (28) 復元口径15.4cm。内面ミガキb、外面上半はヨコナデ。

236-1SK240黄灰色土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (29) 復元口径9.6cm。底部回転ヘラ切り。内面底部はナデ、その他はヨコナデ。

脚付小皿 (30) 復元口径12.2cm、器高3.0cm。脚部は三脚あったと推測される。底部回転ヘラ切り。内面底部は不定方向のナデ。色調は茶白色を呈する。

丸底坏a (31) 復元口径15.2cm、内面ミガキbでコテ当て痕も残る。外面下半に指頭圧痕や板状圧痕が残る。

236-1SK290暗灰色土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (32・33) 復元口径9.4cmと9.8cm。底部回転ヘラ切り。

236-1SK290灰色粘土出土遺物 (Fig.36)

土師器

小皿a (34～37) 復元口径9.4～10.2cm。底部回転ヘラ切り。

小皿a2 (38) 復元口径11.2cm。口縁部内面に僅かに段を巡らす。底部回転ヘラ切り。

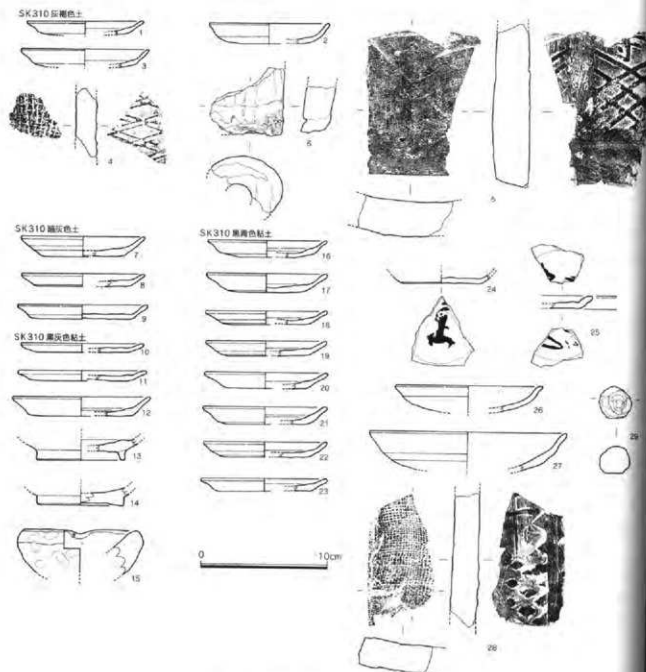


Fig.38 SK310出土遺物実測図 (1/3)

丸底坏a (39～43) 復元口径14.8～16.2cm。内面にコテ当て痕がみられる。

236-1SK310灰褐色土出土遺物 (Fig.38)

土師器

小皿a (1～3) 復元口径9.2～10.2cm。底部は回転ヘラ切り。

瓦類

平瓦 (4・5) 4は二重格子叩き。5は斜格子叩きに「安楽之寺」の一部である「寺」がみえる。

土製品

輪郭口 (6) 先端部で気泡が多数ある付着物 (銚津) があり、一部融解して黒色のガラス質や緑灰色をなしている。

236-1SK310暗灰色土出土遺物 (Fig.38)

土師器

小皿a (7～9) 復元口径9.8～10.4cm。底部回転ヘラ切り。

236-1SK310黒灰色粘土出土遺物 (Fig.38)

土師器

小皿a (10～12) 復元口径9.8～11.0cm。底部回転ヘラ切り。

椀c (13) 復元高台径7.0cm。

緑釉陶器

椀 (14) 高台削り出し。胎土は白色砂粒を若干含み、淡橙色～灰色を呈する。須恵質。軸は潤った緑灰色で薄く施軸する。高台内面は無軸でナデ、畳付は軸を拭き取っている。内面施軸。

土製品

トリベ (15) 復元口径10.0cm。口縁部に注ぎ口の窪みがある。内面は茶褐色・黒灰色・暗緑灰色の付着物がみられる。

236-1SK310黒青色粘土出土遺物 (Fig.38)

土師器

小皿a (16～25) 復元口径9.4～10.0cm。底部回転ヘラ切り。24は底部外面に墨書があり、薄い墨字と濃い墨字が重なっているが文字は判読できない。25も内外面底部に墨書があるが、破片のため詳細不明。

小丸底坏a (26) 復元口径11.6cm。内面ミガキb、外面下半回転ヘラ切り後ナデ調整。

丸底坏 (27) 復元口径15.6cm。内面ミガキb、外面下半は回転ヘラ切り後ナデ調整。

瓦類

平瓦 (28) 斜格子叩きが陰文で、「平井」の一部がみえる。

瓦玉 (29) 大きさ2.4×2.6cm、厚さ2.1cm。

236-1SK315出土遺物 (Fig.39)

須恵器

坏c (1・2) 1は焼成・還元やや不良。2は内面不定方向のナデ。

大椀c (3) 外面下半は回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。

土師器

皿a (4) 復元口径19.6cm。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は橙色を呈する。外面底部回転ヘラケズリ、内外面回転ヘラミガキだが、内面は磨滅している。

大皿a (5) 全体的に磨滅している。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は橙色を呈する。

大皿c (6) 全体的に磨滅する。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は橙灰色を呈する。

瓦類

平瓦 (7) 正格子に近い斜格子叩きを施す。

236-1SK315灰褐色土出土遺物 (Fig.39)

須恵器

皿a (8) 復元口径19.9cm。焼成・還元良好で淡灰色を呈する。外面底部ヘラ切り未調整、内面底部はナデで、やや研磨している。その他は回転ナデ。

土師器

甕 (9) 胎土は2.5mm以下の白色砂粒や金雲母を多く含み、淡白色を呈する。口縁部はヨコナデ、

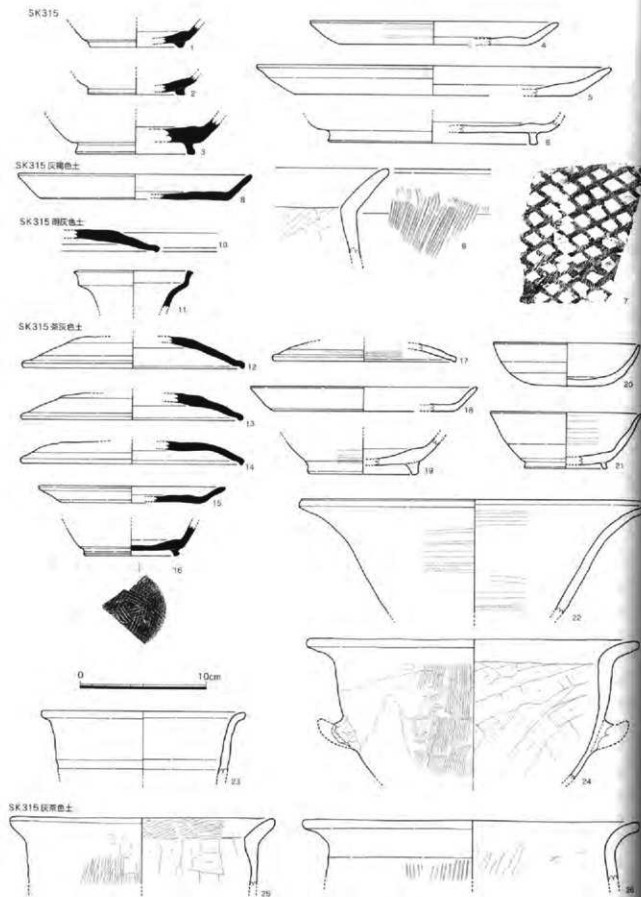


Fig.39 SK315出土遺物実測図 (1/3)

体部外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリである。

236-1SK315明灰色土出土遺物 (Fig.39)

須恵器

蓋3 (10) 外面上半部は回転ヘラ切り後ナデ。内面上半部不定方向のナデ。他は回転ナデ。

広口壺 (11) 復元口径7.4cm, 全面回転ナデで、外面には自然輪が掛かる。

236-1SK315茶灰色土出土遺物 (Fig.39)

須恵器

蓋3 (12~14) 復元口径は17.6~17.7cm。12・13は上半部が回転ヘラ切り後ナデ調整。14は外面上半部が回転ヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ。

皿a (15) 復元口径14.8cm, 全面回転ナデだが、内面底部は滑らかになっている。

环c (16) 外面底部はハケ調整されている。

土師器

蓋3 (17) 復元口径14.6cm, 外面は回転ヘラ削りのあとミガキa、内面もミガキaが残る。

皿a (18) 復元口径17.9cm, 色調は橙茶色を呈する。外面下半から底部は回転ヘラケズリ。

碗c (19) 胎土は白色砂粒や雲母を少量含み、焼成はやや不良で、淡灰茶色を呈する。外面に僅かにミガキaが残る。内面はヨコナデ。

环d (20) 口径11.7cm, 内面は磨滅。外面下半は回転ヘラケズリ、上半部はヨコナデ。

环c (21) 内面はミガキaが残るが、外面は磨滅し、ミガキのような痕跡を残す程度である。その他はヨコナデ。色調は淡灰茶色を呈する。

鉢 (22) 復元口径28.0cm, 口縁端部を僅かに上方に折り曲げる。胎土は若干白色砂粒が含まれるが精製され、橙灰色を呈する。内外面とも磨滅気味だが、回転ヘラミガキが確認できる。

裏 (23) 復元口径16.2cm, 口縁部を外側に曲げる。胎土は白色砂粒を多く含み、橙茶色を呈する。内外面ともヨコナデ。

把手付裏 (24) 復元口径26.6cm, 胎土はやや粗く3mm以下の白色砂粒を多く含む。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面は粗いタテハケとナデで中位に炭化物が付着する。把手は破損しているがナデ調整。

236-1SK315灰茶色土出土遺物 (Fig.39)

土師器

裏 (25・26) 25は復元口径21.0cm, 胎土は白色砂粒を多く含み、口縁部内面はヨコハケ、外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、外面はタテハケを施す。26は復元口径27.0cm, 胎土には角閃石を少量含む。口縁部はヨコナデ、体部外面はぼんやりとタテハケが残る。体部内面はヨコナデとナデ調整である。

畑状遺構

236-1SX640

畑状遺構であるSX640は、調査時には溝として遺構番号を付して調査しているため、その遺構番号毎に報告する。

236-1SX026出土遺物 (Fig.40)

須恵器

环c (1) 内面底部ナデ、その他は回転ナデ。焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈する。

236-1SX036出土遺物 (Fig.40)

土師器

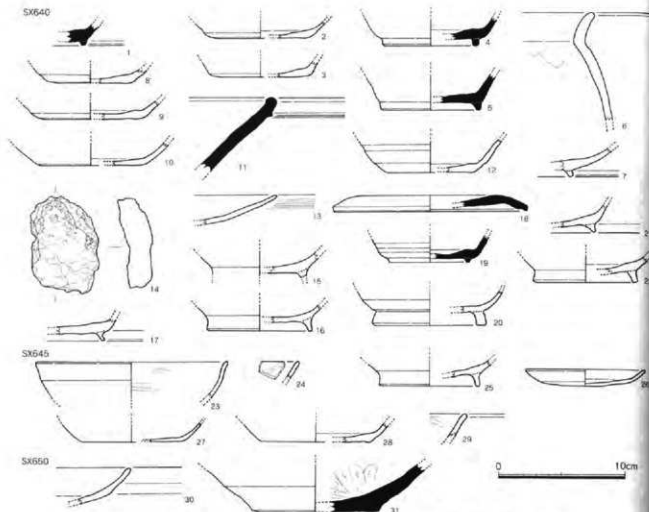


Fig.40 畑状遺構 (SX640・645・650) 出土遺物実測図 (1/3)

坏a (2・3) 復元底径7.6cmと8.1cm。全面磨滅している。

236-1SX058出土遺物 (Fig.40)

須恵器

坏c (4・5) 焼成は不良で灰白色を呈する。全体的に磨滅している。

土師器

甕 (6) 胎土は6mm以下の白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。外面は磨滅、体部内面はヘラケズリ。

緑釉陶器

皿 (7) 全面施釉されているが、軸は殆ど剥落し、光沢だけが残っている。土師質。

236-1SX060出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏a (8～10) 復元底径6.6～8.4cm。底部回転ヘラ切りとみられるが殆ど磨滅している。色調は8が橙灰色のほかは黄灰色を呈する。

236-1SX085出土遺物 (Fig.40)

須恵器

甕 (11) 口縁端部は若干肥厚させる。内外面とも回転ナデ。色調は黒灰色を呈する。

土師器

坏a (12) 復元底径6.8cm。色調は橙灰色で全面磨滅している。

緑釉陶器

皿 (13) 胎土は精製され、黄灰色を呈する。軸は淡い緑黄色を呈するが、殆どは剥落し、口縁端部外面にヘラミガキが残る。須恵質。

236-1SX086出土遺物 (Fig.40)

金属製品

鉤洋 (14) 橙灰色で部分的に暗灰色をなす。大きさは7.7×5.3cm、厚さ2.8cm。

236-1SX163出土遺物 (Fig.40)

黒色土器A類

碗c (15) 底部外面ナデ、外面ヨコナデ、内面は磨滅するがミガキか。

236-1SX187出土遺物 (Fig.40)

土師器

碗c (16) 復元高台径8.4cm。全面磨滅し調整不明。

236-1SX199出土遺物 (Fig.40)

土師器

碗c (17) 細く低い高台を貼付する。内外面磨滅し調整不明。

236-1SX204出土遺物 (Fig.40)

須恵器

蓋3 (18) 口縁端部は僅かに揃む程度。外面上半部は回転ヘラ切り後、一部ナデ調整。その他内面土部以外回転ナデ。

小坏c (19) 低い高台を貼付する。復元高台径6.4cm。底部外面回転ヘラ切りで板状圧痕残る。内外面回転ナデ。

土師器

碗c (20～22) 20は安定感のある高台で、底部は欠損して意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。21は内外面磨滅。22は磨滅しているが、部分的にヨコナデが見える。色調は淡橙色を呈する。

236-1SX645

236-1SX246出土遺物 (Fig.40)

黒色土器A類

碗c (23) 口縁端部を僅かに外反させる。磨滅が目立ち内面に僅かにミガキが残る。

緑釉陶器

碗c (24) 口縁端部の小破片で、胎土は茶灰色の土師質。内外面に明黄緑色の釉を施し、その上に緑彩を施す。

236-1SX342出土遺物 (Fig.40)

土師器

碗c (25) 復元高台径8.0cm。底部回転ヘラ切り、外面ヨコナデ、内面は磨滅する。

236-1SX378出土遺物 (Fig.40)

土師器

小皿a (26) 復元口径9.6cm。

236-1SX379出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏a (27) 復元底径8.0cm。底部ヘラ切りか。内外面ヨコナデ。

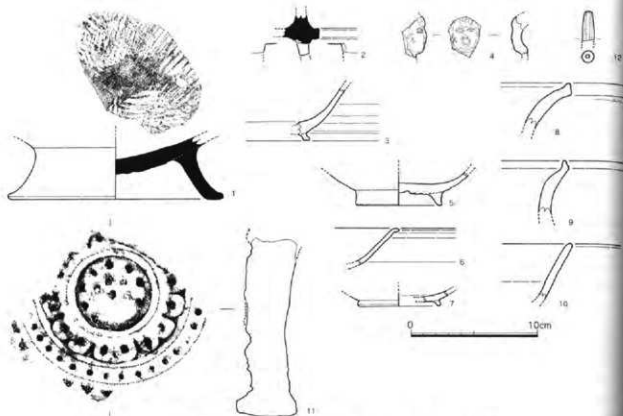


Fig.41 第1調査面その他の出土遺物実測図① (1/3)

236-1SX382出土遺物 (Fig.40)

土師器

坏a (28) 復元底径8.6cm。底部回転へら切り。

黒色土器B類

椀 (29) 口縁端部で内面はミガキcが確認できるが、外面は不明瞭。

236-1SX650

236-1SX140出土遺物 (Fig.40)

土師器

丸底坏a (30) 体部中位で僅かに屈曲する。全面磨滅し調整不明。

須恵質土器

捏鉢 (31) 復元底径10.0cm。胎土は2mm以下の白色砂粒や茶色粒を多く含み、色調は紫色を帯びた明茶色を呈する。内面はタテや斜め方向のナデで、使用によって滑らかになっている。底部外面は回転糸切りとみられる。体部外面はヨコナデ。

第1調査面その他の出土遺物 (Fig.41・42)

須恵器

甕 (1) 外開きの高い高台を貼付し、外面には自然釉が掛かる。底部内面は当て具痕が残り、一部ナデ消している。底部外面は叩きの後ナデで、一部に自然釉が掛かる。S-551より出土。

円面硯 (2) 小破片で、透かし部分と形成する脚部の断面が欠損のままではなく、滑らかになっており、二次加工されたものとみられる。S-202より出土。

緑釉陶器

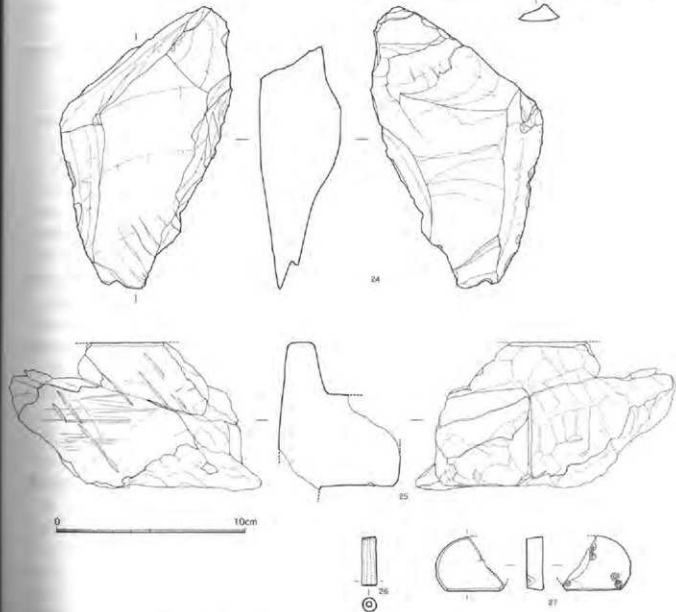
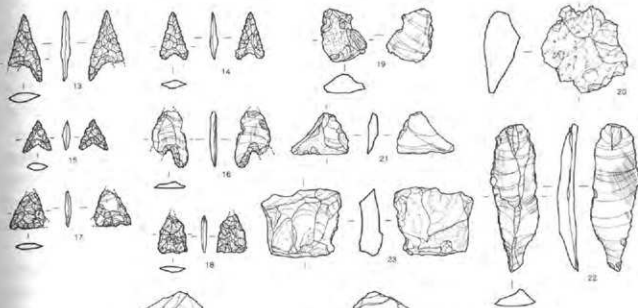


Fig.42 第1調査面その他の出土遺物実測図② (1/2)

椀 (3) 内面底部には段を有する。胎土は黒茶色粒を少量含み、色調は淡灰色を呈し、全面に緑灰色の釉を薄く掛ける。須恵質。S-587より出土。

青白磁

燭台 (4) 胎土は乳白色で水色味の透明釉で光沢がある。燭台の一部とみられる。S-77より出土。
灰釉陶器

椀 (5・6) 5は高台径6.8cm。内面の上半部に緑灰色釉を掛け、まだらに残る。その他内外面は回転ナデで、内面底部は使用によって滑かになっている。S-213より出土。6は胎土が灰色で、内面のみ淡灰緑色の釉が薄く掛かる。外面は回転ナデで、外面下半は回転ヘラケズリを施す。S-552より出土。

皿 (7) 胎土は精製され灰白色を呈する。内面底部と高台付近は回転ナデで、体部上半部に灰緑色の釉が掛かる。S-402より出土。

壺 (8・9) 2点とも外側に湾曲した後、口縁端部を上方に折り曲げている。8は内外面とも緑灰色の釉が掛かるが内面は殆ど剥落。S-55より出土。9は内面に灰緑色の釉が掛かる。外面は回転ナデで釉はない。小破片だがおよそ口径15cmである。S-333より出土。

鉢 (10) 直線的に外反する。胎土は灰白色で、内外面とも回転ナデを施し、内面に光沢のある灰緑色釉を薄く掛ける。S-167より出土。

瓦類

軒丸瓦 (11) 欠落部分も多いが、中房の蓮子は1+6+10とみられ、花弁は若干短い。S-537より出土。
土製品

土鉢 (12) 現存長2.3cm、径1.0cm。色調は淡茶灰色を呈する。S-351より出土。

石製品

石鏡 (13～18) 13は長さ3.7cm、幅1.85cm、厚さ0.5cm。安山岩製。S-88より出土。14は長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmで、全体的にやや風化している。安山岩製。S-5より出土。15は大きさが1.65cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。黒曜石製。S-150eより出土。16は先端を欠損し、現存長3.0cm、幅1.0cm、厚さ0.35cm。黒曜石製。S-164より出土。17は端部を欠損し、現存長1.9cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm。S-46より出土。18は先端欠損する。現存長2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。黒曜石製。S-187より出土。

剥片 (19～22) 19～21は一部自然面が残る。19は黒曜石で、S-89より出土。20は玄武岩で、S-20暗灰色土より出土。21は安山岩で、S-110暗灰色粘土より出土。22は黒曜石の縦長剥片で長さ7.8cm、幅2.6cm、厚さ1.1cm。S-290茶褐色粘土より出土。

石核 (23・24) 23は自然面も残るが、細かく剥離させている。大きさは3.7×4.3×1.2cm。安山岩製。S-392より出土。24は大きさが14.9×9.1cm、厚さ4.3cmの安山岩で、S-602より出土。

石鍋 (25) 外面細かくケズリ整形する。内面には斜めにキズが入っている。S-401より出土。

菅玉 (26) 長さ3.6cm、径0.8cm。中央に0.2cm程の円孔を穿つ。S-5より出土。

石帯丸轆 (27) 1/3ほど欠損しているが、現存長2.85×3.6cm、厚さ0.85cmで裏面に紐穴が3ヶ所彫られている。石材は黒灰色で粘板岩か。S-120より出土。

○第1調査面基盤層

236-1SX345出土遺物 (Fig.43)

土師器

小皿a (1～10) 宍形が多く、口径9.1～10.0cm、器高0.9～1.7cm。確認できるものは全て底部回転ヘラ切りで、内面は不定方向のナデ。7は内面に煤が付着する。

皿a (11) 復元口径14.4cm、器高1.45cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ。

丸底杯a (12～22) 宍形が多く、口径14.0～16.55cm、器高3.0～4.35cm。体部中位で僅かに屈曲し、その周辺に指頭圧痕を残すものもある。内面は摩滅も目立つが、ミガキやコデ当て痕を残すものもある。16・22は内外面に煤が付着する。

器台 (23) 脚部はナデだが、磨滅が著しい。脚部径約3.3cm。

緑釉陶器

椀×皿 (24) 高台は2段で、復元高台径6.8cm。胎土は精製され、暗灰色を呈する。内外面ともやや濃い緑色の釉を施す。内面には浅い沈輪が巡り、重ね焼きのハリ痕がみられる。須恵質。

236-1SX345暗灰色土出土遺物 (Fig.43)

土師器

小皿a (25) 復元口径11.2cm、器高1.0cm。底部には板状圧痕残るが、切り離し不明。

皿a (26) 復元口径14.0cm。底部はやや丸味を帯び、体部中位で屈曲し外反する。

杯a (27～36) 復元口径12.5～14.0cm。器高3.1～4.2cm。底部内面は全て不定方向のナデ。色調は黄灰白色や淡灰色を呈する。体部と底部の境は僅かに丸味を帯びるが、29・30のように底部全体がやや丸味を帯びるものもある。27は体部の外反が小さい器形を呈する。

椀 (37) 復元口径14.4cm。口縁端部を僅かに外反させる。内外面ともココナデ。

椀 (38) 方形の高台を貼付する。内外面ともココナデ、底部内面の一部はナデ。

丸底杯a (39) 口径15.2cm。内面にはミガキや、外面中位に指頭圧痕を残す。

小壺 (40) 復元口径14.0cm。体部外面には煤が付着している。

黒色土器A類

椀 (41・42) 口縁部はあまり内湾しない。内面ミガキ、外面回転ナデ。

緑釉陶器

椀 (43) 底部は削り出し高台。白色砂粒を少量含み、明灰色を呈する。全面に灰緑色の釉が薄く掛かる。内面底部には浅い沈輪が巡る。また、使用により若干研磨されている。須恵質。洛西産。

石製品

砥石 (44) 4面研磨されていて、端部に0.4cm程の円孔を穿つ。長さ6.5cm、幅2.9×1.7cm。砂岩製。櫛として使用した可能性も考えられる。

236-1SX345黒茶色土出土遺物 (Fig.44)

土師器

小皿a (1～4) 口径9.15～9.6cm、器高0.8～1.1cm。底部回転ヘラ切り。

皿a (5) 復元口径14.7cm、器高1.8cm。底部回転ヘラ切り。

杯a (6～10) 6は他と異なり時期が下るもので、中位に僅かな屈曲がある。体部と底部の境が9は明瞭に屈曲、その他3点は僅かに丸味を帯びる。色調は、全体として黄灰色を呈する。

椀 (11) 復元高台径9.0cm。底部外面はナデ。

灰釉陶器

皿 (12・13) 12は復元口径16.8cm、器高2.9cm。復元高台径8.2cm。三日月状の高台を貼付する。胎土は白色砂粒を若干含むが精製され、明灰色を呈する。内面上半部のみ浅い灰緑色の釉を施す。内面下半はナデで、平滑になっている。外面は回転ナデ。K-90窯様式。13は胎土が白色砂粒を若干含むが精製され、灰白色を呈する。内面と口縁端部に淡灰緑色の釉を施す。外面は回転ナデ。

段皿 (14) 胎土が白色砂粒を若干含むが精製されている。内面底部に段を有する。内面と外面の上

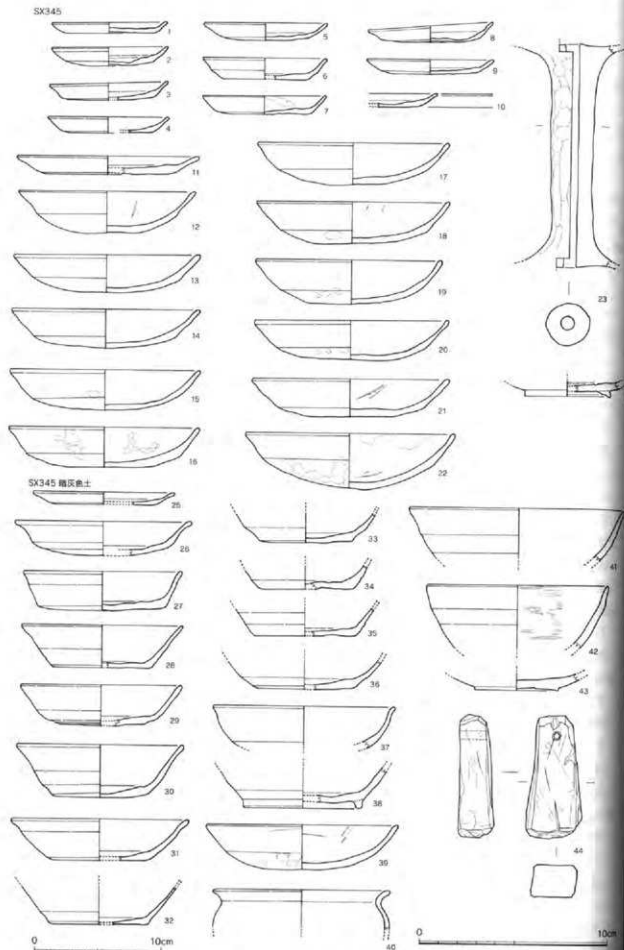


Fig.43 第1面基盤層(SX345・345暗灰色土)出土遺物実測図(1/3、44は1/2)

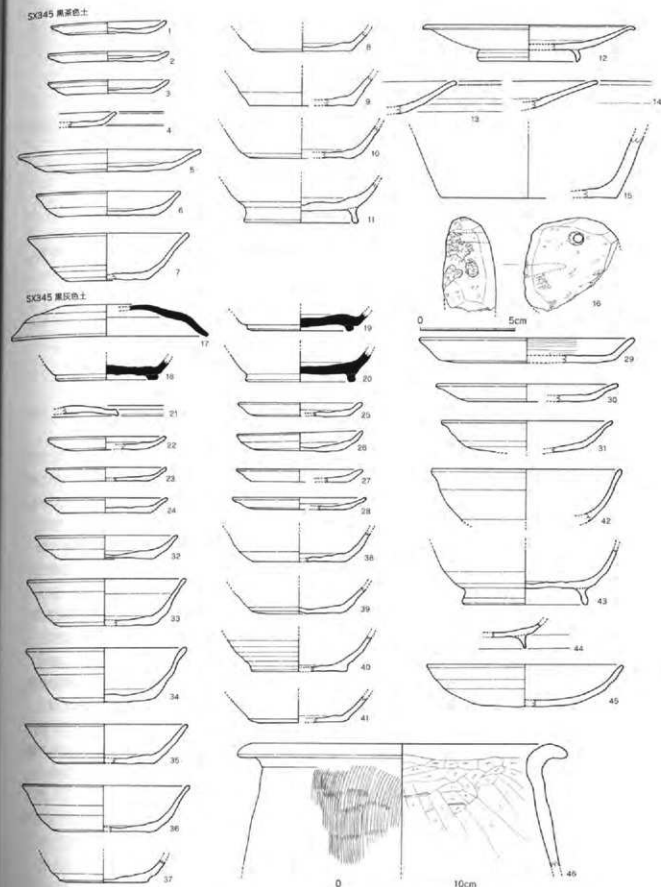


Fig.44 第1面基盤層(SX345黒灰色土)出土遺物実測図①(1/3、16は1/2)

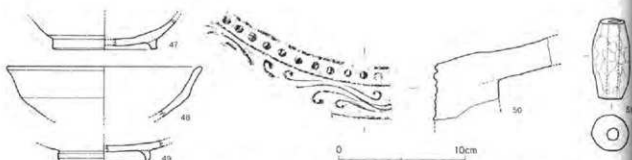


Fig.45 第1面基盤層(SX345黒灰色土)出土遺物実測図②(1/3)

半部に淡灰緑色の軸を施す。軸はハケ塗りとみられる。K14もしくはK90窯様式である。

土師質土器

鉢 (15) 復元底径14.0cm。0.1cm以下の砂粒を若干含む、外面淡橙茶色、内面淡灰褐色を呈する。内面と底部は磨滅するが外面は回転ヘラケズリが確認できる。

石製品

用途不明製品 (16) 石材は軽石で、径0.5cm程の円孔とそれと同じくらいだが貫通していない穴がある。表面も整形されているがその用途は不明である。現存長5.0×5.0cm、厚さ2.85cm。

236-1SX345黒灰色土出土遺物 (Fig.44・45)

須恵器

蓋4 (17) 外面は回転ヘラ切りの後回転ナデ。内面は回転ナデの後、上半部には一部不定方向のナデを施す。また、重ね焼き痕も残す。頂部にヘラ記号のようなものがある。

坏c (18～20) 復元高台径8.1～8.7cm。内面底部は不定方向のナデ。底部外面は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

土師器

蓋3 (21) 外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面はナデ調整。

小皿a (22～28) 口径9.4～10.6cm、器高0.9～1.4cm。底部は全て回転ヘラ切り。

皿a (29～31) 29は内面にミガキを施し、外面底部は回転ヘラケズリ。30は底部回転ヘラ切り、31は底部回転ヘラ切りで、底部は若干丸味がある。

坏a (32～41) 復元口径12.8～13.6cm。体部と底部の境が、35は明瞭に屈曲し体部は直線的に外反する。40も屈曲するが、体部は丸味を帯びる。その他7点の体部と底部の境は僅かに丸味を帯びる。

碗 (42) 復元口径15.0cm。外面ヨコナデ調整。

碗c (43・44) 43は復元高台径9.9cm、内外面ヨコナデ、内面底部ナデ、底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。44は全体的に磨滅し調整不明。

丸底坏a (45) 復元口径15.6cm。全体的に磨滅し調整不明。

甕 (46) 口縁部は若干肥厚し丸味を持って外反する。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。復元口径は26.0cm。

黒色土器A類

碗c (47) 方形の高台を貼付し、復元高台径8.2cm。内面磨滅するがミガキを施す。

黒色土器B類

碗 (48) 復元口径15.4cm。全体的に磨滅するが、内面はミガキ痕が確認できる。

灰釉陶器

皿 (49) 三日月状の丸味のある高台を貼付する。復元高台径7.2cm。胎土は若干粗く灰白色を呈する。

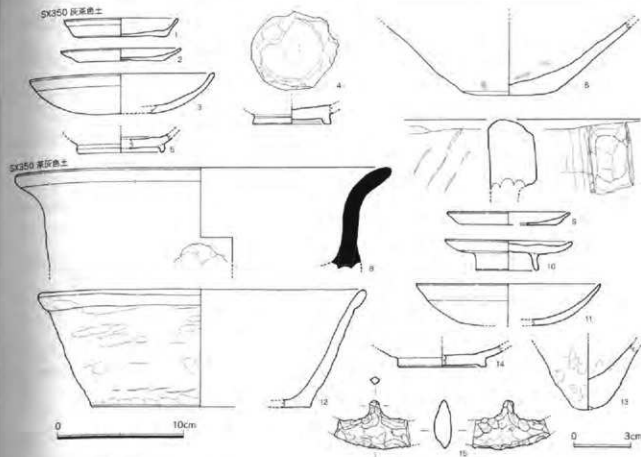


Fig.46 第1面基盤層(SX350)出土遺物実測図(1/3, 15は1/2)

釉は明灰緑色で、内面底部には釉がなく、平滑である。また、重ね焼き痕も残る。現存範囲では外面に釉はない。

瓦類

軒平瓦 (50) 左行きの偏行唐草文である。焼成はやや不良で、白灰色を呈する。

土製品

土鉢 (51) 長さ6.4cm、径2.9×3.0cm。白色砂粒を多く含む、白灰色～暗茶灰色を呈する。

236-1SX350灰茶色土出土遺物 (Fig.46)

土師器

小皿a (1・2) 1は復元口径9.0cm、底部回転糸切り。2は磨滅し調整不明。

丸底坏a (3) 復元口径14.8cm。全体的に磨滅が目立つ。

緑釉陶器

碗 (4) 削り出し高台で復元高台径6.2cm。胎土は淡灰緑～淡茶色の須恵質で、釉は光沢のある淡緑色で全体的に薄く掛かる。体部は意図的に打ち欠いたようにも見える。京都産。

灰釉陶器

碗 (5) 内面は僅かに浅い沈線が巡る。内面は沈線より上部に明灰緑色釉が薄く掛かり、その他は内外面とも黒胎。復元高台径7.0cm。

弥生土器

壺 (6) やや丸い底部で内外面に僅かにハケ目が残る。胎土は茶灰色で、白色砂粒を多く含む。

石製品

石鍋 (7) 把手部分で、内外面削り出され、外面に煤が付着する。

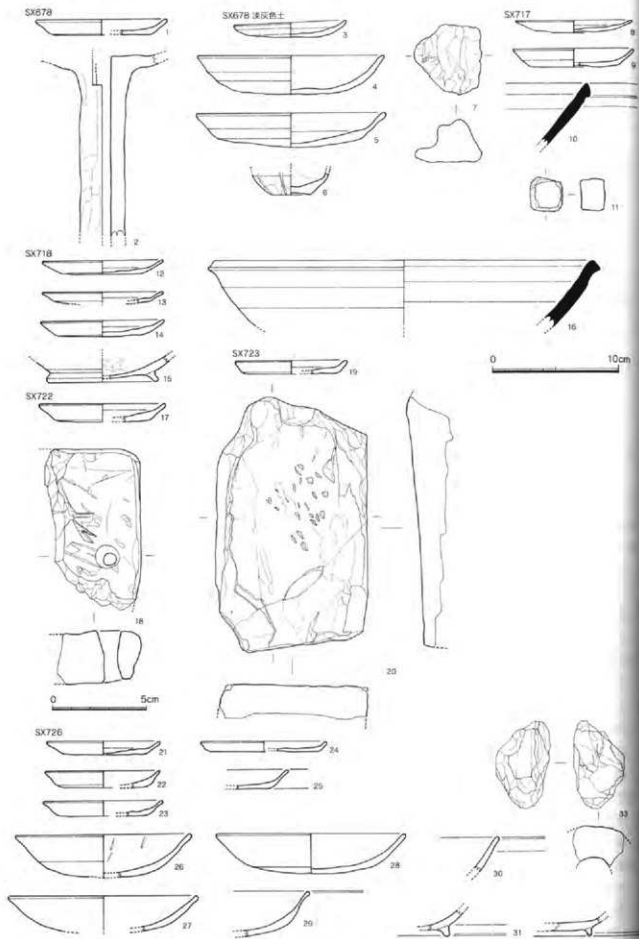


Fig.47 第1面基盤層(SX678・717・718・722・723・726)出土遺物実測図(1/3、18・20は1/2)

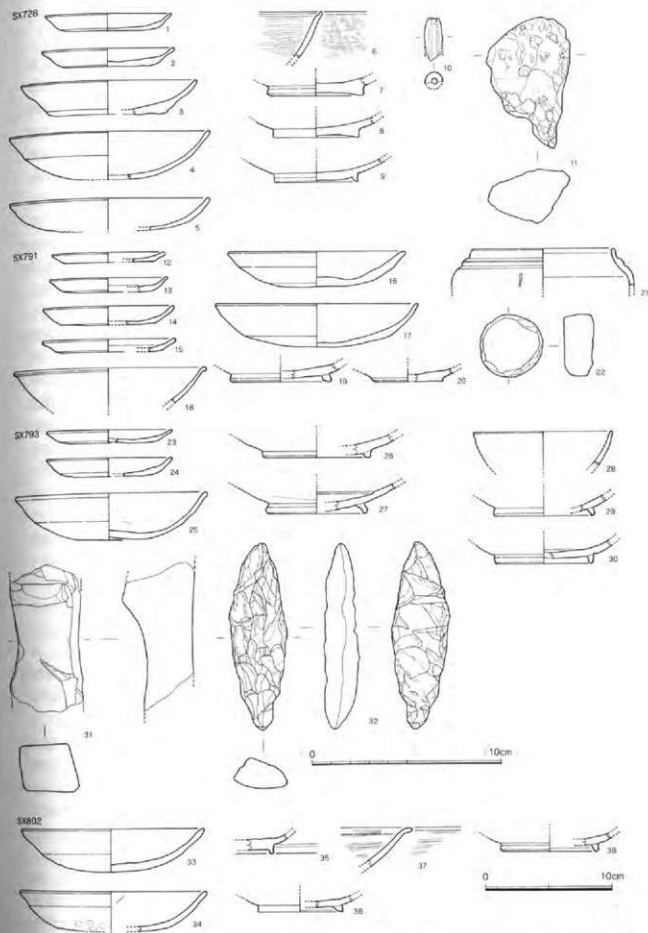


Fig.48 第1面基盤層(SX728・791・793・802)出土遺物実測図(1/3、11・31・32は1/2)

236-1SX350茶灰色土出土遺物 (Fig.46)

須恵器

脚付盤(8) 復元口径30.0cm、口縁部を大きく外反させる。体部下半に脚部を貼付した痕跡を残す。内外面ヨコナデ調整。胎土は精製されているが、0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。焼成・還元は良好で、色調は灰色～暗灰色を呈する。

土師器

小皿a(9) 復元口径9.8cm。外面底部には板状圧痕を残す。

小皿c(10) 口径10.0cm、器高2.4cm。焼成は不良で口縁端部は磨滅する。

丸底杯a(11) 復元口径14.6cm。全体的に磨滅する。

盤(12) 復元口径26.0cm、器高9.25cm、復元底径17.3cm。胎土は精製され、明橙灰色を呈し、焼成は不良。内外面ナデ調整で、外面下半に粘土組織跡を残す。

製塩土器

焼塩壺(13) 胎土は粗く白色砂粒を多く含む、赤褐色を呈する。内面はへら状工具痕があり、外面はナデ調整。

緑釉陶器

皿(14) 高台削り出しで、復元高台径7.0cm。胎土は精製され、灰色～淡灰褐色を呈する。釉は淡い灰緑色釉で、全面に薄く施し高台畳付は釉を拭き取る。底部外面には僅かに回転糸切りが残り、内面には幅広いの浅い沈線が巡る。また、内面は平滑である。須恵質。

石製品

石匙(15) 両端が欠損し、大きさは上下2.6cm、左右4.1cm、厚さ0.9cm。安山岩製。

236-1SX678出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(1) 復元口径10.4cm。底部回転へら切り。

器台(2) 脚部径約3.5cm。脚部はナデ調整。

236-1SX678淡灰色土出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(3) 口径8.9cm。全面磨滅し調整不明。

丸底杯a(4・5) 4は復元口径14.8cm。外面底部に板状圧痕。5は復元口径15.0cm回転。底部回転へら切り後ナデ調整。内面不定方向のナデ。

白磁

小壺(6) 底部は回転ヘラケズリで、径3.1cm。体部には縦沈線が6本ある。胎土は灰白色で、僅かに灰緑色味を帯びた透明釉を施す。細かき買入が入る。外面底部は露胎、内面は底部のみ施釉。

土製品

焼土塊(7) 白色砂粒やスサを含む。棒状痕跡がみられる。

236-1SX717出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(8・9) 復元口径9.2cmと9.6cmで、外面底部に板状圧痕を残す。

須恵質土器

鉢(10) 全面回転ナデで、淡青灰色を呈する。

瓦類

瓦玉(11) 大きさは2.1×2.3cm、厚さ2.0cm。格子叩きと布目痕が残る。

236-1SX718出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(12～14) 復元口径9.6～9.8cm、底部回転へら切り。

黒色土器A類

椀c(15) 内面ミガキ、底部外面ナデ、体部は回転ナデである。

須恵質土器

鉢(16) 復元口径31.0cm。口縁端部を僅かに外反させる。胎土は白色砂粒や黒色粒を含み、色調は淡青灰色を呈する。内外面とも回転ナデ。

236-1SX722出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(17) 復元口径10.0cm。底部回転へら切り。

石製品

滑石加工品(18) 側面の1/2が欠損していて、残存部は削り面取りしている。また、径約1.3cmの円孔が穿たれている。大きさは8.0×4.7cm、厚さ2.75cm。表面にはキズが多く付いている。

236-1SX723出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(19) 復元口径8.8cm、器高1.05cm。底部回転へら切り。

石製品

砥石(20) 大きさは13.5×8.0×2.0cm。残存する側面は面取りされている。使用面は1面で、小刻みなキズが付いている。

236-1SX726出土遺物 (Fig.47)

土師器

小皿a(21～25) 復元口径9.0～10.0cm、器高0.8～1.3cm。底部回転へら切り。

丸底杯a(26～29) 復元口径14.0～15.0cm、体部中位の屈曲は少ない。

緑釉陶器

椀(30・31) 30は須恵質で灰緑色釉を全面に薄く施す。31は須恵質で、内面と体部外面は灰緑色釉を全面に薄く施すが外面は殆ど剥落する。底部外面は露胎である。

灰釉陶器

皿(32) 胎土は淡灰色で、内面のみ灰緑色釉を薄く施すが、殆ど剥落する。

土製品

罎羽口(33) 胎土は白色砂粒や赤褐色粒を多く含む。内外面磨滅する。外面は黄灰色、黒灰色、灰白色に変色する。

236-1SX728出土遺物 (Fig.48)

土師器

小皿a(1・2) 復元口径10.0cmと10.6cm。底部回転へら切り。

杯a(3) 復元口径14.0cm、内外面とも磨滅している。口縁部は歪んでいる。

丸底杯a(4・5) 体部に屈曲なく丸味を持っている。全面磨滅している。

黒色土器B類

椀(6) 口縁端部内面に僅かに段差を付ける。内外面にミガキcを施す。

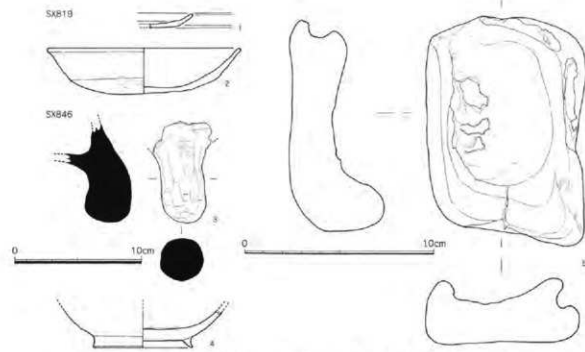


Fig.49 第1面基盤層(SX819・846)出土遺物実測図(1/3, 5は1/2)

緑釉陶器

椀×皿(7~9) 7は削り出し高台で、内面に緑黄灰色の釉を施すが、所々剥落している。胎土は淡褐色の土師質である。復元底径7.6cm。京都産。8は削り出し高台で、内面は薄く施軸されているが、剥落も目立つ。須恵質。復元高台径6.8cm。洛西産。9は削り出し高台とみられる。外面底部は露胎で、内外面は緑黄灰色の釉をとても薄く施す。復元高台径6.6cm。

土製品

土鉢(10) 一部欠損するが、現存長3.5cm、径1.4cm。焼成は不良で茶褐色を呈する。

石製品

軽石(11) 大きさは6.95×4.4×2.9cm。

236-1SX791出土遺物(Fig.48)

土師器

小皿a(12~15) 復元口径9.0~10.6cm。磨滅も目立つが、底部回転ヘラ切り。

丸底杯a(16・17) 復元口径14.0cmと16.0cm。磨滅し調整不明瞭。

緑釉陶器

椀(18・19) 18は復元口径15.4cm、口縁端部を折り曲げる。胎土は黄白色の土師質で、内外面に点々と淡い黄緑色の釉が残っている。19は復元高台径8.0cm、胎土は暗灰色の須恵質で、全面にうっすら淡い緑灰色の釉が残る。

椀×皿(20) 復元底径5.6cm。胎土は黄白色の土師質で、内面のみに淡黄緑色の釉が部分的に剥落した状態で残る。底部外面は回転系切り。

越州窯系青磁

壺(21) 復元口径10.3cm。短い頸部で、頸部下に凸帯が巡る。体部に窪押し縦線を施す。胎土は淡灰色で精製され、釉は淡緑灰色で顔色の質である。

瓦類

瓦玉(22) 大きさは4.9×4.9×2.4cm。側面を打ち欠く。片面にナデが残る。

236-1SX793出土遺物(Fig.48)

土師器

小皿a(23・24) 2点とも復元口径10.0cm。

丸底杯a(25) 復元口径10.0cm、磨滅が目立つが内面にコテ当て痕が僅かに残る。

緑釉陶器

椀×皿(26) 胎土は淡灰色の須恵質で、内外面に淡緑灰色の釉を施す。復元高台径8.6cm。

灰釉陶器

段皿(27) 復元高台径8.0cm。内面は淡緑灰色の釉を施し、重ね焼き痕を残す。外面下半には殆ど釉はない。

椀(28~30) 28は復元口径11.0cm。胎土が淡灰色で精製されている。釉は全く残っていない。29は胎土が白灰色で、釉は全く残っていない。内面は平滑である。復元高台径8.0cm。30は胎土が淡灰色を呈し、釉は全く残っていない。内面は平滑である。復元高台径7.8cm。

石製品

砥石(31) 大きさは7.85×4.1×3.8cmの長方形で、4面使用している。

三稜尖頭器(32) 縦9.85cm、横3.0cm、厚さ1.6cm。全面風化が目立ち、細かい剥離状況がわかりづらい状態である。安山岩製。

236-1SX802出土遺物(Fig.48)

土師器

丸底杯a(33・34) 33は磨滅が目立つ。34は内面コテ当て、外面下半に指頭圧痕残る。

緑釉陶器

椀×皿(35・36) 35は高台削り出しで、内面には浅い沈線を巡らす。胎土は微細な白色砂粒を含むが精製されている。焼成は須恵質で、黄色味を帯びた暗緑色の釉を内外面に施す。置付は釉を拭き取っている。36は内面に浅い沈線を巡らす。胎土は微細な白色砂粒を含むが精製され、焼成は須恵質で、明緑色の釉を内外面に施す。復元高台径6.6cm。

椀(37) 胎土は明灰色でやや粗く、焼成は須恵質。釉は淡い黄緑色を呈する。

灰釉陶器

椀×皿(38) 胎土は灰白色で、微細な白色砂粒を若干含む。残存部分に釉は確認できない。復元高台径7.8cm。

236-1SX819出土遺物(Fig.49)

土師器

小皿a(1) 底部回転ヘラ切り。

丸底杯a(2) 口径15.3cm。外面下半は回転ヘラ切り後ナデで、指頭圧痕も残る。

236-1SX846出土遺物(Fig.49)

須恵器

脚(3) 盤のようなものから剥落した痕跡が窺える。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は良好で灰白色を呈する。全面ナデ調整。

灰釉陶器

椀(4) 復元高台径7.8cm。胎土は白色砂粒を若干含み灰色を呈する。内面上部のみ淡い灰緑色釉が施されているが、欠けている。内面底部は露胎で回転ナデ、外面は回転ナデ、底部は回転系切り後回転ナデ調整。

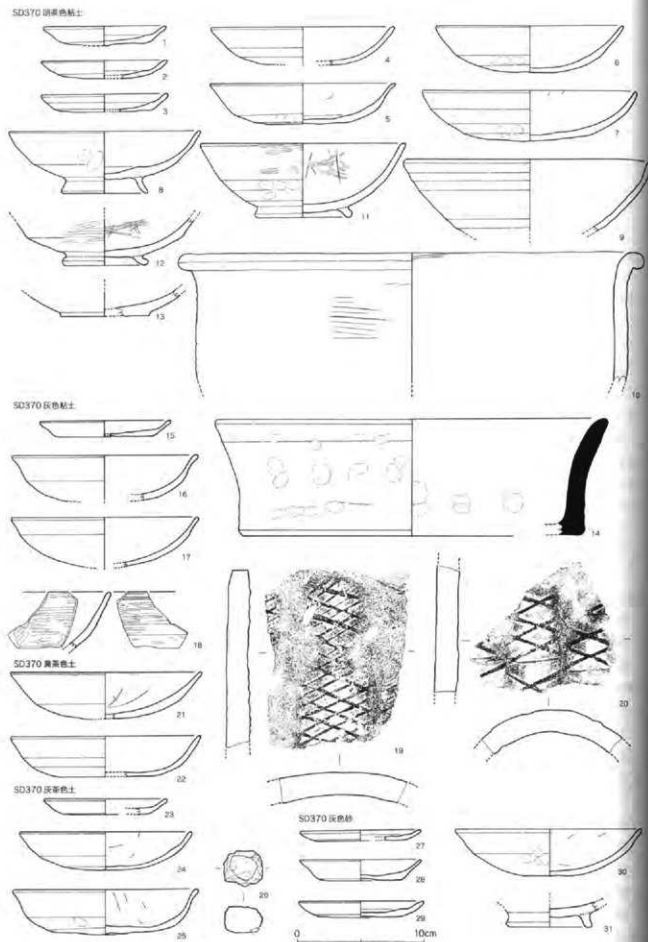


Fig.50 SD370出土遺物実測図 (1/3)

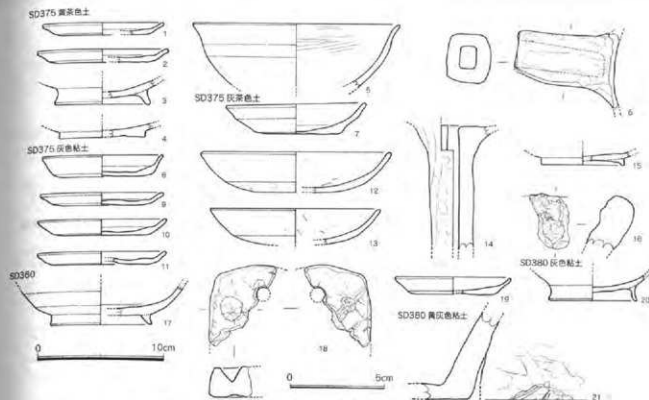


Fig.51 SD360・375・380出土遺物実測図 (1/3, 18は1/2)

石製品

用途不明製品 (5) 大きさ12.3cm×8.5cm、厚さ5.0cmで、全体的に平坦であるが、端部が丸みを持ち、人為的に研磨されたような痕跡を残す。内面は窪んでいるが、加工したものか自然のものかの判別は難しい。

○第2調査面

溝

236-1SD360出土遺物 (Fig.51)

灰輪陶器

椀 (17) 三角形の高台を貼付し、復元高台径8.0cm。胎土は白色・黒色粒を少量含む。内面底部には浅い沈線があり、それを境に底部は露出で、上半には淡灰緑色の釉が薄く掛かっている。

石製品

滑石加工品 (18) 欠損しているが、0.7cm程の円孔と貫通はしていないものの同様の円孔も彫り込まれている。その他条痕もみられる。用途不明である。

236-1SD370明茶色粘土出土遺物 (Fig.50)

土師器

小皿a (1～3) 口径9.7～10.0cm。確認できるものは底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (4～7) 復元口径14.6～17.0cm。磨滅するが内面ミガキb、外面下半に指頭圧痕が残る。

丸底坏c (8) 復元口径15.2cm。外面中位に指頭圧痕が残る。

椀 (9) 復元口径20.0cm。外面ヨコナデ、内面磨滅し調整不明。

甕(10) 復元口径37.0cm。口縁端部を丸く折り曲げている。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、黒茶色を呈する。外面は粗いヨコハケ、内面はナデ。

黒色土器B類

碗c (11・12) 外開きの低い高台を貼付し、内外面にミガキcを施す。11は外面下半に指頭圧痕が残り、内面にはミガキbのコテ当て痕も確認できる。

緑釉陶器

皿 (13) 高台削り出しで、蛇の目高台をなす。胎土は淡灰色の須恵質で、内外面に淡緑白色の釉を薄く施すが、一部剥落する。京都産。

236-1SD370灰色粘土出土遺物 (Fig.50)

須恵器

盤 (14) 復元口径31.0cm、器高9.2cm、復元底径27.3cm。内面下半と外面に指頭圧痕の後ナデ調整。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。焼成はやや不良で灰白色～黒灰色を呈する。

土師器

小皿a (15) 復元口径10.3cm。板状圧痕が残るが、全体的に磨滅する。

丸底坏a (16・17) 復元口径14.7cmと14.8cm。全体的に磨滅し調整不明。

黒色土器B類

碗 (18) 内外面ミガキcを施し、口縁部外面に細い沈線が巡る。

瓦類

平瓦 (19) 菱形の格子叩きで、内面には布目痕が残る。

丸瓦 (20) やや大きい菱形の格子叩きで、内面には布目痕が残る。

236-1SD370黄茶色土出土遺物 (Fig.50)

土師器

丸底坏a (21・22) 体部は屈曲なく丸く仕上げる。21は内面がミガキbで端部に煤が付着する。22は全面磨滅し調整不明。

236-1SD370灰茶色土出土遺物 (Fig.50)

小皿a (23) 復元口径9.8cm。底部回転ヘラ切り、内面底部不定方向のナデ。

丸底坏a (24・25) 24は磨滅が目立つが、内面に当て具痕が残る。25は体部中位で丸く屈曲し、その下に指頭圧痕が残る。部分的に一次焼成で黒色を呈し、内面はミガキbで当て具痕が残る。

瓦類

瓦玉 (26) 大きさは2.8×3.1cm、厚さ2.1cm。表面に叩き痕と布目痕が残る。

236-1SD370灰色砂出土遺物 (Fig.50)

土師器

小皿a (27～29) 復元口径9.6～9.8cm、器高0.8～1.6cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (30) 復元口径15.0cm、内面はミガキbでコテ当て痕が残り、外面中位には指頭圧痕が残る。

黒色土器B類

碗c (31) 高台径6.8cm。内面ミガキcで、外面ヨコナデ。

236-1SD375黄茶色土出土遺物 (Fig.51)

土師器

小皿a (1・2) 復元口径9.6cmと10.4cm。

把手 (6) 長さは7.8cm。形状は方形で、内部は空洞である。外面はナデ調整。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を少量含み、茶灰色や淡褐色を呈する。

黒色土器B類

碗c (3) 復元口径7.6cm。

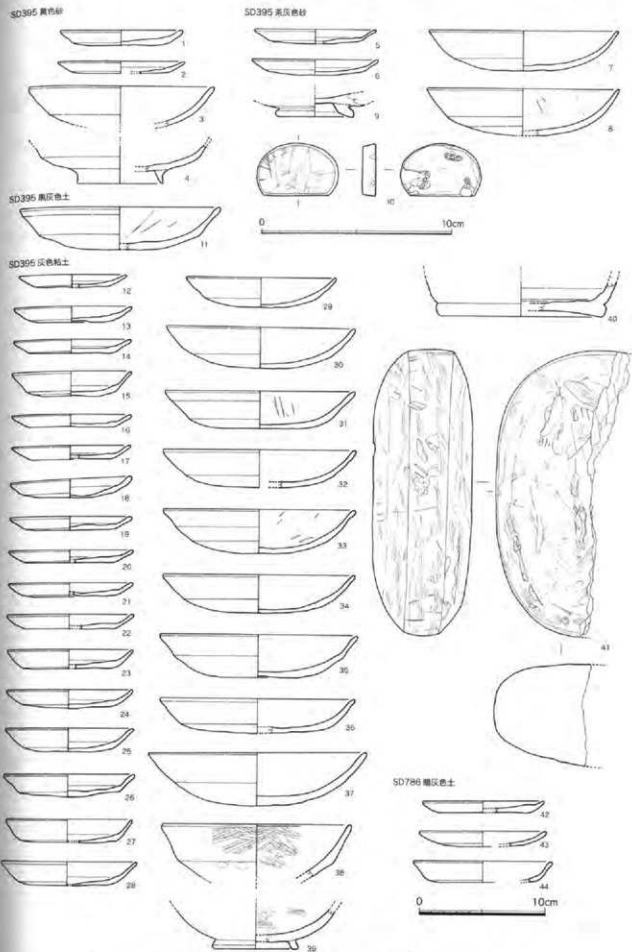


Fig.52 SD395・786出土遺物実測図 (1/3、10・41は1/2)

緑軸陶器

皿(4) 高台削り出しの蛇ノ目高台で、復元口径6.8cm。胎土は黄白色で土師質。軸は緑黄色で全面に施軸するが殆ど剥落している。洛北産。

椀(5) 復元口径16.3cm。軸は灰緑色で内面ミガキ、外面回転ナデのあと施軸するが、口縁部以外殆ど剥落している。須恵質で洛西もしくは篠塚産。

236-1SD375灰茶色土出土遺物 (Fig.51)

土師器

坏a(7) 口径11.0cm。体部中に僅かに屈曲がある。底部回転ヘラ切り後ナデ、内面底部は不定方向のナデ、その他はヨコナデ。

236-1SD375灰色粘土出土遺物 (Fig.51)

土師器

小皿a(8~11) 復元口径9.6~10.2cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a(12・13) 内面ミガキbでコテ当て痕も残る。12は口縁内部に煤が付着する。

器台(14) 0.9cm程の孔が開き、外面はナデ調整。上部は粘土接合部で剥落する。

灰軸陶器

皿(15) 復元高台径6.6cm。胎土は白色砂粒を含むが精製され、灰白色を呈する。軸は現存範囲では確認できない。外面底部は回転糸切り、内面は平滑である。O-53窯様式とみられる。

土製品

トリベ(16) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を若干含むが精製され、灰色を呈する。内面は溶解し赤茶色や暗灰色になり、青緑色や黒茶色物質が付着する。

236-1SD380出土遺物 (Fig.51)

土師器

小皿a(19) 復元口径9.2cm。器高1.4cm。内外面磨減し調整不明。

236-1SD380灰色粘土出土遺物 (Fig.51)

土師器

椀c(20) 復元高台径7.0cm。内面ナデ調整。

236-1SD380黄灰色粘土出土遺物 (Fig.51)

瓦質土器

脚付鉢(21) 胎土は0.2cm以下の白色・黒色砂粒を多く含む、色調は淡灰色を呈する。内外面はヨコナデ、底部外面は削りで、脚部が剥落した痕跡を残す。

236-1SD395黄色砂出土遺物 (Fig.52)

土師器

小皿a(1・2) 復元口径9.6cmと10.0cm。磨減し調整不明。

丸底坏a(3) 復元口径14.6cm。磨減し調整不明。

椀c(4) 復元高台径6.7cm。体部は磨減し調整不明。

236-1SD395茶灰色砂出土遺物 (Fig.52)

土師器

小皿a(5・6) 復元口径9.6と10.0cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a(7・8) 復元口径15.0cmと15.2cm。12は内面に煤が付着する。

黒色土器B類

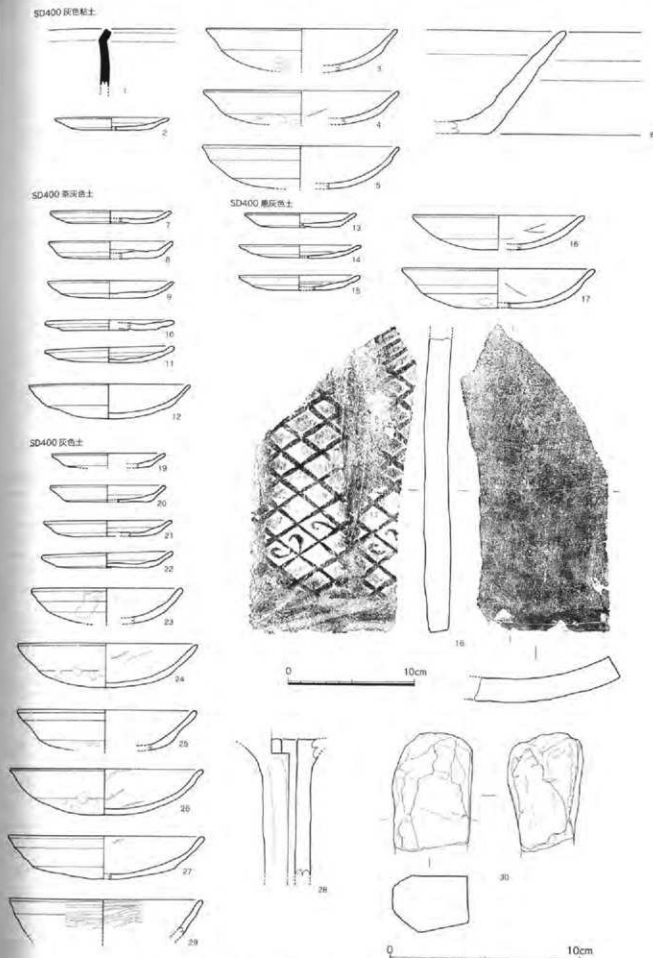


Fig.53 SD400出土遺物実測図 (1/3、30は1/2)

椀c (9) 高台径6.2cm。内面ミガキcが残る。

石製品

石帯丸鞘 (10) 大きさは縦2.8cm、横4.3cm、厚さ0.7cm。石材は粘板岩のようなもので、色調は灰黒色を呈し、表面は光沢がある。裏面には3ヶ所6個の穴が開いている。

236-1SD395灰色粘土出土遺物 (Fig.52)

土師器

小皿a (12~28) 復元口径8.6~11.1cm、器高1.0~2.0cm。底部回転ヘラ切り。

小丸底杯a (29) 復元口径11.8cm、外面底部に回転ヘラ切り痕と板状圧痕が残る。

丸底杯a (30~37) 復元口径15.0~17.2cm。外面中位で僅かに屈曲するものもあるが全体的に丸い。全体的に磨滅するが、内面にミガキb、外面に板状圧痕が残る。

黒色土器B類

椀 (38) 復元口径15.0cm、内外面ともミガキcで、外面中位に指頭圧痕が残る。

椀c (39) 復元高台径6.8cm、外面下半は回転ヘラケズリで、内面はミガキc。

長沙窯系青磁

水注 (40) 復元底径13.4cm。胎土は明灰色を呈し、釉は淡い灰緑色で外面に薄く施す。内面回転ナデ、外面底部はナデである。

石製品

磨石 (41) 大きさは15.1cm、厚さ5.4cmで楕円形をなしていたと見られる。全体的に薄く規が付く。用途について砥石の可能性も考えられる。

236-1SD786暗灰色土出土遺物 (Fig.52)

土師器

小皿a (42~44) 復元口径9.6~11.0cm、42は若干口縁部が歪む。

236-1SD400灰色粘土出土遺物 (Fig.53)

須恵器

短頸壺 (1) 口縁部を屈曲させる。内外面とも回転ナデ。胎土は微細な白色砂粒や黒色粒を僅かに含み、灰白色を呈する。

土師器

小皿a (2) 復元口径9.0cm。底部回転ヘラ切り。

丸底杯a (3~5) 復元口径15.0~15.4cm。3は内面が薄く剥落。

甃 (6) 胎土は精製されているが、0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、茶灰色や茶褐色を呈する。焼成は不良。全面磨滅が著しい。

236-1SD400茶灰色土出土遺物 (Fig.53)

土師器

小皿a (7~11) 復元口径9.6~10.2cm、器高0.8~1.4cm。底部回転ヘラ切り。

丸底杯a (12) 復元口径12.8cm。

236-1SD400黒灰色土出土遺物 (Fig.53)

土師器

小皿a (13~15) 復元口径8.8~9.6cm、器高1.05~1.2cm。底部回転ヘラ切り。

丸底杯a (16~17) 復元口径13.6cmと15.2cm。内面ミガキbでコテ当て痕も残る。

236-1SD400灰色土出土遺物 (Fig.53)

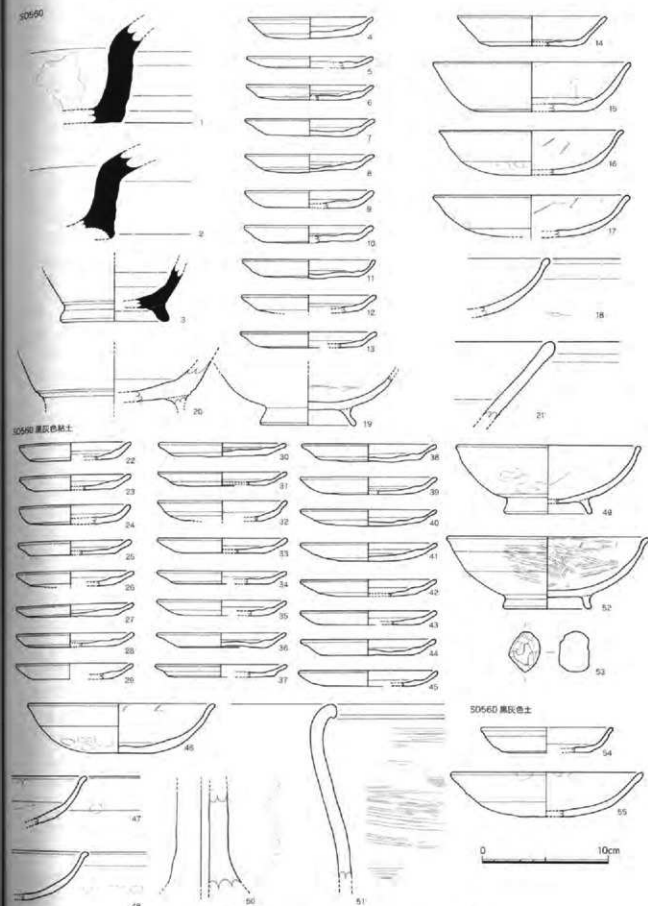


Fig.54 SD560出土遺物実測図 (1/3)

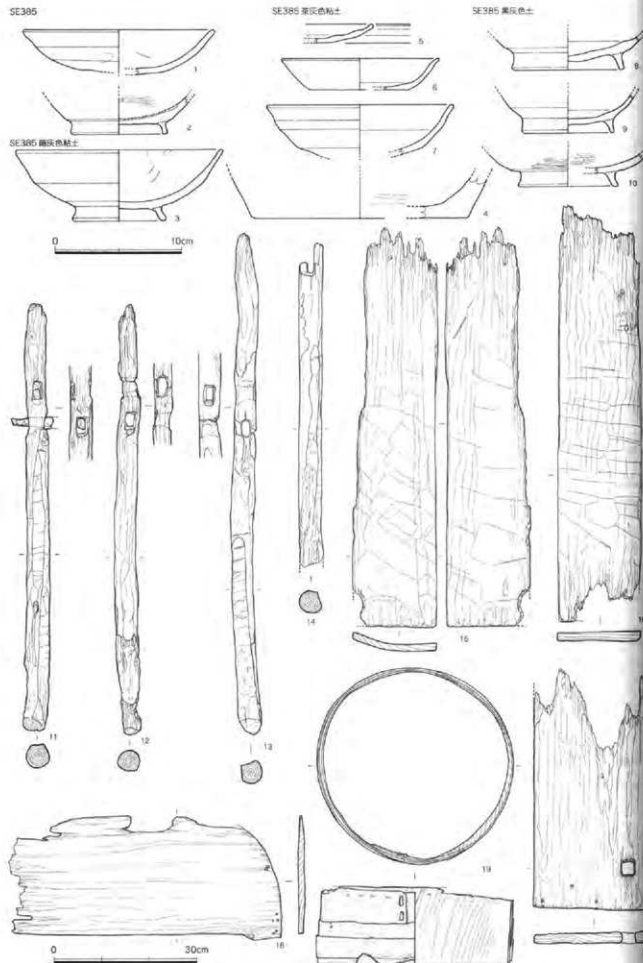


Fig.55 SE385出土遺物実測図 (1/3, 11～19は1/8)

土師器

小皿a (19～22) 復元口径9.0～10.4cm, 器高1.1～1.3cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (23～27) 復元口径14.4～15.8cm, 体部中位に若干屈曲し指頭圧痕が残る。23の外面と26の内面の一部に煤が付着する。

器台 (28) 脚部で径約3.7cm。外面はナデ調整。

黒色土器B類

椀 (29) 復元口径15.6cm。内外面ミガキcを施す。

石製品

砥石 (30) 大きさは6.2×4.25×3.0cm。使用面は3面で砂岩製である。

236-1SD560出土遺物 (Fig.54)

須須器

盤 (1・2) 1は胎土が0.4cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、焼成は不良で白灰色～淡黄褐色を呈する。内外面ともヨコナデ。2は胎土が0.5cm以下の白色砂粒を含み、焼成は不良で灰色～淡灰褐色を呈する。内面には煤が付着している。外面底部ナデ、その他はヨコナデ。

皿 (3) 復元高台径8.6cm。内面はやや平滑である。外面回転ナデ、内面の一部がヘラケズリのような痕跡を残す。

土師器

小皿a (4～13) 口径9.9～10.8cm, 器高0.9～1.7cm。6は外面に煤が付着する。

坏a (14・15) 復元口径11.5cmと15.6cm。15は底部回転ヘラ切りで、内面に煤が付着する。

丸底坏a (16～18) 復元口径14.6～15.5cm。内面はミガキbで、外面下半には底部押し出しの指頭圧痕が残る。

椀c (19) 高台径7.5cm。内面はミガキbであるが黒色化できていない。

甕 (20) 胎土は白色砂粒や赤色砂粒を少量含むが精製され、色調は白褐色を呈する。外面底部は回転ヘラ切り、内外面は磨滅するが回転ナデとみられる。

鉢 (21) 胎土が0.4cm以下の白色砂粒を含む。焼成は良好で、内外面回転ナデで、外面下半にヘラケズリのような痕跡もみえる。

236-1SD560黒灰色粘土出土遺物 (Fig.54)

土師器

小皿a (22～45) 復元口径9.4～11.0cm, 器高1.0～1.6cm。底部回転ヘラ切り、内面底部は一方のナデ。29は内面の一部に付着物がある。

丸底坏a (46～48) 口縁端部が若干平坦部を有する。内面ミガキb。46は復元口径15.2cm。

丸底坏c (49) 復元口径14.6cm。内面にミガキb、外面に指頭圧痕が残る。

器台 (50) 脚部で、径は約3.2cmで、孔の径は1.15cm。外面ナデ調整。

甕 (51) 口縁部を軽く外反させる。胎土は0.7cm以下の白色砂粒や金雲母を含む。内面は斜め方向のナデ、外面は粗いヨコハケで一部ナデ調整。外面全体に煤が多く付着し、内面に部分的に煤が付着する。

黒色土器B類

椀c (52) 口縁部を僅かに外反させる。復元口径16.0cm、内面はミガキbのあとミガキcを施す。

瓦類

瓦玉 (53) 大きさは2.45×3.2×2.35cm。両面に布目と叩き痕が残る。

236-1SD560黒灰色土出土遺物 (Fig.54)

土師器

小皿a (54) 復元口径10.4cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (55) 復元口径15.2cm。口縁端部の内外面に煤が付着する。

井戸

236-1SE385出土遺物 (Fig.55)

土師器

丸底坏a (1) 口径15.2cm。内面ミガキb、外面中位に指頭圧痕が残る。

黒色土器A類

椀c (2) 復元高台径7.6cm。内面ミガキcだが、内面底部は器面が広く剥離している。

236-1SE385暗灰色粘土出土遺物 (Fig.55)

黒色土器A類

椀c (3) 復元口径16.4cm。内面はコテ当て痕とミガキcが残る。外面下半はナデ。

緑釉陶器

鉢 (4) 復元底径17.0cm。胎土は0.1cm以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は灰黒色を呈する。外面はナデ、内面は強いナデで、褐色を帯びた灰緑色の釉を薄く掛ける。

236-1SE385茶灰色粘土出土遺物 (Fig.55)

土師器

小皿a (5) 底部回転ヘラ切り。内面底部不定方向のナデ。

坏a (6) 復元口径12.4cm。外面底部は回転系切りのようにもみえる。内面に一部付着物がある。

丸底坏a (7) 復元口径14.8cm。内面下半はミガキb、上半はココナデ。

236-1SE385黒灰色土出土遺物 (Fig.55)

土師器

椀c (8・9) 復元高台径は9.0cmと7.4cm。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。

黒色土器B類

椀c (10) 復元高台径8.0cm。内外面ミガキc。

236-1SE385出土木製品 (Fig.55)

木製品

剛柱 (11~14) 11は現存長90.6cm、径5.4×5.0cm。表面は部分的に加工を施すが樹皮も残っている。下方はケズリの後劣化している。上部に方形のホゾ穴が、4cm程の間隔を開けてねじれの位置で穿たれ、下段の方には横棧が嵌った状態で検出された。12は現存長90.8cm、径4.9×4.3cm。表面は部分的に加工を施すが、樹皮を残している所もしくは樹皮が剥げただけの部分が多い。上部に方形のホゾ穴が、4cm程の間隔を開けてねじれの位置で穿たれている。13は現存長105.8cm、径5.0×4.8cm。表面は一部加工を施すが、殆どが樹皮を残す所と樹皮が剥げただけの状態である。方形のホゾ穴が4cm程の間隔を開けてねじれの位置で穿たれている。14はホゾ穴部分が欠損し、現存長68.4cm、径5.0×4.6cm。表面は一部加工を施すが、殆どが樹皮を残す所と樹皮が剥げただけの状態である。

井戸枠材 (15~17) 15は現存長84.6cm、幅18.1cm、厚さ1.7cmである。両面ともカンナ削り痕が残る。16は現存長88.2cm、幅18.1cm、厚さ2.2cmである。両面にカンナ削り痕があり、1ヶ所穴が貫通している。



Fig.56 SK390・第2面その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、11は1/2)

17は現存長51.3cm、幅24.8cm、厚さ2.5cmである。表面の加工痕は残っていないが、下方に3.1×3.5cmの方形孔が穿たれ、下端に0.4cm前後の円孔が4ヶ所穿たれている。

板材 (18) 現存長58.0cm、幅26.3cm、厚さ1.4cmである。端部に0.5cm前後の円孔が7ヶ所穿たれており、何かを留めていた穴とみられる。表面に加工痕は残っていない。

曲物 (19) 径41.4×41.6cm、高さ16.5cm。タガが2本通っているが、上部の方はズレ落ちた状態と推測される。上部端には0.2cm前後の多くの円孔が穿たれており、当初桶底があったものを再利用した可能性が考えられる。内面には斜め方向に細かい刻み目を施す。

土坑

236-1SK390出土遺物 (Fig.56)

土師器

小皿a (1~5) 復元口径9.4~10.2cm、器高1.1~1.6cm。2は回転系切り。4は底部系切りか。その他の他は底部回転ヘラ切り。

236-1SK390黒灰色土出土遺物 (Fig.56)

土師器

小皿a (6・7) 復元口径10.2cmと11.0cm。底部回転ヘラ切り。

236-1SK390暗灰色土出土遺物 (Fig.56)

土師器

小皿a (8・9) 8は復元口径9.0cm、磨減し底部調整不明。9は口径9.6cm、底部回転系切り。

第2遺構面その他の遺構出土遺物 (Fig.56)

緑釉陶器

椀×皿 (10) 底部削り出し。胎土は黄灰白色の土師質で、内外面に淡黄緑色の釉を施すが、底部外面は磨減している。復元底径6.6cm。S-776より出土。

石製品

椀 (11) 縦4.4cm、横2.4cm、厚さ1.3cmで、一側面欠損する。表裏のみ研磨されている。また、0.3cmの円孔が穿たれている。重さ21.2g。泥岩製。S-877より出土。

○第2調査面基盤層

第236-1次調査灰色土出土遺物 (Fig.57・58)

須置器

坏a (1) 復元口径13.2cm、底部外面はヘラ切り後ナデ。内面底部はナデ。色調は白灰色を呈する。

坏c (2~4) 復元高台径6.6~7.6cm。3・4は底部端に貧弱な高台を貼付する。

小壺 (5) 復元高台径5.8cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、青灰色を呈する。内外面回転ナデ。

壺 (6) 方形の高台を貼付する。色調は淡青灰色で焼成は良好。内外面とも回転ナデ。

土師器

坏a (7~16) 復元口径は7が12.2cm、8が12.8cmで底部が丸い。復元底径5.8~7.2cm。底部回転ヘラ切り。

小皿c (17) 復元口径11.9cm。器高2.85cm、高台径7.0cm。全面磨減し調整不明。

椀 (18) 復元高台径7.2cm。底部には径0.8cm程の穿孔がある。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や赤色粒を含み、色調は橙褐色を呈する。

椀 (19・20) 復元高台径8.0cmと8.6cm。内外面磨減し調整不明。

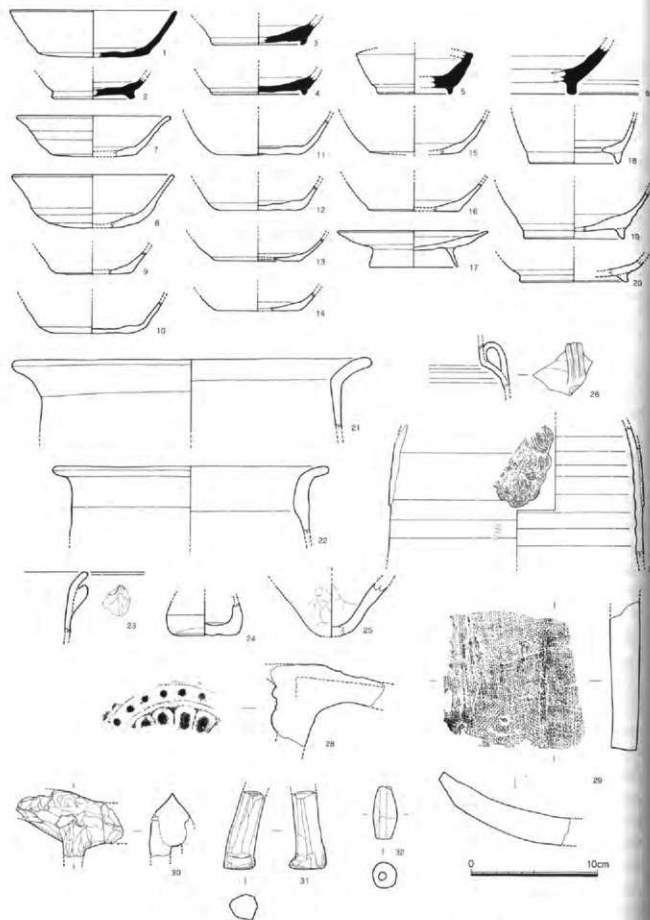


Fig.57 第2面基盤層(灰色土)出土遺物実測図① (1/3)

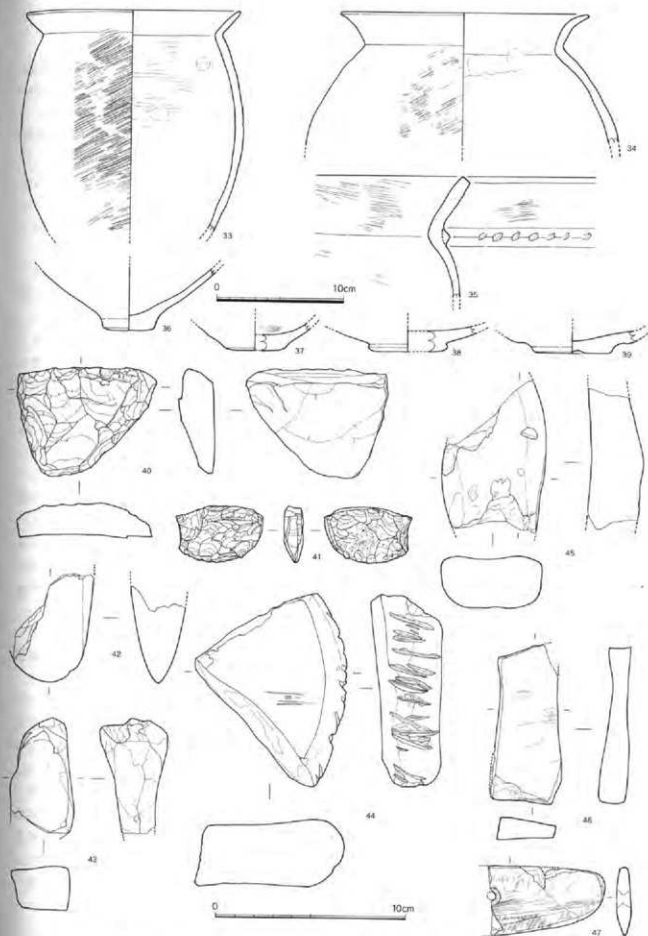


Fig.58 第2面基盤層(灰色土)出土遺物実測図② (1/3、40～47は1/2)

甕 (21・22) 21は口径28.4cm。胎土は0.8cm以下の白色砂粒や赤色粒を含み、外面橙褐色、内面白褐色や淡黄褐色を呈する。体部内面へラケズリだが殆ど磨滅。22は復元口径21.8cm。口縁部に黒斑がある。体部内面はへラケズリ。

甕×甕 (23) 外面に小さな把手が付く。胎土は砂粒を含むが精製され、橙褐色を呈する。口縁部に黒斑がある。

小甕 (24) 復元底径は5.2cm。手握ねで内面には漆のようなものが残る。胎土は0.4cm以下の白色砂粒や赤色粒を含み、橙灰色を呈する。

製塩土器

焼塩甕 (25) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒を含む。内面簡単なヨコナデ、外面指頭圧痕が残る。

埴輪陶器

水注 (26) 耳の部分で、胎土は黒色砂粒を含むが精製されている。外面には淡緑灰色や緑褐色の釉が掛かり、内面は頸部まで釉が掛かり、その下位は回転ナデで露胎である。

長沙窯青磁

水注 (27) 胎土は白色砂粒を少量含み、淡い黄褐色を呈する。内外面回転ナデで体部には釉はみられない。外面に型押文を貼り付け、その一部に淡緑灰色の不透明釉が僅かに残る。

瓦類

軒丸瓦 (28) 複弁で周囲には珠文があり、鋸歯文が巡る。

平瓦 (29) 内面は布目痕が残る、外面は丁寧にへラケズリを行っている。

土製品

土馬 (30) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、青灰色を呈する。焼成は良好で須恵質である。胴部はナデで、脚部はへラケズリで、胴部上部はつまみ出して、背中部分を表現している。

獸脚 (31) 形状から土馬の脚部の可能性があり、土製品に分類したが、色調は淡青灰色で、焼成は須恵質である。外面はへラケズリとナデ、足先の接地面はナデである。

土鏝 (32) 縦4.15cm、径1.9～2.0cm。色調は黒灰色を呈する。胎土は0.1cm以下の白色砂粒や雲母を含む。

古式土師器

甕 (33) 古墳時代の土師器で、復元口径17.0cm。胴部外面は斜め方向の平行叩きで、下半には煤が付着する。内面は磨滅し当て具痕や指頭圧痕が僅かに残る。

弥生土器

甕 (34・35) 34は復元口径19.6cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、白褐色から淡橙褐色を呈する。胴部外面は斜め方向の平行叩きで下半に煤が付着する。35はくびれ部に刻み目突帯を巡らす。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、白褐色から黄褐色を呈する。口縁部は外面が粗いヨコハケ、内面が細かいヨコハケ。胴部は磨滅するが内面はメケ目が僅かに残る。

壺 (36～39) 僅かに丸味のある底部で、36は胎土が0.4cm以下の白色砂粒などを含み、外面淡黄褐色を呈する。37は胎土が0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、外面淡黄褐色を呈する。内面はハケで炭化物が付着する。38は胎土が0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、外面淡黄褐色を呈する。内外面磨滅する。39は底部外面に葉脈痕のようなものが残る。

石製品

磯核石器 (40) 縦5.8cm、横7.5cm、厚さ1.9cm。片面を細かく剥離調整する。安山岩。

スクレイパー (41) 大きさは縦3.0cm、横4.6cm、厚さ1.0cm。表面は小刻みに打ち欠くが、一部白

然をも残る。全体的に風化している。黒曜石製。

磨石片斧 (42) 全面研磨されている。石材は片岩。

砥石 (43～46) 43は砂岩製で4面使用。44は表裏2面が研磨され、側面に刃先を削り込んだような多数のキズが付いている。砂岩製。45は泥岩製で4面使用。46は砂岩製で長辺の4面と短辺の1面が使用されている。部分的に条痕がみられる。

石包丁 (47) 半分ほど欠損し、現存長6.1cm、幅3.7cm、厚さ0.7cm。全面に細かい傷が付く。赤紫灰色の溶結凝灰岩製。

第236-1次調査SX525出土遺物 (Fig.59)

須恵器

壺 (1) 体部屈曲部に三角形の突帯が付く。内外面回転ナデ。

土師器

坏a (2～4) 復元底径6.0～7.6cm。全体的に磨滅し調整不明。

坏c (5) 高台は欠損する。内面が白褐色、外面が淡黄褐色を呈する。内外面とも磨滅する。

甕 (6) 外面には煤が付着する。

灰輪陶器

壺×甕 (7) 胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、淡青灰色や白灰色を呈する。内外面回転ナデで外面に灰緑色の釉を施す。

越州窯系青磁

坏 (8) II類。内面には目跡が残る。内面と外面上半部は施釉され、下半は回転ナデ、底部外面はへラケズリである。釉は光沢のある淡緑灰色である。復元口径15.1cm、器高4.0cm、復元底径6.0cm。

瓦類

平瓦 (10・11) 10は正格子叩きで、文字のような文様が刻まれているが欠損していることもあり、詳細は不明である。叩きが重なっているため不可解な形になっている可能性もある。11は横長の斜め格子叩き。

土製品

獸脚 (9) 0.4cm以下の砂粒を多く含み、暗灰色や淡黄褐色を呈する。焼成は不良。

石製品

石鏝 (12) 復元口径24.2cm。口縁端部外側は欠落が目立つ。内外面は削りで、内面に煤のようなものが付着する。

第236-1次調査茶褐色土出土遺物 (Fig.59)

土師器

坏a (13・14) 13は復元口径14.0cm、14は復元底径9.4cm。全面磨滅し調整不明。

坏c (15) 復元高台径8.6cm。全面磨滅し調整不明。

甕 (16) 胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、色調は淡褐色や白褐色などである。磨滅が目立つが、外面にヨコハケが確認できる。

器台 (17) 脚部径3.3cmほどで、中央の円孔は径1.0cm。外面は縦方向の削りである。

第236-1次調査黒色土出土遺物 (Fig.59)

土師器

坏a (18～22) 復元底径6.4～7.4cm。底部は回転へら切り。

坏c (23・24) 復元高台径は7.0cmと7.6cm。外面底部回転へら切り。

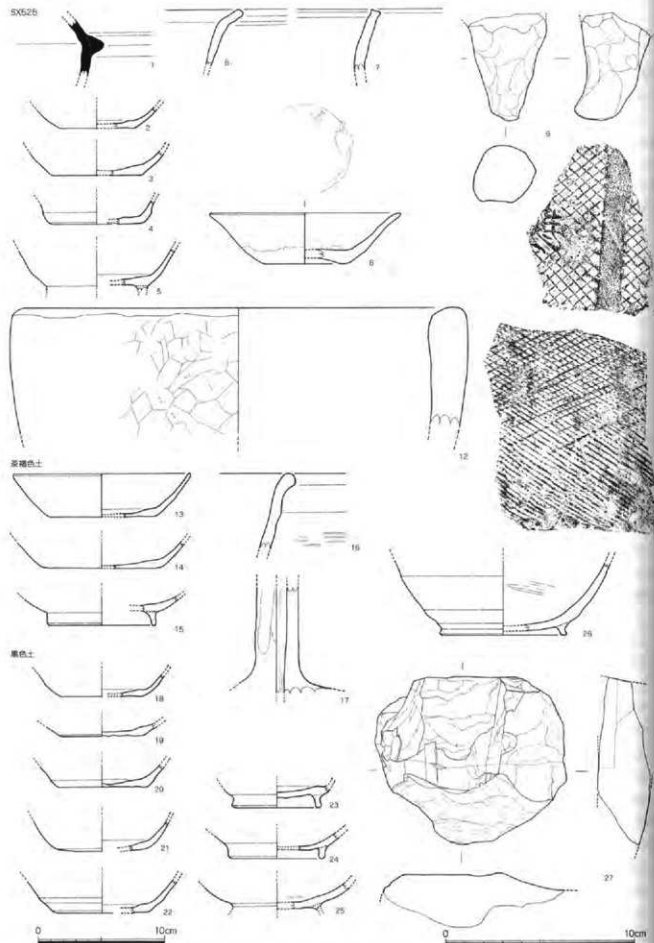


Fig.59 第2面基盤層(SX525・黒色土)出土遺物実測図 (1/3、27は1/2)

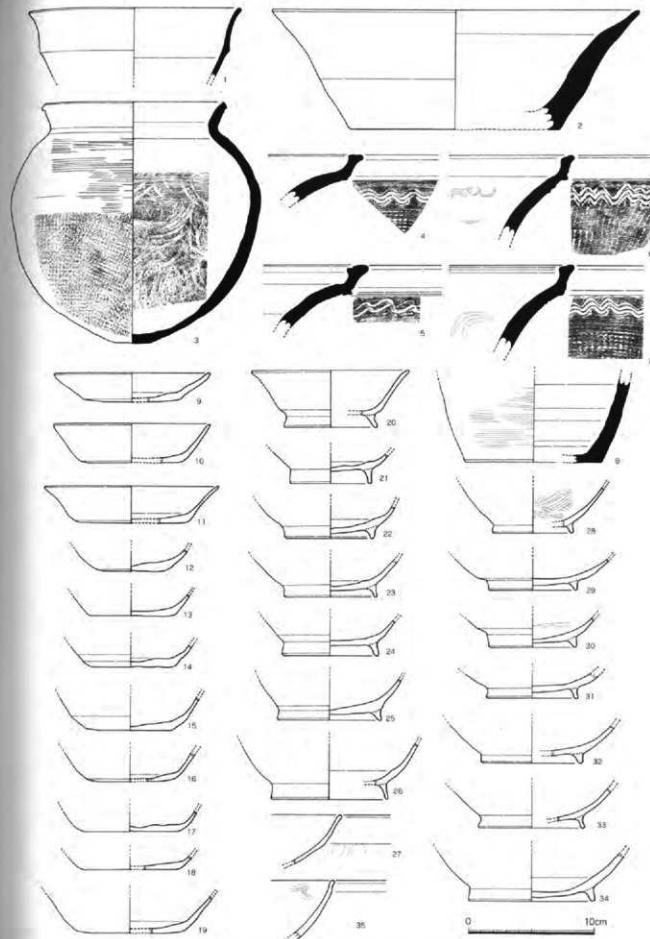


Fig.60 第2面基盤層(黒茶色土)出土遺物実測図① (1/3)

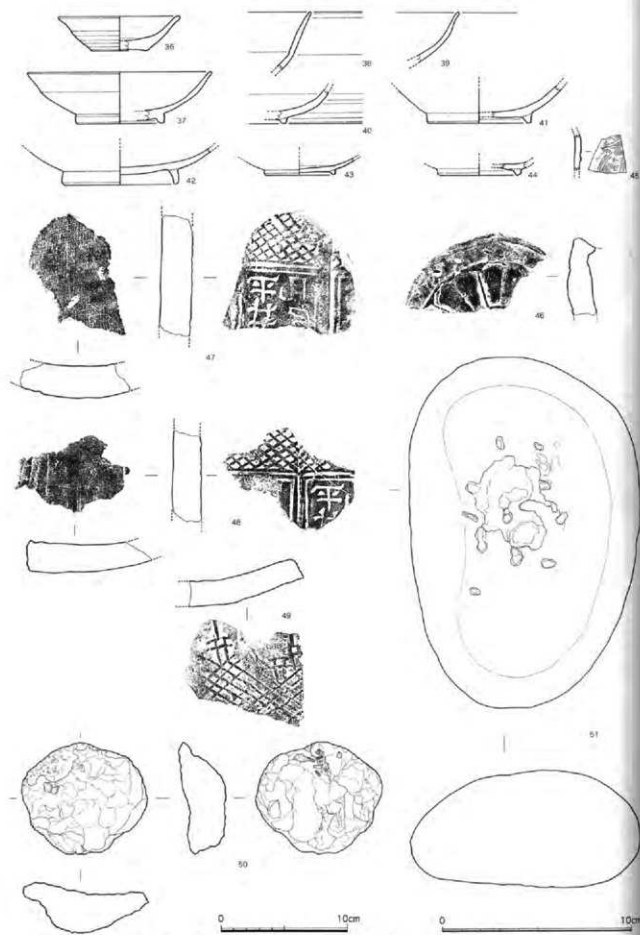


Fig.61 第2面基盤層(黒茶色土)出土遺物実測図② (1/3、51は1/2)

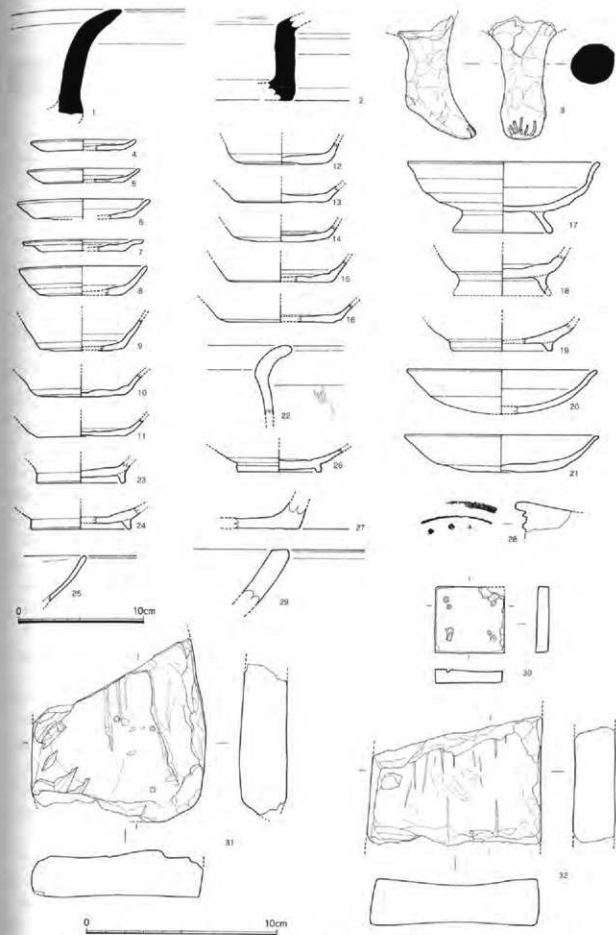


Fig.62 第2面基盤層(淡灰色土)出土遺物実測図 (1/3、29～32は1/2)

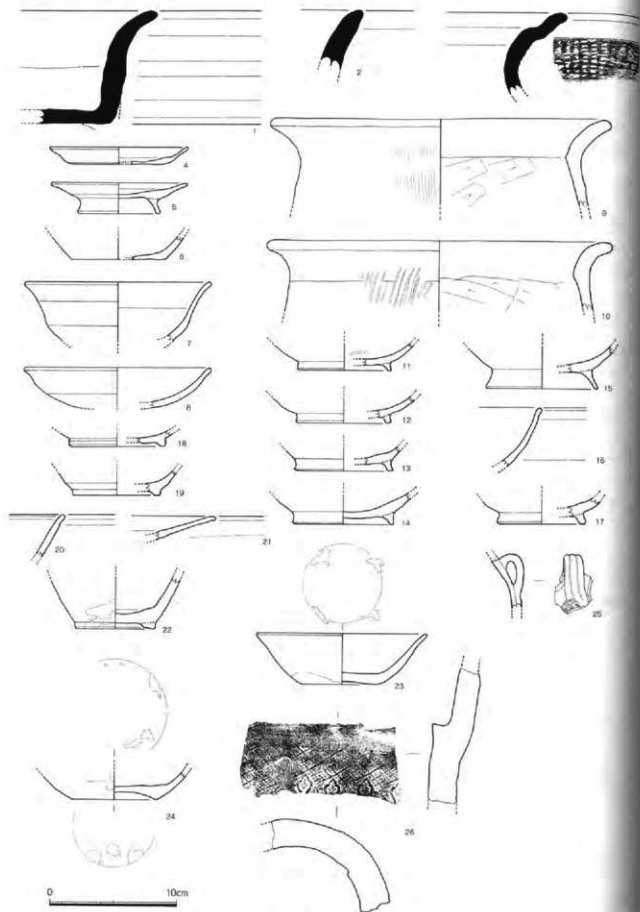


Fig.63 第2面基盤層(茶灰色粘土)出土遺物実測図① (1/3)

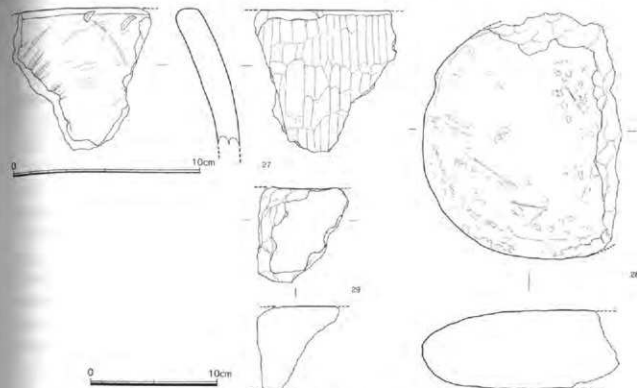


Fig.64 第2面基盤層(茶灰色粘土)出土遺物実測図② (29は1/3、1/2)

黒色土器A類

椀c (25) 全体的に磨滅するが内面に僅かにミガキcが残る。

大椀c (26) 復元高台径10.0cm。胎土は白色砂粒や金雲母などを含み、淡黄褐色を呈する。全体的に磨滅するが内面に僅かにミガキcが残る。

石製品

砥石 (27) 8.9×10.15×2.8cm。表面の剥離が目立つが約2面研磨されている。石材は3片に割れていた。安山岩。

第236-1次調査黒茶色土出土遺物 (Fig.60・61)

須恵器

椀 (1) 椀椀と呼ばれるもので、復元口径16.8cm、0.1cm以下の細砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。

盤 (2) 復元口径29.0cm、器高9.5cm、復元底径16.6cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や黒色粒を多く含み、内面淡灰色、外面灰黄褐色を呈する。外面は回転ナデだが、強いナデで中位はやや凹んでいる。内面不定方向のナデ、底部外面ヘラケズリ。

甕 (3) 復元口径14.6cm、器高19.1cm、復元底径2.4cm。胴部上半にカキ目を施し、下半に叩きを施す。内面同心円の当て具痕があり、上部はその後回転ナデ。

大甕 (4～7) 二重口縁を有するもので、口縁部の下に叩きのあと波状文を巡らす。6・7は内面に当て具痕が残る。色調は5が暗茶褐色で、他は概ね灰褐色である。

甕 (8) 復元底径11.0cm。内面回転ナデで若干平滑である。外面はカキ目のあとヘラケズリを施す。

土師器

坏a (9～19) 復元口径12.3～13.8cm。復元底径5.6～9.0cm。底部はヘラ切りで板状圧痕を残すものもある。

椀c (20～26) 20は復元口径12.4cm、その他は底部付近で、全体的に磨滅が目立ち、21で板状圧痕が、22で回転ヘラ切りが確認できる程度である。

丸底坏a (27) 破片だが、体部中位に指頭圧痕がある。混入の可能性が考えられる。

黒色土器A類

椀c (28~34) 全体的に磨滅が目立ち、28は内面にミガキcが確認できるが、その他は僅かに確認できる程度である。復元高台径6.4~10.0cm。

黒色土器B類

椀 (35) 口縁端部外面に窪み状の沈線が巡る。

緑釉陶器

皿 (36) 復元口径9.6cm、器高2.7cm、復元底径4.6cm。底部外面は糸切りで、内面および外面上半部に緑灰色釉を施す。須恵質。

椀 (37~41) 37は復元口径14.6cm、器高4.05cm、復元高台径7.0cm。高台は削り出し。胎土は青灰色の須恵質で光沢のある暗緑灰色釉を全面に施す。内面底部に不規則に沈線が巡る。38は内面中位で浅い段を持って屈曲する。39は須恵質で、内外面に暗緑灰色釉を厚く施す。40は須恵質で全面に明緑灰色釉を施すが、高台豊付部分によって釉が剥がれている。洛西産。41は復元高台径8.2cm。胎土は微細な砂粒を含むが精製された土質である。明黄緑釉がうす残り、内外面の所々に黄色斑点がみられる。

灰釉陶器

皿 (42・43) 42は復元高台径9.2cm。胎土が0.1cm以下の細砂粒を含む白灰色で、内面上半と外面上半に淡い緑灰色釉を施すが、かなり剥がれている。また内面には重ね焼き痕跡も残す。H-72・虎渓山口窯様式とみられる。

椀×皿 (44) 復元高台径9.6cm。胎土は灰白色を呈し、現存範囲には釉は確認できない。

長沙窯系青磁

水注 (45) 胎土は淡灰褐色で、葡萄文のような型押しで、褐色釉を施す。

瓦類

軒平瓦 (46) 瓦当部分が取れたもので、珠文は殆ど欠損する。複弁で中房は不明。

平瓦 (47~49) 47・48は二重の方形物の中に「平井瓦屋」の陰刻左字がある。細かい格子印。49は「平井」の文字銘がある。

金属製品

鉈澤 (50) 大きさ8.9×9.85cm、厚さ最大4.0cm。いわゆる椀型澤で、表面は暗赤褐色の錆色で部分的に木炭が付いている。

叩き石 (51) 縦18.5cm、横12.3cm、厚さ6.2cm。両面中央付近に敲打痕が残る。

第236-1次調査淡灰色土出土遺物 (Fig.62)

須恵器

盤 (1・2) 1は胎土が0.4cm以下の白色砂粒や黒色砂粒と赤色粒を少量含み、灰色を呈する。口縁部はヨコナデ、内外面下半はヨコナデとナメナデである。底部は接合面で剥離している。2は中位で屈曲し外反する。胎土は0.6cm以下の白色砂粒を含み、白灰色を呈する。口縁部内面にはカキ目のような痕跡を残す。その他内外面は回転ナデ。

散脚 (3) 盤のようなものから剥離した状態で、全面ナデ調整され、先端は溝が彫られ指先を表現している。胎土は0.4cm以下の白色砂粒や黒色砂粒を少量含み、色調は淡青灰色を呈する。

土師器

小皿a (4~6) 復元口径8.4~10.6cm。内外面殆ど磨滅し調整不明瞭。

小皿a2 (7) 復元口径9.7cm。口縁端部の沈線は殆ど磨滅し、平坦になっている。

環a (8~16) 復元底径6.4~9.4cm。底部回転ヘラ切り。

椀c (17~19) 17・18は高い高台で、17は口縁部を若干外反させる。

丸底環a (20・21) 復元口径15.0cmと15.3cm。内外面は殆ど磨滅する。

甗 (22) 胎土は白色砂粒などを含み橙褐色や灰褐色を呈する。磨滅が目立つが体部外面はタテハケ。

黒色土器A類

椀c (23・24) 復元底径7.1cmと8.0cm。磨滅するが、内面ミガキcが残る。

椀 (25) 磨滅するが、内面に僅かにミガキcが残る。

緑釉陶器

皿 (26) 高台は削り出しで、復元高台径6.6cm。胎土は精製され、青灰色を呈する。釉は緑灰色で光沢があり、全面に施軸する。内面底部には浅い沈線が巡る。洛西産。

灰釉陶器

壺 (27) 胎土はやや暗い灰色で、底部外面は回転ヘラ切りとみられ軸はない。釉は緑灰色で、内面は回転ナデのあと薄く施軸、外面も厚く施軸する。

瓦類

軒丸瓦 (28) 珠文部分。

石製品

石鍋 (29) 口縁端部を平坦に作り、内外面に横方向の擦痕がある。滑石製。

石帯蓋方 (30) 3.5cm×3.65cm、厚さ0.7cm。裏面には縦通しの穴がある。蛇紋岩製で質が悪く非常に汚い状態である。

砥石 (31・32) 31は上下欠損するが4面研磨されている。表面にはキズも見られる。32は上下欠損するが4面研磨されている。表面には条痕も見られる。

第236-1次調査茶灰色粘土出土遺物 (Fig.63・64)

須恵器

御付盤 (1) 底部端に脚部が剥落した痕跡を残す。胎土は白色砂粒を多く含み、灰色から暗灰色を呈する。内面下半と外面底部はナデ、その他はヨコナデ。

盤 (2) 口縁端部で、胎土は白色砂粒を多く含み、灰色から暗灰色を呈する。内面磨滅、外面ヨコナデ。

甗 (3) 二重口縁で、頸部外面は叩きでそれ以外内外面とも回転ナデ。

土師器

小皿a (4) 復元口径11.0cm。磨滅し調整不明。

小皿c (5) 復元口径10.8cm。

環a (6) 復元底径7.4cm。磨滅し調整不明。

椀 (7) 復元口径14.8cm。磨滅し調整不明。

丸底環a (8) 復元口径14.8cm。磨滅し調整不明。

甗 (9・10) 9は復元口径27.0cm。胎土は粗く、茶灰色や茶褐色を呈する。外面タテハケ、内面ヘラケズリ。10は復元口径27.3cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を少量含み、橙褐色や茶褐色を呈する。外面タテハケ、内面ヘラケズリ。

黒色土器A類

椀 (11~15) 11~14は復元高台径7.4~8.0cm。15は高い高台で、復元高台径8.8cm。全体的に磨滅し、内面の磨きは僅かに確認できる程度である。

黒色土器B類

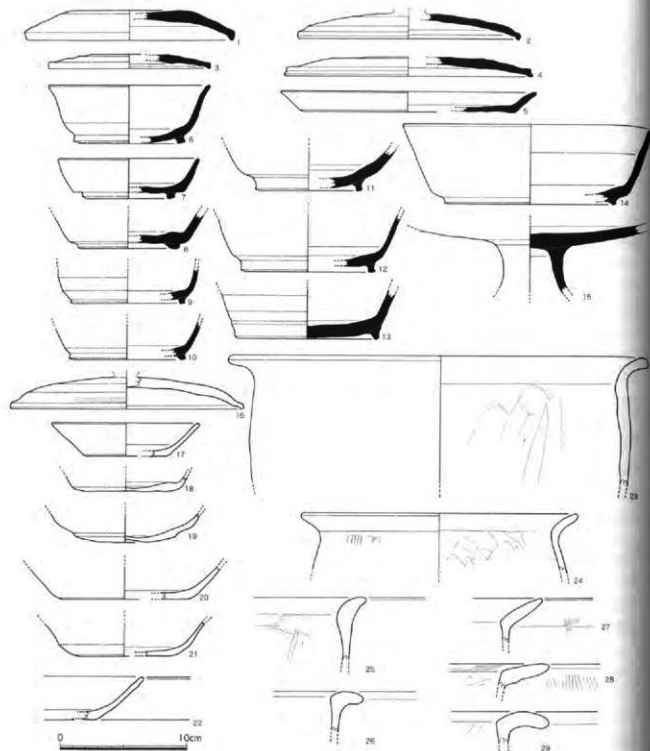


Fig.65 第2面基盤層(暗灰色粘土)出土遺物実測図① (1/3)

碗 (16) 内外面磨滅する。

碗c (17) 復元高台径7.0cm。内面ミガキcを施す。

緑釉陶器

碗×皿 (18) 復元高台径7.6cm。釉は淡黄緑色で光沢があり、内外面に薄く施釉する。高台と外面底部は露胎。須恵質。洛西産。

碗 (19・20) 19は高台削り出でて、復元高台径6.9cm。釉は暗緑色で光沢がある。内外面とも施釉し、

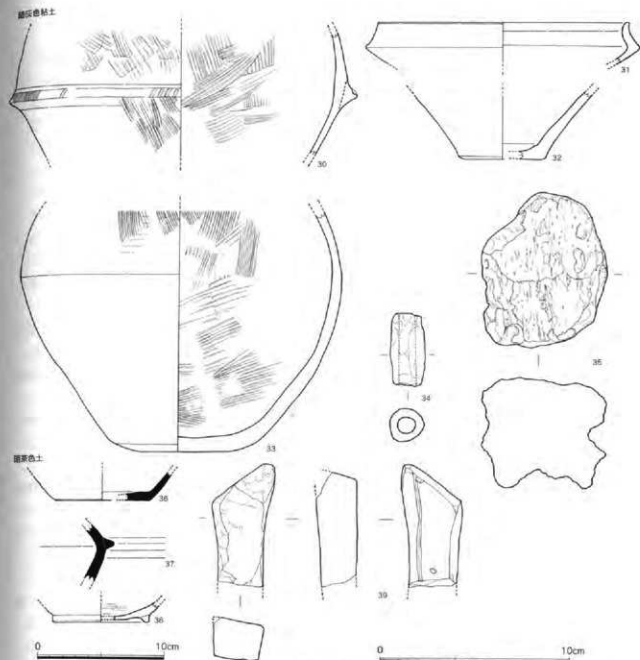


Fig.66 第2面基盤層(暗灰色粘土②、明茶色土)出土遺物実測図① (1/3、35・39は1/2)

高台部は軸を拭き取っている。須恵質。洛西産。20は胎土が精製され、色調は灰色で、釉は茶色味を帯びた緑色である。須恵質。

反種陶器

段皿 (21) 僅かに段が確認できる。胎土は明灰黄色で、明灰緑色の釉を施す。外面回転ヘラケズリでそれ以外は全面施釉する。

甑 (22) 復元高台径6.4cm。胎土はやや粗い明灰黄色で、釉は緑灰色で光沢がある。内面底部には釉が溜まっている。外面底部は回転ナデで、体部外面は釉が溶解できずに部分的に溜まっている。

越州窯系青磁

坏 (23・24) II類。底部は上げ底状態である。胎土は黒色粒を多く含み、緑灰色や茶色の釉を薄めに施す。内面に目跡があり、外面底部端にも目跡が残りが削られている。外面下半と底部は露胎である。23は復元口径13.4cm、器高4.0cm、底径5.9cm。24は底径6.6cm。

長沙窯系青磁

水注(25) 耳部分で、胎土は精製され、黄灰色を呈する。釉は淡い黄白色でその上に剝釉を掛けている。一部剥落する。内面回転ナデで踏胎である。

瓦類

丸瓦(26) 外面は小さい格子叩きとナデ調整。内面に布目痕が残る。

石製品

石鍋(27) 内面はケズリ、外面は横方向に細かく削る。

磨石(28) 欠損して、現存する大きさは13.2×10.5cm、厚さ4.2cmの円形をなす。礫岩。

土製品

埴(29) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、焼成は不良である。

第236-1次調査暗灰色粘土出土遺物 (Fig.65・66)

須恵器

蓋a3(1) 外面上部はヘラ切り未調整、外面中位の屈曲部は回転ヘラケズリ。内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。復元口径16.2cm。

蓋c3(2) ツマミは欠落するが、ツマミ接合のための回転ナデが残る。外面は回転ナデ、内面上半部はナデ。復元口径17.4cm。

蓋3(3・4) 3は小型で復元口径12.6cm。外面上半部は回転ヘラケズリ。4は外面上半部が粗いナデで、頂部はヘラ切り未調整。復元口径19.6cm。

皿a(5) 底部外面はヘラ切り、内面はナデ、その他は回転ナデである。復元口径20.2cm。

杯c(6~14) 復元高台径7.2~13.6cmで、10や14のように低い貧弱な高台を貼付する。内面底部は不定方向のナデ、外面底部はヘラ切り未調整、その他は回転ナデ。色調は靨わ淡灰色を呈する。

高杯(15) 杯部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ。脚部は内外面とも回転ナデ。焼成・還元はやや不良で淡灰白色を呈する。

土師器

蓋c(16) ツマミは欠損するが、接合の回転ナデが残る。外面ヘラケズリのあとミガキaを施す。復元口径18.4cm。

杯a(17~22) 残存しているものは底部がヘラ切り、底部内面はナデである。

甕(23~29) 甕の胎土は白色砂粒や金雲母を多く含む。焼成はやや不良である。体部内面ヘラケズリ。口縁端部ヨコナデである。23は復元口径33.6cm、24は復元口径21.8cm、淡茶色を呈する。外面ハケで、くびれ部分には煤が付着する。25は口縁部を肥厚させる。27はくびれ部にハケ目が確認できる。色調は暗灰色を呈する。28は口縁部内面がヨコハケ、外面タテハケ。29の色調は灰白色を呈する。

弥生土器

甕(30・31) 30は胴部中位に刻み目突帯を遣らす。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、灰黒色や灰白色を呈する。外面ハケ、下半にはやや煤が付着する。内面は細かいハケ調整。31は複合口縁で、胎土は粗く、灰白色を呈する。内外面ヨコナデ。

甕(32・33) 32は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。内外面は磨減し調整不明。黒斑がある。33は胎土がやや粗く0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。底部は平坦だが、体部との境は丸い。外面は磨減するが上部に細かいタテハケが残る。内面は上半部が細かいハケ、下半が粗いハケ調整である。色調は淡茶灰色である。

土製品

土鍾(34) 縦5.75cm、径2.7×2.6cm、0.1cm以下の白色砂粒を僅かに含む。須恵質。

石製品

軽石(35) 大きさは8.2×6.15×5.8cm。

第236-1次調査明茶色土出土遺物 (Fig.66)

須恵器

杯c(36) 底部ヘラ切り未調整。その他は回転ナデ。

甕e(37) 胴部の突帯部分。内外面とも回転ナデで、外面には灰かぶりや自然釉が掛かる。

黒色土器A類

椀c(38) 復元高台径7.6cm、内面ミガキcである。

石製品

砥石(39) 大きさは6.5×3.0×2.2cmの方形。4面で研磨が見られ、一部に刃物痕が残る。

○第3調査面

掘立柱建物

236-1SB040h出土遺物 (Fig.67)

須恵器

蓋1(1) 内外面回転ナデ調整。

236-1SB040k出土遺物 (Fig.67)

木製品

柱材(2) 掘り方に遺存していた柱痕の底部である。全体的に腐食し、三角錐の形状をなしている。

下端には腐食しているが、方形孔が穿たれている。大きさは高さ40.5cm、径21.9×17.2cm。

236-1SB420a黄色土出土遺物 (Fig.67)

須恵器

杯c(3) 端部は僅かに揃まみ出す。上半部がナデ、その他内外面は回転ナデ。

土師器

蓋3(4) 外面上半部がヘラケズリ、その他は回転ナデ。

236-1SB420b茶灰色土出土遺物 (Fig.67)

須恵器

蓋3(5) 内外面回転ナデ。

大椀c(6) 復元高台径12.0cm。内面底部がやや平滑になっている。

236-1SB480c出土遺物 (Fig.67)

木製品

柱材(7) 掘り方に遺存していた柱痕の底部である。腐食が目立ち、内部は空洞になっている部分も多い。また、表面に残る部分は殆どないが、僅かに削ったような痕跡が下端に残る。そして、下端には腐食が目立つが方形の削り込みが確認できる。大きさは高さ32.7cm、径22.5×18.5cm。

236-1SB480f出土遺物 (Fig.67)

木製品

柱材(8) 掘り方に遺存していた柱痕の底部で、今回の調査で最も保存が良好であった建築部材である。中心部は空洞化している。大きさは高さ59.2cm、径22.0×19.5cm。

236-1SB480h柱痕出土遺物 (Fig.67)

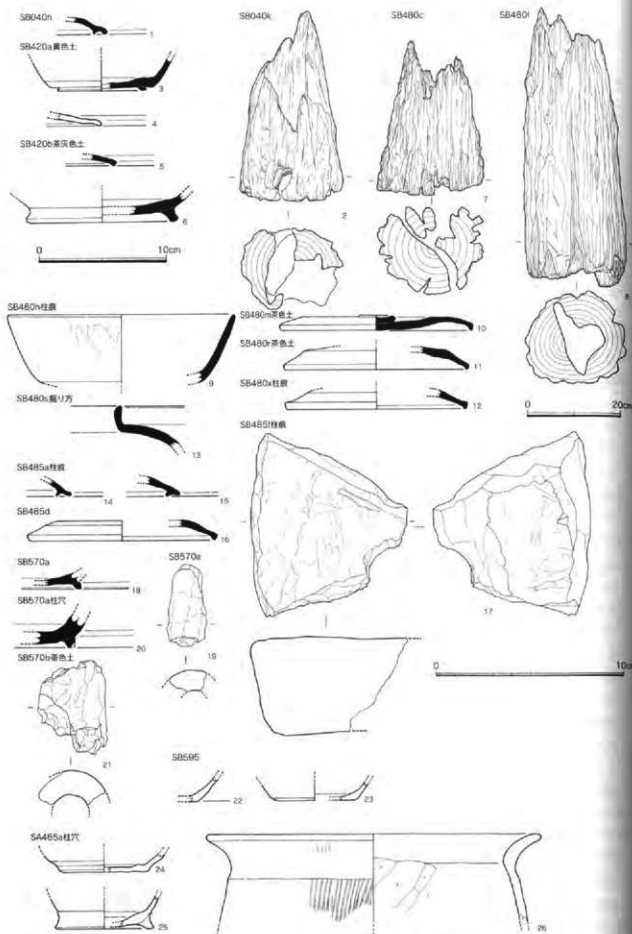


Fig.67 第3調査面掘立柱建物・柵列出土遺物実測図 (1/3, 17は1/2, 2・7・8は1/8)

須恵器

大碗 (9) 復元口径18.0cm。内面全面に濃茶色の漆がベトリ付着する。口縁部外面にも漆が垂れている。

236-1SB480m茶色土出土遺物 (Fig.67)

須恵器

蓋c3 (10) 復元口径15.2cm。外面中位部分が回転ヘラケズリ、その両側は回転ナデ。内面半分が不定方向のナデで、墨が部分的に付着し、硯に転用されたものと考えられる。

236-1SB480r茶色土出土遺物 (Fig.67)

蓋3 (11) 復元口径14.6cm。外面上半部が回転ヘラケズリ。内面一部不定方向のナデ。内面がやや研磨されている。転用硯の可能性はある。

236-1SB480x柱状出土遺物 (Fig.67)

蓋3 (12) 復元口径14.4cm。外面上半部が回転ヘラケズリ。

236-1SB480s振り方出土遺物 (Fig.67)

須恵器

短頸壺 (13) 内外面とも回転ナデで、口縁端部を丸く仕上げる。

236-1SB485a柱状出土遺物 (Fig.67)

須恵器

蓋1 (14・15) 現存範囲では内外面とも回転ナデ。15は還元悪く、淡茶灰色を呈する。

236-1SB485d出土遺物 (Fig.67)

蓋3 (16) 復元口径15.0cm。上半部が回転ヘラケズリで、その他内外面回転ナデ。

236-1SB485f柱状出土遺物 (Fig.67)

石製品

砥石 (17) 2面が研磨され、一部敲打痕もみられる。大きさは9.7×8.3×5.2cm。砂岩。

236-1SB570a出土遺物 (Fig.67)

須恵器

坏c (18) 方形の高台を貼付し、底部内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ切り。

土製品

襷羽口 (19) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒や雲母を含み、外面は熱によって青灰色や白褐色などに変色する。厚さは1.7cmほどである。

236-1SB570a柱状出土遺物 (Fig.67)

須恵器

壺 (20) 体部外面ヘラケズリ、内面回転ナデ。焼成は良好で青灰色を呈する。

236-1SB570b茶色土出土遺物 (Fig.67)

土製品

襷羽口 (21) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒や雲母を含み、外面は熱によって橙褐色や白褐色などに変色する。厚さは1.9cmほど。

236-1SB595出土遺物 (Fig.67)

土師器

坏a (22・23) 2点とも内外面磨減し調整不明。23は復元高台径7.0cm。S-996より出土。

楕円

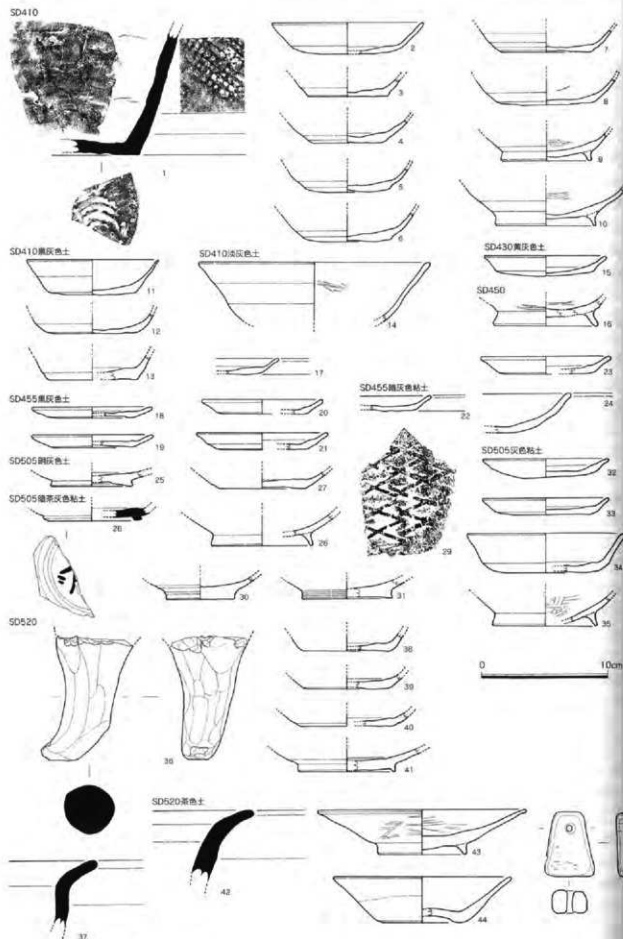


Fig.68 SD410・430・455・505・520出土遺物実測図(1/3)

236-1SA465a柱穴出土遺物 (Fig.67)

土師器

环a (24) 復元底径7.2cm。底部回転ヘラ切り、内面底部不定方向のナデ。色調は灰白色を呈する。
 椀c (25) 高台を体部下半に貼付する。復元高台径7.8cm。内面底部不定方向のナデ。
 甕 (26) 復元口径26.4cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒と金雲母を多く含む。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリである。

溝

236-1SD410出土遺物 (Fig.68)

須恵器

壺 (1) 焼成・還元良好で、内面黒灰色、外面明灰色を呈する。体部下端は回転ヘラケズリ、その上は叩き、内面はナデである。底部外面には同心円の当て具痕があり、一部自然釉が掛かる。

土師器

环a (2~8) 復元底径6.4~8.0cm。底部回転ヘラ切り。2は復元口径12.0cm。色調は全体的に黄白色を呈する。

黒色土器A類

椀c (9・10) 復元高台径7.2cmと8.0cm。内面にミガキcが僅かに確認できる。

236-1SD410黒灰色土出土遺物 (Fig.68)

土師器

环a (11~13) 復元底径6.8~7.2cm。底部回転ヘラ切り、内面底部不定方向のナデ。色調は12が淡茶灰色で他は黄白色を呈する。

236-1SD410淡灰色土出土遺物 (Fig.68)

黒色土器A類

椀c (14) 復元高台径18.4cm。磨減目立つが内面ミガキc、外面ヨコナデ。

236-1SD430黄灰色土出土遺物 (Fig.68)

土師器

小皿a (15) 口径9.7cm。外面底部回転ヘラ切り、内面底部ナデ。

236-1SD450出土遺物 (Fig.68)

黒色土器B類

椀c (16) 復元高台径8.3cm。内外面に僅かにミガキcが確認できる。

236-1SD455黒灰色土出土遺物 (Fig.68)

土師器

小皿a (17~21) 復元口径9.4~10.4cm。底部回転ヘラ切り。

236-1SD455暗灰色粘土出土遺物 (Fig.68)

土師器

小皿a (22・23) 22は磨減しているが、底部に板状圧痕が残る。23は復元口径10.2cm、外面底部ナデ調整する。

丸底杯 (24) 外面下半回転ヘラ切り痕残す。

236-1SD505明灰色土出土遺物 (Fig.68)

緑釉陶器

皿 (25) 復元底径6.4cm、高台削り出して、内面底部と高台臺付に浅い沈線が走る。内外面にやや光

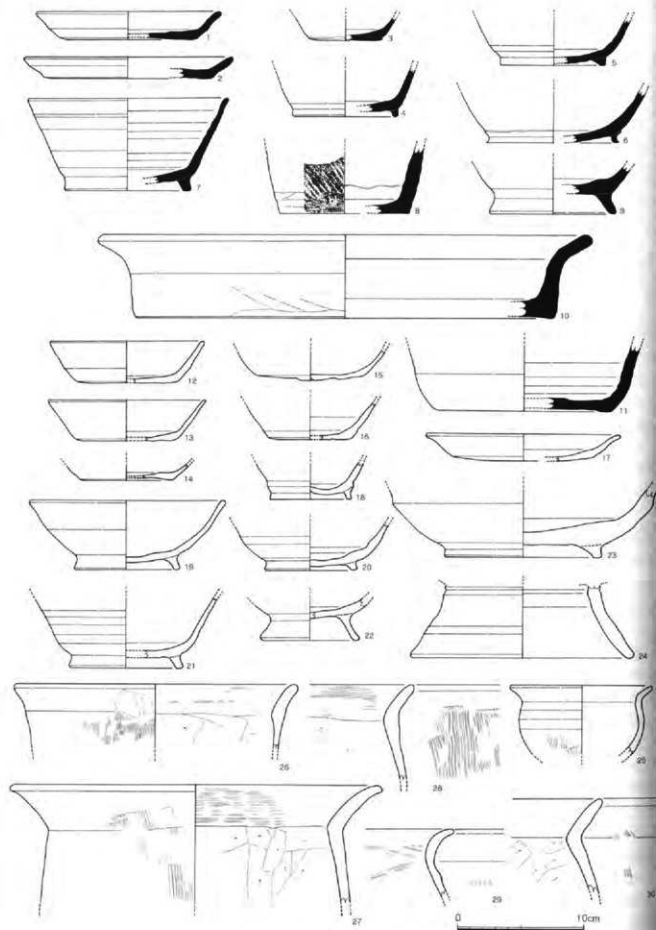


Fig.69 SD515出土遺物実測図① (1/3)

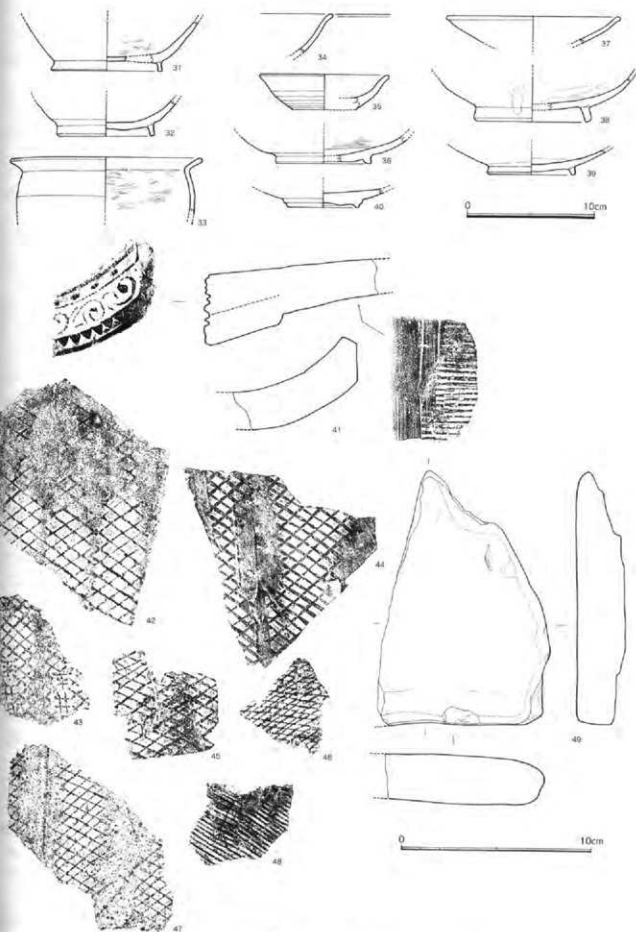


Fig.70 SD515出土遺物実測図② (1/3, 49は1/2)

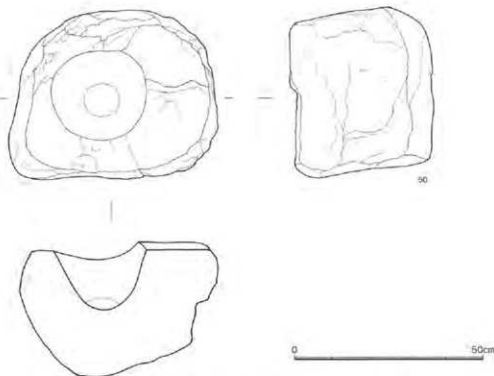


Fig.71 SD515出土遺物実測図③ (1/10)

沢のある緑灰色釉を薄く施軸する。胎土は淡灰色で須恵質。京都産。

236-1SD505暗茶灰色粘土出土遺物 (Fig.68)

須恵器

坏c (26) 復元高台径7.8cm。底部外面に墨書があるが、欠損し文字は読めない。

土師器

小皿a (27) 復元底径7.0cm。磨滅目立つが底部に板状圧痕を残す。

椀c (28) 復元高台径8.0cm。磨滅で調整不明。

瓦類

平瓦 (29) 横長の格子甲き。

緑釉陶器

椀×皿 (30・31)

2点とも円盤高台で、30は須恵質で、回転糸切りの削り出し高台で、底径5.4cm。外底以外に光沢のある濃い緑色釉をきれいに施す。31は高台削り出して、復元底径7.2cm。須恵質だが胎土は茶褐色をなす。全面に薄い光沢のある透明釉を施す。

236-1SD505灰色粘土出土遺物 (Fig.68)

土師器

小皿a (32・33) 復元口径10.0cm。底部回転ヘラ切り。

坏a (34) 復元口径12.4cm。底部回転ヘラ切り。

黒色土器A類

椀c (35) 復元高台径8.3cm。内面ミガキc。

236-1SD515出土遺物 (Fig.69～71)

須恵器

皿a (1・2) 1は底部ヘラ切り後未調整。その他は回転ナデ。2は底部に一部板状圧痕が残る。内面底

部ナデ。焼成はやや不良で白灰色を呈する。

小坏a (3) 底部外面回転ヘラ切り、内面不定方向のナデ。色調は青灰色を呈する。

坏c (4～6) 復元高台径8.4～10.4cm。5は体部下半回転ヘラケズリ。6は細い高台を貼付する。内面底部ナデ。外面底部回転ヘラ切り。

大椀c (7) 内面不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は淡青灰色を呈する。

壺 (8・9) 8は胎土が白色砂粒や黒色粒を含み、白灰色～青灰色を呈する。外面下端が回転ヘラケズリ、その上は平行甲き。内面はヨコナデ。復元底径10.2cm。9は復元高台径10.0cm。内外面とも回転ナデ。

盤 (10) 復元口径39.0cm。器高6.6cm。復元底径33.0cm。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。外面底部は不定方向のナデ。外面下端がヘラケズリ、その上が斜め方向の強いナデ、その他はヨコナデである。

鉢b (11) 復元底径14.0cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、淡青灰色を呈する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面底部はナデ、その他は回転ナデ。

土師器

坏a (12～16) 復元底径6.6～8.5cm。底部回転ヘラ切り。12は復元口径12.2cm。内面と外面底部に漆が薄く付着していて、口縁部内面には漆を取る際に削ったような痕跡を残す。13は復元口径12.4cm。色調は全体的に黄白色を呈する。

皿a (17) 復元口径13.4cm。底部は歪み、磨滅も目立つ。

坏c (18) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み粗い。内面には明褐色に塗られているが、かなり剥がれている。復元高台径6.4cm。

椀 (19) 復元口径15.5cm。内外面磨滅し調整不明。

椀c (20～22) 22は高い高台を貼付する。復元高台径7.8cm。

鉢 (23) 復元高台径12.4cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を含み、淡い橙白色を呈する。外面中位で屈曲する。全体的に磨滅し調整不明。

脚付鉢 (24) 5.7cm程の脚部で、復元高台径17.6cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や赤色粒を含み、白褐色や淡黄褐色を呈する。

小椀 (25) 復元口径11.4cm。磨滅が著しいが体部下半にタテハケが確認でき、その他は回転ナデ。胎土は多くの砂粒を含み、外面は黄褐色～灰褐色を呈する。

壺 (26～30) 概ね口縁部内面ヨコハケ、体部内面ヘラケズリ、外面はタテハケを施す。椀褐色を呈する。26は復元口径22.4cm。口縁部外面に炭化物が付着する。27は復元口径29.4cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、口縁部内面はヨコハケのあとナデを行う。

黒色土器A類

椀c (31・32) 31は復元高台径8.8cmで、底部に漆が残る。外面の色調は椀灰色を呈する。32は復元高台径7.7cmで、外面底部に板状圧痕が残る。外面の色調は黄灰色を呈する。

壺 (33) 復元口径15.2cm。内面ミガキcで炭化物が僅かに付着している。外面は磨滅する。外面の色調は橙色や淡茶色などを呈する。

緑釉陶器

椀 (34～36) 34は胎土が淡い青灰色の須恵質で、全面に暗緑灰色の釉を掛ける。35は復元口径10.2cm。器高2.8cm。復元底径5.1cm。胎土は須恵質で、その他は回転ナデのあと光沢のある灰緑色釉を全面施軸。しかし、外面底部は露胎である。36は高台削り出して、復元高台径7.6cm。胎土は淡灰色で精製され、全面光沢のある淡緑灰色釉を施し、内面はミガキの後施軸する。須恵質。

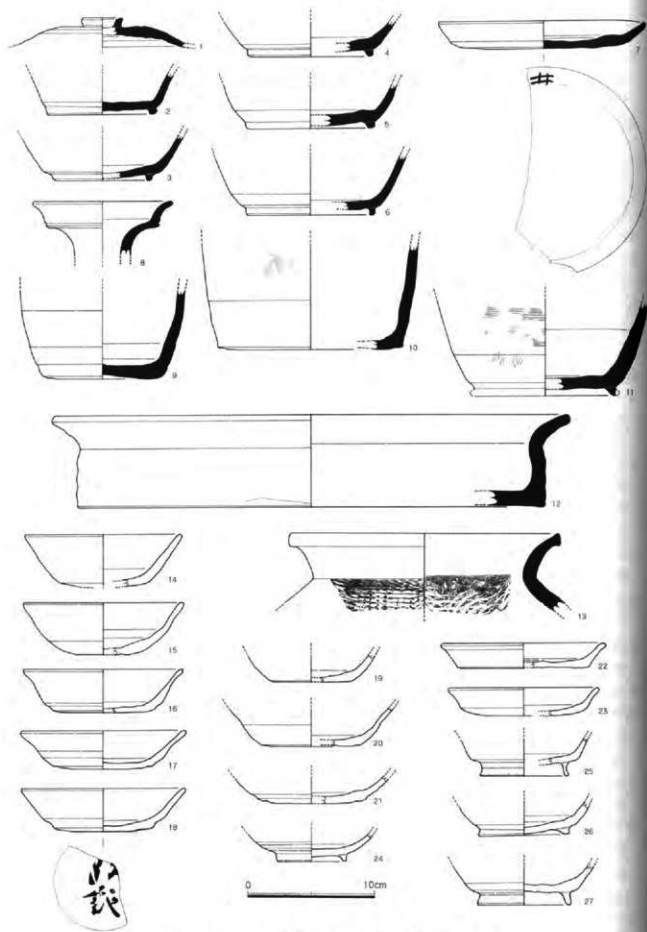


Fig.72 SD515茶色土出土遺物実測図① (1/3)

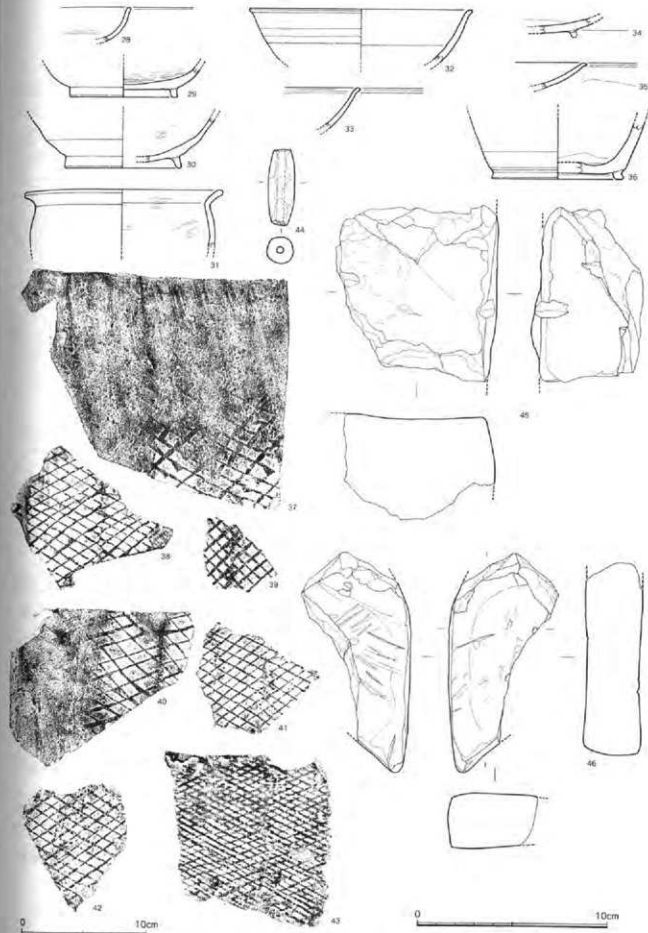


Fig.73 SD515茶色土出土遺物実測図② (1/3、45・46は1/2)

灰釉陶器

皿 (37) 復元口径13.8cm。胎土は白灰色を呈し、釉は淡灰緑色で、回転ナデのあと施軸される。外面は薄く透明、内面はやや緑色が濃い。

椀 (38・39) 38は復元高台径9.3cm。胎土は白灰色を呈し、釉は淡灰緑色で、内面は回転ナデのあと部分的に施軸される。外面も部分的に施軸される。H.72×虎渓山1窯様式。39は復元高台径7.0cm。釉は淡緑灰色で内外面とも中位まで薄く施軸する。内面底部は平滑である。

越州窯系青磁

椀 (40) 底部は削り出して、復元高台径5.6cm。高台の形状が2段になっている。釉は淡い緑褐色で、高台盤付以外全面施軸。1類。

瓦類

軒平瓦 (41) 均整唐草文で、瓦当の上下はヘラケズリで、凹面はヘラケズリの後ナデ。凸面は平行叩きで、一部にぼんやり赤色顔料が残る。凹面は布目痕。

丸瓦 (42・43) 格子叩きで、43は「平井」の文字瓦。

平瓦 (44～48) 44～47は斜格子叩き。46はやや小さい斜格子叩き。48は平行叩き。

石製品

砥石 (49) 平らな砂岩製で、使用面は3面である。残存長13.5×9.1cm、厚さ2.7cm。

礎石 (50) 検出時は穴を下にした状態で出土した。大きさは55.0×45.0cm、厚さ34.0cm。中央に径23.5～24.5cm、深さ15cmの穴が彫られている。表面は平坦であるが人為的なものかの判別は難しい。この石の用途は難しいが、軸受け部分の礎石である可能性が考えられる。

236-1SD515茶色土出土遺物 (Fig.72・73)

須恵器

蓋b (1) 外面頂部は回転ヘラケズリ、内面回転ナデのあと一部不定方向のナデ、その他は回転ナデ。ツマミ径3.2cmで、端部に段がある。色調は淡灰白色を呈する。

坏c (2～6) 焼成は良好で、灰色または青灰色を呈する。内面底部は不定方向のナデ。2は外面底部ヘラ切り未調整、その他は回転ナデ。5は体部外面ヘラケズリ、僅かに自然軸がみられる。6は内面に塗のような付着物がある。

皿a (7) 復元口径16.6cmで、底部回転ヘラ切り未調整。体部外面に「井」の墨書が書かれている。色調は淡灰色を呈する。

壺 (8～11) 8は複合口縁部分で、復元口径11.0cm。屈曲部は明瞭に稜を作り出している。内外面とも回転ナデで赤褐色や紫灰色を呈する。9は復元底径9.4cm、内面回転ナデ、外面下端が回転ヘラケズリ。底部外面ヘラ切り後ナデ。10は復元底径14.6cm、内面粗いナデ、外面は叩きの後ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ。11は先端を欠損するが、外開きの低い高台を貼付する。内面回転ナデ、外面叩きのあとナデ。外面下半は回転ヘラケズリ、底部外面は回転ヘラ切りのあと粗いナデ。復元高台径約11.8cm。

盤 (12) 復元口径40.8cm、器高7.3cm、復元底径36.8cm。外面下端は回転ヘラケズリ、底部外面は不定方向のナデ、その他内外面回転ナデ。口縁部は大きく外反させる。

鉢 (13) 復元口径21.4cm。頸部外面は叩きの後回転ナデ、体部外面は格子叩き、同心円当て具痕を残す。

土師器

坏a (14～21) 復元口径12.4～13.0cm。底部回転ヘラ切り。14・17・18は内面底部が不定方向のナデ。15・17は内面底部回転ナデで、一部不定方向のナデ。16は回転ナデ。色調は全体的に黄白色だが、14

SD540

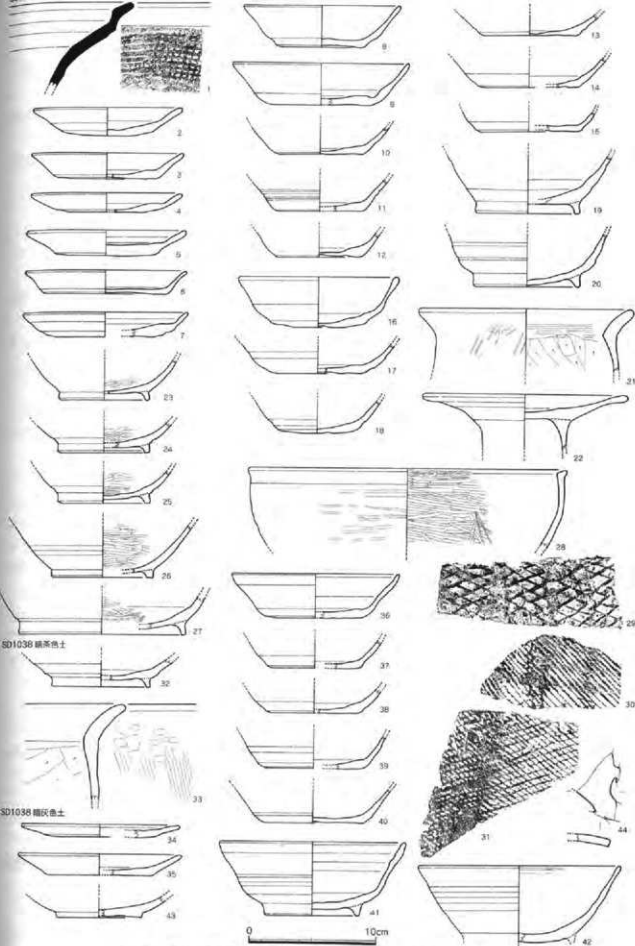


Fig.74 SD540・1038出土遺物実測図 (1/3)

が橙褐色、15・17・20が若干黄色味や橙色を帯びている。18は底部外面に墨書があるが全体的に薄く、途切れている部分もあり、その内容は不明である。

皿a (22・23) 復元口径12.0cm。22は外面底部回転ヘラケズリ後ナデ。23は外面底部回転ヘラ切り、底部内面は不定方向のナデ。

碗c (24～27) 復元高台径5.5～7.4cm。色調は黄白色で14のみ褐色である。25は細く高い高台を貼付する。26はやや歪んでいる。

黒色土器A類

碗 (28) 磨滅するが底部内面付近にミガキが残る。

碗c (29) 高台径8.4cm。底部外面には板状圧痕が残る。内面ミガキc。外面の色調は橙黄色を呈する。黒色土器B類

碗c (30) 復元高台径9.2cm。内面には僅かにミガキcが残る。外面は茶灰色や暗褐色を呈する。黒色土器B類

甕 (31) 復元口径15.8cm。磨滅しているが、僅かに内面にミガキが確認できる。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、焼成はやや不良で、外面橙褐色を呈する。

緑釉陶器

碗 (32・33) 32は復元口径17.6cm。胎土は淡灰色で、土師質である。釉は淡い黄緑色で、内外面に施釉するが、かなり剥げ落ちている。また、内外面とも黄色の斑点がある。33は全面に淡灰緑色の釉を薄く掛ける。須恵質。

灰釉陶器

皿 (34) 内面に薄く淡灰緑色釉が薄く掛かる。外面は露胎で、回転ナデ。

碗 (35) 口縁端部を外に屈曲させる。胎土は白灰色で精製され、釉は淡緑色で内面と外面上半部に薄く施釉する。

壺 (36) 復元高台径10.4cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み淡灰色を呈する。釉は緑灰色で、外面は高台外側まで施釉し、外面底部は露胎。内面は回転ナデのあと施釉、内面底部は露胎。

瓦類

平瓦 (37～43) 斜格子叩きの平瓦で、37は格子が不規則に組み合わさり、格子の中に一部三角形を作っている。43は細かい斜格子叩き。

土製品

土罐 (44) 長さ5.95cm、径2.05cm、孔径0.54cm。胎土は淡黄褐色～淡黒灰色を呈する。

石製品

砥石 (45・46) 45は2面で使用が認められる。46は4面で使用が認められ、表裏面には条痕が残る。

236-1SD520出土遺物 (Fig.68)

須恵器

獸脚 (36) 胎土は0.5cm以下の白色砂粒や黒色砂粒を多く含む。色調は灰色を呈する。外面ナデで、接地面は使用により擦れている。

盤 (37) 胎土は0.5cm以下の白色砂粒や橙色粒を多く含む。口縁部および外面は強いヨコナデ。焼成は良好で、色調は淡黄灰色を呈する。

土師器

環 (38～40) 復元高台径7.0～7.6cm。色調は黄白色や暗黄白色で、全体的に磨滅している。40は底部ヘラ切り。

緑釉陶器

皿 (41) 高台削り出して、復元高台径7.6cm。外面底部に糸切り痕のようなものが僅かに確認できる。内面には沈線が巡り、やや平滑である。釉は緑灰色で全面施釉。須恵質。

236-1SD520茶色土出土遺物 (Fig.68)

須恵器

盤 (42) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、淡い青灰色を呈する。外面強いヨコナデ、内面ナデ。黒色土器B類

皿 (43) 復元口径16.4cm。内外面ミガキcが残る。

越州窯系青磁

環 (44) II類。復元口径14.1cm、器高3.6cm、底径7.0cm。外面底部ヘラケズリ、内面には目跡が残る。胎土は黒色粒や白色粒を多く含む。釉は灰白色～こげ茶色で、剥離が著しい。

土製品

罐 (45) 長さ5.0cm、幅3.9cm、厚さ1.8cmの台形をなす。須恵器甕を転用したとみられ、叩き痕が残る。上部に径0.8cmの円孔を穿つ。

236-1SD540出土遺物 (Fig.74)

須恵器

甕 (1) 二重口縁で外面叩き、内面回転ナデ。

土師器

皿a (2～7) 復元口径11.8～13.0cm。色調は全体的に黄白色を呈する。内面底部ナデ、底部外面は回転ヘラ切り。2は底部ヘラ切り後ナデ。4は底部外面ナデ。色調は全体的に黄白色を呈する。

環a (8～18) 復元底径6.2～8.4cm。底部回転ヘラケズリ。色調は8が暗茶褐色、16は一部が橙色や黄灰色を呈する以外は、全体的に黄白色を呈する。8～15は底部が平坦で、16～18は底部が若干丸味を持っている。8と9は復元口径12.4cmと14.0cm。

碗c (19・20) 復元高台径8.2cmと8.4cm。19は色調が暗茶褐色。20は外面下半が雑なナデ。内面不定方向ナデで、黄白色を呈する。

甕 (21) 復元口径17.0cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や雲母を多く含む。色調は淡褐色を呈する。外面タテハケ。内面は上方向のヘラケズリ、口縁部内面ヨコハケ。

高環 (22) 復元口径16.2cm。脚部径は6.6cm。全体的に磨滅する。

黒色土器A類

碗c (23～27) 復元高台径7.2～13.2cm。内面がミガキcで、外面は回転ナデ。色調は黄茶白色を呈する。

鉢 (28) 復元口径25.2cm。内面はミガキcで光沢がある。外面は回転ナデのあと一部にミガキcを施す。瓦類

瓦瓦 (29・30) 29は斜格子叩き、30は平行叩き。

平瓦 (31) 小さい斜格子叩き。

236-1SD1038暗茶色土出土遺物 (Fig.74)

土師器

碗c (32) 復元高台径7.8cm。

甕 (33) 胎土は0.25cm以下の白色砂粒を多く含む。橙色や赤茶色を呈する。口縁部外面は指頭圧痕が多くなり、内面ヨコハケ、体部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。

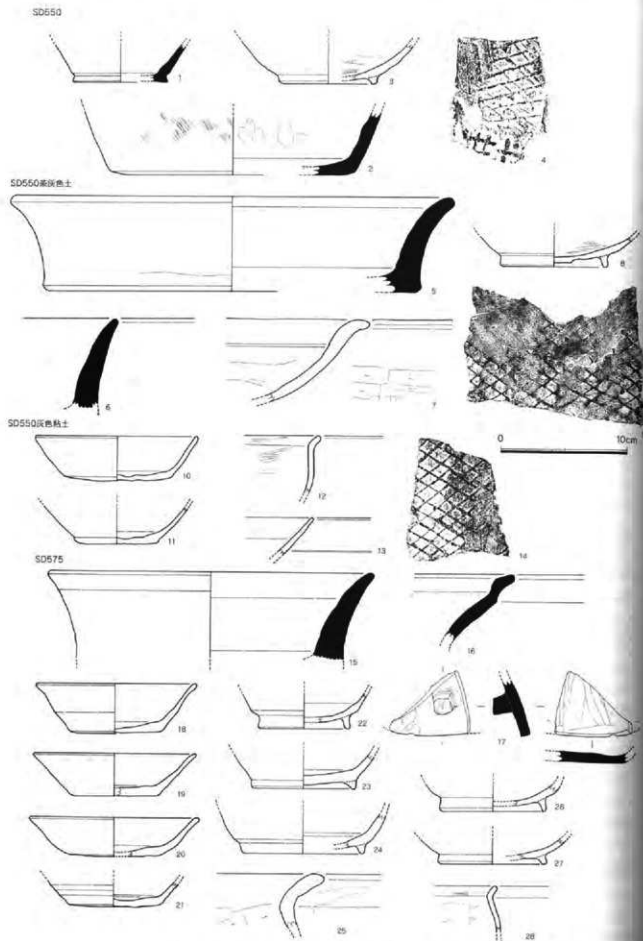


Fig.75 SD550・575出土遺物実測図 (1/3)

236-1SD1038暗灰色土出土遺物 (Fig.74)

土師器

皿 (34・35) 復元口径12.6cmと13.0cm。34は全体が磨減。35は外面底部ナデ調整。

坏 (36～40) 全体的に磨減。底部回転ヘラ切り。外面ヨコナデ。復元底径7.4～8.0cm。36が淡褐色や灰茶色のほかは全体として黄白色を呈する。

椀 (41) 復元口径14.8cm。底部内外面ともナデ。その他はヨコナデ。

黒色土器A類

椀 (42) 復元口径14.8cm。外面下半回転ヘラケズリ、内面はミガキだが殆ど磨減する。色調は淡褐色を呈する。

緑釉陶器

皿 (43) 復元底径6.8cm。釉は淡い黄緑色で、外面を中心に剥落が著しい。土師質。

越州窯系青磁

香炉 (44) 小破片で、香炉の蓋部分と推測され、この破片でも開口部分が4ヶ所確認できる。胎土は0.1cm以下の白色砂粒や黒色粒を僅かに含むが精製されている。色調は淡灰白色を呈する。釉は灰緑色でやや粗い貫入が入る。1期。

236-1SD550出土遺物 (Fig.75)

須恵器

壺 (1・2) 1は復元底径7.5cm。底部外面は糸切りで、その他は回転ナデ。窯落か。2は復元底径19.2cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、灰白色を呈し、焼成は不良で磨減が目立つ。外面下端はヘラケズリとみられ、その上は叩き、内面は指頭圧のあとヨコナデ。

黒色土器A類

椀 (3) 復元高台径7.8cm。磨減し内面ミガキが僅かに確認できる。

瓦類

平瓦 (4) 斜格子叩きで「平井」銘がある。

236-1SD550茶灰色土出土遺物 (Fig.75)

須恵器

盤 (5・6) 5は復元口径35.0cm、器高7.5cm、復元高台径28.9cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒などを含み、焼成はやや不良で、灰色～白褐色を呈する。外面下端が強いヨコナデで、その下がヘラケズリで面取りしている。底部はナデでその他はヨコナデである。6は0.7cm前後の白色砂粒や黒色砂粒を含むが、概ね0.3cm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良で白灰色～淡黒灰色を呈する。全面ヨコナデで、下端欠損部には底部との粘土接合面が確認できる。

土師器

鉢 (7) 内面に浅い沈線が巡る。胎土は0.5cm以下の砂粒を含み、橙褐色や淡灰褐色を呈する。磨減が目立つが外面下半はヘラケズリでナデ調整も行っているようにみえる。内面下半はヘラケズリのあと不定方向のナデか。

黒色土器A類

椀 (8) 高台径8.5cm。内面にミガキ、外面は磨減も目立つが底部に板状圧痕が残る。外面の色調は褐色を呈する。

瓦類

丸瓦 (9) やや凹凸が強い格子叩き。

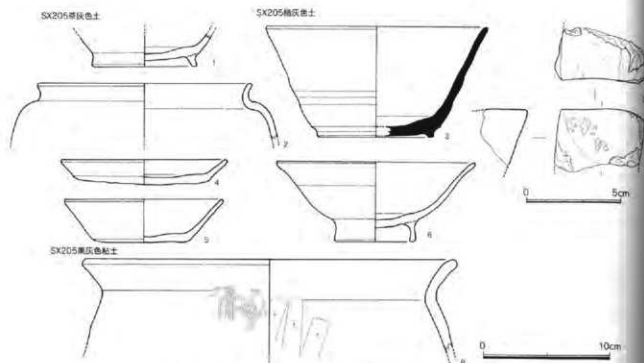


Fig.76 SE205出土土遺物実測図 (1/3, 7は1/2)

236-1SD550灰色粘土出土遺物 (Fig.75)

土師器

坏a (10・11) 底部回転ヘラ切り。色調は10が暗灰茶色、11は黄白色を呈する。

黑色土器A類

小甕 (12) 内面ミガキc、外面回転ナデ。

緑釉陶器

椀 (13) 胎土は精製され、須恵質。釉は淡緑色で光沢があり、ミガキの後全面施釉。

瓦類

丸瓦 (14) 凸面は斜格子叩き。

236-1SD575出土遺物 (Fig.75)

須恵器

盤 (15) 復元口径25.6cm、粘土接合部で欠損する。胎土は0.6cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、淡黒灰色～淡灰色を呈する。内外面ヨコナデ。

甕 (16) 二重口縁で口縁部および内面は回転ナデ、外面は叩きのあと回転ナデ。

碗 (17) 内面はナデ調整で、部分的に墨が付着する。脚部は貼付後ケズリ調整される。

土師器

坏a (18～21) 復元口径12.7～13.4cm。全体的に磨滅が目立つ。色調は全体的に黄白色だが、18・19はやや黄灰色を呈する。

椀c (22～24) 復元高台径7.2～9.7cm。全体的に磨滅が目立つ。色調は全体的に黄白色を呈する。

甕 (25) 胎土は0.5cm以下の砂粒を含み、灰褐色～橙褐色を呈する。体部内面はヘラケズリ、外面には墨が付着する。

黑色土器A類

椀c (26・27) 26は復元高台径8.4cm。全面磨滅する。27は復元高台径8.6cm。全面磨滅するが、内

面はミガキcが確認できる。

小甕 (28) 磨滅が目立つが、内面ミガキc、外面回転ナデが残る。

井戸

236-1SE205茶灰色土出土遺物 (Fig.76)

土師器

椀c (1) 高台径8.3cm。体部内外面ヨコナデ。

越州窯系青磁

甕 (2) 復元口径17.0cm。胎土は明灰色で精製されている。釉は灰緑色で光沢があり、内外面に施釉する。

236-1SE205暗灰色土出土遺物 (Fig.76)

須恵器

大椀c (3) 復元口径17.6cm。底部端に低い高台を貼付する。胎土は白色砂粒を多く含み、焼成は良好で、暗灰青色を呈する。内面底部はナデ、その他は回転ナデ。

土師器

皿a (4) 復元口径13.1cm。底部回転ヘラ切り。色調は黄白色を呈する。

坏a (5) 復元口径12.6cm。底部回転ヘラ切り。内面磨滅、外面ヨコナデ。色調は淡橙黄色を呈する。

椀c (6) 復元口径15.8cm。若干高い高台を貼付する。全体的に磨滅する。

石製品

砥石 (7) 大きさは3.3×5.0×2.4cm。3面が研磨されている。

236-1SE205黒灰色粘土出土遺物 (Fig.76)

土師器

甕 (8) 復元口径29.2cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、橙白色を呈する。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリで墨が付着する。外面はタテハケで墨が付着する。

236-1SE510茶灰色土出土遺物 (Fig.77)

須恵器

盤 (1・2) 1は復元口径38.8cm、器高10.7cm、復元底径27.4cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、暗灰色～淡灰色を呈する。底部外面ヘラケズリ、口縁部内外面と外面はヨコナデ、内面下半は強いナデ。2は復元口径32.0cm、胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、暗灰色～灰褐色を呈する。内外面ヨコナデ。下部は粘土接合部で欠落する。

盥 (3) 復元口径17.2cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、青灰色や暗灰色を呈する。頸部外面は稜線が明瞭に付くほどの強いヨコナデで、内面はナデ。体部外面は叩きで、内面は同心円の当て具痕を残す。

土師器

坏a (4) 復元底径9.0cm。底部回転ヘラ切り、内面底部ナデ。色調は暗黄灰色を呈する。

甕 (5) 口径28.4cm。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含み、淡い橙灰色～黒灰色を呈する。口縁部ヨコナデ、体部外面は粗いタテハケ、内面はヨコハケのあとヘラケズリ。

瓦類

丸瓦 (6) 凸面に斜格子の叩き。

平瓦 (7～10) 7は長方形の格子が不規則に組み合わさり、格子の中に一部三角形を作っている。8は正格子。9は細かい正格子で、欠損しているため方形二重枠内に「大國」の一部である「国」が残る。

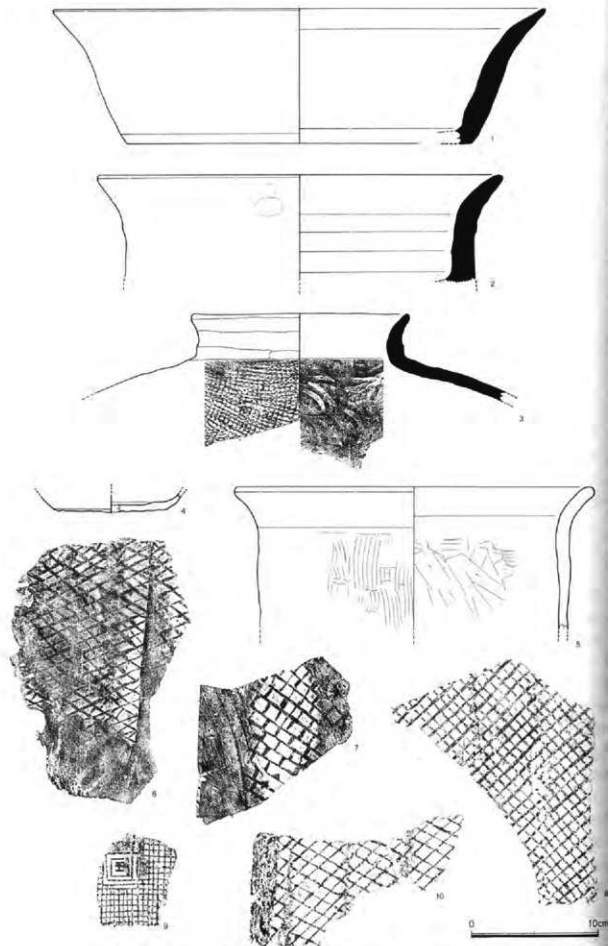


Fig.77 SE510茶灰色土出土遺物実測図 (1/3)

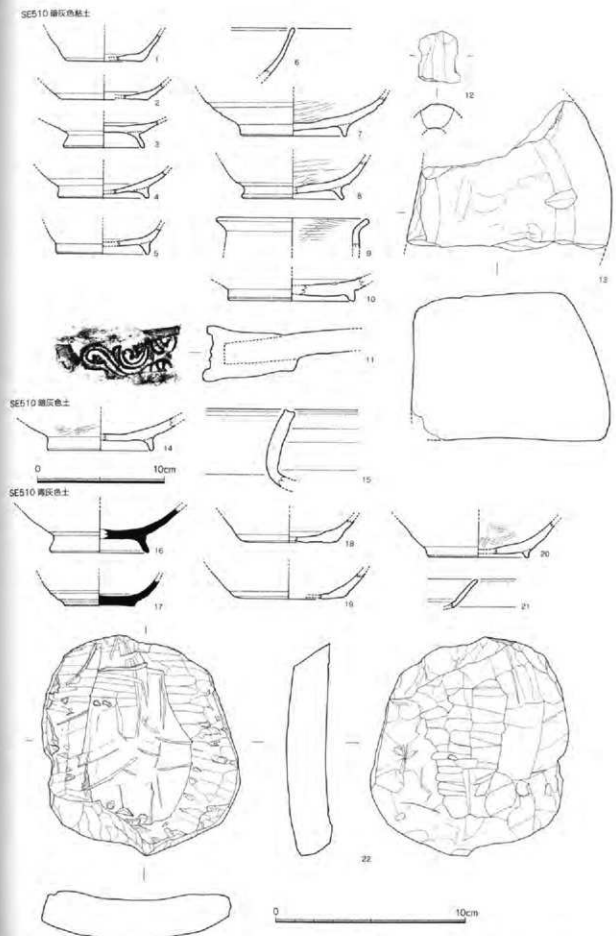


Fig.78 SE510暗灰色粘土・暗灰色土・青灰色土出土遺物実測図 (1/3、13・22は1/2)

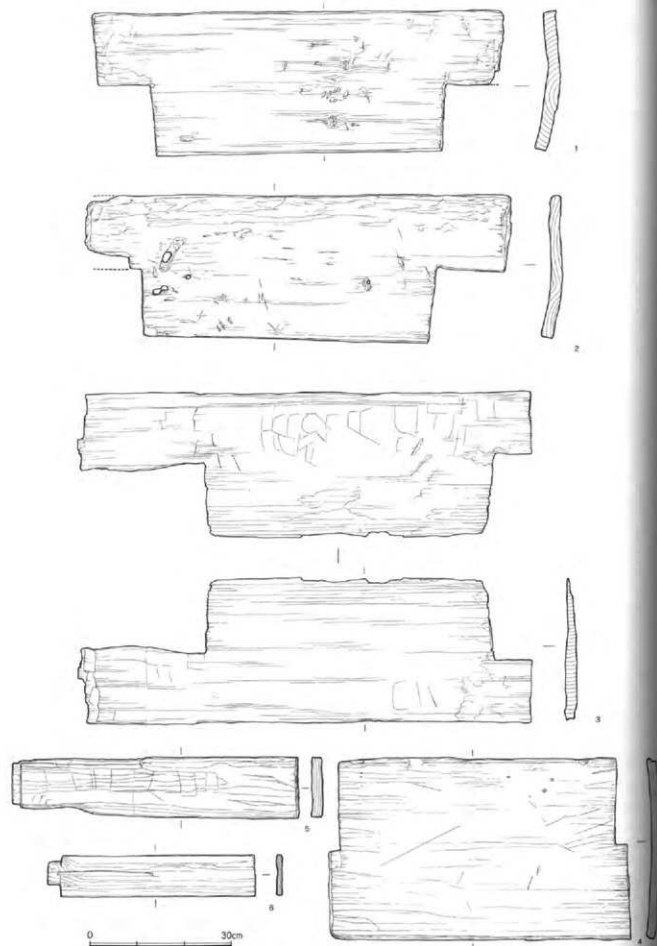


Fig.79 SE510出土木製品実測図① (1/8)

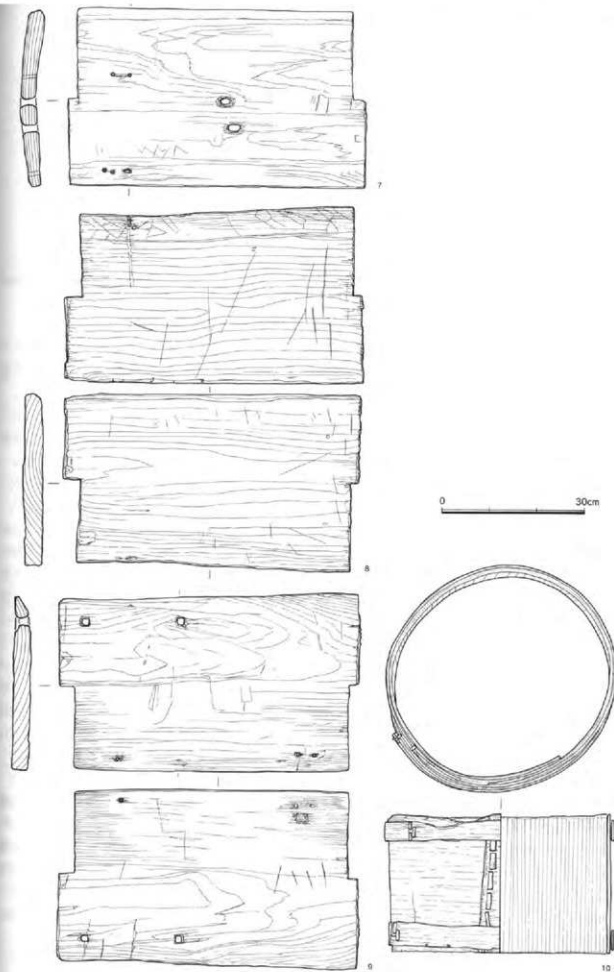


Fig.80 SE510出土木製品実測図② (1/8)

10は斜格子。

236-1SE510暗灰色粘土出土遺物 (Fig.78)

土師器

坏a (1・2) 復元口径6.4cmと7.0cm。色調は黄白色を呈する。

小皿c (3) 復元高台径6.4cm。内面底部ナデ。色調は淡褐色を呈する。

椀c (4・5) 復元高台径7.2cmと7.4cm。内面は回転ナデとナデ。色調は黄白色を呈する。

椀 (6) 内外面回転ナデ調整。

黒色土器A類

椀c (7・8) 7は外面が回転ヘラケズリ、内面ミガキc。外面の色調は暗茶灰色を呈する。8は外面回転ナデ、内面ミガキcを施す。外面の色調は暗褐色を呈する。

小甕 (9) 復元口径12.0cm、内面ミガキc、外面回転ナデ。

緑釉陶器

椀×皿 (10) 高台削り出して、復元高台10.0cm。底部内外面に浅い沈線が巡る。胎土は暗灰色で須恵質。釉は淡緑黄色で全面に施軸し、白黄緑色の斑点が点在する。

瓦類

軒平瓦 (11) 均整唐草文の端部だが、欠落が目立つ。頸部は内外面ともヨコナデ。凸面は格子叩きである。

土製品

輪羽口 (12) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。外面ナデで、淡黄灰色～暗灰色を呈する。

石製品

砥石 (13) 欠損し全形が掴めないが、断面形状を成し、側面は面取り風の研磨やケズリが行われ、表裏面は研磨されている。上面には工具痕もみられ、一部焼けている。現状では砥石として報告するが他の用途も考えられる。

236-1SE510暗灰色土出土遺物 (Fig.78)

黒色土器B類

椀c (14) 内外面とも磨滅するが、外面はミガキcが確認できる。復元高台径8.4cm。

灰釉陶器

壺 (15) 頸部で、口縁端部内面に浅い沈線が巡る。胎土は精製され灰色を呈する。回転ナデのあと緑灰色の釉を薄く掛ける。

236-1SE510青灰色土出土遺物 (Fig.78)

須恵器

椀c (16) 高い高台を貼付する。復元高台径7.8cm。内外面回転ナデで、内面は平滑になり、一部黒のような痕跡もみられ、転用痕と推測される。

椀 (17) 底部外面が回転糸切りで、底径6.0cm。内外面とも回転ナデ。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や橙色粒を含む。焼成は良好で淡褐色を呈する。篠窯産。

土師器

坏a (18・19) 2点とも内面に漆が付着する。体部の色調は黄白色を呈する。19は外面底部に一部に漆が付着する。

黒色土器B類

椀c (20) 外面は磨滅するが、内面はミガキcが確認できる。外面底部はナデ調整。

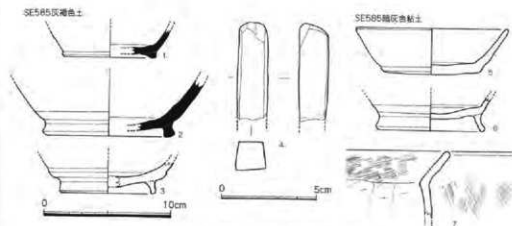


Fig.81 SE585出土遺物実測図 (1/3, 4は1/2)

緑釉陶器

皿 (21) 釉は淡黄緑色で光沢があり、内外面とも綺麗に施軸される。須恵質。

石製品

滑石加工品 (22) 11.6×10.6cm、厚さ2.4cmの楕円形。若干丸みがあり、石鍋の体部の一部を利用してのものと推測される。内外面とも細かいケズリを施している。用途については不明。

236-1SE510出土遺物 (Fig.79・80)

木製品

井戸枠材 (1～9) 1は縦30.5cm、横87.0cm、厚さ3.0cm。両小口は劣化が目立つ。一部窪みがあり炭化している。2は縦31.5cm、横90.1cm、厚さ2.5cm。表面には調査時の傷が多い。5ヶ所不定形な穴が貫通している。3は縦31.0cm、横95.7cm、厚さ2.5cm。両面ともぼんやりカンナ痕が残り、側面は粗く削っている。4は縦38.6cm、横63.9cm、厚さ3.0cm。上下両端は丸味を帯びている。5は長さ60.8cm、幅13.0cm、厚さ2.4cm。両面に僅かにカンナ痕残る。小口は途中まで刻みを入れ折っている。もう一方の小口は断面凸型に加工されている。6は長さ44.05cm、幅8.8cm、厚さ1.2cm。片側が凸状に加工されている。この部分は両側が削られ薄くなっている。7は縦38.0cm、横63.1cm、厚さ3.7cm。中央付近に2.5×1.5cmほどの楕円形の穴が2個、その他1cm前後の穴が5ヶ所穿たれている。表面加工の残りは非常に悪い。8は縦37.6cm、横63.4cm、厚さ4.4cm。端に0.7cm前後の穴が3ヶ所あり、1つは貫通している。凸の下辺は断面が丸味を帯びる。9は縦38.0cm、横69.3cm、厚さ4.0cm。2cm四方の方形孔が2ヶ所あり、1cm程の円孔が3ヶ所、方形形状の窪みが1ヶ所彫られている。長辺の側面はケズリである。

各材にみられた孔は井戸検出時では機能を持っておらず、これらが転用材であったと推測される。

曲物(10) 径は48.0～48.8cm、高さ29.5cm。桜皮の留め具は幅0.9～1.3cmである。上端は凸凹になっている。設置時に上面からの落下物によるものと推測される。内面には細かい刻みが施されている。タガは上下2段あり、上が幅4.3cm、下が幅5.0cmである。タガの厚さは0.4～0.5cmでタガは木釘で留められているが、曲物そのものまで貫通していない。保存状態は極めて良好で、近代に使われていた民俗資料のような雰囲気を保っている。

236-1SE585灰褐色土出土遺物 (Fig.81)

須恵器

坏c (1) 低い高台を貼付する。外面底部ナデで板状圧痕残る。その他は回転ナデ。

壺 (2) 復元高台径10.4cm。外面は回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ、外面底部回転ヘラ切り。

土師器

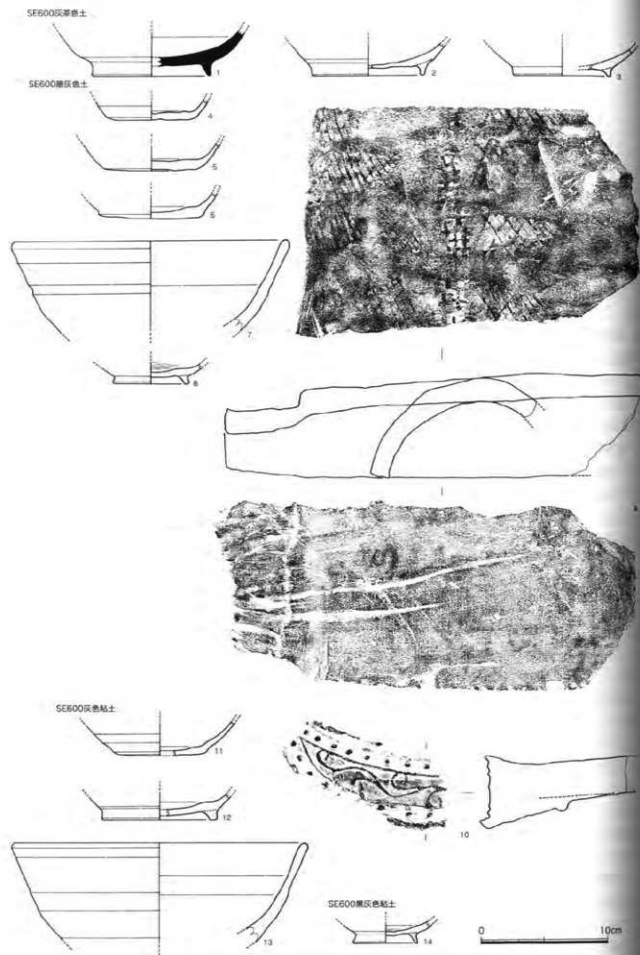


Fig.82 SE600出土遺物実測図 (1/3)

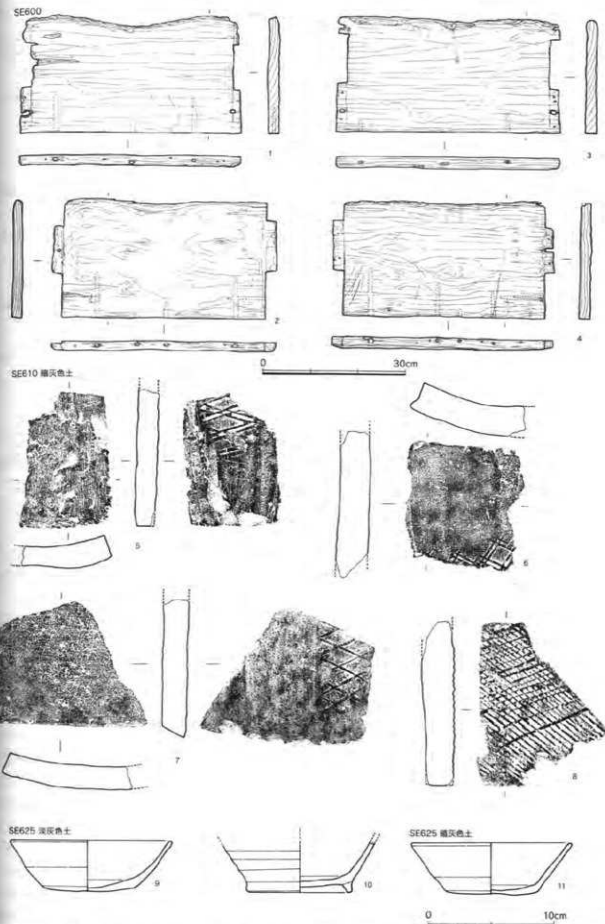


Fig.83 SE600出土木製品・610・625出土遺物実測図 (1/3・1 ~ 4は1/8)

椀c (3) 復元高台径7.6cm。磨滅目立つ。色調は黄褐色を呈する。

石製品

砥石 (4) 大きさは5.2×1.6×1.5cmの方形柱で、4面が研磨されている。

236-1SE585暗灰色粘土出土遺物 (Fig.81)

土師器

坏a (5) 口径12.0cm。底部外面回転ヘラ切り。内面不定方向のナデ。色調は黄褐色を呈する。

椀c (6) やや高い高台を底部端に貼付する。底部外面は回転ヘラ切り後回転ナデ。高台内面に淡褐色の付着物がみられる。色調は黄褐色を呈する。

甕 (7) 胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、淡褐色～黒褐色を呈する。体部内面ヘラケズリ、その他はハケ。

236-1SE600灰茶色土出土遺物 (Fig.82)

須恵器

椀c (1) 三角形の高い高台を貼付する。復元高台径9.4cm。外面底部ナデ、内外面回転ナデ、内面底部は使用により平滑である。

黒色土器A類

椀c (2・3) 復元高台径8.8cmと7.8cm。全体磨滅し調整不明。

236-1SE600暗灰色土出土遺物 (Fig.82)

土師器

坏a (4～6) 復元底径7.0～8.3cm。底部回転ヘラ切り。色調は黄白灰色や明灰色などを呈する。

鉢 (7) 復元口径22.0cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。内面には炭化物が付着している。内外面とも回転ナデ。

黒色土器A類

椀c (8) 内面ミガキc、外面ココナデ。復元高台径6.0cm。

瓦類

丸瓦 (9) 凸面は細長の斜格子叩きとナデ調整で、それに混じて「平井」銘も中央付近に見えるが重なりあって、明瞭ではない。

軒平瓦 (10) 唐草文で外縁は全て珠文である。頸部はナデ。凹面は布目痕があり、凸面には格子叩きを施す。

236-1SE600灰色粘土出土遺物 (Fig.82)

土師器

坏a (11) 底部回転ヘラ切り、底部内面ナデ、その他は回転ナデ。色調は淡白灰色を呈する。

椀c (12) 復元高台径9.2cm。底部回転ヘラ切り。色調は淡橙色を呈する。

鉢 (13) 復元口径23.4cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒や黒色粒を多く含み、白灰色～淡茶灰色を呈する。

236-1SE600黒灰色粘土出土遺物 (Fig.82)

椀c (14) 高台径5.1cm。底部外面がナデ、その他内は外面回転ナデ調整。

236-1SE600出土遺物 (Fig.83)

木製品

井戸杵材 (1～4) 4枚は組み合せて木杵をなし、それぞれを木釘で留めていたとみられ、各材にその痕跡を認めることができる。また、上面は使用時の落下物等により劣化している。内面の下半は表面が黒色を呈している。1は上下25.0cm、幅46.8cm、厚さ2.4cm。小口は左右とも凹型で、小口面に木釘

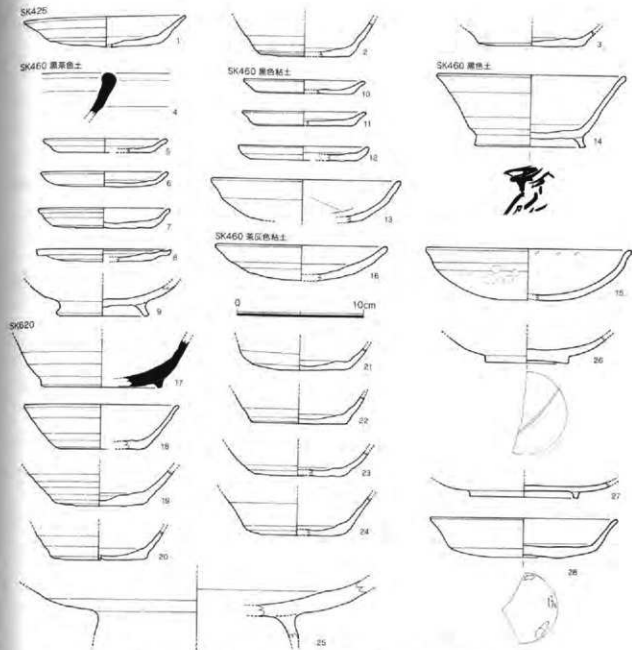


Fig.84 SK425・460・620出土遺物実測図 (1/3)

穴が穿たれている。下辺には径1cm前後、深さ3.5～8.5cmの穴が3ヶ所穿たれ、その間に1個づつ4ヶ所に木釘が打ち込まれている。2は上下25.3cm、幅46.6cm、厚さ2.3cm。小口は左右とも凸型で、小口には深さ8cmほどの穴や木釘が穿たれている。下辺には径1cm前後、深さ1.05～9.6cmの穴が4ヶ所穿たれ、木釘が2ヶ所打ち込まれている。穴のひとつは小口に穿たれた穴と繋がっている。3は上下24.5cm、幅47.35cm、厚さ2.4cm。小口は左右とも凹型で、小口上部に穴が穿たれていた痕跡を残すが腐食している。下辺には径0.5cm前後、深さ3～4.3cmの穴や木釘が合わせて5ヶ所穿たれている。裏面には炭化した産みがある。4は上下24.9m、幅46.7cm、厚さ2.3cm。小口は左右とも凸型で、その凸部に木釘穴が2ヶ所づつ穿たれている。下辺には径1cm前後、深さ1.5～10cmの穴が4ヶ所穿たれ、その間に5ヶ所木釘が打ち込まれている。穴のひとつは小口に穿たれた穴と繋がっている。

それぞれ下辺に穿たれた穴や木釘が、何の用途を持っていたかは不明である。

236-1SE610暗灰色土出土遺物 (Fig.83)

瓦類

平瓦 (5~8) 5・6は二重の斜格子叩き。7は斜格子叩き。8は細長斜格子と小さい斜格子を組み合わせた叩きである。

236-1SE625淡灰色土出土遺物 (Fig.83)

土師器

坏a (9) 復元口径12.8cm。底部回転ヘラ切り。色調は黄白色を呈する。

椀c (10) 高台径8.25cm。底部回転ヘラ切り、内面底部ナデ。台形の高台を貼付する。色調は黄白色を呈する。

236-1SE625暗灰色土出土遺物 (Fig.83)

土師器

坏a (11) 口径12.65cm。底部回転ヘラ切り、内面底部ナデ。板状圧痕が残る。色調は黄白色を呈する。

土坑

236-1SK425出土遺物 (Fig.84)

土師器

皿a (1) 復元口径12.3cm。底部外面は回転ヘラ切り、内面底部は不定方向のナデ。

坏a (2・3) 底径7.2cmと8.4cm。底部外面回転ヘラ切り、内面は2が回転ナデ、3が不定方向のナデ。色調は2が薄い橙白色を呈する。

236-1SK460黒茶色土出土遺物 (Fig.84)

須恵器

鉢 (4) 色調は淡灰色を呈する。内外面回転ナデで口縁部を丸く仕上げる。籐器産。

土師器

小皿a (5~7) 復元口径9.8~10.4cm。外面底部回転ヘラ切り。

小皿a2 (8) 復元口径10.6cm。外面底部回転ヘラ切り。口縁部内面に若干の窪みがある。

椀c (9) 全体的に磨滅するが、内面はミガキのような痕跡がみえる。

236-1SK460黒色粘土出土遺物 (Fig.84)

土師器

小皿a (10~12) 復元口径9.6~10.2cm。外面底部回転ヘラ切り。内面底部ナデ。

丸底坏a (13) 外面下半は回転ヘラ切り後ナデ。内面ミガキbでコテ当て痕が残る。

236-1SK460黒色土出土遺物 (Fig.84)

土師器

椀c (14) 底部外面に墨書があり、字体の動きから幾つか文字が異なる方向から書かれているが、詳細な文字は不明である。

丸底坏a (15) 外面下半は回転ヘラ切り後ナデ、外面中位には指頭圧痕も残る。内面ミガキbでコテ当て痕が残る。

236-1SK460茶灰色粘土出土遺物 (Fig.84)

土師器

丸底坏a (16) 外面ヘラ切り、内面底部はナデでその他は回転ナデ、ミガキbは確認できないが、形状から丸底坏とみられる。

236-1SK545黒茶色土出土遺物 (Fig.85)

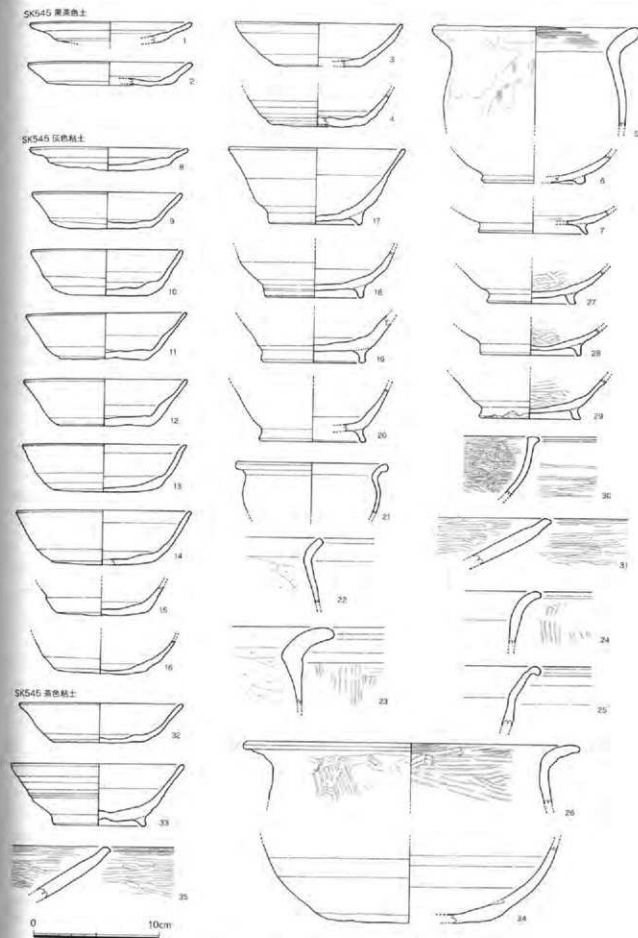


Fig.85 SK545出土遺物実測図 (1/3)

土師器

皿a (1・2) 復元口径12.8cmと13.0cm。2は底部ヘラ切り後ナデ。色調は黄白灰色を呈する。

坏a (3・4) 底部回転ヘラ切り。色調は黄白灰色を呈する。

甕 (5) 復元口径16.4cm。全体がやや歪んでいる。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を含み、橙灰色や黒色を呈する。口縁部内面はヨコハケ、体部外面はハケ。内外面とも煤が厚く付着している。

黒色土器A類

碗c (6・7) 復元口径8.2cmと8.6cm。6は磨減が目立ち、7は内面ミガキcが確認できる。

236-1SK545灰色粘土出土遺物 (Fig.85)

土師器

皿a (8) 口径12.5cm。外面底部はヘラ切り未調整。内面不定方向のナデ。

坏a (9~16) 復元口径11.9~14.0cm。底部回転ヘラ切り。全体として色調は黄白灰色を呈する。

碗c (17~20) 復元高台径7.4~8.4cm。内面底部ナデ、外面回転ナデ。色調は黄白灰色を呈する。

甕 (21~26) 21は口径12.0cm、体部内面ナデ、その他回転ナデ。22は内面ヘラケズリ。23は口縁部ヨコナデ、外面タテハケで煤が付着する。内面ヘラケズリ。24は外面タテハケで煤が厚く付着する。25は内外面回転ナデ。口縁部がやや丸味を帯びその下に煤が付着する。26は口径26.6cm、内面横方向のハケ、口縁部はヨコナデで、外面はハケで若干煤が付着する。

黒色土器A類

碗c (27~29) 高台径7.0~8.0cm。底部は回転ヘラ切り。内面はミガキcが残り、外面回転ナデ。29は高台に工具痕が残る。

小甕 (30) 口縁部を平坦にして、外側に肥厚させる。内面は細かいミガキcが施されている。外面は黒化されていないが、回転ナデのあと一部ミガキcが施されている。

黒色土器B類

皿 (31) 口縁部だが、全形がわからない。口縁部の厚みからやや大きめの器種とみられ、皿や高坏のようなものと推測される。内面は細かいミガキc、外面はヘラケズリのあとミガキcが施されている。胎土は0.2cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、淡灰色を呈する。黒化処理が不完全だが、丁寧にミガキcが施されており、ここでは黒色土器として報告する。搬入品か。

236-1SK545茶色粘土出土遺物 (Fig.85)

土師器

坏a (32) 復元口径13.0cm、底部回転ヘラ切り。

碗c (33) 復元口径13.9cm、内面底部ナデ、外面回転ナデ。色調は暗茶褐色を呈する。

鉢 (34) 復元底径13.8cmで板状圧痕が残る。胎土は0.3cm以下の砂粒を含み、灰褐色を呈する。内面下半はミガキもしくは使用によって平滑になっている。体部内外面は回転ナデで、体部下半は回転ナデのあと一部ナデ調整。

黒色土器B類

皿 (35) 口縁部だが、全形がわからない。口縁部の厚みからやや大きめの器種とみられ、皿や高坏のようなものと推測される。内外面とも細かいミガキcが施されている。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や赤褐色粒を含み、灰褐色を呈する。黒化処理が不完全だが、丁寧にミガキcが施されており、ここでは黒色土器として報告する。搬入品か。

236-1SK620出土遺物 (Fig.84)

須恵器

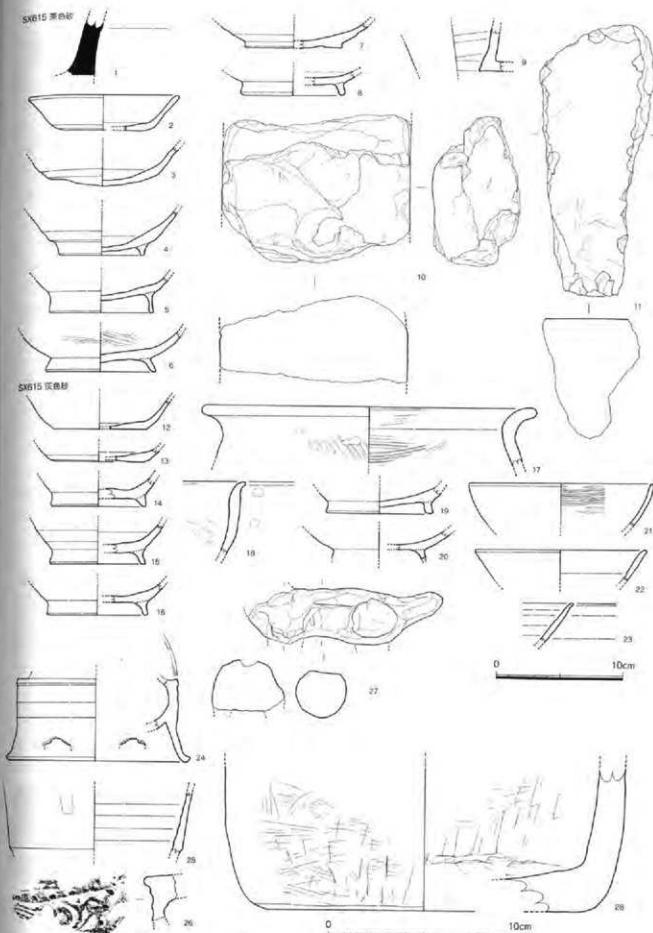


Fig.86 SF615出土遺物実測図 (1/3、11・28は1/2)

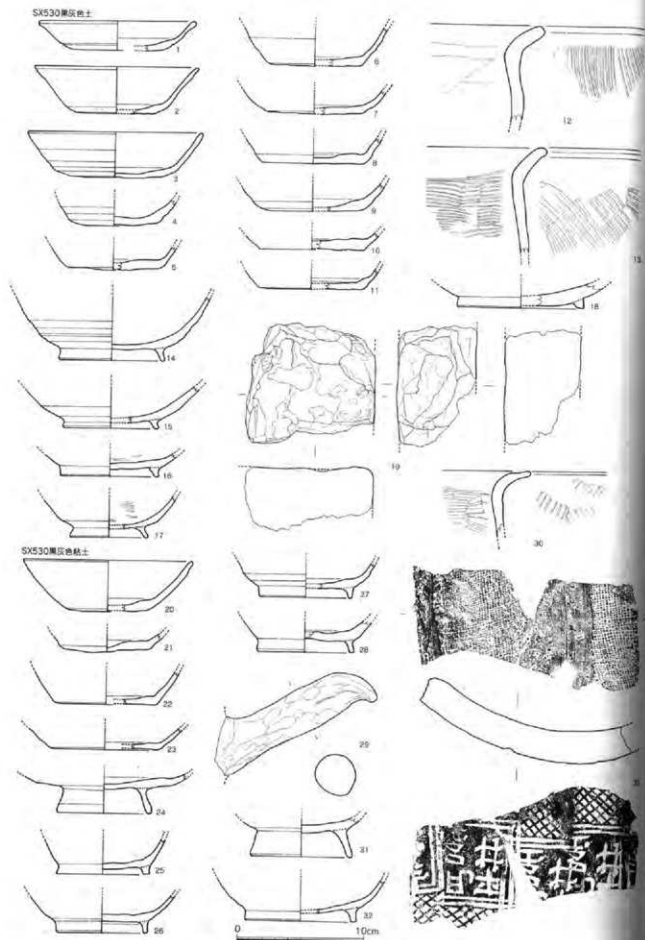


Fig.87 第3面窪み (SX530) 出土遺物実測図 (1/3)

椀c (17) 底部は丸味があり、高台は低い。内面底部は不定方向のナデで、平滑になっている。外面に銅のような付着物がみられる。

土師器

坏a (18~24) 底部復元径6.9~8.0cm。底部回転ヘラ切り、内面底部ナデ、体部内外面ヨコナデ。色調は全体的に黄白色を呈する。

大皿c (25) 高台は高く、径は16cm以上。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含む粗い。内面底部は不定方向のナデ、外面回転ヘラケズリ。

緑釉陶器

皿 (26・27) 26は底部が円盤高台で復元径6.6cm。外面に線刻がある。胎土は白色砂粒を若干含むが精製されている。軸は淡い緑灰色で薄く施軸され、剥落しているところが多い。27は復元高台径8.6cm。胎土は灰白色の土師質である。軸は淡い黄緑色で光沢があり、内外面施軸するが剥落が目立つ。底部は回転系切りで内面には重ね焼き痕跡を残す。

越州窯系青磁

皿 (28) 復元口径14.8cm。器高3.0cm。胎土は灰白色を呈し、軸は暗緑灰色で光沢があり全面施軸する。外面底部端には白い目跡が残る。I類。

第3調査面その他の遺構

236-1SF615茶色砂出土遺物 (Fig.86)

須恵器

盤 (1) 粘土接合部で欠損する。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、焼成はやや不良で、黒灰色を呈する。内外面はヨコナデ。

土師器

坏a (2・3) 底部回転ヘラ切り。3は底部がやや丸味がある。色調は黄白色を呈する。

黒色土器A類

椀c (4・5) 全体的に磨減し調整不明瞭。5は細く高い高台を貼付する。

黒色土器B類

椀c (6) 復元高台径8.7cm。内外面はミガキc。

緑釉陶器

椀×皿 (7) 高台削り出しで、復元底径7.6cm。軸はやや濁った緑灰色で全面に薄く施す。内面はミガキのあと施軸する。胎土は灰色で精製されている。須恵質。京都産。

灰釉陶器

椀 (8) 復元高台径8.2cm。胎土は灰色で細砂粒を含むが精製されている。軸は灰緑色で内面に薄く施軸する。内面底部は露胎で平滑である。外面は回転ナデ。

平椀 (9) 頸部付近で、胎土は灰白色で精製されている。内面回転ナデ、外面は黄茶色味を帯びた透明軸を施すがやや剥落気味である。

土製品

埴 (10) 両端は欠損するが、幅は14.8cmで表面はナデ調整。焼成はやや不良で、色調は茶灰色、灰色、暗灰色を呈する。

石製品

砥石 (11) 使用面は1面。

236-1SF615灰色砂出土遺物 (Fig.86)

土師器

坏a (12・13) 復元底径7.4cmと7.7cm。底部回転ヘラ切り。色調は12が淡橙色、13は黄灰白色。
 椀c (14～16) 復元高台径7.5～8.0cm。内面底部ナデ。色調は淡茶灰色を呈する。
 甕 (17) 復元口径26.4cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を少量含む、橙色や茶灰色を呈する。内面はヨコハケ、外面は口縁部がヨコナデ、体部がタテハケでくびれ部には指頭痕がある。
 小甕 (18) 内面はヨコナデとナデ、外面は指頭圧痕が残り、二次焼成で赤茶色になっている。内面は黒色化する。

黒色土器A類

椀c (19・20) 19は復元高台径8.4cm。20は磨減し僅かにミガキが確認できる。
 椀 (21) 復元口径14.6cm。外面ヨコナデ、内面にミガキcを施す。

緑軸陶器

椀 (22・23) 22は復元口径13.6cm、内面中位に段を有する。胎土は灰色で精製され、光沢のある明緑色軸を全面に施す。須恵質。23は胎土が暗灰色で精製され、光沢のある暗緑色軸を薄く施す。須恵質。

越州窯系青磁

香炉 (24) 復元高台径15.0cm。高台には透かしが設けられている。胎土は黄灰色で精製され、軸はオリブ色で光沢があり、全面施軸するが、上面は軸を拭き取り、目跡が残っている。

長沙窯系青磁

甕 (25) 胎土は黒色粒を僅かに含むが精製され、黄灰色を呈する。内面は回転ナデで露胎。外面は灰青色を帯びた黄色軸で光沢があり、細かい貫入が入る。軸は剥落気味。体部下位に褐軸が垂下する。

瓦類

軒平瓦 (26) 欠損が目立ち詳細は不明瞭だが、唐草文の周縁には珠文がある。

土製品

土馬 (27) 胴部で脚部や頭部は欠損している。胎土は白色砂粒を若干含む橙色を呈する。全面ナデ調整される。

石製品

石鍋 (28) 復元底径18.2cm。内外面とも工具による削りで整形している。滑石製。

236-1SX530黒灰色土出土遺物 (Fig.87)

土師器

坏a (1～11) 復元口径12.4～13.8cm、底径6.4～9.3cm。全体的に磨減し、底部ヘラ切り、底部内面は不定方向ナデが確認できる。色調は全体的に黄白色で、3が橙灰色を呈する。

甕 (12・13) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒や黒色粒を少量含む。12は体部内面ヘラズリ、外面タテハケ。13は体部内面ヨコハケ、外面粗いたテハケ。

黒色土器A類

椀c (14～17) 高台径は6.2～8.4cm。磨減しているが内面ミガキcが僅かに残る。外面の色調は14が淡橙黄色、15が淡橙灰色、17が橙灰色を呈する。

緑軸陶器

椀 (18) 復元高台径10.0cm。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を少量含んだ土師質。軸は淡緑灰色で全面施軸され、斑点状に淡黄緑色の部分がある。部分的に軸が剥落する。

土製品

埴 (19) 胎土は0.5cm以下の白色砂粒や黒色砂粒を含み、白灰色を呈する。表面の欠落も目立つ。厚

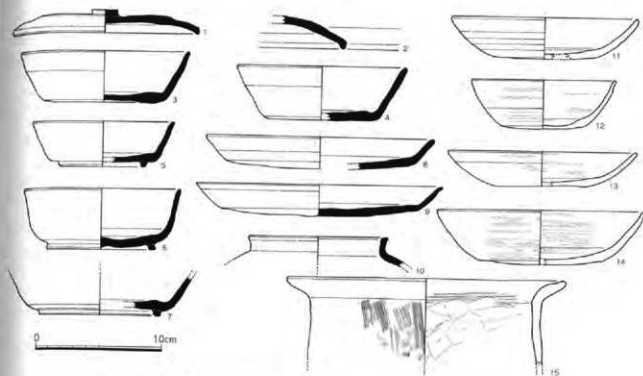


Fig.88 第3調査面窪み (灰色粘土) 出土遺物実測図 (1/3)

さは6.2cm。

236-1SX530黒灰色粘土出土遺物 (Fig.87)

土師器

坏a (20～23) 復元底径6.6～8.8cm。底部回転ヘラ切り。色調は部分的に暗灰色のところもあるが、全体として黄白色を呈する。

椀c (24～28) 高台径7.2～7.7cm。24は高い高台を貼付する。色調は全体として黄白色を呈する。把手 (29) 長さ12.7cm、径3.35cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や黒色粒や赤色粒を含み、淡橙褐色や灰褐色を呈する。全面ナデ調整。

甕 (30) 口縁部内面ヨコナデ、その他内外面はハケ調整である。

黒色土器A類

椀c (31・32) 31は復元高台径8.0cm。高い高台を貼付する。32は復元高台径8.8cm。磨減するが内面にミガキcが残る。

瓦類

平瓦 (33) 裏面は細かい格子叩きに二重線に囲まれ「平井瓦屋」の銘がある。

236-1灰色粘土出土遺物 (Fig.88)

須恵器

蓋c3 (1) 外面上半部回転ヘラズリ。内面上半部ナデ。扁平なボタン状のツマミを貼付する。復元口径14.9cm。

蓋3 (2) 外面上半部回転ヘラズリ。内面上半部ナデ。

坏a (3・4) 外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ、内面底部不定方向のナデ、他は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。復元口径12.4cmと15.4cm。

皿a (8・9) 8は外面底部回転ヘラ切り。内面底部は一部不定方向のナデ、他は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。9は外面底部回転ヘラ切り後粗いナデ。内面底部は回転ナデのあと一部不定方向のナデ、他は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。

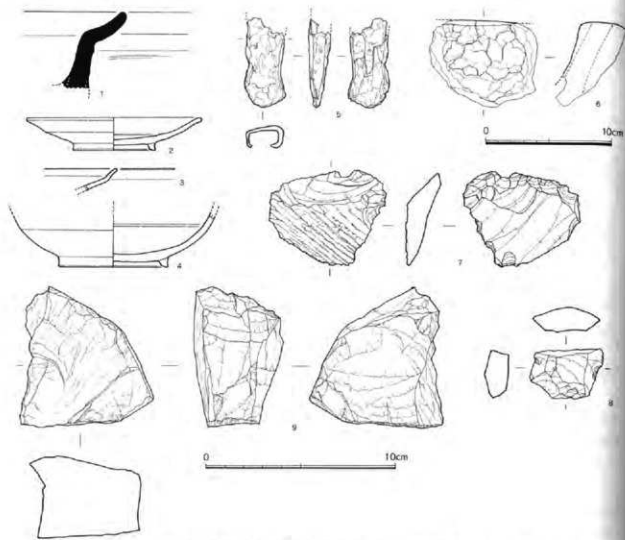


Fig.89 第3面その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、7～9は1/2)

环c (5～7) 5・7は低い方形高台を貼付。5はやや歪んでいる。内面回転ナデ。6は方形高台をやや外開きに貼付する。内面底部は回転ナデのあとナデ。7の内面底部は不定方向のナデ。

短頸壺 (10) 復元口径11.0cm。内外面ナデ調整。

土師器

环a (11) 外面底部回転ヘラケズリ、その他内外面とも回転ナデ。

环d (12～14) 外面底部回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデのあとミガキaを施す。

甕 (15) 復元口径22.0cm。口縁部内面粗いヨコハケ、体部内面ヘラケズリ、外面細かいタテハケ。内面に根が付着する。

236-1第3遺構面その他の出土遺物 (Fig.89)

須恵器

盤 (1) 体部中位で屈曲する。0.2cm以下の白色砂粒を少量含み、暗灰色を呈する。外面下半はナデ。その他はヨコナデ。S-1011より出土。

緑釉陶器

皿 (2・3) 2は復元口径13.8cm、器高2.6cm、復元高台径6.5cm。内面に沈線が巡り、高台には段が巡る。釉は光沢のある濃緑色で、全面に厚く施釉され細かい貫入がある。高台置付は釉を拭き取っている。須恵質。S-1073より出土。3は光沢のある緑灰色釉を内外面に施すが、外面は少々剥けている。須恵質。

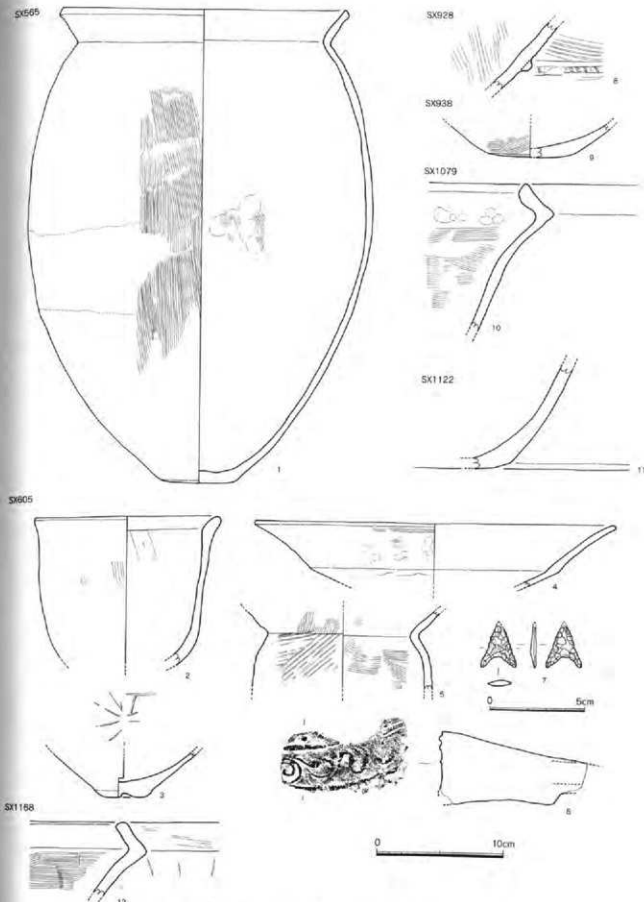


Fig.90 第3調査面基盤層出土遺物実測図 (1/3、7は1/2)

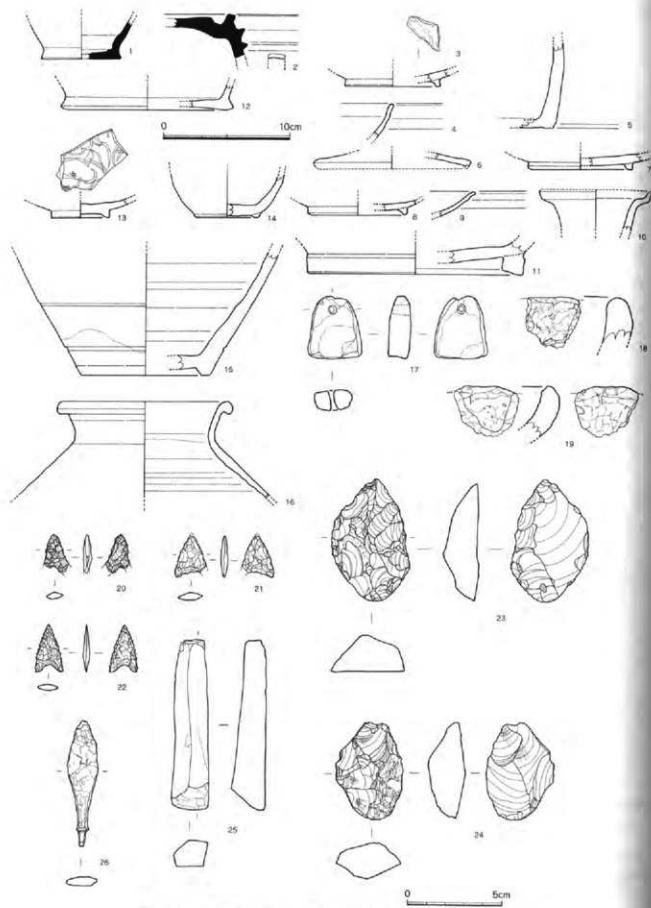


Fig.91 灰褐色土出土遺物実測図 (1/3, 20~25は1/2)

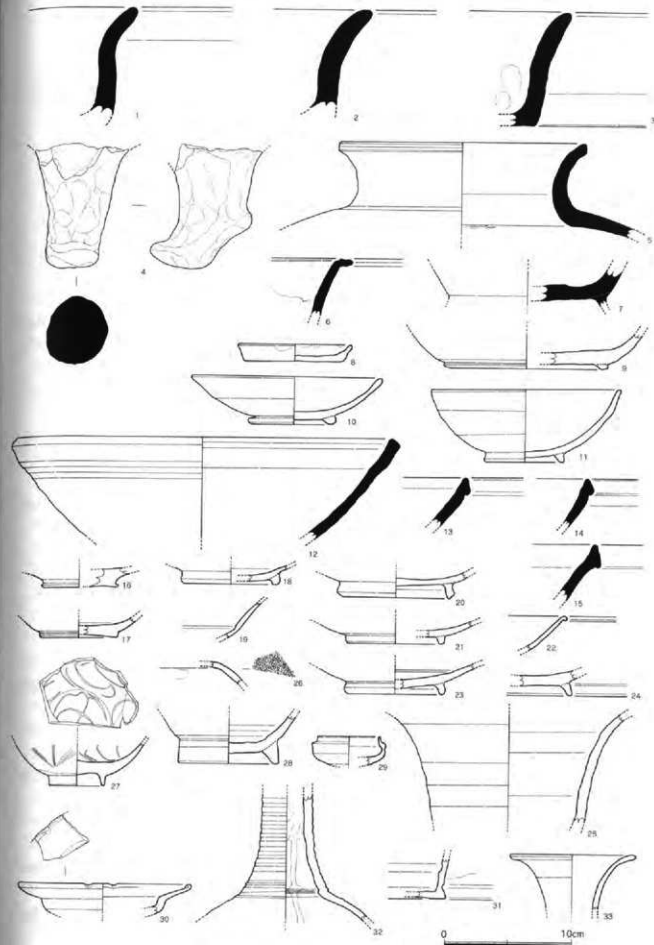


Fig.92 灰茶色土出土遺物実測図① (1/3)

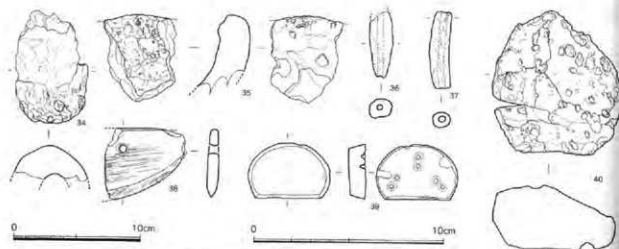


Fig.93 灰茶色土出土遺物実測図② (1/3、38～40は1/2)

S-1107より出土。

碗 (4) 復元高台径8.6cm。体部は丸味があり、体部内面に浅い沈線が巡る。胎土は微細な砂粒を僅かに含み、明灰色～橙色を呈し、土師質。軸は光沢のある明黄緑色である。S-1041より出土。

金属製品

鉄斧 (5) 長さ7.1cm、幅3.25cmで内部は空洞である。全面錆が覆う。S-1012より出土。

土製品

炉壁 (6) 0.6cm以下の白色砂粒を含み、内側から青灰色、白褐色、淡橙褐色を呈する。内面にはヒビが細かく入る。S-568より出土。

石製品

剥片 (7・8) 7は大きさ5.1×6.2cm、厚さ1.8cm。自然面も残す。安山岩製。S-40fより出土。8は大きさ2.6×3.9cm、厚さ1.3cm。安山岩製。S-1037より出土。

石核 (9) 大きさは7.45×4.75cm、厚さ4.3cm。安山岩製。S-515茶色土より出土。

○第3調査面基盤層

236-1SX565出土遺物 (Fig.90)

弥生土器

甕 (1) 復元口径22.8cm、器高37.5cm、底径5.9cm。底部は僅かに丸味を帯びる。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、淡橙灰色を呈する。口縁部はヨコナデ、胴部外面はタテハケで、中位に帯状に煤が付着する。内面は磨滅しているがハケやナデ痕が僅かに確認できる。

236-1SX605出土遺物 (Fig.90)

土師器

小甕 (2) 口径14.8cm。口縁部を肥厚させる。内面ヘラケズリ、外面は僅かにタテハケが残る。全体的に二次焼成で橙褐色を呈する。

弥生土器

甕 (3) 胎土は粗く赤褐色で、底部外面には窪みがある。内面底部にはナデの工具痕が残る。

高环 (4) 復元口径28.6cm。口縁部外面にはヨコハケがあり、煤が付着する。外面には指頭圧痕が残る。

甕 (5) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。胴部外面は平行叩き、頸部および内面はハケ調整である。

瓦類

軒平瓦 (6) 均整唐草文の端部で、頸部はナデ調整。

石製品

石磯 (7) 大きさは長さ2.2cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmでやや風化している。不純物が多い黒曜石。

236-1SX928出土遺物 (Fig.90)

弥生土器

甕 (8) 内外面ハケで、刻み目の突帯を巡らす。

236-1SX938出土遺物 (Fig.90)

弥生土器

甕×壺 (9) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み橙色を呈する。外面は細かいハケ調整。

236-1SX938出土遺物 (Fig.90)

弥生土器

複合口縁壺 (10) 胎土は粗く白色砂粒を多く含む。口縁部ヨコナデ、頸部は内面ヨコハケだが外面磨滅し調整不明。

236-1SX1122出土遺物 (Fig.90)

弥生土器

甕×壺 (11) 内外面磨滅し調整不明。胎土は粗く茶灰白色を呈する。

236-1SX1168出土遺物 (Fig.90)

弥生土器

複合口縁壺 (12) 0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。口縁部外面ヨコハケ、内面ナデ。頸部外面ナデ、内面ヨコハケ。

第236-1次調査その他の土層

第236-1次調査灰褐色土出土遺物 (Fig.91)

須恵器

甕 (1) 復元底径6.2cm。底部外面は回転糸切り。内外面回転ナデ。篠窯産。

円面硯 (2) 方形透かし孔が一部確認できる。硯面は若干滑らかになっている。

緑釉陶器

椀×皿 (3) 復元高台径7.6cm。胎土は0.05cm以下の砂粒を僅かに含み、灰白色を呈する。軸は淡緑色で薄く施軸され、内面には部分的に暗緑色の釉が掛かる。土師質。

椀 (4) 胎土は僅かに細砂粒を含み、暗灰色を呈する。軸は濃い緑灰色で、部分的に剥落している。須恵質。

甕 (5) 胎土は0.1cm以下の白色砂粒や黒色粒を多く含み、白灰色を呈する。土師質。軸は明淡緑色で光沢がある。内外面とも施軸されるが欠落が目立ち、内面下半は薄く掛かっている。

灰釉陶器

蓋 (6) 胎土は灰白色で、軸は灰緑色で外面に厚く施軸され、内面は回転ナデ。

椀 (7) 復元高台径8.3cm。軸は淡緑色で光沢があり、内外面施軸されるが、かなり剥落している。

椀×皿 (8) 復元高台径7.8cm。胎土は白色・黒色の細砂粒を含み、白灰色を呈する。内面にごく僅かに軸が残る。

皿 (9) 軸は緑灰色で、内面施軸、外面下半は回転ヘラケズリで一部施軸される。

甕 (10・11) 10は口縁部を僅かに欠損するが復元口径9.0cm。軸は灰緑色で、内外面とも回転ナデのあと施軸され、内面は剥落が目立つ。11は復元高台径17.0cm。高台は内側がやや浮いた状態。胎

土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。軸は濃緑色で光沢があり、内面と高台外面の一部に施軸する。

長沙窯系青磁

水注(12) 底部外面へラ切り、そのほか内外面は回転ナデ。復元口径13.6cm。

白磁

皿(13) 復元高台径4.6cm。胎土は白色粒などの細砂粒を含み、白灰色を呈し、化粧土が掛かる。軸は黄白灰色で光沢がある。内面にはへら描きの草花文が施されている。広東系。

壺(14・15) 14は低い高台が貼付され、復元高台径5.1cm。胎土は0.15cm以下の白色・黒色粒を含み淡灰色を呈する。軸は淡緑灰色で光沢があり細かい貫入が入る。内外面施軸するが底部は若干剥けています。15は高台が体部と同じ角度で、回転へラケズリで台形に仕上げている。外面は沈線まで施軸し、内面は強いヨコナデの後施軸し、底部は軸が厚く溜まる。高台盤付に付着物がある。胎土は0.05cm以下の黒色粒を含み、白灰色を呈する。復元高台径10.4cm。

中国陶器

壺(16) 復元口径13.8cm。口縁端部は丸く曲げられる。胎土は0.1cm以下の白色粒や赤褐色粒を含み淡灰色を呈する。軸は暗緑色で光沢があり、貫入も入る。内面は胴部が回転ナデで露胎、内面口縁部と外面は回転ナデのあと施軸。

土製品

権(17) 上部に径0.8cmの円孔が穿たれている。大きさは縦4.95cm、幅4.2cm、厚さ1.65cm。全体が磨滅するが、瓦を転用したものとみられる。重さは37.6gである。

トリベ(18・19) 胎土は2点とも軟質で、18は内側から淡紫色、白灰色に変色している。内面は茶褐色部分もある。19は内面に緑色や淡紫色部分がある。

石製品

石鏡(20～22) 20は縦2.0cm、幅1.45cm、厚さ0.35cm。黒曜石製。21は両端で欠損し、現存長2.15cm、幅1.65cm、厚さ0.4cm。黒曜石製。22は縦2.5cm、幅1.5cm、厚さ3.5cm。安山岩製。

尖頭器(23) 縦6.45cm、幅4.1cm、厚さ2.9cm。一部自然面が残る。黒曜石製。

石核(24) 縦5.15cm、幅3.5cm、厚さ2.0cm。一部自然面が残る。黒曜石製。

砥石(25) 縦9.0cm、厚さ1.95×1.35cmと細長く、側面全体に磨痕が残る。

金属製品

鉄鏃(26) 縦9.95cm、最大幅2.45cm、厚さ0.7cm。良好に遺存しているが、全面厚いサビに覆われる。柳葉形で鎌身部中央付近に最大幅がある。

第236-1次調査灰茶色土出土遺物 (Fig.92・93)

須恵器

盤(1～3) 1は胎土が0.35cm以下の白色砂粒を多く含み、焼成・還元良好で淡灰色を呈する。内外面ともヨコナデ。2は全体的に磨滅していて、下部は粘土接合部で欠損する。胎土は0.4cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、淡灰色や淡暗灰色を呈する。3は胎土が0.25cm以下の白色砂粒を含み、焼成は不良で淡灰色や黒灰色を呈する。内外面回転ナデで、外面底部には板状圧痕を残す。

獸脚(4) 0.4cm以下の白色砂粒を含み、白灰色や暗灰色を呈する。焼成は不良で、指頭圧痕は残るが磨滅が目立つ。

甕(5) 復元口径19.6cm。体部内面は叩きの後ナデ。その他はヨコナデ。

甕×壺(6) 破片で全容が掴めない。口縁端部は屈曲させ、つまみ出した突起が巡る。内外面とも

転ナデ。

壺(7) 胎土は0.35cm以下の白色砂粒や黒色粒を少量含み、淡赤灰色を呈する。底部外面はへら切りで、内面底部の一部が粗いナデ、その他は回転ナデ。肥後荒尾産と推測される。

土師器

小皿(8) 口径9.05cm。外面底部は回転系切り。口縁部内外面に部分的に復が付着する。

大甕(9) 低い高台を貼付し、復元高台径13.0cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、淡褐色を呈する。外面は磨滅するが、内面には漆が付着する。

丸底杯(10) 全体的に磨滅しているが、内面に僅かにミガキバが残る。高台は丸味のある低い高台を貼付する。口径15.0cm。

瓦器

甕(11) 口径14.95cm、全面磨滅しているが、内面に僅かにミガキ痕が残る。

須恵土器

鉢(12～15) 12は復元口径31.0cm。内外面回転ナデで、内面下半は不定方向のナデ。13・14は口縁端部を僅かに肥厚させ、外面に沈線状の段が巡る。15は口縁端部を三角形に肥厚させる。

緑釉陶器

椀(16～19) 16は底部系切り。板状圧痕も残る。胎土は淡灰色で、軸は緑灰色で光沢があり、内面に薄く掛かり、外面に僅かに残る。須恵質。17は削り出し高台で復元口径6.3cm。胎土は淡灰色を呈し、全面に光沢のある緑灰色軸を薄く施す。須恵質。18は復元高台径7.8cm。胎土は黒色粒を含み、淡灰色を呈する。軸は全く残っていないが、器面は磨いたようにも見える。須恵質。京都産。19は内面に段を有する。胎土が淡茶灰色で土師質だが焼成は良好。軸は灰緑色で剥落も目立つ。

灰釉陶器

皿(20～22) 20は復元高台径9.2cm。軸は淡緑灰色で内面上部に施軸され、内面底部は露胎で平滑である。外面は回転ナデで露胎。21は復元高台径7.8cm。現存範囲は露胎で、内面底部は回転ナデのあと不定方向のナデで平滑である。内外面回転ナデ。22は回転ナデのあと緑灰色軸を薄く施す。

段皿(23) 復元高台径8.0cm。胎土は淡灰色を呈し、軸は光沢のある淡緑灰色で、内面底部に部分的に軸が掛かる。外面底部は一部軸が掛かる。

椀(24) 胎土は0.15cm以下の砂粒を含み、淡灰色を呈する。内外面回転ナデで、内面底部が平滑である。現存範囲に軸はない。

壺(25) 内外面とも回転ナデのあと光沢のある淡灰白色軸を薄く施す。内面に軸は残る。

新羅土器

甕(26) 小破片で、胎土は0.05cm以下の白色砂粒を僅かに含み、淡灰色や灰白色を呈する。外面は同心円スタンプを施す。

白磁

椀(27) 復元高台径4.4cm。やや細く高い高台を貼付する。軸は灰緑色で細かな貫入が入る。化粧土はない。高台や底部外面は露胎。内外面にへら描き文が施されている。

甕(28) 軸は光沢のある淡緑色で貫入が入る。全面回転ナデで、内面および底部外面と高台盤付は露胎。復元高台径7.9cm。

越州窯系青磁

合子(29) 復元口径4.9cm。軸は光沢のある緑灰色で内外面とも回転ナデのあと薄く施軸する。

唾壺(30) 復元口径13.8cm、体部中位で外側に屈曲させ、口縁端部は内側に折り曲げ丸く仕上げられる。

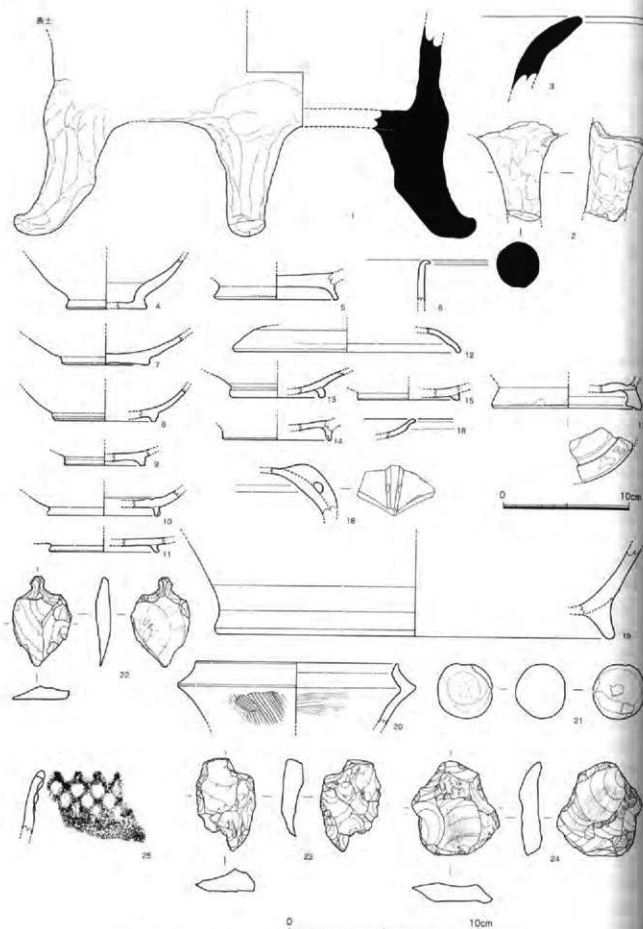


Fig.94 表土その他出土遺物実測図(1/3、22～24は1/2)

端部には輪花状の凹みを付けている。胎土は精製され、緑灰色釉を施軸する。I類。

長沙窯系青磁

水注(31) 外面の一部が淡緑灰色の釉を施軸されるが、その他は回転ナデのあと露胎。

青白磁

壺(32) 軸は光沢のある淡青白色で、外面は施釉され、内面は上部に釉が掛かり、下方へ垂れている。頸部全体に条を巡らす。頸部と胴部の繋ぎ目は内外とも若干の段が付いている。

黒軸陶器

壺(33) 復元口径9.9cm。胎土は僅かに白色や黒色粒を含み、淡灰色を呈する。軸は緑灰色や暗緑灰色で、内外面とも回転ナデのあと施軸される。口縁端部はやや劣化している。

土製品

欄羽口(34) 外面は溶解または変色し、先端部には藍澤が付着する。

トリベ(35) 内面と外面上部は溶解し、暗赤色の藍澤が付着し、内面に緑色粒がみえる。

土鎌(36・37) 2点とも焼成は不良で、36は端部が欠損し、磨滅するが僅かに指頭圧痕が残る。径1.4～1.85cm。37は磨滅するが僅かに指頭圧痕が残る。縦6.05cm、径1.2～1.4cm。

石製品

石包丁(38) 1/3ほどの残片で、円孔が穿たれている。石材は溶結凝灰岩。

石帯丸柄(39) 大きさは縦2.9cm、横4.3cm、厚さ0.9cm。裏面には2個づつ3ヶ所の穴が開く。石材は黒色で粘板岩とみられる。

軽石加工品(40) 大きさは7.7×6.85×3.4cm。表面は研磨され、平坦面を作り出している。

第236-1次調査表土出土遺物 (Fig.94)

須恵器

脚付盤(1・2) 1は盤に脚部が貼付され、盤の底部分で復元底径36.5cm。脚数は不明である。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、淡灰色から暗灰色を呈する。盤の内外面がヨコナデ、脚部はナデ。3と同一個体である可能性が高い。2は脚部で、盤の接合部で欠損する。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、淡青灰色から白灰色を呈する。

盤(3) 盤の口縁部で内外面ヨコナデ。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、淡灰色から淡茶灰色を呈する。

土師器

碗(4) 復元底径6.4cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒などを含み、白黄褐色を呈する。外面底部は回転糸切りで、内面底部はナデ、その他は磨滅し調整不明。

越州窯系青磁

碗(5) 復元高台径9.8cm。胎土は僅かに微砂粒を含みが精製されている。軸は灰緑色で高台登付は露胎、その他は全面施軸。III類。

施軸陶器

壺(6) 口縁部を外側に屈曲させる。全形が掴みにくいが、壺のようなものとみられる。内外面とも回転ヘラケズリで、全面化粧土がある。

緑釉陶器

碗(7～9) 7は復元高台径7.0cm。全体的に磨滅が目立ち、淡緑灰色釉が僅かに残る。土師質で底部は円盤高台。洛北産。8は復元高台径8.0cm、全面に緑灰色釉が掛かり、光沢があり綺麗である。須恵質。洛西産。9は復元高台径6.4cm、高台ケズリ出し。底部外面に軸はなく内面底部と外面には淡緑灰色の釉

が薄く掛かる。京都産。

椀×皿 (10) 胎土は淡灰色で須恵質。内外面に淡緑灰色軸が薄く掛かる。東海産か。

皿 (11) 外開きの低い高台を貼付し、灰緑色軸を全面に掛ける。土師質。防長産。復元高台径8.7cm、灰軸陶器

蓋 (12) 復元口径14.8cm。外面上部が回転ヘラケズリでその他は回転ナデ。外面は灰緑色軸が斑に残り、内面は研磨されている。

椀×皿 (13～15) 13は復元高台径7.6cm。内面には重ね焼き痕が残る。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、淡灰色を呈する。軸は淡緑灰色で、内面底部と外面底部は露胎。14は復元高台径8.6cm。軸は淡灰色で、内面を施軸するが剥離が著しい。東山72×虎漢山1か。15は復元高台径8.0cm。胎土は白灰色で内面のみ灰緑色軸が施される。外面底部は回転ヘラケズリ。

皿 (16) 胎土は0.3cm以下の砂粒を僅かに含み、灰白色を呈する。軸は灰緑色で内外面回転ナデのあと内面だけ施軸する。

壺 (17) 復元高台径12.0cm。高台豊付の外側部分が接するような傾きである。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、淡灰色や明灰色を呈する。軸は緑灰色で、内外面施軸され、高台外面は軸が厚く残る。内面底部と高台豊付に目跡が残る。

耳付壺 (18) 肩部に貼付されたもの。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、白灰色を呈する。軸は光沢のある暗緑色で、内面は回転ナデで露胎である。

弥生土器

甕 (19) 復元高台径31.6cm。胎土は0.6cm以下の砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。全面磨滅する。

壺 (20) 二重口縁壺で復元口径16.0cm。口縁部はヨコナデ、頸部内外面はハケ調整である。

土製品

丸玉 (21) 4.3×3.85cmの球体で、胎土には角閃石が少量含まれるが精製されている。色調は暗灰色～白灰色を呈する。

石製品

石匙 (22) 縦4.75cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm。安山岩製。

刺片 (23・24) 23は大きさ4.85×3.1cm、厚さ1.15cm。チャート製。24は大きさ5.0×4.65cm、厚さ1.2cm。やや風化し稜が取れている。二次加工あり。黒曜石製。

第236-1次調査出土遺物 (Fig.94)

縄文土器

深鉢 (25) 口縁端部と外面に刻目などを施文する。胎土は赤褐色で細かい滑石粉を多く含む。阿高系。整理段階の手違いで出土遺構が不明になった。

2、第236-2次調査

(1) 調査に至る経過

県道観世音寺二日市線及び市道新設に伴う調査で、詳細は第236-1次調査の項で前述したとおりである。調査は遺構密度が大きい太宰府線より北側を第236-1次調査とし、南側を第236-2次調査として調査を行った。第236-2次調査地は太宰府市朱雀2丁目340-1である。

調査費用については、県道部分を福岡県が負担し、その他市道部分は市費で行った。第236-2次の発掘調査は2005(平成17)年1月26日から2005(平成17)年6月8日にかけて実施した。調査は宮崎亮一と柳智子が担当した。調査面積は1705m²である。

(2) 基本層位

地表から約0.6～1mほどは西鉄関連の攪乱層で、この攪乱は一部が地山付近まで達する部分もみられた。その下に耕作土と床土があり、包含層を挟んで整地層に達する。この層位は基本的に北側の第236-1次調査の層位と同様である。地山は柔らかい黄灰色土と黄灰色砂質土で、黄灰色土には上面の整地層が凸凹に食い込んで検出される。この食い込んでいる灰茶色土層(凹凸は遺構番号を付し取り上げている)は第236-1次調査で確認されていた1面目の基盤層と同じとみられ、第236-1次調査南端部ではその基盤層直下に3面目が検出されていたため、この第236-2次調査でも同様であった。

なお、遺構検出時の遺物は茶色土で取り上げている。

(3) 検出遺構

竪立柱建物

236-2SB060 (Fig.96)

調査区南端付近で検出され、西側は調査区外へと続いていて、2005年に行った第251次調査で、その延長部を確認し、南北3間×東西2間の総柱の建物であることが確定した。振れはN-2°17'-E。柱間は南北が約1.88～2.08m、東西が約2.36mを測る。掘り方は一辺0.8～1mほどの方形を呈し、深さは0.3mほど残っている。掘り方」には径0.2～0.3mの柱痕が高さ0.3mほど残っていた。この柱痕は分析を行い、詳細な分析結果は第V章のとおりである。

溝

236-2SD005

調査区を南北に走る溝。方位はN-3°42'-Wであるが、埋土は灰色土で遺物から近代以降のもので、

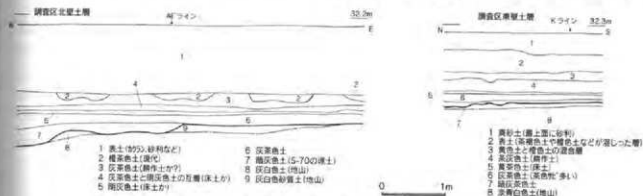


Fig.95 第236-2次調査区土層実測図 (1/60)

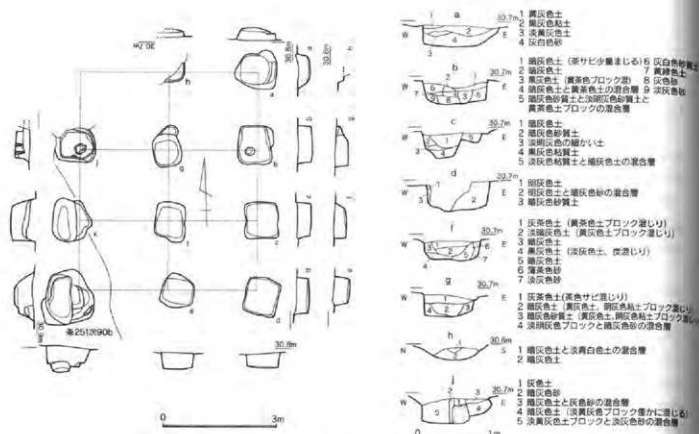


Fig.96 236-2SB060遺構実測図 (1/100、土層図1/50)

操車場建設直前まであった南北道路の側溝か。検出長34m、深さは約0.1mのU字形を呈する。

236-2SD035

方位はE-0° 29' -Sの東西溝で、調査区西端であるため、検出長は4.4m、深さは約0.2mで、底面はやや凸凹している。

236-2SD080

方位は約N-8° 30' -Wのやや西向きの南北溝で、検出長は約11.5m、深さは約0.15mを測る。

井戸

236-2SE001 (Fig.97)

大きさは東西1.15m、南北1.15m、深さ1.25mを測り、丸味のある方形をしている。井戸枠などの施設は残っていなかった。埋土は全体的に炭が混じり、最下層の灰茶色粘土には木片や腐食土がみられ、獣骨も混じていた。

236-2SE030 (Fig.97)

径0.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.85mだが、深さ0.46mで中段があり、その底に径0.36mほどの円形掘り込みがあり、湧水はみられないが、曲物の痕跡である可能性が考えられる。

236-2SE050 (Fig.97)

掘り方は径1.2m、深さ1.08mの隅丸方形である。遺構検出時点で井戸枠の方形プランと隅柱が確認された。井戸枠は大ききの不統一な縦板が使用され、東側6枚、西側4枚、南側約4枚、北側3枚あり、現在している範囲では上下2段分の横棧によって押えられていた。上部の横棧は径0.02mほどでかなり腐食した状態であった。下段の横棧は方形に加工された角材で、それぞれホゾで組まれ、その内法は0.63~0.68mであった。中央には径0.41~0.43mの曲物が2段形で据えられていた。曲物周囲は平瓦が立てた状態で敷き詰められていた。平瓦は欠損は少ないものの、変形が目立つため、不良品が用いられたものと推測される。

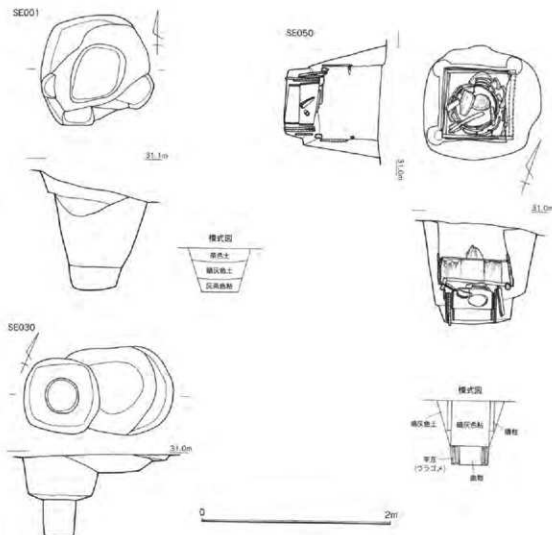


Fig.97 第236-2次調査井戸実測図 (1/40)

と推測される。曲物内からは汲み上げ用とみられる曲物が出土し、曲物検出面のレベルから滑石製石塔の残欠が出土した。

土坑

236-2SK010 (Fig.98)

大きさ1.6×1.8m、深さ0.5mの円形の土坑である。埋土はほぼ単層だが、下層がやや砂質である。

236-2SK015 (Fig.98)

大きさ2.1×1.6m、深さ0.73mの楕円形の土坑である。埋土は大きく2層で下層に奈良時代の遺物が多く、上層にはXII期前後の遺物が多く出土する。

236-2SK025 (Fig.98)

大きさ1.6×1.4m、深さ1.07mの円形の土坑である。トレンチによって切られている。埋土の中央の土質が異なっており、堆積中の沈み込みが窺える。形状から井戸の可能性も考えたが、雨水等の染み込みが速く、とても湧水または貯水は不可能とみられ、土坑として報告する。

236-2SK040

東西1.58m、南北2.05m、深さ0.25mの楕円形の土坑である。埋土は暗灰色土で底面には埋土がやや凸凹に食い込んでいた。

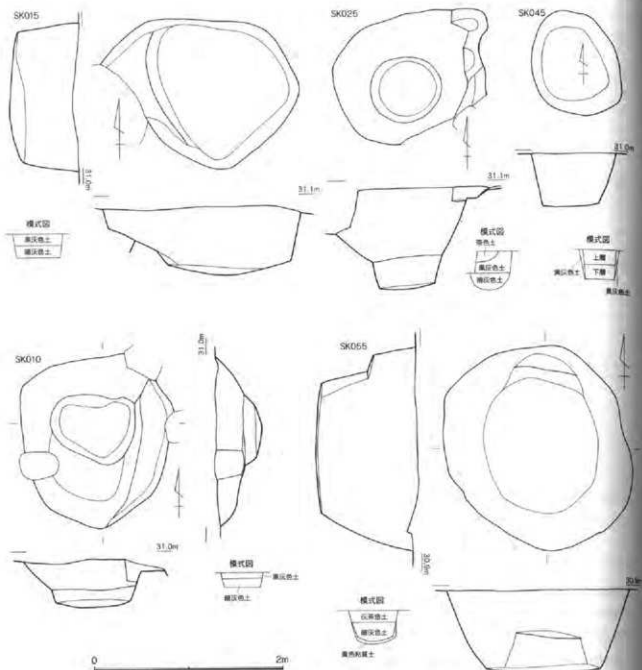


Fig.98 第236-2次調査土坑実測図 (1/40)

236-2SK045 (Fig.98)

東西0.96m、南北1.15m、深さ0.68mの楕円形の土坑である。埋土は暗灰色粘質土で、地山との境に黄灰色土があり、調査時はきれいに捲ける状態であった。埋土中に木片が少量出土したため、井戸の可能性も考えられる。

236-2SK055 (Fig.98)

大きさ2.0×2.2m、深さ0.88mの楕円形の土坑である。遺構検出時は井戸とみられたが、井戸枠などの残骸すら出土しないこと、壁際に地山と似ている埋土が自然堆積した状況とみられるから井戸ではなく、土坑と推測される。

236-2SK085

東西2.6m、南北3.05m、深さ0.7mの不定形の土坑で、SD080との切り合いが不明瞭である。埋土はほぼ暗灰色土の単層である。

その他の遺構

236-2SX070

調査区北西隅で検出されたが、上面は表土剥ぎの段階で、重機によって除去している。底面はかなり凸凹していて、暗灰色粘質土で埋まっていた。南北幅約20m、深さは約0.8mを測る。大きさや部分的に粘土層が残っていることから、土取りの跡と推測される。

236-2SX032

大きさは0.5～0.52m、深さ0.5mの円形ピットである。

236-2SX034

大きさは0.66～0.68m、深さ0.25mの円形ピットである。

236-2SX038

大きさは0.26～0.3m、深さ0.4mの円形ピットである。

236-2SX020

南北6.0m、東西3.0m以上で、西側は調査区外に続く。深さ0.05～0.15mと浅く、土坑というより窪みのような状況である。埋土は灰色土である。

その他にも同様の埋土で、不定形な土坑が調査区中央付近の軟弱地盤を中心に検出された。

(4) 出土遺物

溝

236-2SD005出土遺物 (Fig.99)

龍泉窯系青磁

椀 (1) IV類。

肥前系磁器

椀 (2～5) 青色で文様を施した染付である。2は復元高台径5.5cm、3は高台畳付が露胎。復元高台径3.9cm。4は高台畳付と高台内面に付着物がある。5は内面露胎。

国産陶器

急須 (6) 茶蓋し穴が3つ開けられている。外面は乳白色の釉を施すがかなり剥落している。

236-2SD035出土遺物 (Fig.99)

須恵器

坏c (7) 灰白色の胎土で、体部はやや丸味があり、内面は不定方向のナデを施す。

土師器

甕 (8) 口縁部内面はハケ、体部は内面ヘラケズリ、外面タテハケ。口縁部との境は明瞭な稜線を有する。

236-2SD080灰茶色土出土遺物 (Fig.99)

土師器

小皿a (9) 内外面とも摩滅が著しい。

丸底坏 (10・11) 口縁部を僅かに外反させる。

黒色土器

椀 (12・13) 12は体部下半に指頭圧痕が、内面にはミガキが残る。復元口径14.0cm。13はやや外

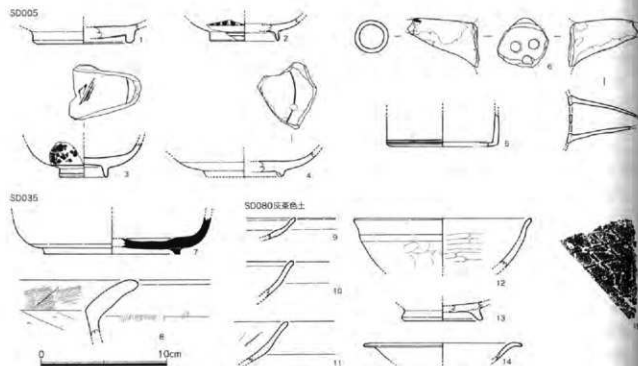


Fig.99 第236-2次調査溝出土遺物実測図 (1/3)

開きの高台を貼付する。復元高台径6.3cm。

白磁

椀 (14) 胎土は淡白灰色で、やや緑がかかった淡灰白色釉を施す。口縁部は大きく外反する。復元口径12.5cm。

瓦類

破片 (15) 菱形の斜格子。

井戸

236-2SE001茶色土出土遺物 (Fig.100)

土師器

小皿a (1~7) 口径9.8~10.8cm。器高1.2~1.8cm。底径7.5~8.8cm。底部回転ヘラ切り。

丸底坏a (8) 口径15.0cm。器高4.1cm。内面ミガキbで、上部にコテ当て痕残る。

黒色土器

椀c (9) 復元口径16.2cm。器高5.3cm。高台径6.9cm。内外面に細かいミガキ。B類。

236-2SE001暗灰色土出土遺物 (Fig.100)

土師器

小皿a (10~17) 口径9.4~10.4cm。器高1.0~1.3cm。底径5.8~8.8cm。確認できるものは全て底部回転ヘラ切り。

丸底坏 (18~20) 全体的に磨滅が目立つが、体部中位でやや屈曲し外反している。

黒色土器

椀c (21) 三角形の低い高台を貼付し、内外面にミガキcを施す。高台径6.2cm。

236-2SE001灰茶色粘土出土遺物 (Fig.100)

土師器

小皿a (22・23) 口径10.6cmと9.6cm。底部は回転ヘラ切り。

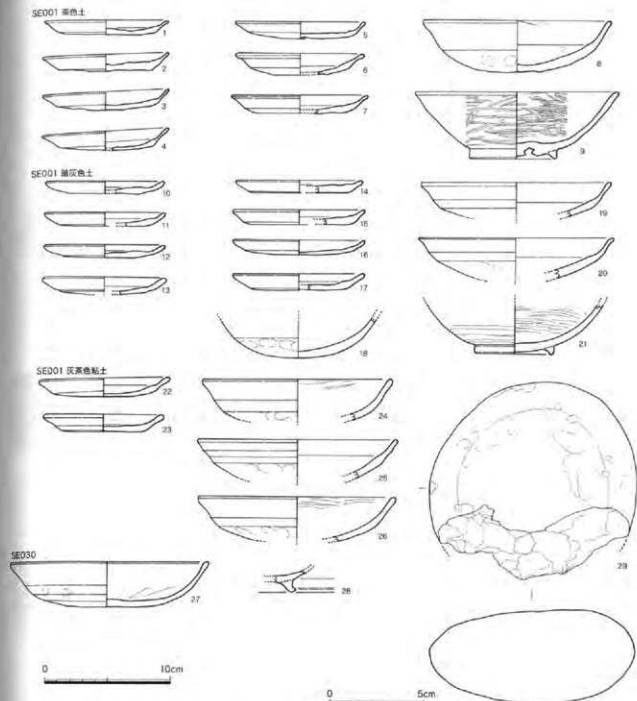


Fig.100 236-2SE001・030出土遺物実測図 (1/3, 29は1/2)

丸底坏 (24~26) 体部下半に指頭圧痕が残る。内面下半を中心にミガキbが確認できる。

236-2SE030出土遺物 (Fig.100)

土師器

丸底坏a (27) 全体的に丸味があり、内面にミガキbを施す。復元口径16.0cm。器高3.6cm。

黒色土器

椀c (28) 高台は端部を外側に跳ね上げている。

石製品

磨石 (29) 大きさは10.8cm×10.3cm、厚さ4.8cmの円形で、一部欠損している。部分的に火を受けて黒色に変色している。石材は礫岩。

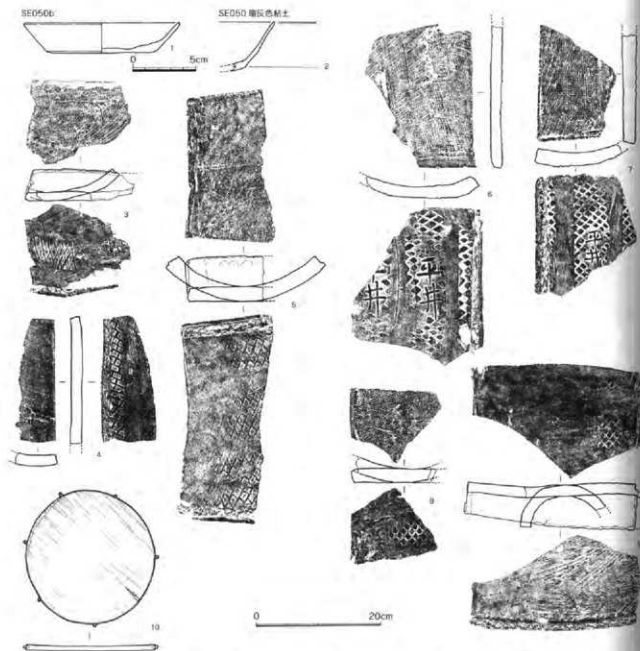


Fig.101 236-2SE050出土遺物実測図 (1・2は1/3、1/6)

236-2SE050b出土遺物 (Fig.101)

土師器

坏a (1) 複元口径12.3cm、器高2.4cm。

236-2SE050暗灰色粘土出土遺物 (Fig.101・102)

土師器

坏a (2) 全体的に磨滅が目立つが、底部がやや出っ張っている。色調は淡黄色を呈する。

瓦類

平瓦 (3～8) 3は横長の格子叩きで一部二重になっている。4・5はウラゴメに使用された平瓦と同じく不整合な格子と三角形を組み合わせた叩き。6～8は斜格子が陰文で、6・7は「平井」銘がある。

丸瓦 (9) 斜格子が陰文。内面には布目痕と弓切痕が残る。

木製品

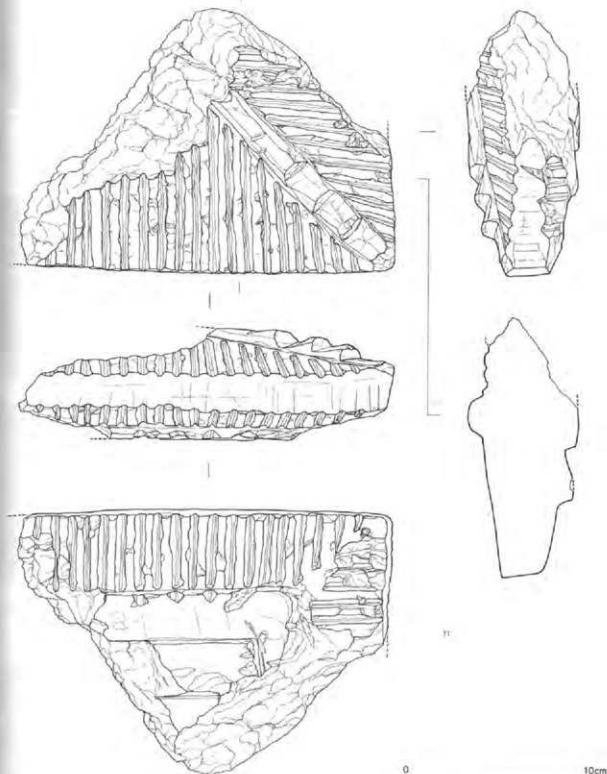


Fig.102 236-2SE050暗灰色粘土出土遺物実測図 (1/2)

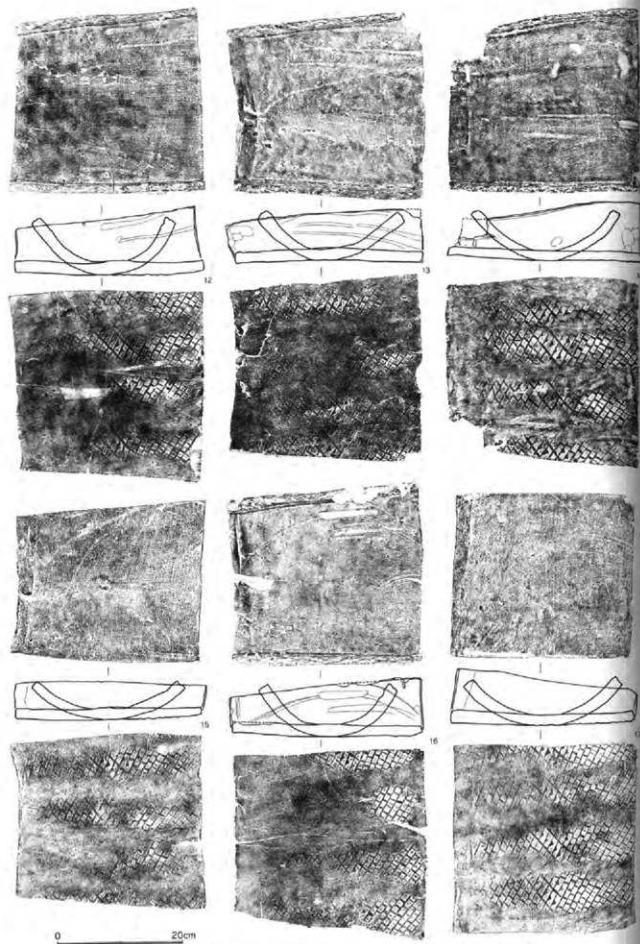


Fig.103 236-2SE050ウラゴメ出土遺物実測図① (1/6)

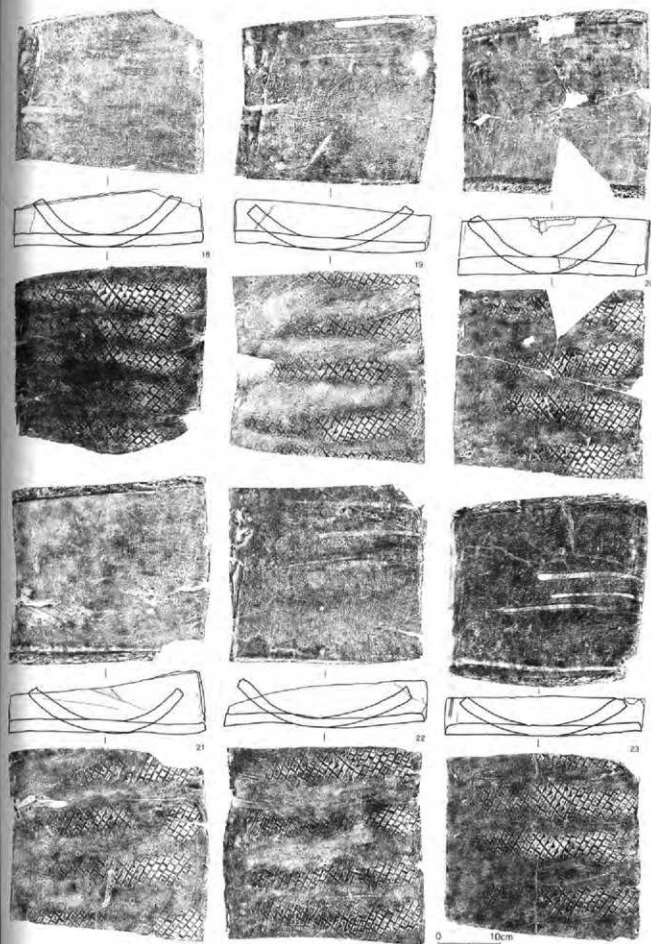


Fig.104 236-2SE050ウラゴメ出土遺物実測図② (1/6)

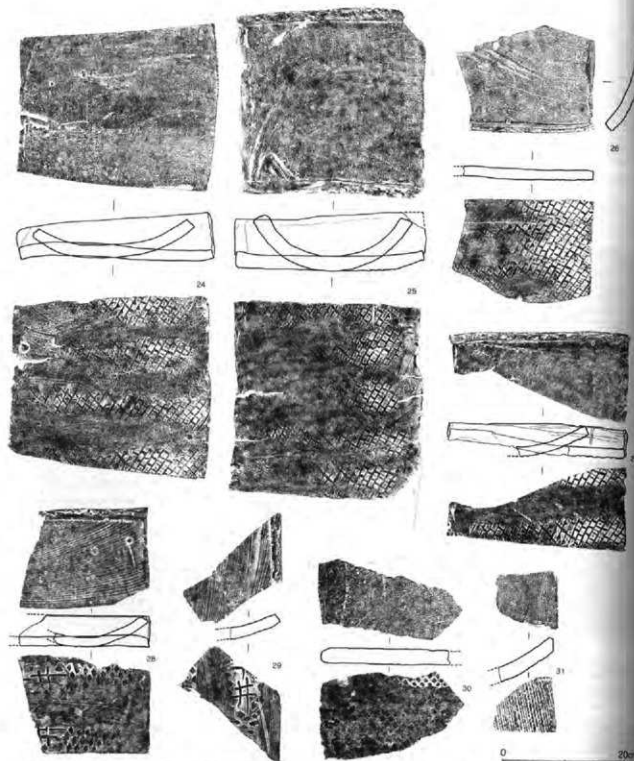


Fig.105 236-2SE050ウラゴメ出土遺物実測図③ (1/6)

- 曲物底板 (10) 曲物の側板を留める7ヶ所(6ヶ所に木釘残存)の木釘穴がある。径21.8cm。
石製品
滑石製屋蓋 (11) 屋蓋の側板部分の破片で、大きさは19.8cm×14.0cm、高さ5.8cmで、石材は淡い緑色を帯びた滑石製である。
屋根は緩い傾斜で作られ、約1cm間隔で溝を掘り、断面台形状に丸瓦を表現しているが、瓦塔などで見えるような瓦一枚毎を表現した割り出しはなく、平瓦の表現も全くない。また、軒先瓦の表現も全くなく、

平坦に仕上げている。屋根の降棟には鬼瓦を模した3段の段差が作られている。側面から見ると降棟の先端部に向かって若干上方に反りが認められる。

裏側は屋根と同じく約1cm間隔で溝を掘り、断面台形状に垂木を表現している。垂木は平行(平行垂木)に並んでいる。先端部分には風弾などを仮め込むための径0.4cm、深さ1cmの円孔が彫られている。垂木の内側にある桁のような部分には1.9cm間隔で刻み目がみられる。

この遺物以外に破片の出土はなく、残存部分からも全体形状を復元することは困難である。表面に残るケズリなどの加工痕は明瞭に確認でき、風雨に晒された感じは受けないため、製作後早い段階で破棄されたか、屋内にあった可能性が考えられる。

236-2SE050ウラゴメ出土遺物 (Fig.103~105)

瓦類

平瓦 (12~31) 12~27は殆どが完形に近く、焼成も良好であるが、歪んでいるものが多く、不良品であったとみられる。大きさは、縦31cm前後、横25cm前後、厚さ2cm前後である。外面の叩きは長方形を組み合わせたもので、長辺方向には並んでいるが、短辺方向には並んでいない不統一な叩き目を示す。格子の中に一部三角形を作っている。28~30は斜格子が陰文で、30は正格子に近い。28・29は「平井」路がある。31は縄目叩き。

土坑

236-2SK010黒灰色土出土遺物 (Fig.106)

須恵器

蓋c3 (1) つまみは欠損。外面天井部回転ヘラケズリ、その内面はナデ。復元口径14.6cm。

蓋3 (2) 外面は口縁部近くまで回転ヘラケズリ。

椀c (3) 体部に丸味があり、やや外開きの高台を貼付する。内面底部付近は粗いナデ。

皿a (4) 小片であり、口径復元にはやや無理があるが、20.0cmを測る。全面回転ナデ。

土師器

甕 (5) 体部内面はヘラケズリ、外面タテハケ、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。胎土には金雲母を含み、色調は外面茶褐色、内面暗茶黒色を呈する。

236-2SK010暗灰色土出土遺物 (Fig.106)

須恵器

高坏 (6) 酸化し茶褐色を呈する。内外面とも回転ナデ。復元底径は7.4cm。

236-2SK015黒灰色土出土遺物 (Fig.106)

土師器

小皿a (7~10) 復元口径8.7~9.5cm、器高0.7~1.7cm。底部ヘラ切りで、内面はナデ。

丸底坏a (11) 外面は器面がやや荒れている。下半に僅かに指頭圧痕が残る。内面にミガキbを施す。黒色土器

椀 (12) 外面は器面が荒れていてミガキの残りは悪い。内面はミガキc。

236-2SK015暗灰色土出土遺物 (Fig.106)

須恵器

坏 (13) 内外面とも回転ナデ。

高坏 (14) 脚部は内外面とも回転ナデ。坏部内面はナデを施す。焼成はやや不良である。

土師器

坏 (15) 内外面とも丁寧な回転ナデを施す。胎土は砂粒を僅かに含み橙褐色を呈する。

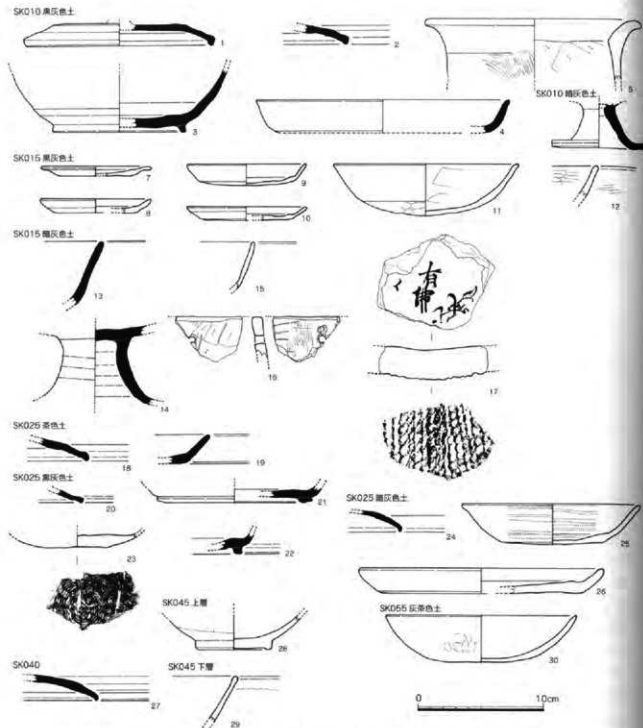


Fig.106 第236-2次調査土坑出土遺物実測図① (1/3)

甕 (16) 小片のため全形が不明瞭だが、甕の一部と判断した。径0.5cmの円孔を穿ち、その上に同じ大きさの穴があるが貫通はしてない。そして、横方向のサイズもみられる。内面はヘラケズリ、外面は細かいハケ。胎土は白色砂粒を含み茶褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (17) 表に墨書があり、「有佛」のほかに「イ」のような文字、そして、もう1ヶ所文字が書かれているが、重なり合っているため、詳細は不明である。一部文字として認識し難い部分があるため、習書や筆慣らしである可能性も考えられる。裏面は縄目叩きである。焼成は不良で白灰色を呈する。

236-2SK025茶色土出土遺物 (Fig.106)

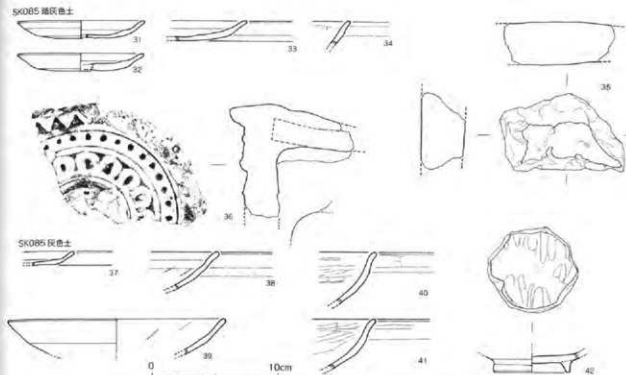


Fig.107 第236-2次調査土坑出土遺物実測図② (1/3)

須恵器

蓋3 (18) 外面の上半部にはヘラケズリの後未調整。

皿a (19) 全面回転ナデ。

236-2SK025黒灰色土出土遺物 (Fig.106)

須恵器

蓋3 (20) 口縁端部は三角形状につまむ簡単な成形している。

坏c (21・22) 21は還元焼成が不良で、つぶれた高台を貼付する。22は方形の高台を貼付する。

縄文土器

壺? (23) 砂粒を含むが比較的精製されていて、橙褐色を呈する。網目籠に粘土を押し込んで作ったとみられる土器である。焼成がよく縄文土器ではない可能性もある。

236-2SK025暗灰色土出土遺物 (Fig.106)

須恵器

蓋3 (24) 体部上半部は回転ヘラケズリの後ナデ調整。

土師器

坏d (25) 内外面とも回転ナデの後ミガキaを施す。底部は回転ヘラケズリ。

皿a (26) 内面底部はミガキ気味の強いナデ。外面底部はヘラ切りの後ナデ調整。

236-2SK040出土遺物 (Fig.106)

須恵器

蓋3 (27) 口縁端部が僅かに三角形状につまんで成形している。外面上部は口縁部近くまで、回転ヘラケズリが施されている。内面はヘラケズリと対応して不定方向のナデを施す。

236-2SK045上層出土遺物 (Fig.106)

白磁

椀 (28) IV-1a類。

236-2SK045下層出土遺物 (Fig.106)

灰釉陶器

椀 (29) 淡灰緑色の釉が薄く掛かり、非常に細かい貫入が入る。

236-2SK055灰茶色土出土遺物 (Fig.106)

土師器

丸底杯a (30) 全体的に磨減しているが、体部下平に指頭圧痕が残る。

236-2SK085暗灰色土出土遺物 (Fig.107)

土師器

小皿a (31～33) 全て底部は回転ヘラ切り。口径は31が10.0cm、32が10.1cm。

灰釉陶器

椀 (34) 口縁端部で僅かに外反する。内面に釉がみられるが端部は露胎。

土製品×瓦類 (35) 表面が劣化しているため、全容が不明だが、埴か瓦の残片かもしれない。胎土は灰茶白色で砂粒を多く含む。内外面には工具によるナデ痕と布目痕が残る。厚さ3.5cm。

瓦類

軒丸瓦 (36) 複弁で内縁に珠文、外縁は鋸歯文で、中房は剥落して不明瞭。

236-2SK085灰色土出土遺物 (Fig.107)

土師器

小皿a (37) 内面に不定方向ナデ。

丸底杯 (38・39) 体部は明瞭な内面にミガキbのコテ当て痕が残る。

黒色土器

椀 (40・41) 2点とも口縁端部を外反させる。回転ナデのあとミガキc。B類

椀c (42) 内面底部に手持ちのヘラミガキを施す。高台径6.0cm。

その他の遺構

土取り遺構

236-2SX070出土遺物 (Fig.108)

白磁

椀 (1・2) 1はII類。2はIV類。

同安楽系青磁

皿 (3) I類。復元口径12.8cm。小片のため復元径がやや正確性に欠ける。

緑釉陶器

皿 (4) 須恵質で、削り出しの円盤高台。底部外面は削り出し後丁寧なナデ、内面も丁寧にナデられている。釉は全く残っていない。復元底径6.4cm。京都系。

瓦類

平瓦 (5・6) 5は斜格子が陰文で、大きめの「平井」路がみられる。6は細長い不規則な格子叩き。

ピット

236-2SX032出土遺物 (Fig.108)

土師器

小皿a (7～11) 全体的に磨減が目立つ。復元口径8.8～10.4cm、器高0.9～1.2cm、復元底径5.9～7.8cm。

丸底杯a (12～16) 12～15は体部中位に屈曲は角どみられない。内面ミガキb。外面下半は底部押し出しで指頭圧痕が残る。復元口径14.8～16.6cm。

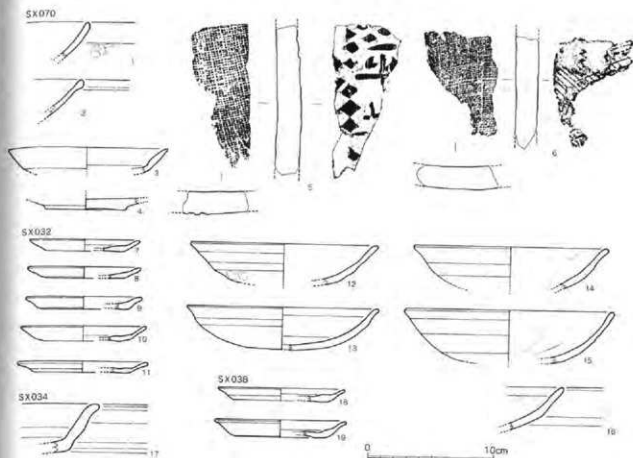


Fig.108 第236-2次調査その他の遺構出土遺物実測図① (1/3)

236-2SX034出土遺物 (Fig.108)

土師器

盤 (17) 小片で全形が掴めないが、盤のような形状をしていたものとみられる。外面下半はナデ、底部内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。口縁端部は黒色を呈する。

236-2SX038出土遺物 (Fig.108)

土師器

小皿a (18・19) 18は底部回転糸切り。復元径10.0cm。19は回転ヘラ切り。復元径10.4cm。

竈み

調査区の中央付近で不定形な竈みが多く確認され、それぞれに遺構番号を付して調査を行った。よって、遺物の時期も微妙に異なるため、統一番号を付せずに調査時のまま報告する。

236-2SX020暗灰色土出土遺物 (Fig.109)

須恵器

杯c (20) 底部外面は回転ヘラ切り後未調整。その中央付近に同心円の墨書が見られる。

土師器

丸底杯a (21) 体部中位に指頭圧痕がみられ、底面に板状圧痕が残る。

236-2SX041出土遺物 (Fig.109)

須恵器

杯c (22～25) 方形の低い高台で復元高台径7.6～10.0cm。25は底部端近くに高台を貼付する。

236-2SX049出土遺物 (Fig.109)

須恵器

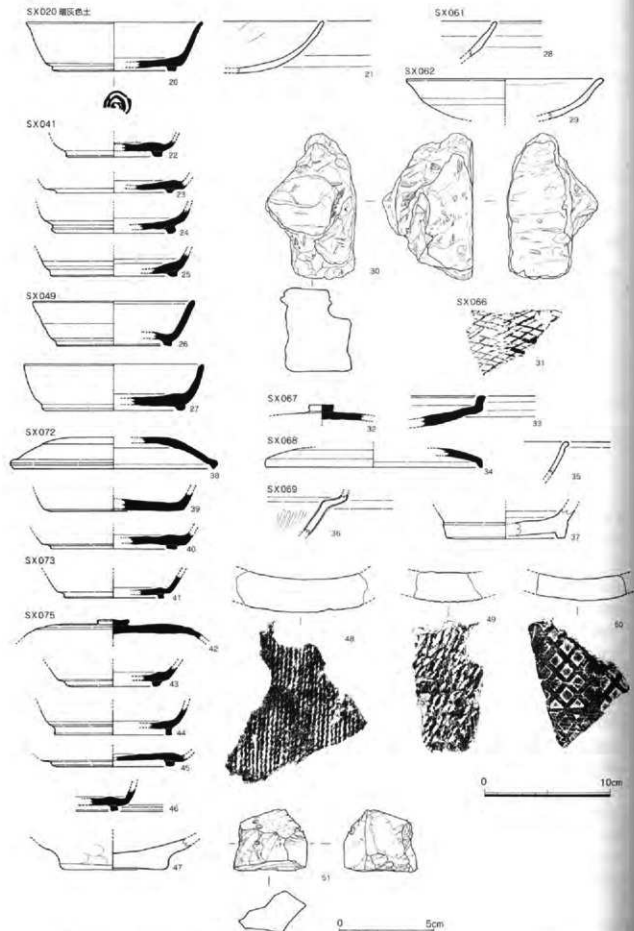


Fig.109 第236-2次調査その他の遺構出土遺物実測図② (1/3、51は1/2)

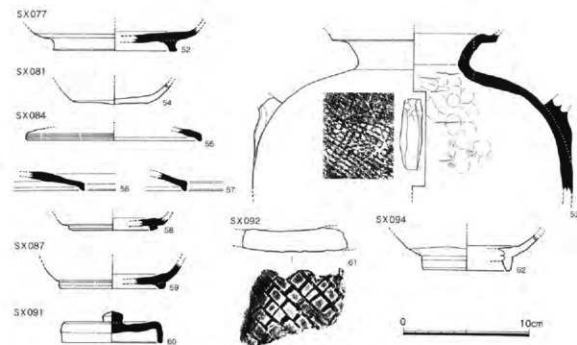


Fig.110 第236-2次調査その他の遺構出土遺物実測図③ (1/3)

环c (26・27) 復元口径12.8cmと14.2cm。底部端近くに高台を貼付する。

236-2SX061出土遺物 (Fig.109)

土師器

丸底环 (28・29) 体部中位で僅かに屈曲する。29は屈曲部分から下に指頭圧痕が残る。

236-2SX062出土遺物 (Fig.109)

土製品

土塊 (30) 全体的に粉やスサ痕跡がみられ、一部棒のようなものがあった痕跡が残る。胎土は0.3～0.5cmの砂粒も含むが、全体的に精製されている。色調は黄橙色を呈する。平坦面もあり、土壁であった可能性が考えられる。

236-2SX066出土遺物 (Fig.109)

瓦類

平瓦 (31) 斜格子。

236-2SX067出土遺物 (Fig.109)

須恵器

蓋c (32) ボタン状のツمامミが貼付され、内面ナデ、外面回転ヘラケズリ。

高环b (33) 环部外面下半は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。

236-2SX068出土遺物 (Fig.109)

須恵器

蓋3 (34) 外面上部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。

白磁

椀 (35) V-3類。

236-2SX069出土遺物 (Fig.109)

龍泉窯系青磁

盤 (36) 皿類。

中国陶器

壺 (37) IV-3b類。

236-2SX072出土遺物 (Fig.109)

須恵器

蓋3 (38) 口縁端部は三角形を呈し、外面頂部は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ。

环a (39) 底部外面は粗いナデで、粘土粗痕跡が残る。内面はナデ。復元底径11.0cm。

环c (40) 低い高台を貼付し、底部は内外面とも丁寧なナデを施す。復元高台径9.9cm。

236-2SX073出土遺物 (Fig.109)

須恵器

环c (41) 底部内面は粗いナデ。復元高台径7.9cm。

236-2SX075出土遺物 (Fig.109)

須恵器

蓋c (42) 外面上部は回転ヘラケズリ、内面はヘラケズリに対応してナデがみられる。

环c (43~46) 復元高台径7.4~9.6cm、43の体部は外開きになる様子が窺える。44は細い高台で、底部内外面ともナデ。45も底部内外面ともナデ。46は方形高台を簡単に貼付する。

弥生土器

甕 (47) 復元底部径8.6cm。全体に器面はかなり荒れている。部分的に指頭圧痕や一次焼成の変色が見られる。

瓦類

平瓦 (48~50) 48は細かい縄目叩き。49は粗い縄目叩き。50は正方形のやや太い格子叩き。

石製品

剥片 (51) 大きさは3.2×3.8×2.2cmで、一部自然面が残る。安山岩製。

236-2SX077出土遺物 (Fig.110)

須恵器

环c (52) 復元高台径9.8cm。内面は平行ナデ。

壺 (53) 口縁部は屈曲し二重になっていて、端部を欠損する。耳部が1ヶ所残存する。外面は叩きの後ナデ、内面は雑なナデで、布目痕が残る。全体的に器面が荒れている。

236-2SX081出土遺物 (Fig.110)

土師器

环a (54) 全体的に磨滅している。底径5.3cm。

236-2SX084出土遺物 (Fig.110)

須恵器

蓋3 (55~57) 55は復元口径13.8cm。56は上面が回転ヘラ切りのあと雑なナデ。

环c (58) 高台は方形で外側を若干上げている。復元高台径7.0cm。

236-2SX087出土遺物 (Fig.110)

須恵器

环c (59) やや丸味のある体部で、その端部に高台を貼付する。内面ナデ。復元高台径8.4cm。

236-2SX091出土遺物 (Fig.110)

須恵器

壺蓋 (60) 口縁端部を内側に斜めに作っている。径8.0cm、器高2.4cm。

236-2SX092出土遺物 (Fig.110)

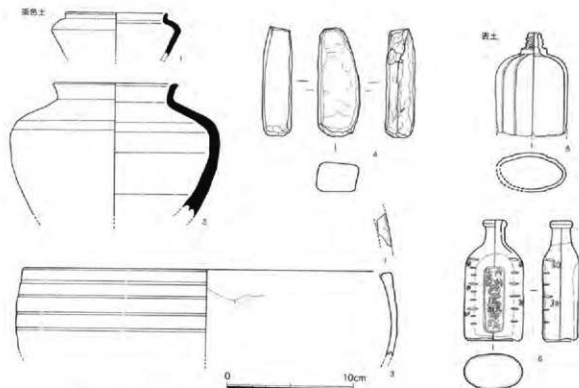


Fig.111 第236-2次調査茶色土・表土出土遺物実測図 (1/3)

瓦類

平瓦 (61) 不整合で形が不統一な格子叩きである。

236-2SX094出土遺物 (Fig.110)

白磁

碗 (62) V類。

第236-2次調査茶色土出土遺物 (Fig.111)

須恵器

短頸小壺 (1) 復元口径8.0cm。内外面とも回転ナデ。

壺a (2) 復元口径9.8cm。内外面とも回転ナデ。内外面の一部には自然軸がみられる。

輸入陶磁器

鉢 (3) 広東系白磁もしくは長沙窯系青磁。口縁部内面上部が露胎。口縁部上面に目録が残る。外面に条痕を巡らす。胎土は少量の黒粒が入り、釉はやや黄色味を帯びた白色で、細かく貫入が入る。口縁部内面上部が露胎。復元口径28.8cm。

土製品

棒状土製品 (4) 長さ8.6cm、幅3.3cm、厚さ2.3cm。側面に接合痕がみられる。全体はナデで、焼成は硬質。

第236-2次調査表土出土遺物 (Fig.111)

国産磁器

瓶 (5) 白色の陶器で、薬瓶とみられる。

ガラス製品

瓶 (6) 薬瓶で、表面に「内科 小児科 西尾醫院」と刻まれている。

第236-2次調査横乱出土遺物 (Fig.112)

礎石 (1) 大きさは105×67cm、厚さ59cm。表面には柱座が彫られていて、下端径65cm、上端径

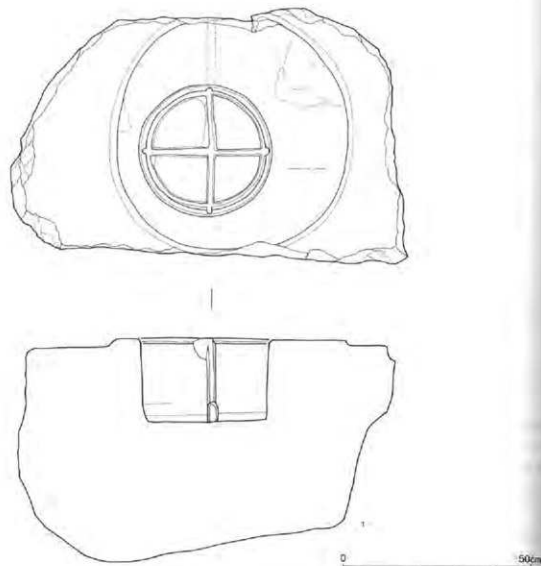


Fig.112 第236-2次調査攪乱出土遺物実測図(1/10)

62cm、高さ2cm前後を測る。柱座の中央付近には径34.5×35.5cmの穴が彫り込まれている。穴の上面は0.7cm程の段が巡らされている。穴の底には幅1.5cm、深さ1cm前後の溝が十字に彫られ、側面にも伸びている。そして、下端の1ヶ所に幅2.5cm、高さ5cmの楕円形の孔が穿たれ、13.5cmで貫通している。花崗岩製。柱座の大きさは筑前国分寺など市内で確認できる礎石と同規模である。中央の穴は近代以降に何かの柱を立てるために掘られたものと推測され、孔は水抜き機能を持っていたと推測される。よって、これは礎石の転用と推測される。

第236-2次調査地表土採集遺物

この調査地において、近現代の攪乱が多く見られたが、その攪乱や表土からガラス製のラムネ瓶が3個表採され、現在筑紫野市在住の個人が所有されている。ラムネ瓶には「登録 飛梅 商標」「此容器他二使用或ハ賣買ヲ禁ズ」底面に「古沢」と刻まれている。このラムネを販売していたラムネ工場は、現在の五条1丁目の五条交差点の北西角に、戦後すぐまであり、白木原や雑餉隈など近隣地域に馬車や三輪車で販売に行っていた。その後工場はなくなり、金物屋や衣料品店などに変わったが、縦長の建物だけは交差点北幅工事が行われる平成14年まで残っていた。このラムネは当時この地の住人が廃棄したものであろう。

V、第236次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

【1】自然科学分析その1

大宰府条坊跡236次調査では、掘立柱建物跡や井戸跡等の遺構が検出されている。これらの中には柱礎板、井戸枠等の建築部材が残存しているものがある。

本報告では、これらの木質遺物を対象として、遺構の構築年代を明らかにするための放射性炭素年代測定と、木材利用に関する資料を得るための樹種同定を実施する。

1.試料

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、S-570から出土した礎板と考えられる木材2点(①、②)、S-480eの柱痕と考えられる木材1点、S-60jから出土した柱痕1点の合計4点である。S-570①とS-480eの2点は炭化物であり、残る2点は生木であった。

(2) 樹種同定

試料は、S-60jの柱痕、S-600の井戸枠2点(②、③)、S-40mの柱痕と礎板(①、②)、S-40bの柱痕と礎板(②、③)、S-385の井戸横棧の8点である。年代測定のみを実施する、S-570から出土した礎板と考えられる木材2点(①、②)、S-480eの柱痕と考えられる木材1点の3点についても樹種等の由来確認を行う。したがって、合計点数は11点となる。

2.分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じまり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装置し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron QSDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

(2) 樹種同定

生木試料については、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラバゴム粉末、グリセリン、蒸留水の

混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。一方、炭化物2点については、実体顕微鏡で組織構造の有無を確認し、組織構造が認められた場合には、組織構造の特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にす。また、各種樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にす。

3.結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1、暦年較正結果を表2に示す。各試料の同位体効果の補正を行った年代値は、S-570c①は1,240±30BP、S-570c②は1,240±30BP、S-480eは1,500±30BP、

表1. 放射性炭素年代測定結果

地区	遺構	番号	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
AG-12	S-570	①	炭化物	1,240 ± 30	-29.86 ± 0.57	1,320 ± 30	IAAA-62512
AG-12	S-570	②	生木	1,240 ± 30	-27.74 ± 0.52	1,280 ± 30	IAAA-62513
W-16	S-480e		炭化物	1,500 ± 30	-24.80 ± 0.55	1,500 ± 30	IAAA-62514
F-6	S-60j		生木	1,850 ± 30	-30.84 ± 0.55	1,680 ± 30	IAAA-62515

1)年代値の算出には、Labbeyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
		cal AD	cal AD	cal BP	cal BP		
236-1次 S-570 ①	1,244 ± 29	cal AD 899 - cal AD 762	cal BP 1,281 - 1,168	0.688	IAAA-62512		
		cal AD 761 - cal AD 806	cal BP 1,189 - 1,168	0.207			
		2σ cal AD 693 - cal AD 870	cal BP 1,267 - 1,080	1.000			
236-1次 S-570 ②	1,239 ± 28	cal AD 892 - cal AD 749	cal BP 1,258 - 1,201	0.577	IAAA-62513		
		cal AD 763 - cal AD 782	cal BP 1,167 - 1,168	0.199			
		σ cal AD 768 - cal AD 810	cal BP 1,161 - 1,140	0.179			
236-1次 S-480e	1,500 ± 28	cal AD 847 - cal AD 855	cal BP 1,103 - 1,095	0.045	IAAA-62514		
		σ cal AD 867 - cal AD 871	cal BP 1,263 - 1,079	1.000			
		2σ cal AD 546 - cal AD 598	cal BP 1,404 - 1,352	1.000			
236-2次 S-60j	1,586 ± 32	cal AD 442 - cal AD 453	cal BP 1,508 - 1,497	0.013	IAAA-62515		
		σ cal AD 461 - cal AD 483	cal BP 1,489 - 1,467	0.038			
		2σ cal AD 533 - cal AD 838	cal BP 1,417 - 1,312	0.948			
236-2次 S-60j	1,586 ± 32	cal AD 428 - cal AD 464	cal BP 1,522 - 1,488	0.375	IAAA-62516		
		σ cal AD 482 - cal AD 533	cal BP 1,468 - 1,417	0.625			
		2σ cal AD 410 - cal AD 546	cal BP 1,540 - 1,404	1.000			

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である

5)相対比は、σ、2σのそれぞれとした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

S-60jは1,590±30BPを示す。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。いずれも炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれとした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差σとして計算させた結果、S-570c①はcalAD689-806、S-570c②はcalAD692-855、S-480eはcalAD546-598、S-60jはcalAD428-533である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表3に示す。木

材は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹6種類(ヤマグワ・クスノキ・クスノキ科・ヒサカキ・イスノキ)に同定された。なお、炭化物2点については、組織構造が認められず、種類・由来等は不明である。

同定された各種種の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(Cryptomeria japonica (L.f.) D. Don) スズギスギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的大い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヤマグワ(Morus australis Poir.) クワ科クワ属

環孔材で孔間部は3-5列、孔間外への移行は緩やかで、晩材部でははじめ単列で配列し、後2-4個が塊状または接線方向に複合して配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列。小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

・クスノキ(Cinnamomum camphora (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-10細胞高で、やや階層状に配列する。柔細胞は周囲状〜翼状。柔細胞には油細胞が顕著に認められる。

・クスノキ科(Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

道管径が異なることから、上記クスノキを除くクスノキ科のいずれかと考えられるが、クスノキ以外のクスノキ科は組織がよく似ており、同定に至らなかったためにクスノキ科とした。

・ヒサカキ (Eurya japonica Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2-3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列-階段状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高で、単列の組織が多い。

・イスノキ (Distylium racemosum Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

4. 考察

S-570cの礎板2点は、生木と炭化物が各1点であり、生木はヤマグワ、炭化物は由来不明であるが、年代値は補正年代が2点とも1,240±30BPとなり、暦年較正値もcalAD689-806とcalAD692-855でほぼ同年代を示す。ヤマグワは、強度や耐朽性が比較強い材質を有しており、材質を考慮した木材選択が推定される。また、S-480eの柱痕と考えられる炭化物も組織が観察できず由来は不明である。補正年代値は1,500±30BP、暦年代はcalAD546-598でS-570よりも古い年代を示す。

S-60jの柱痕は、補正年代が1,590±30BP、暦年代がcalAD428-533を示し、今回年代測定を実施した案化でも最も古い年代を示す。柱痕はクスノキ科に同定されたが、本地域に生育するクスノキ科の中で柱材に利用できる強度・大きさを有する種類としては、タブノキ属やヤブニッケイ等が考えられる。本試料には、クスノキ科によくみられる交錯木理が確認できることから加工性は低いが、クスノキ科の木材は全般的に樟腦を含んでおり、耐水性や防虫性がある。

一方、S-40は総柱の掘立柱建物跡であり、柱穴bの礎板2点と、柱穴mの柱痕と礎板について樹種同定を実施した。その結果、柱痕がイスノキ、礎板3点がクスノキ科2点、イスノキ1点に同定された。イスノキは日本産木材としては極めて重硬・緻密で強度が高く、加工は困難である。S-40では、礎板にクスノキ科とイスノキ、柱にイスノキが利用されていたことが推定される。S-40では、このほか柱穴dと柱穴kからも部材が出土していることから、これらの部材についても樹種同定を実施して今回と同様の結果が得られるのか確認したい。

なお、イスノキは、遺跡出土品では、櫛としての事例が多く、柱材に利用された例は少ないが、過去に建築材、柱材、桁材等に出土した例は全て九州地方である(山田,1993)。これは、イスノキが暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、現在の分布の中心が九州にあることから、他地域よりも入手しやすい条件が関係していると考えられる。

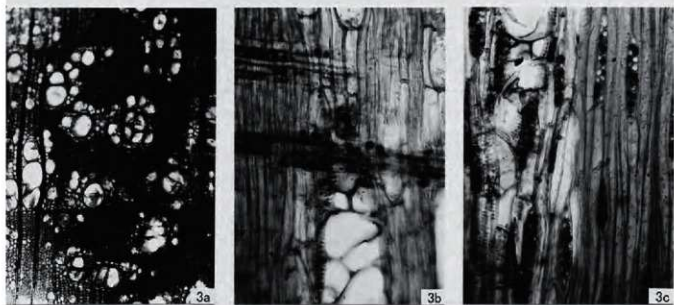
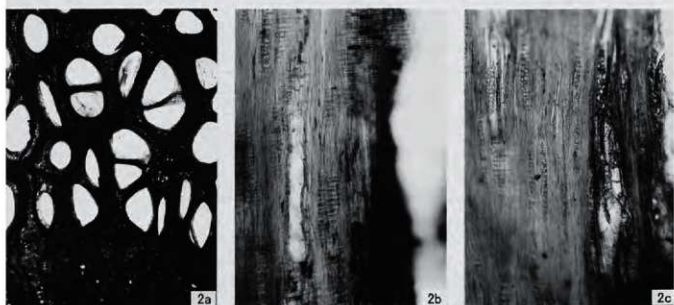
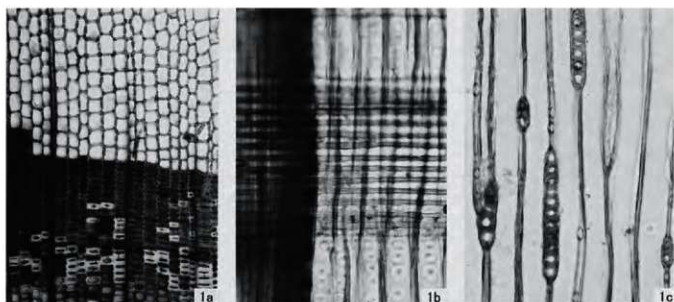
S-600の井戸枠は、スギとクスノキが認められ、少なくとも2種類の木材が利用されていたことが推定される。スギは木理が通直で割製性が高く、加工が容易であり、芯材であれば耐水性も高い。一方、クスノキは、交錯木理がみられ、加工性は低いが、耐水性は比較的高い。井戸枠は使用期間中ずっと水中にあるか、水には浸からないものの湿度の高い環境に置かれることが予想され、耐水・耐湿性のある木材を選択したことが推定される。一方、同じく井戸であるS-385の横板は、ヒサカキに同定され、S-600とは異なる樹種が認められた。ヒサカキは重硬で強度が高いが、クスノキやスギのような大径木になる種類ではない。

大宰府家坊跡では、BC38区の平安時代とされるS-490でも井戸部材の樹種同定を実施している(パリオ・サーヴェイ株式会社,2004)。その結果では、立板と横板がスギ、横木がサカキとユズリハ属で、部位によって樹種が異なる結果が得られている。この結果を考慮すれば、今回の同一井戸内や異なる井戸での樹種の違いも部位の違いが関係している可能性がある。また、S-600が平安前期であるのに対し、

S-385は11世紀以前とされていることから、時期の違い等も影響している可能性がある。

引用文献

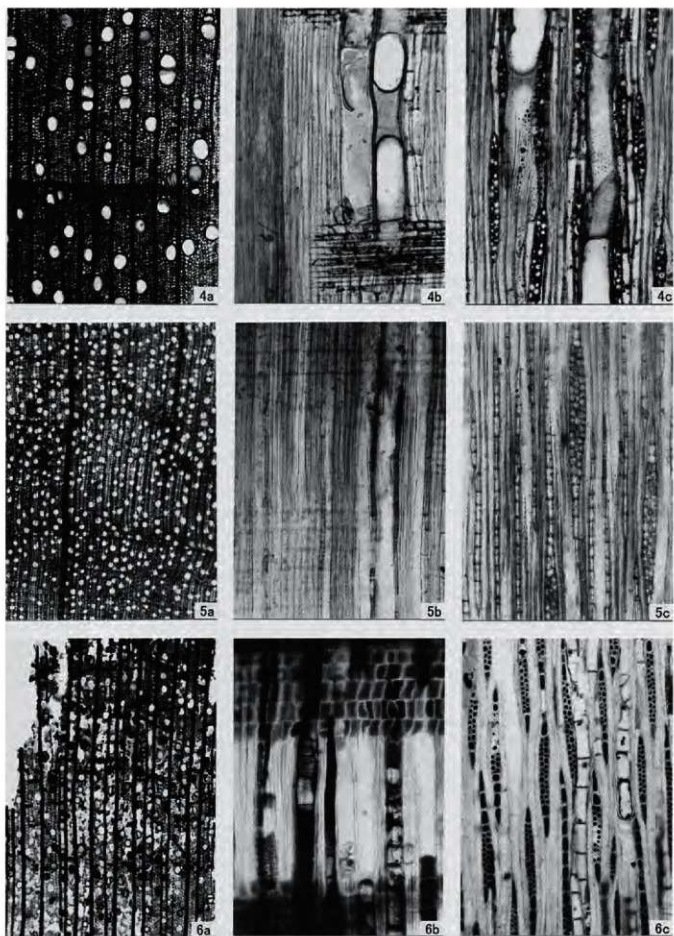
- 林昭三,1991.日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31.京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32.京都大学木質科学研究所,66-176.
伊東隆夫,1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33.京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34.京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35.京都大学木質科学研究所,47-216.
パリオ・サーヴェイ株式会社,2004.樹種同定.「太宰府市の文化財第69集 大宰府家坊跡22 一御垣野・隈野線道路拡幅に伴う調査」,太宰府市教育委員会,221-222.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
島地謙・伊東隆夫,1982.図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
山田昌久,1993.日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 一用材から見た人間・植物関係史.植生史研究特別第1号.植生史研究会,242p.



1. スギ(S-600;③)
 2. ヤマグチ(S-570c;②)
 3. クスノキ(S-600;②)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a-2-3b,c
 100 μ m: 1b,c

写真981. 写真1 木材(1)



4. クスノキ科(S-40m,②)

5. ヒサカキ(S-385,②)

6. イスノキ(S-40m,①)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b, c

写真982. 写真2 木材(2)

【2】自然科学分析その2

今回の大府府条跡跡236次調査に伴う自然科学分析は、次のような目的で実施する。S-315遺構の年代観に関する情報を得るために、放射性炭素年代測定を実施する。黒色粘土の成因を検討するために、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、鉱物分析、土壌理化学分析、軟X線撮影観察を実施する。S-85遺構内堆積物の古植生を検討する目的で、花粉分析を実施する。土器内炭化物の由来を知る目的で、樹種同定を実施する。

1.試料

放射性炭素年代測定用は、S-315遺構の炭化物と黒色土の2点を分析する。珪藻分析、植物珪酸体分析、土壌理化学分析は、黒色土上部、黒色土下部の2点を分析する。花粉分析は、珪藻分析を行った2点に加え、S-85遺構内堆積物2点 (N7, N8) も分析する。鉱物分析は、地山と黒色土上部の2点を分析する。軟X線撮影は、柱状に採取された黒色土1点である。樹種同定用試料は、W16ES-170の土器群中の土器底部に付着していた炭化物4点 (1-4) である。No.2を除く3点は微細な炭化物が僅かに認められ、繊維状の構造が認められることから木材等が炭化した可能性がある。No.2は、黒色の炭化物様の物質が認められるが、いずれも微細で保存状態も悪く、繊維構造等は認められない。

2.分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で実施する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入して、永久プレパラートを作成する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の調線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b) などを参照する。

同定結果は、淡水生種の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛:比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による珪酸体の除去、アセトリシス (無水酢酸9:濃硫酸1の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表として示す。

(4) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリアングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入してプレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(5) 樹種同定

木口 (横断面)・椀目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の断面を製作し、実体顕微鏡および透視電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

(6) 鉱物分析

試料約40gの水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm・1/8mmの砂分をポリアングステン酸ナトリウム (比重約2.96) により重液分離、重鉱物と軽鉱物をそれぞれ125粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とした。「その他」は軽鉱物中においても同様である。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡を持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものとする。

(7) 土壌理化学分析

有機含量をチューリン法で実施する (土壌環境分析法編集委員会, 1997)。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる (風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法 (105℃、5時間) により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφのふるいを通させる (微粉砕試料)。

微粉砕試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの腐植含量量 (Org-C乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

(8) 堆積物軟X線写真撮影

地層断面より採取したブロック状の試料から、幅7cm、長さ20cm、厚さ1cmの板状の試料をプラスチックケース内に分離、成形して軟X線写真の撮影を行った。撮影は東都文化財研究所の協力を得た。

3.結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表4、5に示す。同位体補正を行った測定年代は、S-315が1,250±40BP、黒色土が10,840±70BPである。暦年較正を行った値は、慣例上10年単位で表すが、暦年較正曲線や較正プログラムが改

正された際に、再計算や比較を行いやすくするため、1年単位で表記している。その結果は、S-315が calAD686-802、黒色土が calBC10.928-10.867である。

表4. 放射性炭素年代別測定結果

試料名	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
S-315	1,250 ± 40	-27.28 ± 0.58	1,290 ± 40	IAAA-42457
黒色土	10,840 ± 70	-28.60 ± 0.69	10,900 ± 70	IAAA-42458

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
 3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表5. 暦年校正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代(cal)				相対比	Code No.		
		cal AD	886 -	cal AD	799				
S-315	1251 ± 36	cal AD	886 -	cal AD	799	cal BP	1,254 - 1,151	0.936	IAAA-42457
		cal AD	793 -	cal AD	802	cal BP	1,157 - 1,148	0.064	
黒色土	10,841 ± 67	cal BC	10,928 -	cal BC	10,867	cal BP	12,878 - 12,817	1.000	IAAA-42458

- 1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and P.J Reimer)を使用
 2)計算には表に示した丸め前の値を使用している。
 3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(2) 珪藻分析

結果を表6に示す。上層・下層とも珪藻化石の産出が少ない。また、産出種は溶解している。少量ながら産出する珪藻化石は、上層・下層とも近似している。産出種は淡水生で、沼沢湿地付着生種群(安藤, 1990)の*Eunotia flexuosa*, *Eunotia praerupta* var. *bidens*, *Pinnularia viridis*等が産出する。また、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻A群(伊藤・堀内, 1991)の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*等も産出する。沼沢湿地付着生種群とは、水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で優勢な出現の現れる種群のことである(安藤, 1990)。

(3) 花粉分析

分析の結果、いずれの試料も花粉化石はマツ属やイネ科などが検出されるが、保存が悪く検出数も少ない。シダ類胞子は、比較的多くみられる(表7)。

(4) 植物珪酸体分析

結果を表8、Fig.113に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。黒色粘土の上部と下部では同様な産状が見られ、ヨシ属の産出が目立ち、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

(5) 樹種同定

同定結果を表9に示す。S-170No.2は組織構造が観察できず、炭化物の種類や由来は不明である。その他の試料は全て炭化材で、2種類の木材組織が観察できる。いずれも道管が認められることから広葉樹材で、No.1,4の2点はシャシヤンボ、No.3はツゲ近似種に同定される。各種類の解剖学的特徴等を記す。

表6. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	黒色粘土	
	塩分	pH	流水		上部	下部
<i>Eunotia flexuosa</i> (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	f-ph	O	1	2
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	f-ph	RB,O	1	5
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		10	5
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	1
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	1
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-unk	ac-il	f-ph		1	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	O	1	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	3
<i>Synedra</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-
珪藻化石総数					25	19

凡例: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 O.R: 流水に対する適応性
 Ogh-ind: 真塩不応性種 al-il: 好アルカリ性種 f-ph: 好止水性種
 Ogh-hob: 貧塩適応性種 ind: pH不応性種 ind-ph: 好流水性種
 Ogh-unk: 貧塩不明種 ac-il: 好酸性種 unk: 流水不応性種
 unk: pH不明種

環境指標種群

- O: 沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻(RA-A群, RB-B群, Rt未区分, 伊藤・堀内, 1991)

表7. 花粉分析結果

種 類	黒色土	
	試料番号	上部 下部
木本花粉	2	3
マツ属	2	-
ツガ属	2	-
マツノ風	-	2
スギ属	1	1
クマシデ属-アサダ属	-	-
ブナ属	-	1
コナラ属コナラ亜属	-	-
コナラ属アカガシ亜属	1	1
ニレ属-ケヤク属	-	-
草本花粉	-	-
イネ科	2	1
サナエタデ属-ウナギツカミ属	1	1
ソバ属	1	-
アカザ科	-	-
バラ科	-	-
ヨモギ属	-	-
不明花粉	1	-
シダ類胞子	-	-
ヒコガサカズラ属	-	-
イノモトウ属	1	1
他のシダ類胞子	139	82
合 計		
木本花粉	6	8
草本花粉	4	2
不明花粉	1	0
シダ類胞子	137	63
総計(不明を除く)	147	73

表8. 植物珪酸体分析結果

種 類	黒色粘土	
	試料番号	上部 下部
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	3	3
ヨシ属	58	79
ウシクサ族コブナグサ属	5	1
ウシクサ族ススキ属	25	14
イチゴツナギ亜科	3	14
不明キビ型	6	5
不明ヒゲシバ型	7	11
イネ科葉身細胞珪酸体		
タケ亜科	9	9
ヨシ属	101	98
ウシクサ族	17	18
不明	14	6
合 計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	130	127
イネ科葉身細胞珪酸体	141	131
総 計	271	258

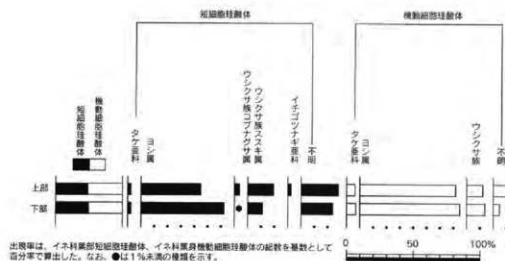


Fig.113 黒色粘土の植物珪酸体群集

表9. 樹種同定結果

地区	選標番号	試料の状態	番号	樹種
W16	S-170	土器低部付着炭化物内	1	シャシャンボ
			2	不明
			3	ツゲ近似種
			4	シャシャンボ

- ・シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunb.) ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で10細胞高前後のものとして5-7細胞幅、30-60細胞幅のものがある。

- ・ツゲ近似種 (cf. *Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* (Muell.Arg.) Rehd. et Wils)

ツゲ科ツゲ属

散孔材で、道管径は極めて小径、管壁は厚～中厚で、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-3細胞高。観察範囲が狭く、保存状態も悪いために、らせん肥厚の有無や散孔の形態等が観察できず、近似種とした。

(6) 鉱物分析

分析結果を表10、Fig.114に示す。2点の試料は、重鉱物組成・軽鉱物組成ともほぼ同様の組成を示す。重鉱物組成は、斜方輝石が最も多く、50～60%程度を占め、次いで角閃石が20～30%程度を占める。他に10%程度の不透明鉱物と微量の単斜輝石が含まれる。軽鉱物組成では、長石が最も多く、50～60%を占め、風化粒の「その他」を除くと、少量の石英とバブル型火山ガラスを伴う組成である。

(7) 土壌理化学分析

結果を表11に示す。分析の結果、2点とも腐植含量は高く、6-7%程度を示す。

(8) 堆積物軟X線写真撮影

結果については考察において併せて述べる。

表10. 重鉱物分析結果

試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑閃石	ザクロ石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計	
地山	145	3	60	0	2	0	1	30	9	250	10	0	1	26	136	77	250
黒色土上部	134	4	67	0	0	1	1	37	6	250	10	0	4	16	165	55	250

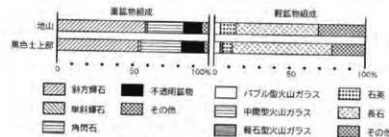


Fig.114 重軽鉱物組成

表11. 土壌理化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量(%)	備考
黒色土 上部	HC	N2/O 黒	6.91	
黒色土 下部	HC	N2/O 黒	5.93	

土性: マンセル表色系に準じた新版標準土色粘(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。
土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。
HC: 重粘土(粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)

4.考察

(1) S-315出土炭化材の年代値

S-315から出土した炭化物の年代値は、測定年代で1,250±40BP、較正年代でcalAD686-802であり、奈良時代前後の年代値を示している。

(2) 黒色土について

黒色土の由来に関して、鉱物分析では、地山と黒色土を分析して比較し、無機質な部分の由来について検討する。磯(2001)による地形分類図によれば、今回の調査区は、沖積段丘面の上に位置する。地山とされた試料は、この段丘面を構成する堆積物と判断される。磯(2001)では、沖積段丘面より上位に位置する河成段丘の低位段丘1面の表層に始良Tn火山灰(AT町田・新井, 1976)を含む厚さ1m程度のレス(風成土壌)が形成されていると述べている。一方、太宰府市を取り巻く基盤の地質は早良花崗岩と呼ばれる粗粒な黒雲母アダム岩(日本の地質「九州地方」編集委員会, 1992)であるから、地山における斜方輝石の卓越する重鉱物組成は、その母材が早良花崗岩に由来するものではないことを示している。以上のことから、地山試料に含まれる重軽鉱物の多くは、阿蘇4火砕流およびATICに由来すると考えられる。実際に地山試料の軽鉱物中には火山ガラスも認められている。今回の分析の対象とされた

黒色粘土は、重軽鉱物組成が地山と一致することから、その母材は地山に由来すると考えられる。すなわち、地山を構成している土壌の表面に植物が被覆したため、土壌中に腐植が供給され、黒色土が形成されたと考えられる。

次に黒色土を構成する腐植の由来について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、土壌理化学分析の結果から検討する。黒色土は腐植含量が6.7%と比較的高いが、分解が進んでおり、肉眼で観察可能な植物遺体は検出されない。珪藻化石は保存が悪く、検出量が少ない。珪藻化石を構成するシロカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きく入り溶けやすいことが実際により推定されている(千木良1995)。また、珪藻殻とおなじ化学組成を持つ植物珪酸体は、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では、風化が進みやすいと考えられている(江口,1994;1996)。産出する珪藻化石は、沼沢湿地付着生種群と乾いた好気的環境に生育する陸生珪藻が検出されることから、弱酸性を呈した湿地と乾燥した状況を繰り返していたと推測される。また花粉化石は保存が悪く、シダ類胞子と比較的多く見られる程度であるが、花粉化石は好気的環境による風化に弱く、かつシダ類胞子は花粉化石と比べて風化に強いことから(徳永・山内,1971)、珪藻化石から推定される結果と調和的である。植物珪酸体分析からみると、湿潤な場所に生育するヨシ属の産出が目立つた。そのため、黒色粘土は黒ボク土に見られるようなネズミザサやススキ属などの腐植の蓄積ではなく、湿潤な場所に堆積する泥炭が、乾湿を繰り返す状況の分解して生成される黒泥土に近いものであったと考えられる。なお、年代測定を行った際に測定した $\delta^{13}C$ の値が -28.60 ± 0.69 である。 $\delta^{13}C$ の値は、光合成の様式の違いにより同位体分別の効果が異なるため、植物により異なる。大部分の植物はC3植物であり、 $\delta^{13}C$ の値は-25前後に収まることが多いが、ススキ属などのC4植物では-13前後の値である。今回得られた数値からみると、腐植の大部分はC3植物に由来(ヨシ属もC3植物)すると考えられるが、これは植物珪酸体分析結果と比較しても調和的である。なお、植物珪酸体組成中のC3植物とC4植物の比率と、腐植中の ^{13}C の値には相関が認められ、土壌中の腐植の由来を調査する際には、これらの分析が有効であることが、指摘されている(井上ほか,2001)。

なお、黒色土の上位には、流路ないし氾濫堆積物と判断される粗粒砂～細礫層が存在している。粗粒砂～細礫層から黒色土の層相変化および上記の分析結果をふまえると、粗粒砂～細礫層形成後、本調査区では堆積環境が安定し、植物が繁茂するようになり、地表面上において腐植が蓄積されていくような離水没を繰り返すような渾濁地の堆積環境となったことが推定される。黒色土の上位では、流路堆積物の累重が認められず、包含物をなす泥混じり砂によって覆われる。このような層相変化は、本調査区周辺において、黒色土形成以降に新たな流路堆積物や顕著な氾濫堆積物が累重しなくなったことを示している可能性がある。調査区が立地する沖積段丘面は、山口川と宝満川の河川争奪によって完新世に離水した地形面であるとされる(磯,2001)。黒色土を構成する腐植からは、 $10.840 \pm 70BP$ の放射性炭素年代値が得られた。この年代値および調査区で認められた層序や堆積物の層相変化は、沖積段丘面の形成および離水といった遊跡周辺の地形発達史に大きく関係していることが予想される。今回得られた分析結果については、今後の周辺での調査事例をふまえ、本地域の地形発達史との関連において、さらに検討していくことが必要と判断される。

(3) 古植生について

S-85を分析した結果、花粉化石はほとんど検出されなかった。これは先にも述べたように、好気的環境下における風化が原因と考えられる。当社が太宰府市内の遊跡で行った結果をもとにすると、遊跡周辺の山地には、シイ・カシ類からなる照葉樹林が存在していたと考えられる。また、クスノキ科の花粉化石は膜が弱いため化石としてはほとんど残らないが、照葉樹林の代表的な樹木であるタブノキやクス

ノキなどクスノキ科も多く生育していたと思われる。一方、奈良・平安時代以降になると、マツ属が周辺に分布を拡大したと考えられる。マツによる、開墾による伐採地に先駆的に生育し二次林を形成することが多い種類であり、このような特性から植林されることもしばしばある。このことから、奈良・平安時代の古植生は、大宰府周辺の開発が進むにしたがって、マツの二次林や植林が増加し、山地で優勢であった照葉樹林が減少してきた可能性を指摘している。このような植生変遷は、九州地方の花粉化石群集をまとめた成果にも同様に現れている(Hatanaka,1985;畑中ほか,1998)。

(4) 土器付着炭化物

土器付着の炭化物は、4点中3点が広葉樹の炭化材であり、2種類が認められた。いずれも硬度で強度の高い材質を有する。シャシャンボやツツゲは、暖温帯常緑広葉樹林に生育する種類であり、シャシャンボについては現在でも周辺の丘陵地に生育している(井上,2001)。したがって、炭化材は遊跡周辺で入手可能な木材が利用されていることが推定される。

引用文献

- 安藤一 1990.淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
千木良雅弘.1995.風化と崩壊.近未来社,204p.
江口誠一.1994.沿岸域における植物珪酸体の分布.千葉県小櫃川河口域を例にして.植生誌研究,2,19-27.
江口誠一.1996.沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値.バトロジスト,40,81-84.
原口和夫・三友清史・小林弘.1998.埼玉の藻類.珪藻類.埼玉県植物誌.埼玉県教育委員会,527-600.
Hatanaka Ken'ichi,1985.Palynological studies on the vegetational succession in the Wurm (Glacial Age) in Kyusyu and adjacent areas.Journal of the faculty of Literature,Kitakyusyu Univeraity (Series B),18-29,71.
畑中健一・野井英明・岩内明子.1998.九州地方の植生史.図説 日本列島植生史.安田喜憲・三好教夫編.朝倉書店,151-161.
伊藤良永・堀内 誠示.1991.陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
井上晋.2001.植物と植生.太宰府市史編集委員会(編)「太宰府市史 環境資料編」太宰府市,107-135.
井上玄・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆.2001.都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷—植物珪酸体による植生変遷との対応.第四紀研究,40,307-318.
磯田 2001.第1編 太宰府市の地形と地質.太宰府市史環境資料編.太宰府市,7-104.
近藤鎌三・佐藤隆.1986.植物珪酸体分析.その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.
Krammer, K.,1992.PINNULARIA,eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.JCRAMER,353p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986.Bacillariophyceae.I.Teil: Naviculaeae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988.Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaeae,Bacillariaceae,Suriellaeae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a.Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b.Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav

Fischer Verlag,248p.

町田洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—科学,46,339-347.

日本の地質「九州地方」編集委員会,1992,日本の地質9 九州地方,共立出版,371p.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子,化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.



1. 重鉱物(糸236-1 地山)



2. 重鉱物(糸236-1 黒色土上部)



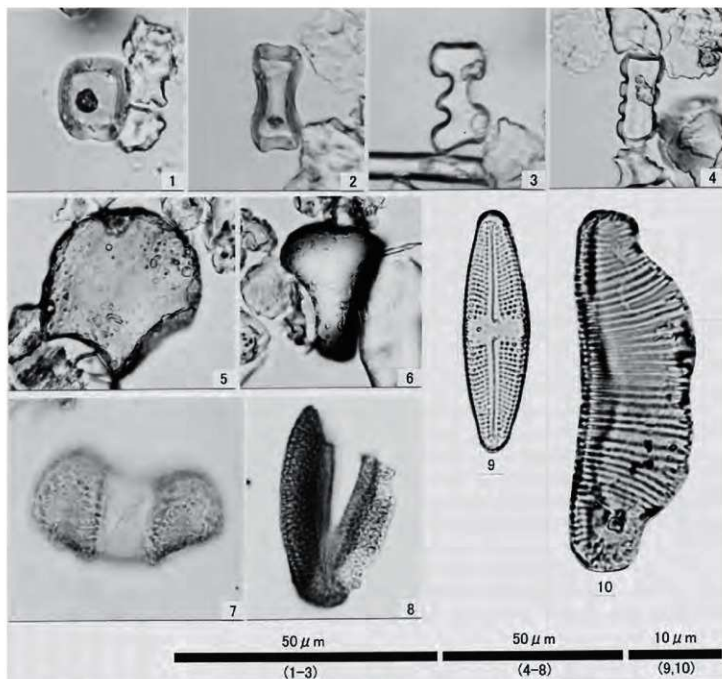
3. 軽鉱物(糸236-1 地山)



4. 軽鉱物(糸236-1 黒色土上部)

Qz: 石英 Pl: 斜長石 Opx: 斜方輝石 Cpx: 單斜輝石 Ho: 角閃石 Op: 不透明鉱物
Vg: 火山ガラス

0.5mm



1. ヨシ属短細胞珪酸体(黒色土;下部) 2. コブナグサ属短細胞珪酸体(黒色土;上部)
 3. ススキ属短細胞珪酸体(黒色土;上部) 4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(黒色土;上部)
 5. ヨシ属機動細胞珪酸体(黒色土;下部) 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体(黒色土;上部)
 7. マキ属(黒色土;上部) 8. ソバ属(黒色土;上部)
 9. *Navicula mutica* Kuetzing(黒色土;上部)
 10. *Eunotia praeurpta* var. *bidens* Grunow(黒色土;下部)

写真984. 写真4 植物珪酸体・花粉化石・珪藻化石

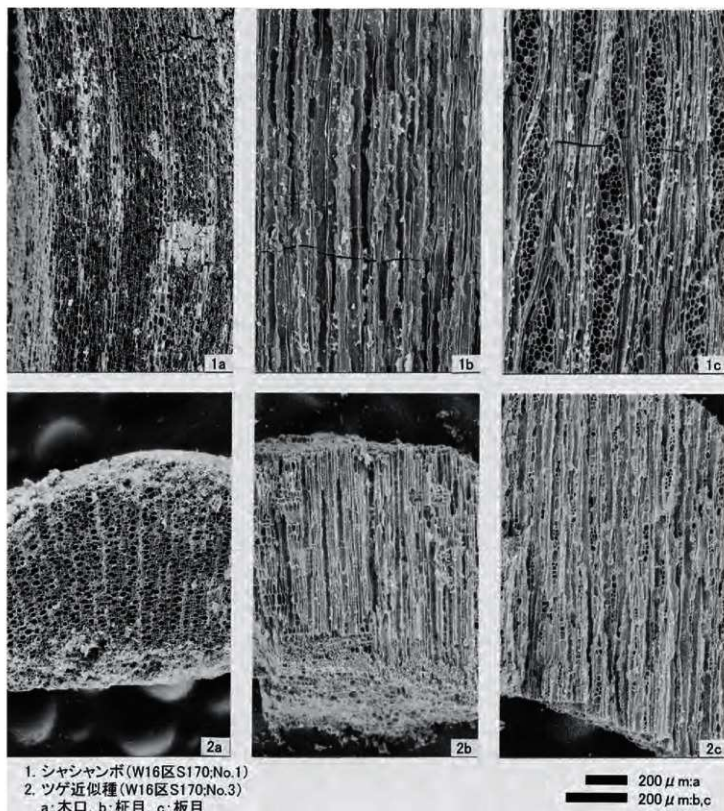


写真985. 写真5 炭化材

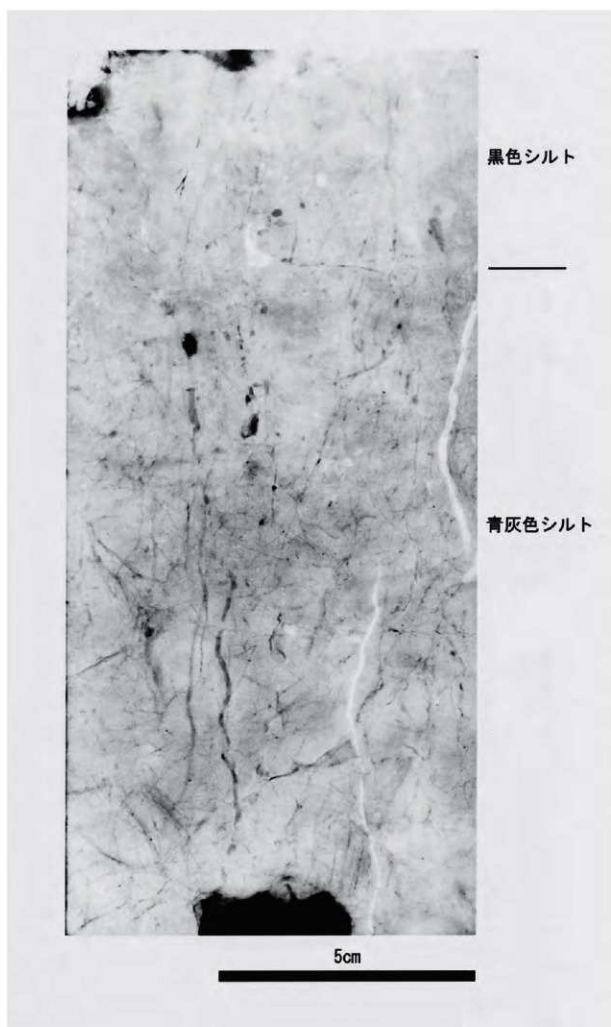


写真986. 写真6 軟X線写真

VI、調査まとめ

今回の調査の特筆すべき所見を列挙すると以下のとおりである。

- ・条坊の土地利用の変遷が明瞭
- ・東西道路の検出
- ・畑状遺構の検出
- ・桁行16間（29.6m）におよぶ大型掘立柱建物の検出
- ・土取り遺構の検出
- ・須恵器の脚付甕が多数出土
- ・滑石製屋蓋の出土

遺構の変遷について

遺構の検討は、調査済みの隣接地の調査所見（第251・255・257次）や現在調査中の第267次調査を若干加味したものの、県道部分の調査所見をもとに検討を行った。今後西鉄線車場跡地で現在も続けられている隣接地の調査成果を踏まえ、総合的な検討・評価が必要である。

今回の調査地は調査面・遺構面とも4面であったが、後世の削平はもちろん、上面の掘り残しや掘り上げすぎなどによって、遺構面と調査面が必ずしも一致しているとは限らない。よって、異なった調査面で同じ時期の遺構も存在している。遺構や遺物量をみた場合、8世紀前半～中頃、9世紀後半～10世紀前半、11世紀中頃～12世紀初頭の3時期に目立った出土量を示しており、それを踏まえ順にまとめてみる。

○7世紀以前（縄文時代～7世紀初め）

第236-1次調査の北半部で、第3調査面の下に黒色土や黒色粘土が南北に逆S字状に蛇行している。この黒色土は第V章で記したように、流路もしくは氾濫原が安定し、植物が繁茂するようになり、地表面上において腐植が蓄積されていくような離水没を繰り返す湿地環境となったことが推測されている。その後、この地形を大きく変化させるような自然事象を確認することはできず、現在みるような安定した地盤が形成されたものと推測される。その時期については黒色土の放射性炭素年代でBC10900年前後の数値が得られており、縄文時代草創期もしくは後期旧石器時代に遡るものと推測される。

旧石器・縄文時代については、遺構は確認されていないものの、縄文土器が1点のほか旧石器をはじめ縄文時代の石器も少量出土する状況である。これは条坊内で縄文土器や石器類が見られる状況と同じである。この調査地に関しては、前述したように離水没を繰り返す環境にあったことは理解でき、流されてきた可能性が十分考えられる。また、前述の黒色土が掘立柱建物の掘り方の埋土に使用されている状況からすると、古代以前の生活面は、大宰府成立後の条坊内が整備されていく中で削平された可能性は十分に考えられる。

7世紀より古い土器で、最も多く出土しているのは、弥生時代後期から古墳時代初期の土器である。しかし、土坑や住居などの遺構は確認していない。第3調査面で確認したアメーバ状の窪みにこの時期の遺物が多く出土するが、古代の須恵器と一緒に見つかることが多く、アメーバ状の窪みが弥生時代のものと明確に言い切れる根拠に乏しい。しかし、北隣の第168次調査（太宰府市の文化財第69集）で弥生時代後期の流路や土坑が検出されており、今回は遺構こそ明瞭ではないものの、土器の分布状況から付近一帯で僅かながらも人の活動があったことが窺える。

古墳時代については、須恵器が数点出土する状況で、太宰府市の西部にあたる大住野地区の京ノ尾遺跡（太宰府市の文化財第85集）等で住居跡が集中し、遺物が多量に出土する状況に比べると、極端に少ない状況であり、後世の削平の有無に関係なく、明らかに人の活動がなかった状況を示している。

○7世紀後半～9世紀初頭（大宰府編年IA期～VIA期）

大宰府土器型式のIA期（7世紀後半）頃の遺物が各遺構から散見され、弥生時代終末前後から400年間確認できなかった人の活動が、大宰府が成立することによって、この付近でも始まったことを物語っている。

この時期の遺物が出土している遺構の中で、第236-1次調査の南端部で検出されたSD015の下層（暗灰色土）から、このIB期の須恵器類などがまとまって出土している。このSD015では上下2層が明瞭に分離でき、上層は8世紀中頃の遺物を含んでいる。このSD015の最終埋没は8世紀中頃と言えるのだが、下層に7世紀末頃の遺物が占めている状況は、周辺にその時期の遺構が展開し、8世紀中頃にそれらの遺構から遺物が流れ込んだ可能性と埋没過程の中で7世紀末に近い時期にSD015が半分ほど埋没し、その後8世紀中頃に再び埋没したという大きく2通りの埋没過程が想定できる。後者の場合、大宰府成立当初にこの溝、つまり東西路が設計されたことになるのだが、溝という遺構の埋没環境の特性上明言すること難しく、その可能性のひとつとして今後の課題とする。

このSD015と平行してSD020が検出された。北側のSD015を境に遺構密度が極端に少なくなるため、その2条に囲まれた幅3.5～4m（溝心々距離約5m）の道路（SF665）と考えられる。SD020はSD015と異なり、7世紀の遺物は少なく、8世紀前半頃の埋没と推測される。この道路の東側延長上には般若寺丘陵があり、7世紀後半～末頃の溝や掘立柱建物が発見されており（太宰府市の文化財第90集）、何らかの関係があったのかもしれない。

大宰府条坊案については鏡山猛氏をはじめ様々な案が考えられてきたが、今回の調査地で検出した道路にはほぼ合致する案を出している井上信正氏の案を今回は採用することとし、SF665を15条路、後述するSF615付近を14条路として報告する。

14条路については、平安時代前期～後期にかけて掘り直しや僅かな場所の移動が行われている。その中で最も古い道路は、出土遺物からVIB～VII期頃に埋没している。これ以前の奈良時代に道路が存在したかどうかについては、調査所見からは言及できない。

そのほか奈良時代の遺構は、さほど多くなく、北西部のSK315とその付近のビットや窪みと後述する方形掘り方を持つ掘立柱建物5棟を欄列だけで、井戸は未確認である。

第3遺構面でも確認した掘立柱建物のうち、南北に長い大型掘立柱建物が1棟検出された。隣接する第257次調査でも1棟検出され、2棟は東側の柱筋を合わせて南北に並ぶことが確認され、下記のような数値が得られている。

- ・236-1SB480（北棟）：南北16間（29.6m、小尺100尺、柱間約1.85m）×東西3間以上（6m以上）
報告書作成中に第267次調査が行われていて、SB480の西側が見え隠れしていて、全体として東西4間（約8.6m）になる可能性が高い。
- ・257SB300（南棟）：南北11間（23.6m、小尺80尺、柱間約2.15m）×東西5間（8.6m、小尺29尺）
2棟の建物間は10.4m（小尺35尺）
※小尺29.6cm

このように南北に長大な建物が並ぶ例は、官衙遺構が数多く確認されている大宰府でも大宰府政庁以外に、全国的に見てもこのような遺構は官衙の中でも国庁クラスのものでしか見ることができなく、これらの遺構は国庁に相当する建物と言って遜色ないであろう。時期が明確ではないものの、須恵器の脚

付盤など、多坊内の他の調査では出土しない遺物があるのも他と異なる地域であったことを補足できるだろう。SB480は数少ない出土遺物から、8世紀第3四半期頃に廃絶したと推測される。建築年代は掘り方の遺物から8世紀第2四半期頃と推測される。また、SB480eの柱痕の放射性炭素年代の測定を行ったところ、546～598年という測定結果が出されている。第257次調査SB300でも同様の測定を行ったところ、SB300の中でも柱痕で3世紀中頃～5世紀前半、礎板が6世紀中頃～7世紀初という測定結果が出されており、同一遺構内でも大きな年代差があることになり、単純に古墳時代の建築とか古材の転用などとは言いきれない測定値である。材の遺存状況によっては内側の年輪ほど古い年代を示すともいわれていることから、この測定値がそのまま遺構年代と直接結びつけるには、さらなる検証が必要であり、今回は分析結果の提示だけに留めたい。

SB570は、SB480より大きな掘り方を持ち、東西棟になるとみられる。西側には14.0mの間隔においてSB480が存在する。同時期に存在していた場合、SB480が南北棟に対し、SB570が東西棟の配置をとるため、それぞれ殿殿・正殿を想像させるが、SB570が西辺の柱列のみ確認されただけであるため、今後行われるであろう周辺の調査結果踏まえ検討していかねばならない。

15条路の北側に掘立柱建物3棟（SB040・485・500）、欄列1条（SA490）が確認されている。この4遺構については重複している方が方位がほぼ同じであるため、近接した時間内で建て替えが行われた可能性が高い。しかし、隣接する15条路や大型掘立柱建物（SB480・570）とは方位が若干異なる。遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、平安時代の遺物が混入していないため、奈良時代以前と推測される。SB480・570と併存したかどうかは不明であるが、隣接する第257次調査では、切り合いから大きな掘立柱建物→小さな掘立柱建物の変遷が確認されており、この調査地でも同じ変遷であった可能性が高い。

SB040やSB500などの掘立柱建物が切り込むアメーバ状の凸凹は、弥生土器などに混じって、少量ながらも奈良時代の遺物が含まれており、これらが掘立柱建物の伴う整地である可能性が考えられる。第236-2次調査でもアメーバ状の凸凹が検出され、8世紀代の凸凹もあり、調査地全体にこのような遺構が広がっていたことがわかる。

○8世紀前半～10世紀中頃（大宰府編年VIB期～IX期）

この時期には14条路が明瞭に確認でき、14条路関連の遺構（SD515・520・550・575）からはVIB～VII期の遺物が出土し、この上を10世紀代の茶灰色粘土が覆っている。そして、14条路の南側SD415付近（AIライン）から15条路北側溝（SD015）にかけて灰色土を主とした整地が広がっている。これは、第3遺構面を覆う整地で、出土遺物からおおよそVII～VIII期（9世紀中～10世紀前半）頃で、その中でも9世紀後半頃と推測される。時間的には灰色土の整地が行われた時期と14条路が同時期に埋没したような状況を示しており、全体的に土地の改変があったことが想定される。その茶灰色粘土部分が10世紀代に道路として利用されていたかどうかは、詳細な観察を怠ったため不明である。

また、15条路については、切り合いや出土遺物等から、この時期に存在したかどうかは明確に言い切れない。

この時期の遺構は、多くはないものの14・15条路それぞれに近い位置に展開する。井戸などから出土する土の整地以前と考えられる遺構はSE205・SA635・SB630だけで、そのほか同時期のSE025・230・385・585などは整地以降の遺構と考えられる。また、平安時代初頭前後の遺物も少ないため、人の動きは活発ではなかったと考えられる。

その後灰色土には畑状遺構とする格子状の溝や南北溝が展開する。畑状遺構（SX640・645）は、時期判断が難しいが、整地層に切り込んでおり、その整地層より若干新しいVIII期前後の埋没と推測される。畑状遺構と推測している溝で東西・南北の溝の切り合いのほか、いくつかの切り合いが確認され何處か掘り返されていることがある。また、畑状遺構（SX640・645）を確認した範囲は、SX645の南北溝を主とする畑状遺構が、SD415やSD657の東西溝付近を北端としている。そして、その付近から北側は整地があって、2面目が展開している。SX640と645の境界については、調査区中央付近にある大規模乱近とみられる。その南側に格子状に広がるSX640は15条溝を南端としている。東側は現時点では未調査部分が多いが、調査区内においては4ライン付近で途切れているように見える。西側は第257次調査で西端が確認できたことから、現状ではSX640の東西幅は約45m、南北幅は約36m確認されている。途中の大規模で不明瞭な部分があるが、SX640・645を合わせた南北幅は約80mである。整地として報告している灰色土であるが、その確認した範囲と畑状遺構の範囲が大方一致している。西側の第257次調査でも格子状に広がる溝の検出範囲と灰色土の範囲はほぼ一致する。これは灰色土に切り込む同時期の建物が出検されていない状況から、単純に灰色土＝耕作土と考えられるが、全く別の地盤整備遺構の可能性も完全に否定はできない。このような溝の遺構は長岡京水垂地区や雲雲宮内府の他地区でも確認されており、今後調査事例の増加と詳細な検討によって、明らかにしていかなければならない。

この時期の井戸のうち、SE585は灰色土に掘り込まれ、その埋土に畑状遺構が切り込んでいる。最終的に畑状遺構が切り込んでいるもの、ある時期には畑のための井戸であったといえる見方もできる。

第236・2次調査地は丘陵帯という現環境から、山裾が削平された状態が検出されたとみられたが、VII期埋没のSE050などが丘陵帯に存在することが確認され、井戸の深さも第236・1次調査より若干浅いもの大きな違いはないため、当時すでに現況に近い地形であったことがわかった。

この時期の出土遺物のうち、VII期埋没地の236・2SE050の井戸から出土した滑石製屋蓋は、軒先が表現されていないなど細部に至る表現は見られず、写実的ではないが、屋根の勾配が緩い点は、古代的な様相と言える。このような形状の遺物として瓦塔が知られているが、九州では現在瓦塔の出土例は16例あり、瓦葺の表現が、熊本県から出土している瓦塔と近似していることから、時期や形状から瓦塔と同様の意味を持つ種類のひとつと捉えることは可能で、肥後の関連も指摘されている。しかし、複製のもの出土は知られておらず、非常に珍しい遺物である。また、破片であるが故に塔か堂か判断も難しく、同様の出土例が知られていない現段階では、踏み込んだ検討が出来ず、今後の類例の増加を待ちたい。

○10世紀中頃～11世紀前半（大宰府編年IX～XII期）

この時期の遺構は少なく、明瞭な遺構はSK160のみで、僅かに時期が被る遺構にSE215やSD505があるのみで、生活痕跡のない空地のような状況を想像してしまう。しかし、10世紀にこの地で自立した生活痕跡がなかった場合、10世紀代の遺物が混入することは少なくなるため、出土する遺物の時期からVIII～IX期頃とみている畑状遺構が、11世紀まで存在していた可能性も考えられる。

9世紀代の14条路の北側で2条の溝（SD505・560）があり、埋没時期はX～XI期で溝間は約4mを測る。東側はSD410付近で途切れているが14条路の可能性が考えられる。

○11世紀中頃～12世紀前半（大宰府編年XI～XIII期）

この時期の道路であるが、14条路は平安時代前期から後期まで、SD415～560間の幅24mの範囲で側溝の掘り直しが行われており、この範囲が道路の土地境として認識されていたものと考えられる。しかし、単純に道路側溝が土地境というのではなく、その外側に緩衝地帯を設け、土地利用が行われた

ことも想定できる。中央大路（推定朱雀大路）においても、第220次調査で道路側溝の外側に同規模の側溝が掘られていた例があり、今後の事例をもとに検証していかねばならない。

15条路は奈良時代までの側溝が明瞭に確認できたにもかかわらず、平安時代の道路痕跡が調査段階では不明瞭であったが、西側の第257次調査によって、平安時代の平行する2条の溝（S-2・15）が確認され、その延長上に位置していた236・SD042・041が道路側溝であることがわかり、同じ位置に道路が存在していたことがわかった。しかし、その側溝も途切れていて、その先に蛇行するSD001やSD017が存在し、あたかも道路が曲がっているような状況を示している。この部分は遺構の埋没が条坊廃絶の前後のどちらなのか不明瞭のため今後接地の調査で明らかになるであろう。

また、条路に伴う溝以外にも、土地区割りに関係するような溝が多く存在する。時期は異なるのだが、SD395の南端が畑状遺構の北端と一致している。それぞれの遺構の時期が2世紀程の開きがあるにもかかわらず、ほぼ同じ場所を土地境としてきたことを示している。また、SD400・395・786とSD070は遺構間が23m以上離れているが、南北に並んでいる。その他にもSD335・260・250と結ぶ南北溝と第257次調査のS-40が、約59.5mの間隔があるが、ほぼ南北に並んでいる。また、それらを結ぶ南北ラインで東西溝であるSD210が途切れている。そして、大規模乱によって詳細は不明だが、前述の南（SD250・070）の断絶部分や前代の畑状遺構のSX640とSX645の境界付近にSD130・210の東西溝が存在している。前述してきたとおり、個別の遺構間の明瞭性は見出されるが、全体的に見るとその規則性が重なり合っており、逆に不透明な状況を生み出している。これは、調査ではわからない用途の違いや若干の時期差があると考えられる。検討が狭い範囲のため、詳細な検討はここでは行わず、周辺の調査成果が得られれば詳細に検討したいであろう。

第236・2次調査の北端で検出したSX070は、粘質の地盤が掘り取られているため、土取り跡と推測される。その埋土に阿安系青磁や龍泉系青磁などの遺物が僅かながら含まれていたことから、最終埋没は12世紀中～後半頃と考えられる。第236・2次調査地に隣接して10世紀代の般若寺瓦葺があり、その材料となる粘土の人手先と考えられたが、残されている遺物では時期差があり直接結びつけることでない。同様の遺構が隣接する第251次調査で確認され、その埋没後に掘立柱建物で建てられている。SX070に関しては粘土質で埋まっていたことから、人為的に埋めた可能性が高い。

出土遺物や掘り方の規模などから平安時代後期以降と考えられる掘立柱建物は9棟あるが、遺物からは大きな時期差を見出せない。条路や区画溝に切り込んだ建物（SB100・655・275）があり、条坊廃絶後に建物が存在したことは明瞭なのだが、条坊廃絶直前に建物が存在したか否かを明確に証明する所見がなく言及できない。今回の調査地で、底部切り離しが承りであった土師器は極めて少なく、6つの遺構、1つの整地で僅かに数点出土しているだけである。それらはSB275周辺の整地（SX350）や近隣のSE330、SK390、SD400で出土しており、この調査区北端付近での生活痕跡が窺える。また、南側のSD130・170の溝でも出土し、当時の区画溝として存在していたことが窺える。また、同時期の土器や陶磁器が出土することが極端に少ないことから、12世紀に入って早い段階で生活の場ではなくなったことが窺える。大宰府政庁が廃された後、願世首寺や安樂寺（太宰府天満宮）などの有力寺社の庇護によって町が形成されていくため、遺構の分布も条坊の北東部に移っていく傾向があり、この付近は居住地として利用されなかった可能性が高い。表土観察でも第1遺構面上に包含層があって、その上は耕作土と土車場の整地となっているため、平安時代末期から大正時代に西鉄操車場ができるまでの800年間は田園であったと推測される。

今回の調査は、掘削や時間的な制約等により、正確な所見が得られない状況もあった中で、様々な可能性を含め、遺構の変遷を追ってみた。今まで述べてきたように、第236次調査を終えた後の整理作業

期間中も周囲の発掘調査は進み、情報が増加していたものの、その詳細な整理検討が進んでいないため、今回の報告では調査時の所見を若干参考にしたに過ぎない。現在進行中の発掘調査においても興味深い発見が続いており、今回不明瞭だった遺構や調査所見についても明確な回答が得られると思う。今後周囲の発掘調査を整理していく中で、第236次調査も再検討し、総合的な考察を行わなければならないだろう。

参考文献

- 鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房1968年
 小田富士雄「瓦塔の検討」『豊前・トギノ窟跡の調査—古代須恵器・瓦塔に関する研究—』2007年
 井上信正「大宰府の街区割り」と街区成立についての予察『糸里制・古代都市研究 通巻17号』2001年
 吉岡伸「長岡京地の土地利用—水垂地区の小溝群について—」『文化財学論集』文化財学論集刊行会1994年
 「史跡出雲国府跡発掘調査通信 意宇の杜—現地説明会資料—」島根県埋蔵文化財センター 2007年
 『大宰府条坊跡21』太宰府市の文化財61集 太宰府市教育委員会 2002年
 『大宰府条坊跡22』太宰府市の文化財69集 太宰府市教育委員会 2004年
 『大宰府条坊跡32』太宰府市の文化財90集 太宰府市教育委員会 2007年
 『太宰府市史 考古資料編』太宰府市 1992年

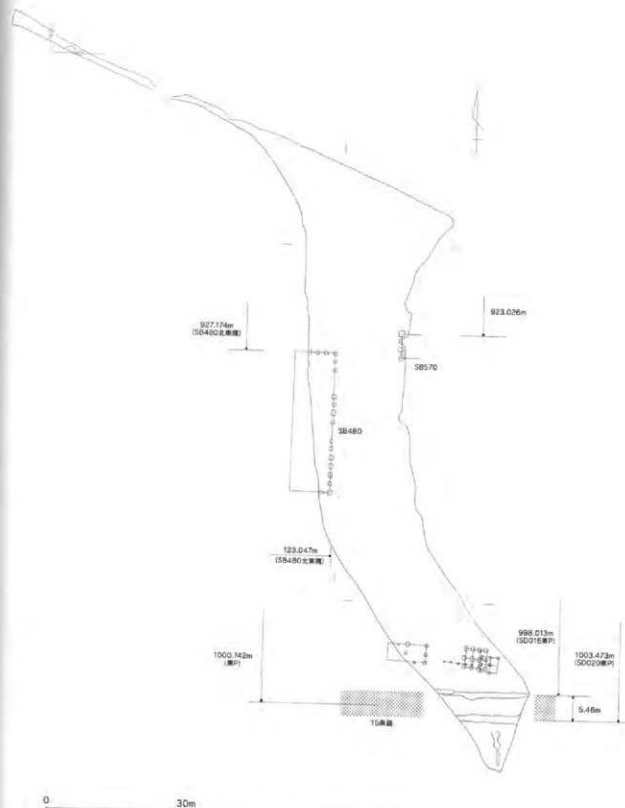


Fig.115 奈良時代の主要遺構

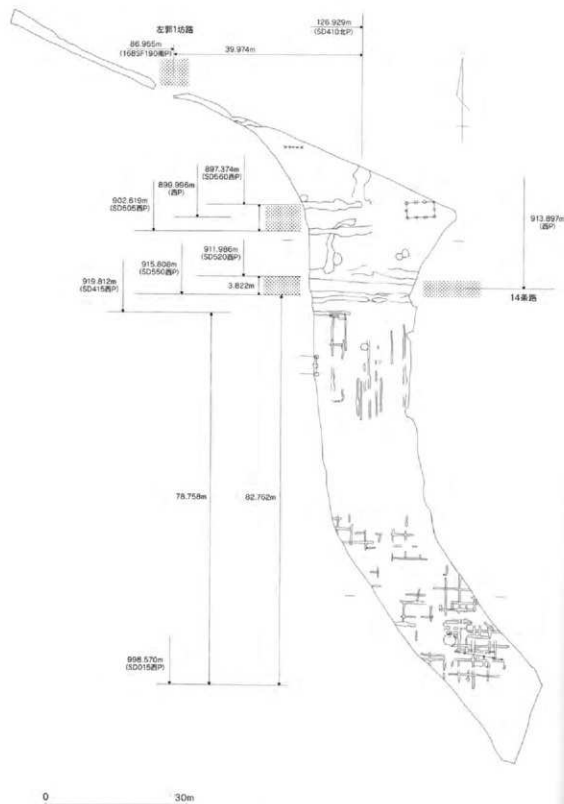


Fig.116 平安時代前期の主要遺構

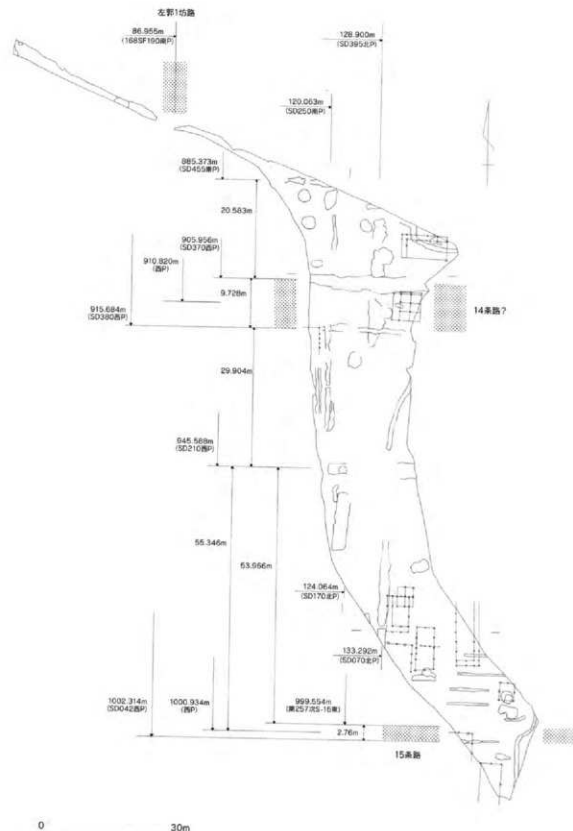


Fig.117 平安時代後期の主要遺構

78	ピット群	灰色土	1	360(3・14)	
79	ピット群	灰黄色土	1	612	
80	236-150000	埋戻灰土	1	V111前期	
81	ピット群	S-15の底面	1	Q14・15	
82	ピット群	灰土	1	U1	
83	土坑	青灰色土	1	V12	
84	土坑群	一部S14のみ?	1	F10	
85	236-150440	溝	1	V11期	
86	236-150440	灰黄色土	1	平家時代前期	
87	ピット群	灰土	1	F10	
88	ピット群	埋戻灰土(黄色土ブロック混じり)	1	F9・10	
89	ピット群	埋戻灰土	1	Q6	
90	溝	埋戻灰土 S-640-90	1	F7・8	
91	ピット群	埋戻灰土	1	T10	
92	土坑群(複集)	青灰色土と黄灰色土	1	P15	
93	236-150440	埋戻灰土	1	Q13	
94	土坑	底面から垂立柱状、埋土中に切り込んでいたかも。	1	Q12	
95	236-150460	土坑	埋土と黄色土混じり、一旦埋戻の上より埋土	1	X11~X111期
96	236-150100	ピット群	埋戻灰土	1	X11期~
97	ピット群	埋戻灰土 3層の内層のものに遺物が多い。	1	X11期~	
98	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
99	ピット群	埋戻灰土	1	T10	
100	236-150100	独立柱建物	S-70~100	1	X11~X111期
101	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
102	ピット群	埋戻灰土	1	Q10	
103	ピット群	黄灰色土ブロック混じり	1	F10	
104	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代	
105	236-150100	溝	1	平家時代後期	
106	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
107	ピット群	埋戻灰土	1	K11	
108	土坑	埋戻灰土	1	J10	
109	ピット群	埋戻灰土	1	F10	
110	236-150110	土坑	S-106の底面	1	Q10
111	ピット群	埋戻灰土	1	H8	
112	ピット群	埋戻灰土	1	H8	
113	溝群	埋戻灰土	1	L1	
114	ピット群	埋戻灰土	1	J9	
115	溝	灰黄色土	1	9世紀代	
116	ピット群	埋戻灰土	1	L1・12	
117	土坑	S-203~117	1	L2	
118	溝?	埋戻灰土	1	F17	
119	凹み	埋戻灰土	1	F9	
120	溝々木まり	埋戻灰土	1	平家時代	
121	土坑群	埋戻灰土	1	C10・11	
122	土坑	埋戻灰土 S-70~122	1	Q11	
123	土坑	埋戻灰土	1	X11期~	
124	土坑	青灰色土	1	N12	
125	236-150120	溝	埋戻灰土	1	X11~X111期
126	土坑	埋戻灰土	1	9世紀	
127	溝	埋戻灰土	1	9世紀	
128	土坑	埋戻灰土	1	平家時代後期	
129	凹み	埋戻灰土	1	Q7・8	
130	236-150130	溝	埋戻灰土	1	X11~X111期
131	溝	埋戻灰土	1	F11	
132	溝	S160何か?	1	Q11	
133	ピット群	埋戻灰土	1	X11期~	
134	土坑	埋戻灰土	1	X9~10	
135	土坑	埋戻灰土	1	Q11	
136	凹み	埋戻灰土	1	Q7	
137	溝群	埋戻灰土	1	Q9	
138	SK966ピット群	埋戻灰土	1	X11期	
139	ピット群	埋戻灰土	1	F11	
140	236-150650	溝	埋戻灰土	1	X11期~
141	ピット群	埋戻灰土	1	現代	
142	ピット群	埋戻灰土	1	Q14	
143	ピット群	埋戻灰土	1	Q11	
144	ピット群	埋戻灰土	1	Q14	
145	236-150140	独立柱建物	1	X11期	
146	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
147	ピット群	遺物にS-70の遺物あり	1	T12	
148	236-152640	溝	埋戻灰土	1	Q11・12
149	土坑	埋戻灰土	1	F11	
150	236-15A150	溝群	埋戻灰土	1	X11前期後
151	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X11
152	ピット群	埋戻灰土(黄色土ブロック混じり)	1	Q11	
153	236-152640	溝	埋戻灰土	1	S-155~125
154	ピット群	埋戻灰土	1	V10	
155	236-150160	溝	S-190と同-遺物、遺物少ない	1	X11~X111期
156	ピット群	埋戻灰土	1	X11~X111期	
157	ピット群	埋戻灰土	1	X11期	

158	ピット群	埋戻灰土	1	X11期	
159	ピット群	灰黄色土	1	Q12	
160	236-150160	土坑	S-160~166	1	IX~X期
161	236-152640	溝	S-161~30	1	X11
162	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
163	236-152640	溝	灰黄色土	1	Q14
164	くぼみ	埋戻灰土	1	Q16	
165	236-150160	溝の埋戻物	埋戻灰土	1	X11前期後
166	土坑	黄色土と黄灰色土	1	平家時代前期	
167	土坑	灰黄色土	1	AB11	
168	236-152640	溝	埋戻灰土	1	平家時代
169	溝	黄灰色土	1	S-6031	
170	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X11~X111期
171	ピット群	S-120と同-遺物	1	AB11	
172	凹み	埋戻灰土	1	X11前期	
173	溝	埋戻灰土	1	X10・11	
174	溝	埋戻灰土	1	M39	
175	土坑	埋戻灰土	1	平家時代	
176	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10・11
177	236-152640	溝群	埋戻灰土	1	X10・10
178	土坑	埋戻灰土	1	Q10	
179	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10
180	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X11前期後
181	たまり	埋戻灰土	1	X11期	
182	溝	埋戻灰土	1	Q10	
183	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10
184	236-152640	溝	S-161と同-溝	1	X10
185	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10
186	236-152640	溝	S-154とのり合い不明	1	X10
187	236-152640	溝	S-150とのり合い不明	1	X10
188	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10
189	土坑	埋戻灰土	1	X10	
190	236-152640	溝	遺物少ない	1	X11~X111期
191	溝	埋戻灰土	1	S・6	
192	ピット	埋戻灰土	1	Q10	
193	ピット	埋戻灰土	1	Q5	
194	ピット	埋戻灰土	1	Q6	
195	溝	埋戻灰土	1	S16	
196	土坑?	黄灰色土	1	Q6	
197	溝	S-190の埋入あり?	1	平家時代	
198	溝	埋戻灰土	1	平家時代前期	
199	236-152640	溝	埋戻灰土	1	平家時代後期
200	溝	埋戻灰土	1	T14	
201	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X12
202	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
203	ピット	埋戻灰土	1	T12	
204	236-152640	溝	埋戻灰土	1	9世紀前半
205	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10~X111期
206	236-152640	溝	埋戻灰土	1	Q10
207	236-152640	溝	埋戻灰土	1	平家時代
208	236-152640	溝	埋戻灰土	1	AB11
209	ピット	片層式含む	1	F9	
210	236-150010	溝	埋戻灰土	1	平家時代後期
211	ピット	埋戻灰土(底掘り)	1	平家時代後期	
212	ピット	埋戻灰土	1	X10	
213	包含層	埋戻灰土	1	平家時代後期	
214	ピット群	埋戻灰土	1	X11・12	
215	236-150215	溝	埋戻灰土	1	X11~X111期
216	ピット群	埋戻灰土	1	X10	
217	ピット群	埋戻灰土	1	X10	
218	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10
219	ピット	埋戻灰土	1	X10	
220	236-150020	溝	埋戻灰土(埋土はほぼ単層)	1	VII~VIII期
221	ピット	埋戻灰土	S-216の下	1	X10
222	ピット群	埋戻灰土	1	X10	
223	ピット群	埋戻灰土	1	F11・12	
224	ピット群	埋戻灰土	1	X9	
225	溝	埋戻灰土	1	X11前期後	
226	ピット群	埋戻灰土	1	平家時代後期	
227	ピット群	埋戻灰土	S-190~227	1	平家時代後期
228	ピット群	埋戻灰土	S-230~228	1	AD17
229	溝	埋戻灰土	1	10世紀	
230	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X11前期後
231	ピット群	埋戻灰土	1	AD18	
232	ピット群	埋戻灰土	1	AD17	
233	ピット群	埋戻灰土	1	AD17	
234	ピット群	埋戻灰土	1	AD18	
235	236-152640	溝	埋戻灰土	1	X10
236	ピット群	埋戻灰土	1	11世紀	
237	ピット群	埋戻灰土	1	AD18	

238	堆	灰褐色土	1		AB17
239	堆	赤褐色土	1	平安時代後期	
240	236-158240	土坑	1	E1~E11期	A227
241	堆	灰白色粘質土	1		AB14
242	堆	灰白色	1		AB10
243	堆	灰白色	1		AB16
244	溝	青灰色粘質土 S-216~244	1	E11期	F16
245	堆	灰白色～灰白色粘質土	1	E11~E111期	AB、AB16
246	236-158245	堆	1	E111期前後	AB16
247	堆	灰白色	1		AB14
248	溝	灰白色粘質土	1	平安時代後期	AB15
249	溝	灰褐色土	1	11世紀	AB15
250	236-158250	溝	1	11世紀	1797オン
251	236-158249	溝	1		AB7
252	溝	灰褐色土	1		F7
253	溝	灰褐色土	1	平安時代前期	F9・10
254	溝	灰褐色土	1		F18
255	溝	灰褐色土	1		AC10
256	溝	灰褐色土	1	平安時代後期	F18
257	土坑	黒褐色土	1		F16
258	溝	灰褐色土	1		F16
259	土坑	赤褐色土	1		F18
260	236-158260	溝	1	E~E11期	AB~AD17
261	236-158245	溝	1	平安時代	ABM13
262	236-158245	溝	1	平安時代	ABM13
263	ピット	黒褐色土	1		AB17
264	ピット	黒褐色土	1		AB13
265	土坑	黒褐色土	1	11世紀前半～中葉	AB29
266	ピット	黒褐色土	1		AB14
267	土坑	黒褐色土	1	平安時代後期	AB14
268	ピット	黒褐色土 S-269+268	1	平安時代中葉～後葉	AB14
269	236-158245	溝	1	平安時代	AB14・AB16
270	236-158270	溝	1	11世紀前後	AB~AB15
271	溝	赤褐色土	1		AB15
272	溝	赤褐色土	1		AB15
273	ピット群	赤褐色土	1	E11期	AB15
274	土坑?	S-272+274	1	11世紀	AB15
275	236-158275	灰白色柱礎物	1	E11期前後	AL10・11・12
276	溝	赤褐色土	1		AB15
277	溝	赤褐色土	1	平安時代後期	AB17
278	ピット群	黒褐色土	1		AB17
279	ピット	赤褐色土	1	平安時代後期	AB17
280	236-158280	横列穴	1	平安時代後期	AL10・11・12
281	236-158280	溝	1		F8
282	溝	赤褐色土	1		F8
283	ピット群	黒褐色土	1	平安時代	F13
284	ピット群	黒褐色土	1		F14
285	236-158285	柱礎柱礎物	1	E11~E111期	AB15
286	ピット	赤褐色土	1		F15
287	ピット群	赤褐色土	1		AB15
288	溝	灰白色土	1		F14
289	ピット	赤褐色土	1		F14
290	236-158290	土坑	1	E11期前後	AS17
291	土坑	赤褐色土	1		F14・15
292	ピット	赤褐色土	1		AB15・16
293	236-158293	溝	1		AB19
294	ピット群	赤褐色土	1		AB19
295	土塚	赤褐色土	1		AB19
296	ピット群	赤褐色土	1		AB19
297	穴まり	赤褐色土	1		AB15
298	ピット群	赤褐色土	1		AB17
299	溝	赤褐色土	1		F17
300	236-158300	神戸	1	11世紀	AS18・19
301	穴まり	赤褐色土	1	平安時代後期	AB17
302	溝	赤褐色土	1	平安時代後期	AB17
303	ピット	赤褐色土	1		AB18
304	ピット	黒褐色土	1	平安時代	AB15
305	溝	黒褐色土	1	11世紀	AB18
306	土坑	赤褐色土	1	11世紀～	AB17
307	溝	緑褐色土	1		AB15
308	溝	黒褐色土	1		AB15
309	ピット	赤褐色土	1		F14
310	236-158310	土坑	1	E11~E111期	ABM23
311	土坑	赤褐色土	1		EV15
312	土塚	赤褐色土	1		AB15
313	ピット	赤褐色土	1		F16
314	ピット	赤褐色土	1		F15
315	236-158315	柱礎	1	9世紀後半～末	BC28
316	ピット	赤褐色土	1		F7
317	ピット群	赤褐色土	1		AB7

318	溝	黒褐色土	1	平安時代後期	F16
319	溝	赤褐色土	1	平安時代後期	F16
320	穴まり	赤褐色土	1	E11~E111期	AS13・14
321	ピット群	赤褐色土	1		FY16
322	ピット群	赤褐色土	1		F14
323	ピット	赤褐色土	1		F16
324	溝	赤褐色土	1		F13
325	236-158225	埋石	2	2段のみ	平安時代
326	ピット	赤褐色土	1		AC13
327	土坑	黒褐色土	1		AC14
328	ピット	赤褐色土 S-328+180	1		AC14
329	溝	赤褐色土	1	11世紀	AB17
330	236-158330	神戸	1	E11~E111期	AB18・19
331	ピット群	赤褐色土	1		AB11
332	ピット	赤褐色土	1		AB15
333	溝	赤褐色土	1		AB16
334	ピット群	赤褐色土	1		AC16
335	236-158335	溝	1	平安時代	E11・E111
336	ピット群	赤褐色土 (黒色土混じり)	1		AC16+17
337	ピット群	赤褐色土 S-250+337	1		AB17
338	ピット群	赤褐色土	1		AC16
339	ピット群	赤褐色土	1		AC16
340	236-158240	柱礎柱礎物	1	平安時代前期	AL・AL17
341	ピット群	赤褐色土	1	平安時代前期	AD13
342	236-158240	溝	1		AC12
343	ピット	赤褐色土	1		AC12
344	土坑	赤褐色土～灰白色粘質土	1	平安時代	AC2016
345	236-158245	溝	1	11世紀前半	E11
346	236-158245	溝	1	S-242上同一遺構	平安時代前期
347	土坑	赤褐色土	1		AB17
348	溝	赤褐色土	1		AC12
349	ピット群	赤褐色土	1	平安時代前期	AS20
350	236-158260	溝	1	赤褐色土 (黒色土混じり)	平安時代前期
351	ピット群	赤褐色土	1		AX28・27
352	ピット群	赤褐色土	1		AX28
353	ピット群	赤褐色土	1	平安時代	AP25・26
354	ピット	赤褐色土	1		AB11
355	236-158265	溝	1	S-355の下層の溝 赤褐色土、最下層は灰白色土	E11~E111期
356	溝	赤褐色土	1		AB11
357	穴まり	赤褐色土	1		AB11
358	236-158245	溝	1		AD13
359	ピット群	赤褐色土	1		AD14
360	236-158260	溝	1	S-350?の下の溝 緑褐色土	11世紀～
361	溝	赤褐色土	2		AD14
362	236-158245	溝	1		AD14
363	ピット群	赤褐色土	1	S-180+363	AC17
364	ピット	赤褐色土	1		AP17
365	236-158265	溝	2		AP19
366	ピット群	赤褐色土	1		AC17
367	236-158245	溝	1		AC~AB14
368	ピット群	赤褐色土	1		AD14
369	236-158245	溝	1		AD14
370	236-158260	溝	1	赤褐色土	AD14
371	ピット群	赤褐色土	2	S-371上同一遺構	AD14
372	穴まり	赤褐色土	1		E11~E111期
373	穴まり	赤褐色土	1		AB13
374	ピット群	赤褐色土	1		AB13
375	236-158275	溝	1	S-275上同一遺構	AB13
376	穴まり	赤褐色土	1		AP14
377	溝	赤褐色土	1		AP13
378	236-158245	溝	1	穴まり混入か?	平安時代後期?
379	236-158245	溝	1		AC2014
380	236-158245	溝	1		Y111期
381	236-158245	溝	1		Y111期
382	236-158245	溝	1		Y111期?
383	ピット群	赤褐色土	1		AC15
384	236-158245	溝	1		AC15
385	236-158260	溝	2		AC15
386	溝	赤褐色土	1		AC15
387	236-158245	溝	1		AC15
388	236-158260	溝	1		AC15
389	236-158245	溝	1		AC15
390	ピット	赤褐色土	1		AC15
391	ピット群	赤褐色土	1		AC15
392	ピット	赤褐色土 (黒石入り)	1		AC15
393	ピット群	赤褐色土	1		BC39
394	ピット群	赤褐色土	1		BC39
395	236-158293	溝	1	S-395+380	111期
396	ピット	赤褐色土	1		E11~E111期
397	ピット群	赤褐色土	1		BC39

731	ビント群	灰褐色土	2		AP・AQ12	
732	ビント群	灰褐色土	2	S-300の下		
733	灰褐色土	S-305・300O下	2		AP10	
734	ビント群	灰褐色土	2	11世紀〜	AP19	
736	墳	灰褐色土	2	11世紀〜	AP9・10	
737	墳	灰褐色土	2		AP9	
738	土坑	灰褐色土	3	1階下	AP9	
739	ビント群		2	AKM20		
741	ビント群		2	11世紀〜	AP10	
742	ビント群		2	1階前後	AP11	
743	ビント群		2		AP9	
744	ビント群		2		AP9	
746	ビント群		2		AP8	
747	ビント群 (住痕あり)	灰褐色土	2		AJ23	
748	ビント群 (住痕あり)	灰褐色土	2		AJ23	
749	ビント群 (住痕あり)	灰褐色土	2		AS20	
751	ビント群	暗灰褐色土	2		AS20	
752	ビント群		3		AT20	
753	ビント群		2		AT21	
754	ビント群		2		AT22	
756	ビント群		2		AT21	
757	ビント群		2		AM20	
758	ビント群		2		AM20	
759	ビント群		2		AM19	
761	墳	暗灰色土	2		AT19	
762	たまり	灰褐色土	2		AT20	
763	ビント群	暗灰色土	2		AT20	
764	ビント群		2	平安時代	AT20	
766	ビント群		2		AT20	
767	ビント群	暗灰色土	2		AT18	
768	ビント群	暗灰色土	2		AT19	
769	ビント群	暗灰色土	2	11世紀〜	AT19	
771	ビント群	暗灰色土	2		AT18	
772	ビント群	暗灰色土	2	11世紀前後	AS19	
773	ビント群	住痕あり	2		AT20	
774	ビント群	住痕あり	2		AT19	
776	ビント群	暗灰色土	2		AT18	
777	ビント群	暗灰色土	2		AS19	
778	ビント群	暗灰色土	2	平安時代	AT21	
779	ビント群	暗灰色土	2		AT6318	
781	墳	暗灰色土	2	11世紀前後	AT18	
782	ビント群	暗灰色土	2		AS17	
783	ビント群	暗灰色土	2		AT17	
784	ビント群	暗灰色土	2		AQ12・13	
786	Z30-1302/86	灰褐色土と黄土土の混合粘土	2	11世紀後半	APA24	
787	ビント群	暗灰色土	2		AP19	
788	ビント群	暗灰色土	2		AP18	
789	墳	灰褐色土と黄土土ブロックの混じり	2		AP18	
791	Z20-152/79	雑草	1	1階	平安時代中期	AQ・AS16-18
792	ビント群	暗灰色土	2		AP18	
793	Z36-152/93	雑草	2	11世紀	MP・AP7イン	
794	土坑	灰白土	2	11〜1111期	AP16・17	
796	たまり	黄土土	2		AP16	
797	ビント群	暗灰褐色土 S-310の底面	2		AP11	
798	ビント群	暗灰褐色土	2		AP12	
799	ビント群		2		APM18	
801	ビント群		2	1111期前後	AP16	
802	Z36-152/82	S-370の増長の上下、明確な層構造ではない。	1	1階	1111〜1111期	AP7インより前期
803	ビント群	灰褐色土	2		AQ19	
804	ビント群	灰褐色土	2	平安時代前期	AS11	
805			2		AS11	
806	たまり	暗灰色粘質土	2	平安時代後半	AK12	
807	たまり	黄土土	2	11世紀〜	AK19	
808	たまり	黄土土	2		AK11・12	
809	ビント群	黄土土	2	平安時代	AK11・12	
810			2		AK11	
811	墳	暗灰色粘質土	2	11世紀〜	AK11	
812	土坑	灰褐色土	2	1111〜1111期	AK14	
813	ビント群		2		AK9・10	
814	ビント群		2		AK11	
816	土坑	S-375+916	2	1111期〜	AK17	
817	土坑	S-378の上の部分	2		AK15	
818	土坑	S-399+918	2	平安時代後半	AK13	
819	Z36-152/119	雑草	2	1111期〜	AK13	
821	ビント群	黄土色粘質土	2		AK12	
822			2		AQ14	
823	たまり	黄土土	2	11世紀前半〜	AP19	
824	ビント群	黄土土	2		AP12	
828	土坑	灰褐色粘質土	2		AP13	
827	ビント群		2		AQ17	

828	雑草 (霞み)	灰褐色土 深さ約5cm	2		平安時代後半	AK15
829	雑草		2		平安時代後半	AK14
831	雑草	雑草	2		11世紀	AK13
832	ビント群	雑草の遺留	2			AK13
833	ビント群		2			AK13
836	ビント群		2		平安時代中期	AK・AP13
837	ビント群		2		11世紀	AK11・12
838	ビント群		2		11世紀	AK13
839	土坑		2		AK12	
841	土坑	灰褐色土 底面ビントより明確・粘出し	2		AK12	
842	土坑		2		AK12	
843	墳	灰褐色土	2		AK13	
844	土坑	灰褐色土	2		AK13	
846	Z30-152/84	たまり	2	S-416-846		1111〜1111期?
847	たまり	暗灰色土	2		平安時代	AQ16
848	たまり	暗灰色土	2		平安時代	AQ14
849	ビント群	灰褐色粘質土 S-848+849	2		AQ14	
851	たまり	暗灰色土	2		AK14	
852	たまり	暗灰色土	2		AK14	
853	墳	灰褐色土	2		AQ17	
854	たまり	灰褐色粘質土 S-727+854	2		1111〜1111期	AQ16
856	土坑		2		平安時代前期	AK15
857	ビント群	暗灰色土 S-857+849+847	2		AQ16	
858	ビント群		2		AKM19	
859	ビント群	トンブイン	2		AP14・15	
861	墳	黄土土	2		AP16	
862	ビント群	黄土土	2		APAQ16・17	
863	ビント群	黄土土	2		AP16	
864	墳	黄土土	2		AP18・19	
866	墳	黄土色粘質土 (黄土土ブロック多く入る)	2		AP18	
867	ビント群		2		AKM19	
868	ビント群		2		AK15	
869	墳	黄土土	2	S-380+869		AJ16
871	墳	暗灰色粘質土	2		AJ17	
872	土坑		2		AK16	
873	ビント群		2		AJ17	
874	墳	灰褐色土	2		AJ17・18	
876	墳	黄土土	2		AJ17	
877	土坑	暗灰色土	2		平安時代後半	AJ19
878	墳	黄土土 S-878+877	2		AJ18	
879	ビント群	S-879+877	2		AJ19	
881	ビント群	S-300の粘出し層の残り残し	2(1)		AJ18	
882	土坑		2		11世紀後半〜	AK25
883	ビント群	黄土土	3		平安時代	AK25
884	ビント群		3		11世紀	AK25
886	ビント群	暗灰色土	3		AK24	
887	ビント群	暗灰色土	3		AK24	
888	ビント群	暗灰色土と黄土土の混合層	3		AK23	
891	土坑		3		AK20・31	
892	ビント群		3		AK20	
893	ビント群		3		AK20	
894	ビント群		3		AK20	
896	ビント群		3		AK20	
897	土坑	黄土土	3		平安時代	AK24
898	土坑	黄土土	3		平安時代前期	AK19
899	ビント群	S-375の下	2		AK18	
901	ビント群		2		AK14	
902	ビント群		2		AK13	
903	ビント群		3		AK20	
904	土坑	暗灰色土	3		平安時代	AK24
906	ビント群		3		AK20	
907	ビント群		3		AK20	
908	ビント群		3		AK20	
909	ビント群	暗灰色土 (黄土土ブロック混じる)	3		AK20	
911	ビント群	暗灰色土	3		AK20	
912	土坑	暗灰色土 (黄土土ブロック混じる)	3		AK27	
913	土坑	暗灰色土	3		平安時代	AK20
914	土坑	暗灰色土	3		平安時代	AK20
916	ビント群		3		AK22	
917	ビント群		3		AK22	
918	ビント群		2		AK22	
919	ビント群		2		AK22	
921	ビント群	黄土土	3		平安時代?	AK12
922	ビント群		3		AK12	
923	たまり	暗灰色粘質土	3		11世紀	AK19
924	たまり	暗灰色粘質土	3			AK19
926	土坑	暗灰色土	3			AK19
927	ビント群		3			AK12

表17 第236-2次調査 出土遺物一覧表

74	様み		1	古代	AA・AB14・15
75	236-25M75	様み	1	弥生中前期	ONS-5
76	様み群		1	奈良末～平安前期	AC15
77	236-25M77	様み群	1	古代	AD15
78	様み群		1	古代	AC13
79	様み群		1	古代	AD15
80	236-25M80	溝	1	1期前後	W12～AB13
81	236-25M81	様み群	1	平安時代	WX13・14
82	様み		1	Y14	
83	様み		1	奈良時代	K5
84	236-25M84	様み	1	9世紀前半	K4
85	236-25M85	土坑	1	11～11期	S12
86	様み		1	平安時代前期	J5
87	236-25M87	様み	1	古代	J4
88	ピット		1		K4
89	土坑		1		TE4
91	236-25M91	様み	1	古代	WX15・16
92	236-25M92	様み	1	平安時代	WP14・15
93	様み		1		R16
94	236-25M94	様み	1	11期後	CS6・7
96	ピット		1		D5

1-1 弥生前期上	
図	銅鐻
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-2 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-3 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-4 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-5 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-6 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-7 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-8 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-9 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-10 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-11 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-12 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-13 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-14 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-15 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-16 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-17 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-18 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-19 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-20 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-21 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-22 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸
1-23 弥生前期上	
図	銅鐻、銅丸、鍔、鍔片
注	弥生前期(1-2)、2期後半
出	土坑
尺	銅丸(横径約、長さ約)、鍔片
出	銅丸

表18 第236-2次調査 須恵器・土師器・黒色土器供託品計測表

▲内黒字 ▶ 破砕片

品名	数量	発掘位置	測長	口径	重量	底径	A/B
1-1 須恵器							
片断	→	8251	JFg.100-01	1.1	0.4	0.1	0.3
小皿	+	8260	JFg.100-02	1.30	6.0	0.0	0.2
小皿	→	8261	JFg.100-03	0.9	4.1	0.1	0.2
小皿	-	8262	JFg.100-04	0.9	3.2	0.1	0.2
小皿	+	8263	JFg.100-05	3.3	12.1	0.1	0.2
小皿	+	8264	JFg.100-06	4.4	15.3	0.0	0.2
小皿	→	8265	JFg.100-07	2.0	7.3	0.1	0.2
小皿	+	8266	JFg.100-08	2.6	9.3	0.1	0.2
小皿	→	8267	JFg.100-09	1.4	4.0	0.0	0.2
小皿	→	8268	JFg.100-10	0.8	2.8	0.0	0.2
大皿	-	8269	JFg.100-11	6.4	23.1	0.0	0.2
大皿	-	8270	JFg.100-12	4.3	15.1	0.0	0.2
須恵器	-	8271	JFg.100-13	1.0	4.1	0.0	0.2
1-2 土師器							
片断	→	8272	JFg.100-14	0.7	2.2	0.0	0.2
小皿	-	8280	JFg.100-15	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	-	8281	JFg.100-16	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	→	8282	JFg.100-17	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	+	8283	JFg.100-18	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	-	8284	JFg.100-19	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	→	8285	JFg.100-20	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	-	8286	JFg.100-21	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	+	8287	JFg.100-22	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	→	8288	JFg.100-23	0.0	0.0	0.0	0.1
小皿	+	8289	JFg.100-24	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8290	JFg.100-25	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8291	JFg.100-26	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8292	JFg.100-27	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8293	JFg.100-28	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8294	JFg.100-29	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8295	JFg.100-30	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8296	JFg.100-31	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8297	JFg.100-32	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8298	JFg.100-33	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8299	JFg.100-34	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8300	JFg.100-35	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8301	JFg.100-36	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8302	JFg.100-37	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8303	JFg.100-38	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8304	JFg.100-39	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8305	JFg.100-40	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8306	JFg.100-41	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8307	JFg.100-42	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8308	JFg.100-43	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8309	JFg.100-44	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8310	JFg.100-45	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8311	JFg.100-46	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8312	JFg.100-47	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8313	JFg.100-48	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8314	JFg.100-49	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8315	JFg.100-50	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8316	JFg.100-51	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8317	JFg.100-52	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8318	JFg.100-53	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8319	JFg.100-54	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8320	JFg.100-55	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8321	JFg.100-56	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8322	JFg.100-57	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8323	JFg.100-58	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8324	JFg.100-59	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8325	JFg.100-60	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8326	JFg.100-61	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8327	JFg.100-62	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8328	JFg.100-63	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8329	JFg.100-64	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8330	JFg.100-65	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8331	JFg.100-66	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8332	JFg.100-67	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8333	JFg.100-68	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8334	JFg.100-69	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8335	JFg.100-70	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8336	JFg.100-71	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8337	JFg.100-72	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8338	JFg.100-73	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8339	JFg.100-74	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8340	JFg.100-75	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8341	JFg.100-76	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8342	JFg.100-77	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8343	JFg.100-78	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8344	JFg.100-79	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8345	JFg.100-80	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8346	JFg.100-81	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8347	JFg.100-82	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8348	JFg.100-83	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8349	JFg.100-84	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8350	JFg.100-85	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8351	JFg.100-86	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8352	JFg.100-87	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8353	JFg.100-88	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8354	JFg.100-89	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8355	JFg.100-90	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8356	JFg.100-91	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8357	JFg.100-92	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8358	JFg.100-93	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8359	JFg.100-94	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8360	JFg.100-95	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8361	JFg.100-96	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8362	JFg.100-97	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8363	JFg.100-98	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8364	JFg.100-99	0.0	0.0	0.0	0.1
大皿	-	8365	JFg.100-100	0.0	0.0	0.0	0.1

写真図版

写真図版には遺構の主な写真に掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



第236-1次調査第1調査面全景（上が北）



第236-1次調査SB100付近空中写真(上が北)



第236-1次調査第1調査面南端部全景(上が東)



第236-1次調査 SB045検出状況(南から)



第236-1次調査 畑状遺構全景(南西から)



第236-1次調査 SE215全景（北から）



第236-1次調査 SK310全景（東から）



第236-1次調査第2調査面全景（上が北）



第236-1次調査第3調査面全景（上が北）



第236-1次調査 SB480全景（東から）



第236-1次調査 SB480全景（南から）



第236-1次調査 推定15条路（SF665）とSB040（上から南）



第236-1次調査 推定14条路（SF615、西から）



第236-1次調査 SB570全景（上が西）



第236-1次調査 SE510全景（北から）



第236-1次調査 東壁土層5（西から）



第236-1次調査 SBO40k土層（北から）



第236-1次調査 SB480c土層（東から）



第236-1次調査 SB480f土層（東から）



第236-2次調査全景（上が南東）



第236-2次調査 SB060全景（上が西）



第236-2次調査 SE050井戸枠状況（北から）



236-1SD370灰色粘土(Fig.50-14)



第236-1次 灰色土(Fig.58-40)



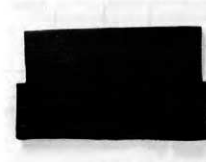
236-1SB480(Fig.67-8)



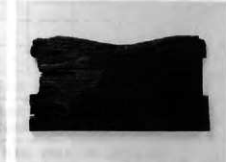
236-1SD520茶色土(Fig.68-45)



236-1SD515茶色土(Fig.69-10)



236-1SE510(Fig.80-9)



236-1SE600(Fig.83-1)



236-1SK460黒色土(Fig.84-14)



236-1SF615灰色砂(Fig.86-27)



第236-1次調査 表土(Fig.94-1)



第236-1次調査出土(Fig.94-25)



236-2SE050ウラゴメ(Fig.104-19)



236-2SE050ウラゴメ(Fig.103-17)



236-2SE050暗灰色粘土(Fig.102-11)

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと									
書名	大宰府条坊跡 36									
副書名	第236-1・236-2次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	99集									
編著者	宮崎亮一、(株)ハリノ・サーヴェイ									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2008(平成20)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鑑定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第236-1次	左郭12・13条2坊	太宰府市 朱雀3丁目	402214	20039284	56790.0	-44700.0	20040419	20050329	2740	鉄道新設
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第236-2次	左郭14条2坊	太宰府市 朱雀2丁目	402214	20039284	56650.0	-44623.0	20050126	20050608	1705	県道・ 市道新設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
大宰府条坊跡 第236-1次	都城跡	奈良、平安	観立柱建物、井戸、土坑、溝、道路		土師器 陶磁器	須恵器 緑釉陶器	須恵器 灰釉陶器	南北16間(29.6m)の観立柱建物 条坊痕跡		
大宰府条坊跡 第236-2次	都城跡	奈良、平安	観立柱建物、井戸、土坑、溝		土師器 土坑、溝	須恵器 陶磁器	瓦			

太宰府市の文化財 第99集

大宰府条坊跡36

— 県道観世音寺二丁目市線建設に伴う調査—
平成20(2008)年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 (株)三光 福岡営業所
福岡市博多区山王1-1-4-4

